



現代中国村落の存立構造：顔役の個的資質を媒介に 立ち上がる村落生活

首藤，明和

(Degree)

博士（学術）

(Date of Degree)

2001-09-30

(Date of Publication)

2008-11-27

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲2386

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1002386>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



2001 年（平成 13 年）3 月 26 日

現代中国村落の存立構造

—顔役の個的資質を媒介に立ち上がる村落生活—

神戸大学大学院文化学研究科社会文化専攻（博士課程）

首 藤 明 和

目 次

序章 研究の目的と方法 1

- (1) “痛み”を共有した中国理解へむけて 1
- (2) 現代中国農村の位置 ―ハイブリッドモダンと顔役― 4
 - 1) 現代中国社会とハイブリッドモダン
 - 2) 分析概念としての顔役
- (3) 顔役が支える中国農村の現代化 ―本稿の構成について― 8

第1章 現代中国村落の諸類型

―通底的構造としての「自己表出的顔役型村落」― 13

- (1) 問題の所在 13
- (2) 村落の結合原理 15
 - 1) 旧華北村落の地域団体的結合の脆弱性
 - 2) 旧華北村落の本村人関係に表れる団体的性格
 - 3) 人々の結合を支えるもの ―共有財産とその管理をめぐる規範的価値―
- (3) 村落類型の分析軸 ―村内経済基盤と村民の結合形態― 18
 - 1) 村内経済基盤
 - 2) 村民の結合形態
 - 3) 経済基盤をもたない場合
- (4) 現代中国村落の諸類型 22
 - 1) 村内経済基盤の「ねじれの構造」
 - 2) 通底的構造としての「自己表出的顔役型村落」
 - 3) 村落類型に関する事例

第2章 顔役の概念的意味

―「仲介者」「規範適用方法の選択者」としての役割から― 32

- (1) 顔役の存在が浮き彫りにする農村社会の構造 32
 - 1) 仲介者としての顔役と農村社会の秩序に果たす役割
 - 2) 村落共同体論に替わる秩序メカニズムを求めて
- (2) 顔役の役割 ―1900年～解放前の顔役― 36

1) 仲介者としての顔役	
2) 仲介者の役割の変容と顔役の消失	
3) 顔役による規範の適用方法の選択	
(3) 現代中国農村における顔役の位置づけ	41
1) 人民公社時代の顔役 —基層幹部の装いをまとった仲介者—	
2) 改革・開放時代の顔役① —「規範適用方法の選択者」の役割への着目—	
3) 改革・開放時代の顔役② —多様な「仲介者」に存在する共通性を求めて—	
4) 調査村落の分析課題	

第3章 調査地の概要 —遼寧省撫順市順城区河北郷龔家溝・都市近郊村の事例— 57

(1) 遼寧省撫順市	57
1) 撫順の周縁性	
2) 新中国成立から改革・開放後の撫順	
(2) 河北郷	63
(3) 龔家溝	64
1) 龔家溝	
2) 新中国成立から78年改革・開放までの概要	
(4) 改革・開放時代 —床板生産の流行と村民の個人経営者化—	69
1) 農外収入機会を個人で探し求める村民 —自己資金の蓄積—	
2) 個人経営の隆盛 —畜産から床板生産へ—	
(5) 床板生産後の村民生活の変化	73
1) 村民の新しい需要の出現と商業やサービス業の発展	
2) 人々の移動の変化 —龔家溝での労働市場の形成—	
3) 村の山にたいする無関心化	
(6) 龔家溝の村政府幹部 —私的経営者の兼職—	78

第4章 顔役の性格が反映する村の政治構造 —村政府と村民のルーズな関係— 82

(1) 村の「緩やかなまとまり」 —顔役の個的資質の反映—	82
(2) 外村人の前書記がおこなった村落公共事業	84
1) 前書記A Zの家族	
2) 前書記A Zの個人経歴	

3) 外村人の書記就任にたいする反発の背景	
4) 前書記の自己表出的な公共事業運動と外村人ネットワークの利用	
5) 前書記辞任後の公共事業の低調	
(3) 現書記の個的資質と村政府	96
1) 村財政	
2) 工業用電気の管理と村の治安	
3) 上級政府と龔家溝 —納税方法と優遇策—	
4) X B 書記の個的資質が反映する龔家溝の政治構造	

第5章 経済領域の顔役 —大規模床板工場の経営者— 106

(1) 大戸が経営する床板工場	106
1) 経営者の経歴と床板工場への投資	
2) 大戸の業務内容と龔家溝の床板生産への貢献	
3) 大戸と政府の関係	
(2) 大戸が雇用する従業員	111
1) 専門職能者と単純労働者	
2) 大戸の単純労働者にたいするイメージ	
(3) 大戸の危機感	114
1) 小戸にたいする印象	
2) 企業集団化への期待	

第6章 経済的顔役の周縁にいる者たち —小規模床板工場の経営者— 119

(1) 小戸の生産設備と製造工程	119
1) 生産設備	
2) 生産工程	
(2) 木材購入と床板販売	123
1) 木材の購入	
2) 床板の販売	

第7章 周縁にいる者たちの顔役 ―ある兄弟姉妹の歴史から― …… 128

- (1) 文革から80年代前半にかけて ……129
 - 1) 「上山下郷」運動
 - 2) 改革・開放から龔家溝に移住するまで ―兄弟間の離反のきざし―
- (2) 龔家溝への移住 ―親族のなかの顔役が果たした役割― ……133
 - 1) 工場経営を始めた大姐夫 ―兄弟姉妹の撫順移民のきっかけ―
 - 2) 龔家溝への移住 ―大姐夫を頼って―
 - 3) 精神的・技術的な支え ―賀子傑のこと―
- (3) 床板生産後の兄弟姉妹 ―親族のしがらみによる協同と離反― ……139
 - 1) 床板経営に到る過程
 - 2) 床板生産における協同と離反
 - 3) 母親の介護をめぐる協同と離反
- (4) 床板生産以外の選択 ……146
 - 1) 雑貨店の開店に至る過程 ―顔役が後押しした料理の才能を生かす道―
 - 2) 雑貨店の経営からみた龔家溝
- (5) 受け継がれる親族のしがらみ・期待される顔役の存在 ……150
 - 1) 長男の結婚と二男の将来
 - 2) 第二次移民 ―親族を頼って繰り返される移住―

終章 顔役の個的資質が立ち上げる村落生活 …… 159

- 1) 理論的射程
- 2) 村落生活を立ち上げる中心的顔役／生活の細部の面倒をみる身辺的顔役
- 3) 身辺的顔役の条件 ―「能耐」であること―
- 4) 顔役の重層的存在が生み出すダイナミズム
- 5) 今後の課題

参考文献 …… 169

序章 研究の目的と方法

(1) “痛み”を共有した中国理解にむけて

「近代化」という言葉からは、例えば産業化、都市化、核家族化、民主化、官僚制化、効率化など、社会でおこるさまざまな変化を思い浮かべる。現在、地球上の多くの社会は、物質、精神、思想の各方面にわたって近代化のもたらした産物を享受している。同時に一方で、例えば環境破壊、民族問題、国際紛争、生活や文化の破壊など、地球上のあらゆる存在の共存共栄を脅かすような諸問題も、近代化がもたらした産物と無縁ではない。近代化には正負の両側面が存在する。

日本人が近代化としてイメージするような社会変動について、中国ではそれを「近代化」としては表現しない。政府、研究者、一般民衆を問わず、中国ではそうした社会の動きを「現代化」と言い表す。これは、単なる言葉のあやではない。中国社会にとって現代化とは、あくまで「中国的近代化」のことをいう。一方、近代化とは「解放以前の西洋化、ブルジョワ化しか意味しない」のである【橋本，1990：484】。すなわち現代化という言葉には、自らが経験した近代を乗り越え、中国人が歴史の主体であることを確認しながら現代化のプロジェクトを推し進めようとする、中国社会の“想い”が込められている。

しかし、なかなか思うようにことは運ばないようである。現代化とは、「中国でありつづけること（実際には、選択の余地のないことなのだが）と、近代（西洋的な進んだモデルとしての）を追い求めることとのジレンマが、政治、経済、思想、科学というさまざまな領域」で起こる、試行錯誤的なプロセスである【同上】。

例えば「中国的社会主義」や「社会主義市場経済」など国家が社会統合のために掲げるスローガンには、相互に矛盾した意味内容が同居している。現代化の主体的担い手であろうとし、現実を生じうるあらゆる可能性にも主体的に対応しようという強い意欲が、かえってこうしたスローガンの矛盾となって表れるのだろうか。こうした社会統合のスローガンから感じるのは、むしろ混沌とした中国社会の姿でさえあり、状況主義的対応という原則なき原則である。試行錯誤的な社会変革のなかでは、人々の日常生活においても、ジレンマに満ちたさまざまな出来事が生じているにちがいない。

改革・開放前は、社会主義的価値へ原理的にコミットメントすることが、個々の人格に優越する形で強制された時代だった。結果の平等を至上理念とする社会主義的価値は、人格を犠牲にするという重大な矛盾を犯してまでも維持されてきた。人々の心の痛みは、人格の圧殺のなかに生じたことだろう。

一方、現在では、自分がどのように生きるべきかを選択する自己裁量の範囲が広まった。人々の生活スタイルにおいて異質性が増すことで、個々の人生に見られる他者との厳然たる格差が、人々の主観のなかにはっきりと認識される。過去を振り返り、現在の自己の境遇を顧み、将来の進路を予想したとき、なんとなく自分の人生にたいして納得できるものもあれば、どうしても腑に落ちないこともあるだろう。こうした意味で、やはり人々の生活には心の痛みがつきまとう。

「痛みの中の現代化」【橋本・深尾，1990】において、さまざまに生じる社会現象の意味は、人々の営みのなかから読み解かなければならない。そして“痛み”のような、だれもが“共感”できる身体的感覚を通じた他者理解は、その結果、観察者である私たち自身も、自己の境遇や営為にたいする反省的思考に誘われ、新しい見地へと開かれていくにちがいない。そこには、他人事として突き放してしまうことのできない何ものかがあるはずだ。本稿における中国理解（他者理解）も、こうした“痛み”のような身体感覚を分かち合うなかで、同時に自分自身も見つめ直すプロセスとして進めることができればと思う。

例えば 20 年ほど前、食べるものさえこと欠いた経験をもつ人々は中国において少ない。現在 20 才代の若者でも、飢えの経験をした者がいる。改革・開放後の 20 年、中国は確かにこうした生存にかかわるような問題を解決してきたのである【陳光金，1998】。とくに農村住民と接すると、彼らにとって鄧小平の改革がもつ意味とは、まさしく“生きていくことの実現”と不可分にあったことを感じる。当然、彼らによって生きられてきた過去は、現時点での彼らのありようを大きく規定している。もし私たちが彼らのことを理解しようとするならば、例えばこの場合、空腹という誰もが理解できるような身体的感覚を通じて、彼らの生きている世界に橋を架けてみてはどうだろうか。空腹によるあせり、怒り、絶望感…、空腹が満たされたときの安堵感、活力、希望…。こうした身体的感覚やここから派生する感情経験を共有することで、他者へ橋を架けてみるのである。他者へのアプローチにおいて“橋を架ける”とは、双方向に往来できる道を作ることである。

政治、経済、文化、宗教、思想…。どれをとっても他者と関係を取り結ぶ際には、支

配一従属のシステムを生成する根源として転化しかねない。異文化理解においても例外ではない。アメリカ人中国史研究者のP・コーエンはこう述べている。

あらゆる学問的探求は、言い換えればおよそ知るということは、ある種の「帝国主義」という性格を帯びている。そして探求者が一正確に言えば、探求者が属する文化的・社会的・政治的世界が一、探求される側の歴史形成になんらかの役割を演じている時に、表現が誤りを含む危険は最大となり、「帝国主義」はとりわけ有害なものとなろう。かかる関係の下では、探求者は同時にケーキの切り手と選び手を兼ねることになる。彼は奴隷と像の両方を手に入れ、場合によっては像のデザインにまであれこれ口を挟むことになるからである【Cohen, 1984: (訳) 221】。

他者を知るということには、観察者の属する文化的・社会的・政治的世界を媒介にした他者への知的支配の契機が内在する。コーエンは、アメリカ人研究者が中国近現代史にたいして、西洋中心的な偏見や先入見を克服しつつ中国の現実を損なわずに理解する試みとして、「中国自身に即したアプローチ」を提唱した。「内発的変化の重視」「地域や地方の重視」「基層社会の重視」「社会科学の理論、方法、手法の歴史学への摂取」である【*Ibid*: (訳) 226-266】。

「中国自身に即したアプローチ」に異存はない。では、こうしたアプローチと、筆者がいう身体的体験や感情経験をテコとした他者理解とはどのような関係にあるのだろうか。例えば、先にあげた農村住民の飢えの苦しみを例にとってみよう。現在でも中国の内陸部農村では、十分な栄養を摂取できない人々が少なくない。その際、観察者が付帯する政治学、経済学などいわゆる“洗練された”科学認識からは、中国農村の市場原理の未確立や資源再分配の不公平、村民自治の未確立など、さまざまな問題が指摘されるだろう。その際、私たちは「だから中国は…」と納得し、さらに「中国は…しなければならない」と道具的解決法を提案するかもしれない。そうした解決法は観察者からすれば、制度的な知識体系に適ったものであり“正しいこと”だとされる。

しかしながら、空腹に苦しみ、将来への不安を抱え、やり場のない怒りを感じている農村住民の生活世界にひとたび足を踏み入れたならば、それだけではすまされない何ものかを私たち観察者は感じるはずである。彼らの抱える生活上の悩みや困難を“肌で感じる”なかで、生活者としての身体的感覚や感情経験を彼らと共有する機会が生れる。その上で、

私たちが「だから中国は…」とか「中国は…しなければならない」と言う場合、その発話のなかには、制度的な知識体系と照らし合わせた“正しさ”だけでなく、すでに何らかの新しいニュアンスが含まれている。つまり、身体的体験や感情経験の共有によって誘引される（可能性のある）対象世界への責任感（道徳的コミットメント）である（1）。コーエンのいう「中国自身に即したアプローチ」にたいして、筆者は身体的体験や感情経験をデコとして道徳的コミットメントを誘引しつつ他者理解に向かう必要性を付け加えておきたい（2）。

21世紀を迎えた今、中国社会を何ゆえ研究するのか。筆者の研究目的はこのように表現できる。それは、激動する中国社会を生きる人々にたいして、彼らと身体的体験や感情経験を共有できるようなアプローチを模索し、これを通じて、理論的・道徳的・実践的な他者理解の方法を探求することである。

感情経験などを共有するアプローチを支える拠り所として、本稿では次のような中国農村への仮説的命題を立てた。すなわち、「中国社会の現代化は個人の資質にみられる差異を反映したものであり、中国農村社会構造は個人のエネルギーをダイレクトに汲み出す構造特性をもっている」。本稿を通じて、こうした仮説がどこまで説得力をもつのか論証しなければならない。もし仮にこうした仮説にリアリティがあるとすれば、論証のプロセスを通じて、日々を生きる個人の姿が社会変動の担い手という位置づけのなかから抽出され、彼らの感情経験などを“肌で感じる”ことができるだろう。ここからは理論的・道徳的・実践的な他者理解をめぐる方法の獲得に向けて、何らかの手掛かりが得られるかもしれない。

この仮説の論証では、主に筆者がおこなった現地調査のデータに基づくことになる。調査地は中国東北地方（遼寧省撫順市）の都市近郊村（龔家溝）である。調査は2000年2月～8月にかけておこなわれた。

（2）現代中国農村の位置 ―ハイブリッドモダンと顔役―

1）現代中国社会とハイブリッドモダン

本稿での調査事例分析の特徴を述べる前に、筆者は現代中国農村をどのように位置づけるのか、この点について整理しておきたい。

80年代以降、先進国を中心に「近代」の問い直し気運が高まると、従来のモダニズム（近代主義）やモダニゼーション（近代化）という「方向性をもった動的な言葉」よりも、モ

ダニティ（近代性）という「方向性を欠いた静的な表現」が多用されるようになった【今田，1994：31】。ポストモダン社会の到来が実感される所以である。

こうした「近代」への懐疑的、自覚的な態度は、何も先進国に限られた現象ではない。中国の現代化は、その始まりにおいて「西用中体」（日本の場合は和魂洋才）が「スローガン」として掲げられたように、一貫して「ハイブリッドモダン」であり、外社会がもつ近代的要素をモダニティとして抽出し、自社会への適用性を考慮して取捨選択を意識的にこなってきた。西ヨーロッパ社会で生れたモダンは欧米でポストモダンへと転換したが、西ヨーロッパ以外の地域では、モダンをモダニティに抽出し操作することでハイブリッドモダンとして変質し展開してきた【厚東，1998】。

中国農村では、80年代初頭から中央の指導により、段階を追って村民自治が実施されてきたが【陸・南，2000】、こうしたことも中国社会がハイブリッドモダンであることを裏づけている。すなわち中国の現代化は、「近代化論」でいわれるように「民主化」を必然的にともなうのではなく、むしろ「民主化」をモダニティ（中国では現代性）という静的要素として懐疑的、自覚的に選択・作り変えることができる立場にある。

ハイブリッドモダンへの視点は、厚東洋輔が「同時代を地平とする新と旧との差異化の試み」として定式化している【厚東，前掲書：17】。ここでは新／旧は、対比的、理念的に再編される。したがって伝統（旧）も不変ではなく、「不断の再定義」を受けることで初めて社会のなかに制度として存在する。

このような社会認識は、中国現代化において歴史的主体であろうとする人々がおこなう社会的営為の意味について、一定の分析射程の範囲を明示する。本稿における事例分析は、こうした理論的骨格に具体的内容を肉付けしていく作業と位置づけられる。すなわち、「固有の文化的要素と社会変動を首尾よく関連させ」た社会変動理論【北原，1996：139】への関心を共有し、「具体的な事実から記述」することを通じて「現代社会と文化の変容を概念化しよう」とする立場に立つ【佐々木，1999：19】。

本稿の作業仮説は第一節で明らかにした。この仮説を、中国社会をハイブリッド社会ととらえる観点と関連させた場合、新たに得られる視点とは何だろうか。理念的な話と断った上で、次のように言い表せるだろう。

中国農村住民の行為者は、二者のグループに把握できる。前者は農村社会の実力者たちであり、彼らの社会的行為は個的資質の表出的動機に基づくものとして理解できる。後者はそれ以外の一般農村住民であり、彼らの社会的行為は欠乏動機に基づくものとして理解

できる。もちろん類型的理解のなかでの話なので、前者のなかに欠乏動機が見出せないかといえ、まったくそうではない。むしろ量的には後者よりも前者のなかに多くの欠乏動機を見出せるかもしれない。ただ、前者には後者よりも多くの表出的動機が見出せることを強調しておく。

表出的動機とは「意味充足」に結びつくものであり、欠乏動機のように機能主義の言葉（品質、性能、管理、制御、計画、最適化、目的合理性、生産性、均衡、成長、発展など）から説明される動機とは次元が異なる【今田、前掲書：130－133】。意味充足とは、既存の新／旧を差異化し、新しい意味を創造する過程でおこなわれる社会的営みであり、既存の意味世界を創造的に破壊する営みでさえある。

ここでは、意味創造に積極的に関与する担い手を農村社会の実力者に求める。こうした実力者は「顔役」という言葉で表すことができる。自己表出的な動機をより多くもつ顔役の社会的行為は、理論上、ハイブリッドモダンといった地平にたいして親和的に位置づけられることになる。

2) 分析概念としての顔役

「顔役」という言葉であるが、実は、中国社会で日常的に使用される言葉ではない(3)。むしろ、中国社会を分析した専門書のなかにだけ、しかも日本人研究者の論文や翻訳書においてだけ見出せる言葉である。したがって、顔役という言葉はあくまでも分析概念であり、中国の日常生活と結びついた実態概念ではない。

では、なにゆえに顔役という言葉を取り上げるのか。理由はいくつかある。

第一に、中国農村社会の実力者にたいする呼称は地域によって大きく異なる。モノグラフでは、調査地域における固有の表現に関心を払う必要があり、本稿でも調査村落の実力者にたいする呼称や評価を紹介している（終章【8－1】を参照）。しかし、華北の村落だけでも3、4ヶ所まわれば、「忙頭」「幫手」「張羅人」「主持人」「一把手」「帶頭人」「中人」など、彼らにたいするさまざまな呼称を耳にすることができる。しかも、これらの呼称には地域ごとにニュアンスの違いがみられる。したがって、人間個人を起点として中国農村の社会変動を分析するという目的からすれば、実力者個人を表す何らかの一般的な分析概念が必要となる。

第二に、顔役という言葉は、個人の資質が人間関係の形成に影響を与えることを想起させる。実際、日本人研究者は、英文で書かれた中国農村のモノグラフで「bully」（弱いも

のいじめ、暴漢)という表現があると、顔役を訳にあてることが多い。例えば、アメリカ人宣教師 A・スミス【Smith, 1899】は、約 100 年前の中国農村の実力者を「恐れられるべき人間」として描出したが、訳者は彼らを顔役と訳出した。また W・ヒントンは、抗日戦争後、山西省の一寒村でおこなわれた土地改革を描出するなかで、郷紳が支配者の地位を維持するために、直接でむき出しの暴力により課税、逮捕、体罰、罰金、処罰などを実行し、なかには非合法の匪賊を有する者も存在するとしたが【Hinton, 1966 : (訳) 65-80】、やはり彼らにも顔役という訳があてられた。

中国の人間関係を顔役の存在からアプローチすることは、最近、社会学者のあいだでよく使われる「関係(グアンシ)論」のなかで位置づけるとどうなるだろうか。園田茂人は中国を「関係主義社会」として次のように述べている。

人々は「社会的な地位を超え、みずからに利するよう関係ネットワークを利用する。それぞれの目的に応じて関係を使い分け、必要とする資源を調達しようとするのである。ここで注意しておく必要があるのは、資源が不均等に分配されているからこそ、人々は階層性を越えて資源を調達しようとしている点だ」。「階層差が存在しないところで找関係(ジャオグアンシ)や拉関係(ラグアンシ)といった関係の操作化は存在しないのである」。「ともあれ、関係をもつ者同士が互いの面子(メンツ)を立てあうべきだとする人情(レンチン)によって成立する関係主義は、平等指向と差異化指向を同時に内包している。そこに見られるのは、強い支配-従属関係をもつ親子関係と強い平等指向をもつ兄弟関係の併存という、中国の家族・親族構造と同じ論理である」【園田, 2001 : 210-211】。

中国社会の個人は平等指向と差異化指向を並存させ、「関係」を操作することで必要な資源を獲得するとされる。顔役的存在への着目は、「関係の操作化」が前提とする階層性や資源の不平等な分配について、農村社会に固有な状況から説明する足掛かりとなるだろう。もちろん、人間個人のもつ性格などが支配-従属関係やパトロン-クライアント関係を生み出す要因となるかもしれない。これは至極、常識的なことだが、案外、社会学が見落としてきた論点でもある。

顔役という言葉を使用する第三の理由は、社会学の蓄積してきた分析概念を用いれば、顔役の一般的な意味をある程度整理することができるからである。社会学辞典を参照する

と次のようになる。「顔」とは、特定の社会的な名声を保持した対面集団における権威、威信、面目、体裁、名誉などの象徴的表現である（4）。顔役とは、こうした象徴を体現した人物である。顔役は、対面集団において、人々と face-to-face に相互に交流する。依頼者は顔役の仲介を経ることで、他人や何らかの中間的媒体を利用しなくても、必要な資源や情報を獲得することができる。顔役は権威や威信を維持・増殖し、他者に優越した価値、すなわち面子（メンツ）の保持者であることを承認させるために、自己表出的な動機に基づいた社会的行為をおこなう。

いずれにしても、顔役という言葉を中国農村に固有な社会構造と文化的要素に関連させ、分析概念として洗練化する作業は、未だ十分とはいえない。このことは、例えば日本の村落や経営体を分析する際に用いる「親分＝子分関係」などの概念と比較すれば明瞭である。顔役概念の整理は、本稿を通じての課題である。

（3）顔役が支える中国農村の現代化 ―本稿の構成について―

以上、中国農村研究における問題関心の所在や本稿で採用する認識枠組みについて明らかにしてきた。最後に、本稿での調査事例の分析がどのような特色をもつのかについて、章構成の紹介を兼ねて述べておきたい。

第1章では、現代中国村落の類型化を試みる。そのねらいは、村落のもつ多様性の内容と偏差の幅を総体的に把握するための分析枠組みを設け、第3章以下でとりあげる調査事例村落の位置を明瞭にすることである。

中国村落は不断に構成されるプロセスにある。仮に農村住民の生活と密接に関連した組織として成立するケースがあれば、そこに中国村落の姿を実体的にとらえるのではなく、中国村落のもつ多様性と偏差のなかで、いかなる要因によってそうした生活組織が構成されたのかを問わなければならない。

そこで村落の類型化にあたっては、まず村落の人的結合を支える要素として政治的経済的な構造条件に着目する。その上で、中国農村社会の構造特性と関連させつつ、顔役という個性的人間を、政治的経済的構造条件に規定されつつも一方でそれらに働きかけ「構造化」をおこなうエージェントとして位置づける（5）。顔役は農村社会のさまざまな対面集団に準拠しつつ、住民の生活を手助けする。村落生活の内容を左右する顔役の存在は、中国村落に通底する構造特性である。「自己表出的顔役型村落」として類型化した村落は、顔

役の存在がもっとも顕著に表れることから、中国村落の通底的なモデルとして位置づけられる。

中国農村の顔役について、その概念的意味を議論しているのが第2章である。まず、顔役にアプローチすること自体のユニークさを、中国農村に関する先行研究を通じて明らかにする。次に、顔役の社会的な意味内容、すなわち農村社会での「役割」を、社会の具体的事象のレベルでは「仲介者」、抽象的レベルでは「規範の適用」を他者に影響力を行使するなかでおこなう「規範適用方法の選択者」として方法論的に定位する。また、現代化における社会の転換期では価値規範を含めた意味世界は創造期（不安的期）にあるので、顔役を社会的属性に同定させて論じるのではなく、意味世界に積極的に関与する行為者としてゆるやかにとらえるほうが、社会のダイナミズムを理解するのに適していることを主張する。最後に、顔役の存在から村落生活の存立構造にアプローチすることで、いかなる問題が実証的な課題として明らかになるのかを示しておく。

第3章以下の事例分析では、「自己表出的顔役型村落」に分類される村落を取り上げ、農村住民の社会生活に強い影響をもたらす顔役に着目しながら、顔役の個的資質が生み出すさまざまな社会現象を通じて現代化に生きる農村住民の姿を浮き彫りにする。

まず第3章では、調査村落「龔家溝」の概要が述べられ村の特徴が整理される。都市近郊村、異姓雑居村で解放後から人口流入が激しい反面、山間村で人民公社時代から食糧供出の義務が免除されるほど貧困な地域であった。改革・開放後は農業の未発達、村有工場の不在、個人経営の発達などにより、村政府は村民を管理する契機をもたず、村落生活は個々の村民の努力によった。村外社会との関係は開放的で、村を単位とした利益の排他的専有などは存在しない。

このような特徴をもつ龔家溝では、政治構造や規範構造のルースさが村の基本的な性格を形成する。第4章では、ルースな政治構造をもつ龔家溝で「緩やかなまとまり」が発生する場合、その契機や性質は顔役の個的資質によって方向づけられることが述べられる。具体的には、顔役として前書記と現書記をとりあげ、彼らの個人的志向性の違いを通じて村政府と村民の関係の通時的差異を理解する。また、顔役のもつ個人的なネットワークや文化領域での顔役の競合が村の政治構造に影響を与えることも明らかにする。

政治や文化の領域での顔役を整理した後、第5章では経済領域の顔役について触れる。具体的には、龔家溝でもっとも規模の大きい床板工場の経営者を紹介する。この経済領域の顔役が村内の経済的連関を通じて村民の生産活動にどのような貢献をしているのか整理

する。また、経済的顔役が一般農村住民とは異なる志向性に支えられていることを、顔役の抱く企業集団化計画から浮き彫りにする。さらには、経済的成功が政治的威信の獲得につながり、政治的威信を通じて経営的戦略の実現が目指されていることを明らかにする。

これまでとりあげてきた分析対象は、農村社会で中心的位置を占める顔役であった。第6章では、むしろ、こうした中心的位置を占める顔役からは周縁にいる者たちの経済活動を取り上げる。小規模床板工場を大規模工場と比較することで、農村住民の経済活動がいっそう立体的に浮き上がる。

第7章では、ある兄弟姉妹の歴史を紹介する。その目的は、周縁にいる者たちの経済活動を彼らの生活世界のなかに位置づけ直し、周縁者の経済活動から社会的意味を浮き彫りにすることにある。具体的には、文化大革命時代の下郷、改革・開放時代の都市への再移住、床板経営者としての自立へと向かうプロセスを再現し、兄弟姉妹をめぐる限られた血縁や婚姻関係のなかで、身辺的な顔役がいかなる役割を果たしたのかが分析される。周縁に位置する兄弟姉妹は親族関係における身辺的な顔役を介して農村社会の中心的顔役へとつながる。村落生活の存立条件のひとつに、こうした顔役の重層的な存在が指摘される。

注

(1) 他者理解には、政治、経済、思想、科学など制度的に“洗練された”アプローチに加えて、道徳的なコミットメントが必要である。こうした研究スタンスは、現代ドイツの哲学者・社会学者ユルゲン・ハーバーマスの啓発されるところが大きい。もちろんその意味は、彼の社会理論（社会認識）が中国農村の抱える現実と課題にたいして無条件に有効だと主張することではない。豊泉周治が指摘するように、ハーバーマスの研究態度には、ひとつの他者理解のあり方（批判的社会認識のあり方）が見出せるという意味である。すなわち「理論的であることと政治的であることが顕著に切断されやすい日本の学問領域に対して、ハーバーマスの場合、理論的・学問的であることと道徳的・倫理的であること、そして実践的・政治的であることは不可分の関係にある」【豊泉，2000：5】。私たち日本人がアジア社会を研究するにあたっては、主知主義に墮すことのない道徳的、実践的な“責任ある”態度が要求されるのはいうまでもない。道徳的コミットメントが欠落している場合、アジア社会にたいして“架けた橋”も、道具的解決法の独善的な支配－従属構造を持ち込むだけで、結局、だれもその橋を渡らないことさえある。

(2) ここでは「感情の比較社会学」が明らかにする、次のような視点にも留意する必要がある。「感情

体験や感情表現の社会的分布を観察していると、個々人や個別的な状況を超えた同型性、規則性を見出すことができる」。こうした「感情規則の内部構造」からは「感情体験の仕方に関する規則」と「体験された感情の表現の仕方に関する規則」が取り出せる【石川、1997：202】。他者理解を身体的体験や感情経験をデコにしておこなうことは、「異文化の規則を自文化に翻訳しようとする試み」ともなうが、他者の行動が「所属文化に同調するもの」だという保証はない【同上書：205】。感情をその社会性から定式化するこうした観点は、感情経験が自然主義的人間観のなかで無条件に共有されるという考えを厳しく戒めると同時に、感情経験が相互理解にスムーズに働くとは限らず、まさしく新たな「誤解」の種にさえなることに注意を促す。筆者自身、フィールド調査を通じて、インフォーマントと調査者の相互作用のなかでめまぐるしく変化する感情体験にかかわり、著しく異なる感情表現によって自分自身の認識枠組みが麻痺し眩暈のようなものを感じたことさえある。

本稿での事例分析を通じて、私たちが感情経験をデコにした他者理解に到るには、少なくとも次の二点に意識的であることが要求される。第一に、「一度や二度の出会いやわずかな体験で相手を断定的に評価するのは軽率すぎるということになる。信頼性の高い判断をおこなうには情報不足の折は判断を留保しなければならない。この意味では日常的推論は科学的推論となんら変わるところはない」ということ【同上書：206】、第二に、「さまざまな感情にこめられた文化的な力についてどのように語るのか」という問題について、文化人類学のフィールド経験や観察者自身の人生経験（自己をめぐる位置づけの絶えざる再定義）を通じて発せられた次の知見、「ひとの情動的な経験を把握するためには、わたしたちは一般的な死について語るのではなく、その主体が社会的な関係の場でどういう立場にいるのかを考えなければならない」と言う言葉にも真摯に耳を傾ける必要がある【Rosaldo, 1989：(訳) 7－8】。

いずれにしても、感情経験をデコにして道徳的コミットメントを誘引しつつ他者理解に向かうという試みには、考察すべきさまざまな課題が存在する。先行諸研究の整理も含めて、今後の課題としたい。

(3)「顔役」という言葉は中国社会で耳にすることはないが、「顔」という言葉については、中国社会に固有な文化的要素が内包されている（もちろん、中国で言う「顔」と分析概念として日本人研究者が用いる「顔役」とのあいだには、直接的な関係はない）。李明伍は「顔」を次のようにまとめている。「顔の象徴する社会的事象」として「尊厳、名声」「社会道徳的人格」「関係倫理的人格」「能力的人格」「社会的交換資源」をあげる。これら五つの側面は、中国文化の言葉では「名」（世俗的・社会的自我の証）、「義」（道徳的義務）、「利」（手段としての社会的資源）という三つに集約される。顔の全体像は「名顔」「義顔」「利顔」の三つの側面をもつトライアングルである【李、2001：199－204】。また「顔とは、不特定の他者もしくは特定の他者の意識において形成されているであろう自我の肯定的人格のイメージである」。そして「不特定の他者一般」によって意識されているであろうイメージが「臉」、「特定の他者」

によって意識されているであろうイメージが「面子」として語られる【同上書：205】。

(4)【濱嶋他（編），1977】を参照。

(5)「構造化」については、今田高俊【今田，1986】から一定の影響を受けていることを確認しておく。

第1章 現代中国村落の諸類型

一通底的構造としての「自己表出的顔役型村落」

(1) 問題の所在

本章では、現代中国村落（行政村）の類型化を試みる。この作業を通じて、現代化が農村住民によってどのように生きられているのかを理解する足掛かりとしたい。

周知のように、中国農村では、1978年の改革・開放以降、さまざまな制度改革が実施されてきた。第一に、国家による市場経済要素の積極的な導入がある。人民公社の解体、農家生産請負責任制、農作物流通自由化など、計画経済から市場経済への移行が進められている。

第二に地方分権、いわゆる「放権譲利」の実施、例えば、国家行政コストの削減を目指した地方政府（省・市・県・郷鎮）への財政権限の委譲がある。地方政府の財政支出の拡大は彼らに独自財源の確保を促し、経済利益の追求を余儀なくした。一方、行政村は、国家の財政体系から除外されたため、上級の地方政府と同様、あるいはいつそうシビアに、財源やその規模、配分などについて自主的にやりくりする必要性が生じた⁽¹⁾。村の福祉や社会資本整備などの財源は、農地請負費、村有工場からの上納金、民営企業の土地使用料など、村内でおこなわれる諸事業から徴収しなければならない。現在、村の共産党支部や村政府幹部の重要な任務は、経済発展に尽力することだといって過言ではない。

第三に、国家による、いわゆる「村民自治」の推進がある。すなわち、一連の制度改革により、人民公社時代、あるいは改革・開放後に蓄積された村所有の生産手段の管理と経営に変動が生じ、また、村民間の利害関心が強調されたことで、経済的な矛盾や衝突が村落内部に顕在化した。国家は、これに対処するため、村民の民主的参加による村の財務収支の管理と監督の制度化に着手する。87年には「中華人民共和国村民委員会組織法（試行）」が公布され、88年6月から実験的な実施に至っている。98年11月、第九期全国人民代表大会常務委員会では、それまでの経験を踏まえて「中華人民共和国村民委員会組織法」を採択し、国家にとっての理想的な行政村のあり方を示した。

以上のような農村社会の制度改革のなかで、仮に、村落の財政基盤（共有財産）が整備

されており、その利益分配をめぐる中で村民の関心が村落の管理運営を焦点に糾合し、かつ、そこに何らかの地域団体の結合性に関する価値規範の作用が認められるならば、国家の主導による「村民自治」政策とあいまって、村落は農村住民の生活組織として発展する可能性も開けてきた【首藤，1999】。

当然、こうした農村社会の変化は国際状況にも連動している。改革・開放が始まってまもなくの頃、沿岸 14 都市の経済技術開発区、および、深圳、汕頭、珠海、厦門、海南島の経済特別区が、経済発展の牽引車の役割を果たした。いわば、外国資本や先進技術を取り入れることではかられた国家による経済発展戦略だった。またそれに前後して、農村の郷鎮企業が、主に「自力更生」をスローガンとした人民公社時代の遺産（地域共有資源、地域意識、地域政府）を基礎に発展したこともよく知られている。

またここ最近では、都市、農村において民営企業の台頭が著しい（2）。私営企業家は社会主義市場経済の重要な構成要素として、法の庇護下に置かれるまでになった。もちろん、外国からの資本投資や技術提携は経済開発区などの限られた域内を越えて、中国国土の広い範囲にわたって広がっている。公有経済部門だけでなく非公有の部門においても、外国との商取引、合資、合併事業などがおこなわれる。かつ、そうした現象は都市部に限らず農村地方にも存在する。現在の中国では、自生的資本家（私営企業家：民間資本家と民間経営者の未分化な状態）が台頭するなかで、都市だけでなく農村部からも国際市場に向けて工業製品が供給される状況にある（3）。

以上のように、市場経済の浸透、村民自治の普及、村外社会の情報・資源との接触という事態を踏まえると、社会の変化にたいして農村住民が主体的にどのように対応しているのかに興味をもたれる。村落の果たしうる可能性についても、こうした文脈に即して問いかける必要があるだろう。すなわち村外社会のできごとは、その少なくない部分が村落を媒介にして個人に作用するが、村落が農村住民の生活に貢献するケースがみられる場合には、そこにはどのような条件が必要なのだろうか。

1997 年において村民委員会は約 74 万存在する【河原，1999：86】。したがって、それとほぼ同数の村落（行政村）が存在する。農村住民にたいして村落が果たしうる役割を明らかにすることは、農村住民がどのように現代化を生活しているのか理解するための重要な一作業である。現在、依然として戸籍の区別（都市／農村）は人々の生活を大きく左右しているが（4）、一方、農村住民間においても、どのような村落に戸籍を所持するか（村籍）によって、生活に質的な格差が生じている。こうした農村住民の生活の差異があらわれる

具体的様相のひとつが村落である。

本章では、村落が村民生活を立ち上げる構成条件を明らかにすることで中国村落の類型化を試みる。このことは、中国村落のもつ多様性の内容と偏差の幅の総体的な解釈にも寄与するであろう。

（２）村落の結合原理

農村住民が構成主体であることを射程に入れた村落類型の分析軸は、どのように設定できるだろうか。ここでは旗田巍【1973】、清水盛光【1939】【1951】、今堀誠二【1953】らの先行研究を批判的に参照し、旧華北村落の結合原理を明らかにするなかで分析軸の設定を試みる。とくに旗田の分析枠組に関しては、当時の歴史状況に内在的に埋もれてしまうことのない、むしろ現代の村落を分析するための一般的視点が含まれていることを明らかにする。

１）旧華北村落の地域団体的結合の脆弱性

旗田巍は、戦前・戦中、中国史研究の重要な課題であった中国専制主義の本質や基盤に関心を寄せつつ、旧華北村落の実態を探った。旗田は「村の土地・村の境界の内容を分析することによって、それを生み出した村落団体の性格を知ること」ができると考えたが【旗田、前掲書：58】、旧華北の「大多数の村々では、境界といえば看青の境界があるだけ」だったので【同上書：59】、看青の境界を取り上げて村の性格に関する考察をおこなった【同上書：57－120】。

旗田は看青の境界が「村の発展過程においてではなく、その零落の過程において成長発展する」ことを見出した【同上書：67】。村の零落過程とは、第一に、同族関係が分解して異姓雑居が強まる傾向、第二に、自作農が没落して貧農化・小作化が著しく、階級分化が進行して村民生活が窮迫化する過程を意味している。

村が零落すると、同じ村のなかから作物を盗む貧民が増える。富裕層は盗難防止のために村のなかでもっとも盗みをやりそうな「光棍」「土棍」（貧しくて結婚もできず、腕力の強い乱暴者）たちを看青夫として私的に雇った。当初の看青の境界は、看青夫どうしの縄張りが固定されたものだった。その後 19 世紀末から 20 世紀初頭にかけて、財政支出の増加にともなう新財源の確保に差し迫られた県政府は、「青苗会」が村民から「青苗費」（看

青の費用）を徴収する慣行に目をつけ、青苗会の設立をすべての村々に強要した。青苗会を通じて新しい税金を徴収しようとしたのである。県政府の基層社会への介入にともない、看青の境界は、看青夫による私的看青の縄張りから青苗会による公的看青の境界へと変容した。その後、県政府の徴求が増すにつれて青苗費の名目での村費徴収が増加し、村の境界は村費徴収という課税の境界として形成されていく。そのなかでも、とくに零落著しい村落ほど「看青の境界が課税の境界とも一致し、完全な村の境界」となっていた【同上書：67】。

旗田はこのように村の境界（看青の境界）の内容を明らかにした。その上で、こうした境界の内容を生み出した華北村落の団体的性格について、次のように述べている。看青の境界は村の封鎖性・排他性を示すものではない。外村人への侵害にたいする防御、本村人の利益の擁護といった性格が薄く、作物盗難防止の協同は本村人を第一義的に守るような積極的意義をもたない【同上書：67－70】。また、コウリヤンの葉の採集、採草、落穂拾い、放牧などの慣行も看青と同様に消極的な性格しかもたず【同上書：98－102】、結局、農民生活にとっては、本村人だけが利益を享受するような区域、すなわち村という一定の団体支配区域を決める必要がなかったと結論した【同上書：116－120】。旧華北村落の実態は、農民の生産活動に積極的に関与する「村落共同体」の姿からは程遠かったのである。

2) 旧華北村落の本村人関係に表れる団体的性格

しかし旗田は、「地域団体としての村の成長の未熟さ」から、「直ちに華北村落の団体的性格が微弱であると結論するのは早すぎる」という。つまり「村の人（あるいは村民の資格）」については、その事実および意識が明白に存在する」ので、それらの検討を通じて華北村落の団体的結合を理解する必要があると主張した【同上書：121】。

旗田は、「村の人」の結合は「古い型の村」つまり同族集居村に顕著だとし、そこに団体結合のプロトタイプを見出した。農民は自分の村の人を「本村人」「本地人」「当地人」、他の村の人を「外村人」「外地人」などと呼ぶ。本村人の資格条件が最も厳重な村では、家族連れで住むこと、家・土地・墓を所有すること、代々居住していることなどが求められる【同上書：153－154】。すなわち本村人の資格条件は、同族意識に強く制約される（5）。

一定の資格を満たす者が本村人と呼ばれるわけだが、本村人には彼らだけの特典や負担があることから、外村人とは異なる村落生活の内容をもつ。これら特典や負担には、村廟祭礼の参加、村公有地が小作に出された場合の小作優先権、村公有地の先買権、村民所有

地の先買権、公共採土地からの採土、公共器具や公共墓地の使用、村長選挙への参加、村費の負担などがある【同上書：121－126】。

本村人関係を通じて利益の排他的専有がおこなわれ、土地支配のあり方など農民の生産活動にとって重要な局面にも本村人関係は積極的に関与する。地域団体としての村が作物盗難防止といった消極的な役割しかもたないのとは対照的であった。

しかしながら、こうした本村人関係は「歴史的方向」【同上書：67】である村落の零落にともない消失していく。村が零落すると、土地所有は本村人の条件ではなくなる。土地が不在地主の手に渡ると、元来のように自作農＝本村人の所有地面積に応じた村費負担では村費が賄えなくなる。村費負担は土地所有者から土地耕作者へと幅が広げられ、課税範囲（村の境界）が形成される。この境界内の土地を耕す者は、どの村の人であろうと課税した。本村人はさまざまな特典を失い、「単なる村落居住者」として重い村費の負担に苦しむ存在となった【同上書：166】。村の境界は、一部の富裕な土地所有者層の利益を守るために作られていったのである【同上書：71－98】。

旧華北農村における本村人結合は消失傾向にあり、さらには、本村人結合に代わるような「家族・同族の血縁の枠をこえる村仲間の紐帯の成長」もみられなかった。「私有地の枠をこえて村の土地の利益をまもる」ような新しい団体的性格は生れなかったのである【同上】。

3) 人々の結合を支えるもの ―共有財産とその管理をめぐる規範的価値―

ここで、旗田の所論にたいして批判的検討を加えておきたい。旗田は、同族集居村での共有財産の存在をアプリアリに措定している。それゆえ同族集居村では、共有財産の管理や分配をめぐって本村人の資格条件や特典などが必然的に制度化されるような印象がもたれている。旗田は共有財産の蓄積プロセスを無視しているわけだが、ここから生じる問題が二点ある。

第一に、旗田は村落の零落後、本村人関係に代わる新しい結合形態が生れないと嘆き、こうした過程を解放前中国の歴史に内在化させて理解した。しかしここではむしろ、そうした本村人結合自体は人々の関係のなかで共有財産が存在することから生じたものであり、結局、人々のあいだに「持ち寄る」財産がなければ団体的結合も生じないことにこそ注目すべきである（6）。同族規範が本村人の結合を生み出すのではなく、族人のあいだに持ち寄られた財産がある場合、その管理や分配をめぐって同族規範が人々の関係に働く“可

能性”がある。旗田の議論ではこのことが逆になっている。

第二に、共有財産が存在すれば、その管理に適した村民結合形態が形成され、分配をめぐって何らかの規範的価値も見出しうる。排他的な利益専有の形態は同族規範に基づいた本村人関係に加えて、従来希薄であった村落地域団体の構成員としての本村人関係もありうる。旗田だけでなく、清水や今堀に共通した欠点は、「同族村」「共有財産」「規範の成立」から「異姓雑居村」「共有財産の解体あるいは支配階級の専有化」「無規範化」と単一に図式化していることである(7)。確かに民国期の華北村落は日本軍や軍閥などの搾取を受け、農村住民が自治的に管理する共有財産を消失しつつあった。しかしその後の中国農村は、土地改革、農業集団化を経て、地域団体組織を形成しうるだけの共有財産を蓄積したところも少なくない【小林, 1997】。すなわち、地域団体が支配する土地が明瞭に区画化されたこと、灌漑水利施設や道路など公共の社会資本が整備され、農機具などの公共物も所有するようになったこと、あるいは「社隊企業」など非農業部門の生産設備が建設されたことなど、地域団体としての村落の結合条件が整備されたところも少なくない。

「生産大隊＝自然村は、境界をもつ、文字どおりの村落共同体の“発生”を意味する」ともいわれるように、人民公社時代の「自力更生」政策は地域組織の形成と「村落エゴの台頭」という中国農村の新しい局面をもたらし改革・開放に到っている【中村, 1979:216】。

以上より村落類型の分析軸には、村内経済基盤と、それを管理する人々の結合形態を設定することが適当かと思われる。人々が結合するには共有財産の存在が不可欠である。共有財産が蓄積されるとともに、その管理運営をめぐって村落生活の立ち上げに志向した規範的価値が適用され村民のあいだに地位・役割が体系化されていく。村落が生活組織として構成される可能性はこうした過程のなかに見出せる。

(3) 村落類型の分析軸 ―村内経済基盤と村民の結合形態―

1) 村内経済基盤

村内経済基盤では、その所有形態や蓄積の方法において相互に排他的な性質が存在し、村落の性格はそれぞれに異なって規定される。所有形態では<集団所有経済―私的所有経済>、蓄積プロセスでは<市場志向―国家志向>が、村落を類型化する上で重要な標識となる。

①集団所有経済―私的所有経済

村落のおこなう公共公益事業は、村民生活の重要な側面である。人民公社の解体後、その行政部門を引き継ぐ形で郷人民政府と村民委員会が設置されたが、それがおこなう公共公益事業の経費は中央政府の財政不足もあって引き続き郷と村が独自に負担することになった。このため村政府は事業費として「村保留金」を個々の農民に直接賦課する【河原，前掲書：105】。このなかでも、集団経済と関係する村営工場、村有工場請負経営者、専業戸（養魚池など村の資産を使用するもの）などからの上納金は重要な収入源である（【石田・中田，1988】【厳，1997：142】など）。私営企業が発展している村では、彼らの納める管理費なども村財源となる。確かに郷鎮政府による村への援助も存在するが、その実質的内容は、村からの上納金を一部返還したものにすぎない【折，1997：261】。したがって、村党支部委員会や村民委員会は、独自の方針を通じて村内企業の管理に関与し、収入の多い非農業部門の発展と雇用創出に努めるケースが多い。

ここで問題なのは、公有経済と私有経済とでは、村政府の関与の仕方が異なることである。集団所有経済部門では、「行政の側が契約関係を通じて、行政指導や営業取消を行うことや、投資額・収入額・税額などの契約関係を把握することも可能となっている」ように、その関係が密接である。一方、私的所有経済部門と行政の関係は、第三者的協会を通じて指導監督がおこなわれるだけで、間接的、希薄なものである【中村，1994：30】。

したがって、村落が村民のために実施する諸事業は、財源が村政府の直接管理できる集団経済にある場合、より計画的で公平におこなわれると予想される。村政府財源の集団所有経済－私的所有経済の違いは、村落の構造的な差異を生み出し、それぞれタイプの異なる村民生活のあり方を引き出す。したがって、村落類型の村内経済基盤に関する対抗的な分析項目のひとつに、＜集団所有経済－私的所有経済＞と設定するのが適当である。

②国家依存－市場志向

中国経済は計画経済から市場経済への移行にある。これを理念的にとらえれば、村内経済基盤の蓄積は、市場活動によるのか、あるいは非市場活動によるのかに大別できる。非市場活動には、例えば、国家による農地収用への補償、国有資産などの払い下げや私的専有、土地所有権の売却・貸し出しなどがある。いわば、市場活動を通じて財政基盤を整備する村落が国家から自立的であるのにたいして、非市場活動の方では、国家の投資や資産（土地）に寄生する傾向がみられる。

2) 村民の結合形態

①本村人結合－本村人の資格条件なし

現代の中国村落では、村民の結合原理について、同族的規範に基づく本村人結合に加えて、地域団体的規範に基づく本村人関係も考慮しなければならない。従来の多くの村落類型では血縁村と地縁村を対立的にとらえてきたが、本稿ではむしろ、排他的な利益享受の結合形態として両者を本村人関係として同一的にとらえる。本村人の資格条件は、宗族成員と村落成員の二通りが存在することになる。そこで、結合形態に関する分析軸のひとつは<本村人結合－本村人の資格条件なし>と設定する。

ちなみに後者では「顔役の個性の顕現化」が特徴である。血縁的、地縁的な規範が相対的に薄まるからである。こうした村落での村民結合形態は本村人結合に比べて拡散的だが、しかし外社会につながりをもつ顔役が村落生活の立ち上げに向けて資源を動員することで村がまとまる可能性もある。

②「村民自治」：村財政収支の管理・監督への村民参加－不参加

村民の結合形態には、本村人関係といった、いわば農村社会構造に直接かかわるものもあれば、一方、国家が推進する「村民自治」(8)によって形成される結合形態もある。村民自治では、村民の民主的参加による村の財務収支の管理と監督の制度化が重要な目的である。田原史起が明らかにしているように、理念的には前者が村落内部からの自生的結合、後者は村落外部からの構成的結合ととらえられ、実際には両者は相互補完的に作用し、地域によって複雑な様相を示している【田原，2000】。村民の結合形態に関する分析軸のひとつに、<村財政収支の管理・監督への村民参加－不参加>をあげておく。

3) 経済基盤をもたない場合

①定住志向－出稼ぎ志向

国家財政に含まれない村落は自力更生を強要されるが、さまざまな要因のため何ら経済基盤が形成されない村もある。とくに沿海部に比して内陸部の村落は、こうした「空殻村」【徐，1997：267】とよばれる貧困村落が多く存在する。空殻村では、生活に占める村落の役割が低い傾向にある。

都市や富裕村の近郊・後背地の村であれば、農村住民は現金収入機会を求めて都市部などで仕事を探したり、自ら個人経営者として事業を起こしたりする。また、都市消費者向けに農作物を栽培し販売する。この場合、生活の基盤は戸籍を有する自分の村である。一方、都市遠隔地であれば遠方の都市部へ出稼ぎに出る。

空殻村の生活のあり方は村民の志向性を指標に、＜出稼ぎ志向－定住志向＞として分類できる。市場志向の村落であれば、積極的に裕福な都市部や農村部に出勤や出稼ぎに行く。それにともない、移出先での同郷ネットワークや、母村と移出先を結ぶ協同関係が彼らの重要な生活組織となる(9)。一方、定住志向であるならば、国家の援助に期待するなどして、積極的な出稼ぎ戦略は見られない。栽培する作物も自家消費が中心で、現金収入機会がほとんどない。

②村民結合形態について

出稼ぎ志向の村では、出稼ぎ者の送金や、あるいは出稼ぎ者が帰郷し、資金、技術、情報などを村にもたらす結果、郷鎮企業など村内経済基盤が徐々に蓄積され、これを焦点に村落内の人的結合が形成されるようになる【高田，1999：117－123】。また、こうした帰郷者の企業設立を、土地、税金、資金調達、人材獲得などの面で郷鎮や県、省の地方政府が支援し【同上書：123－124】、農村住民によって村落が構成されるのを後押しする。

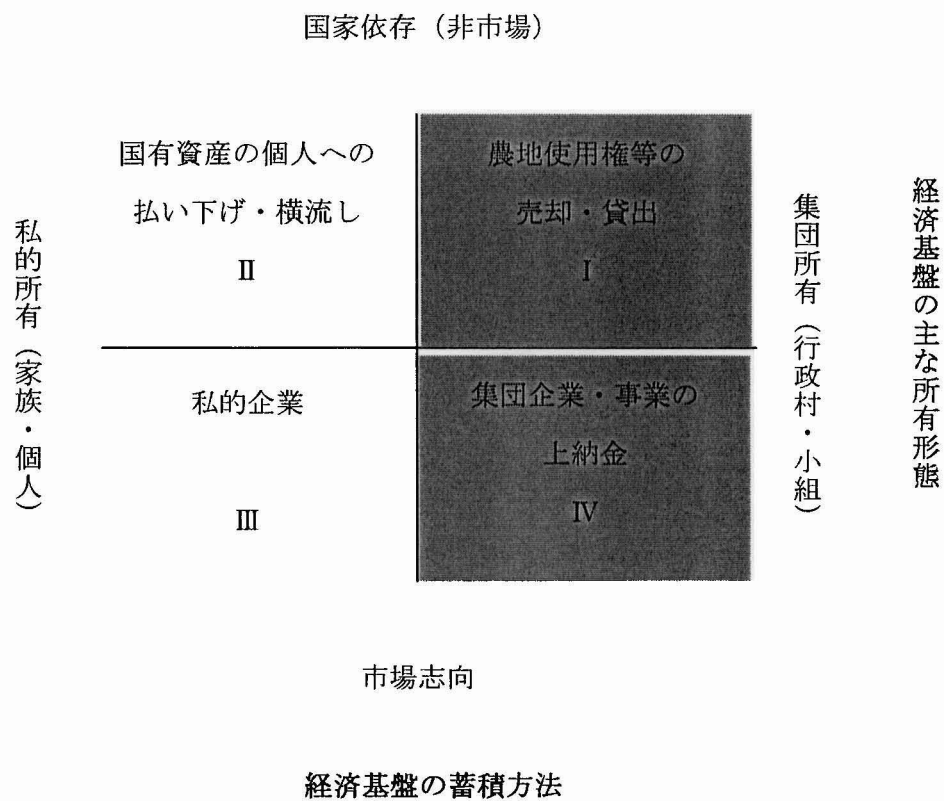
これらの村では、経済的利益を排他的に享受する本村人関係が未成熟である。また、「村民自治」による外部社会からの構成的結合も、村財政収支の管理、監督に村民が参加する意義が小さく形式的なものである。村民の結合については移住メカニズムについての分析が必要であり、村内の村民結合について何らかの排他的分析項目を設定するのは困難である。

以上、経済基盤未成立の村落類型は、＜定住志向－出稼ぎ志向＞とのみ暫定的に設定しておく(10)。

（４）現代中国村落の諸類型

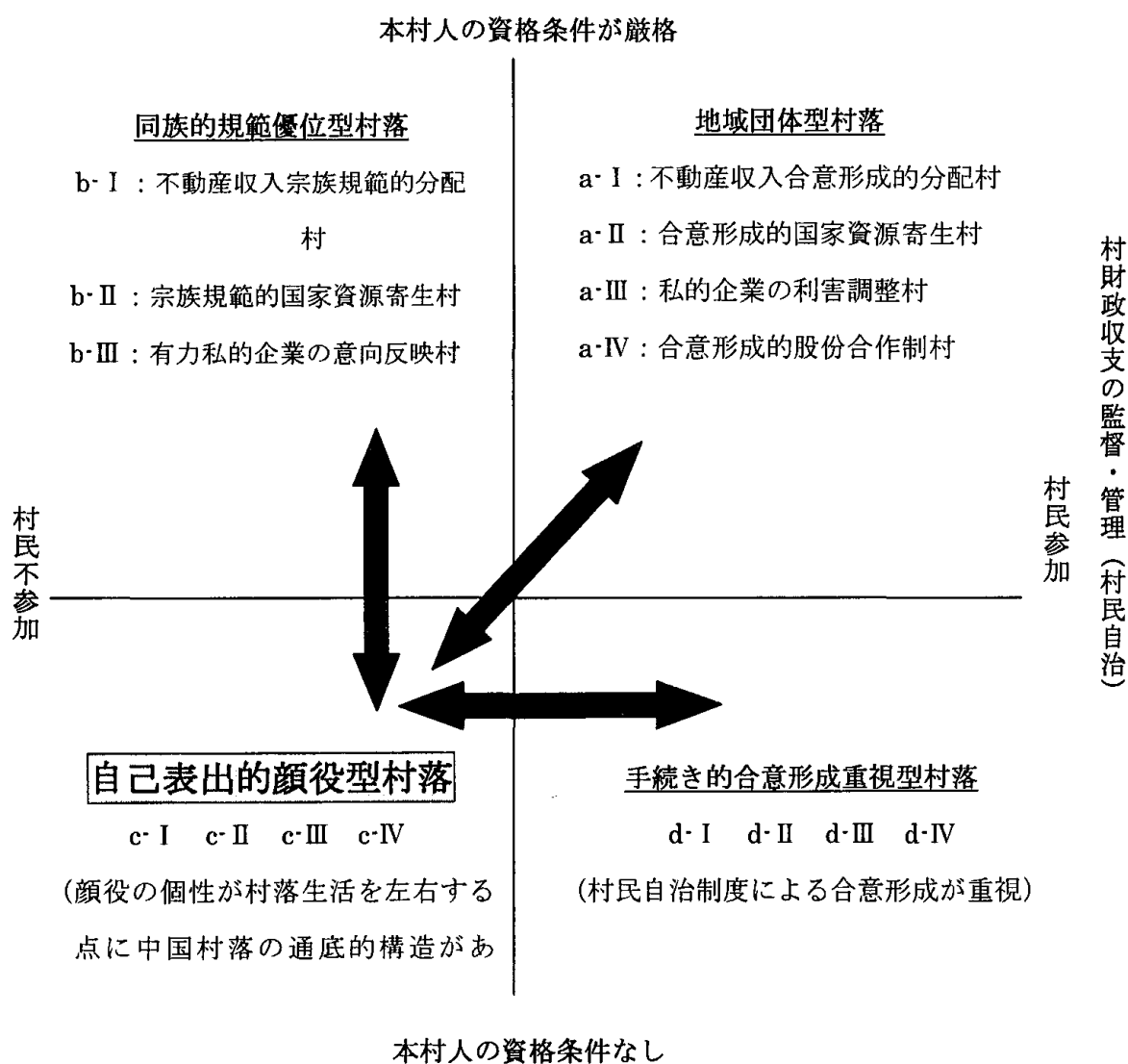
村落を類型化するにあたり、村内経済基盤を４形態（〔図１－１〕）、村民結合を４形態、それぞれ明らかにした。前者と後者を掛け合わせたものが村落類型として表される（〔図１－２〕）。

〔図１－１〕 村内経済基盤



（注）類型Ⅰと類型Ⅳの村内経済基盤の管理主体は村政府である。したがって、ⅠとⅣは村財政と密接に関係する。
一方、類型Ⅱと類型Ⅲは、管理主体が個人であり、村財政と関係しない場合がほとんどである。

〔図 1－2〕 現代中国の村落類型（通底的構造としての自己表出的顔役型村落）



〔注 1〕 中国村落に通底的な構造は「自己表出的顔役型村落」にみられる。

〔注 2〕 これら 16 類型の村内経済基盤をもつ村落には、村内経済基盤未成立の村落からの出稼ぎ者や出勤者を抱えている。また、村内経済基盤の“成立”“未成立”は相対的で、これら 16 パタンの村落も、より裕福な地方へと出稼ぎや出勤に行く村民を抱えている。

〔注 3〕 比較的経済の発展した村落は、村財政源として I 型をもち、かつその他 II、III、IV 型のいずれかの経済基盤を併せもつ場合が多い。こうした経済構造の多層性は、村政府と村民の間の関係に反映する。

1) 村内経済基盤の「ねじれの構造」

前節の1) ①の議論では、村内経済基盤の所有形態が集団所有か私的所有かによって生活のあり方が構造的に異なってくることを指摘した。このことについてもう少し詳しくみておこう。

【図1-1】からわかるように、類型Ⅰと類型Ⅳでは村内経済基盤の管理や利益分配の主体は村落であり、経済基盤は村財政と密接に関係している。一方の類型Ⅱと類型Ⅲでは、経済基盤は私的所有経済にあり、村財政との関連が小さい。生活組織の担い手について理念的にとらえた場合、類型Ⅰと類型Ⅳでは村落が主要な担い手になる可能性があるが、一方の類型Ⅱや類型Ⅲでは家族や個人（顔役）の役割が大きく、村落はむしろ村民生活にたいして消極的になる可能性が強い。

しかし、後に紹介する村落事例からもわかるように、実際の村落経済基盤は集団所有と私的所有の多層性を示すことが少なくない。もう少し厳密にいうと、経済が比較的発展した村落の多くはⅠ型の経済基盤をもつ傾向にあり、村財源の主要部分がこうした土地使用権の売却益に依存することが多い。

すなわち市場志向的に経済活動をおこなっている村では、経済発展とともに農地の工業用地への転換がおこなわれ、土地使用権価格も上昇する。土地使用権の売却益の約半分は村の取り分となるので、結局、市場活動に志向している村では財政収入の少なくない部分が土地使用権の売却益で占められ、市場経済で成功すればするほど国家資産（土地）への寄生性が強まる傾向にある。

ちなみに第3章以下で紹介する「自己表出的顔役型」村落の龔家溝は、村財政がⅠ型、村民の生活がⅢ型の経済基盤に依存している。村政府と村民の関係は没交渉的で希薄なものだが、その一因はこうした村内経済基盤の「ねじれの構造」にあると理解することもできる。一方、村民の生活と村財政がもっとも緊密な関係を示すのは、「地域団体型」のa-Ⅰ型とa-Ⅳ型の経済基盤をもつ村である。

2) 通底的構造としての「自己表出的顔役型村落」

村落類型は、「地域団体型」「同族的規範優位型」「自己表出的顔役型」「手続き的合意形成重視型」と名づけた。類型化に一般的な欠点であるが、ここでも経済基盤や村民結合形態の形成など、動態的なプロセスが捨象されがちである。こうした理論的欠点を補足するために、本稿では、村落構造の形成に大きな影響力をもつと仮定される顔役の存在をピッ

クアップした。さらに、顔役の存在を中国村落の通底的構造ととらえ、「自己表出的顔役型村落」を中国村落の通底的モデルと位置づけた。

顔役の存在を重視する理由は、中国農村の構造的特性にある。たとえば佐々木衛は、華北の村落社会構造を次のように分析した【佐々木，1993】。華北農村社会は制度的枠組としての宗族、感情に基づきインフォーマルに結ばれる個人的関係のネットワーク、そして前者ふたつの中間に位置する「党」や「会」などの任意集団の三層から構成される。そして、これら三層の社会関係を貫く一般的特徴として「差序格局」【費孝通，1998（初出1947）：24－30】が指摘される。

費孝通の「差序格局」は、佐々木による整理も参照すると【佐々木，前掲書：29－30，49－51】、次のようにまとめられる。中国の社会関係は「コネ」や「よしみ」を通じて結ばれ、そうした個人を中心として結ばれた関係が堆積することで集団も形成される。したがって社会規範は、社会分業にともない領域ごとに特有の規範的価値が制度化されるのではなく、あくまでも私人関係の「類別」によって成立する。この類別を表したのが「差序」である。具体的には鬼神、君臣、父子、貴賤、親疎、爵賞、夫婦、政事、長幼、上下の十倫であり、二者間の「差序」（差異）に基づいた「格局」（秩序）を構成する。しかし、こうした「差序」で表される形式的な規範も、対面関係を越えた制度的拘束力を強く持たないがゆえに、現実社会における個人の社会的属性によって絶えず相対化される。実際に「差序」が適用されるかどうかは行為者の状況判断と規範的価値の適用の方法に委ねられる。

「差序格局」は、フォーマル、インフォーマルを問わず全ての集団に通底する構造的特性である。集団はキーパーソンの個人的な呼びかけで組織され、集団の凝集性はそうした特定個人のリーダーシップに依存する（11）。

結局、中国村落は二者関係に基づく人的結合が蓄積するなかで形成される対面集団である。中国農村の日常的な姿に配慮しつつ村落の存立構造を解明するには、キーパーソンの能力、財力、地位、威信、人格の魅力といった個人的属性から、人間集団の実際の動きを問いかける視点が必要である。ここに、実力者（顔役）の存在を中国村落の通底的構造ととらえた理由がある。

本稿では、従来、中国村落の実体的な姿として論じられることの多かった同族村、「村落共同体」、「村民自治」推進村なども、その発生メカニズム自体に分析の焦点を置こうとする。こうした問題意識からは、同族村（「同族的規範優位型」）も次のように仮説的に説明される。すなわち、顔役が農村社会のフォーマルな枠組みである同族規範を内面化し実

際に適用することで、住民の二者関係に同族規範が構造化された対面集団を立ち上げた、
というものである。「同族的規範優位型」村落は、中国農村で確かに高い頻度で発生するが、
しかし顔役の存在を通底構造とする中国村落では、それもあくまで偶然の産物なわけであ
る。

3) 村落類型に関する事例

①地域団体型村落

a-I : 不動産収入合意形成的分配村 都市近郊村などでは、工業化や都市化が進み、
土地価格が上昇する。村政府の財源は農地使用権売却益に大きく依存するが、農地を失っ
た村民は代替的な生活の糧を得るために、売却益の公平な分配を要求し、村政に参加する
【徐, 前掲書: 374】。なお、**b-I** の不動産収入宗族規範的分配村では、村民自治制度に
のっとった村民参加がおこなわれない。すなわち、本村人関係に規定された利益分配がお
こなわれることより、**a-I** と比較した場合、よりいっそう規範的価値（文化）要素を反
映させた結合形態を示す。

a-II : 合意形成的国家資源寄生村 **b-II** 参照。

a-III : 私的企業の利害調整村 **b-III** 参照。

a-IV : 合意形成的股份合作制村 広東省深圳市B村【徐, 前掲書: 324-337】。人口 1500
人多、もともと陳氏の単姓村である。工業の発展により、本村人人口の 20 倍にあたる外来
人口 3 万人が在住する。B村の経済基盤は、正確には **a-IV**に加えて、**a-I** も併せもつ。
1986 年、生産規模拡大に対応するため、村級および各村民小組を単位とした独立採算責任
制の股份合作公司（株式合作会社）を設立した。村民小組級の公司では、各戸にひとりの
株式代表が参加する株式代表会議が最高決定機関となる。村の城鎮化（都市化）にともな
い、株式公司は農民の請負田を徴収して工場用地に転用することで、企業から土地の使用
料、上納金を得る。請負田を徴収された農民は、それと引き換えに公司の株を取得し配当
金を得る。村級の株式公司では、董事長は党支部書記が、副董事長は村民委员会主任がそ
れぞれ兼任し、「党・政・企」の三位一体体制の下で、村有資産を管理運営している。B村
では、村幹部の村有資産運営について、村民参与の監視がおこなわれている。毎 10 戸から
選出された村民代表による村民代表会議で 2/3 以上の賛成を得なければ、村幹部はいかな
る事業も実施することができない。B村は、市場活動を通じて村有資産を蓄積した点で対
外社会に開放的であり、同族的規範に基づいた本村人関係のあいだで利益を専有する点で

対外社会や外村人に排他的である。村民委員会の主な業務は、治安維持、消防、外来人口管理であり、その費用は全村収入の7～10%を占める。外村人には、選挙権、株式所有やその配当など、本村人と同等の権利は認められない。なお、b-IVでは、村民自治の制度に拠らないだけ、a-IVと比較して、よりいっそう規範的価値（文化）要素の影響を受ける。

②同族的規範優位型村落

b-I：不動産収入宗族規範的分配村 a-I型参照。

b-II：宗族規範的国家資源寄生村 遼寧省海城市趙堡村【冯・姚・王，1997】は、鉍物資源の産出地である。趙姓が半数以上を占める大規模同族居住村。人民公社期、鉍産資源は国家所有であったが、改革・開放後は村も村有経済の下で鉍物採掘を開始し裕福になった。しかし、所有権と経営権が未分離なまま、党・村委による村有企業の投資決定や経営者人事の介入がおこなわれ、村有企業は経営が悪化した。95年以降、党・政・企の幹部、村民委員会委員、村民代表、村民小組長などが数十回の会議を開き、村有資産の大部分を個人に払い下げる決定をした。その後、私的企業が村経済の中心となり、村財政収支について村民の監督と検査は消極化、村落公益公共事業にたいする村、村民の関心は低くなった。村務の粗放性や村民自治の消極性は、その後、宗族を代表する村幹部が宗族規範的に国家資源に寄生し続ける状況を生み出した。こうした状況は、豊富な鉍物資源を有することで所与の経済利益のパイが大きく、それゆえ各村民の経済利益追求の機会が比較的広く開かれていることと親和的でさえある。また、開拓地のもつ開放性や粗放性といった中国東北地方の地方文化とも関係している【首藤，2000】。村務の粗放性は本村人の利益を損なうのではなく、地域特性との関連で、むしろ村民生活にプラスに働いている。a-IIでは、こうした国家資源への寄生が、村民自治の合意形成のなかで管理されている。

b-III：有力私的企業の意向反映村 白坦村【徐，前掲書：338-353】は、全村農家の400戸あまり（60%）が家庭工場を経営する同族村である。本村人（宗族成員）の利益を守るため、村務には、社会資本整備、医療教育福祉の実施、環境整備、同一商品の加工生産ゆえに生じる村内企業間の利害衝突の調整などがある。村財源は、村有経済からの収入がわずかに年15万元であり、その主要財源を裕福な個人企業主の寄付に依存している。企業主の寄付の目的は、善行により名声を得ること、幹部との関係を築き、自企業に便宜をはかってもらうことなどがある。したがって村幹部は、有力企業主の意向を無視して村務をおこなうことができない。例えば、ある有力な個人企業の工場排水は村内の池を汚染し

環境改善が急務な状態だが、村幹部はいかなる策も講じえないでいる。白坦村では経済の中心が個人経営企業にあることで公共事業での公共性に欠ける側面がある。またここには宗族の実力主義的側面を見出すこともできる。村財政収支への村民の関心が低いのは、こうした実力主義を文化的な規範的価値から容認していることを表す。一方、a-Ⅲの私的企業の利害調整村では、村民自治による村民の村政参加により、こうした一部の有力私的企業の利益が村政に直接反映してしまう事態を回避し調整できる。

b-Ⅳ 宗族規範的股份合作制村 a-Ⅳ参照。

③自己表出的顔役型村落

c-Ⅰ, c-Ⅱ, c-Ⅲ, c-Ⅳ 筆者は2000年の2月から8月にかけて、遼寧省撫順市の都市近郊村である龔家溝の調査をおこなった。全村約320戸のうち、260戸が床板製造を個人経営でおこなう異姓雑居村である。龔家溝は耕作地に恵まれない山間村で、人民公社時代は食糧供出義務が免除された。村政府は農業を媒介にした村民支配の契機をもたず、村有企業も存在しない。村と村民の関係は希薄である。改革・開放以降、村には専業農家が存在しない。村は92年以降、納税、農地請負費上納などの村民の義務を一切免除してきた。80年代は都市での小商い、機械修理、運送業、90年代前半は畜産業、90年代後半は床板生産が村民の主生業であった。91年の道路舗装工事では村に200元の資金しかなく、私的経営者の前書記が資金を捻出し、外村人のネットワークを駆使して完成させた。90年代後半、床板資産に賦課される税金は、直接上級政府に支払われ、村は関与しない。村民の生活について村は全く関与せず、個々の家族が中心的役割を担う。そこには村の顔役的存在の大きさも見て取れる。90年代後半、現書記は村落公益事業に関心をもっていない。村財政は、国道建設による農地収用の補償金、あるいは外村人床板経営者への土地使用権の売却によって潤った。村民は村財政の監督・管理について関心がない。

龔家溝はc-Ⅰ型とc-Ⅲ型の特徴をもつ。村財政は前者、村民の生活は後者に依存し、村政府と村民とのあいだに没交渉的な関係を形成している。

「自己表出的顔役型」に共通する特徴とは次のようなものである。同族規範や地域団体的規範が希薄で村民自治が成立しない村では、村幹部の個人的な資質が村の性格に反映される。また村幹部など顔役的存在の行為は、村落共同体的規範を越えた対面集団に基づいておこなわれる。

④手続き的合意形成重視型村落

d-I, d-II, d-III, d-IV 村幹部の個的資質が村の性格に反映されるのは「自己表出的顔役型」と変わらないが、しかし顔役的村幹部が指導する村政府にたいして村民の政治的参加がおこなわれる点でC型と異なる。村幹部は、村落という集団の顔役であることが期待され、村民間の合意形成に留意する。村民間で合意形成が成り立てば、顔役的存在による村民生活への積極的な関与がおこなわれる可能性もある。

注

(1) 【加藤, 1997: 106-133】【折, 1997: 258-265】【戴・史・許・周他, 1999】などを参照。

(2) 民営企業に関しては、【陳宝榮, 1998】【張・明, 1999】【張・明, 2000】【張宗和, 2000】【第14回「大学と科学」公開シンポジウム組織委員会(編), 2000】などを参照。また、社会主義中国における私営企業を、その政治的矛盾、行政府との癒着、法の未整備、私営企業家の社会生活など、ゴシップ的な観点から扱う書物が少なくない。例えば、【朱・姚・鄒・胡, 1998】【李振傑, 1999】など。

(3) 中国は半周辺・周辺の工業化を本格的に推進する「ポスト新国際分業」にさしかかりつつあるといえよう。「ポスト新国際分業」とは、「半周辺・周辺においてそれらの社会の自生的資本(家)によって資本主義的工業化が主導され、そのような工業化に基づいて工業製品が国際市場に供給されるタイプの分業として規定」される【山田, 1998: 13】。

(4) 1958年に始まった戸籍制度では、食糧配給制度の実施とあいまって、農村戸籍者は自家消費食糧の自給自足が義務づけられ、都市への移動が拒まれた。確かに改革・開放になると、農村戸籍者の社会分化が進んだ。また、92年の食糧配給制度廃止は、農村戸籍者の離農が国家制度的に認められたものである。「農村戸籍者」は必ずしも「農民」を意味せず、農村戸籍者の社会分化は時代の奔流である。しかしながら都市戸籍、農村戸籍の区別は、就業、就学、移動、社会保障、社会信用、文化、社会意識などさまざまな面で質的な格差をもたらしており、こうした状況に根本的な変化は生じていない。

(5) 一方、本村人の資格条件がゆるやかな村では、「家族づれで移ってくればすぐに本村人となり、家族をつれて出ていけばすぐ外村人となる」ように、ほとんど条件らしきものが存在しない【旗田, 前掲書: 154】。

(6) 滋賀は、中国の家の本質的要素として「人と財産」をあげる【滋賀, 1967: 68】。すなわち、「持ち寄る」財産がなければ、役割・地位が体系化されず、権利・義務の関係も発生しない。佐々木は、こう

した「持ち寄り関係」を中国村落の構成原理として注目している【佐々木，2000：56－57】。

（7）清水は次のように述べている。階級分化の進行など血縁的統一の欠如が異姓雑居村の全体的拘束を不可能にし、この集合意識の弛緩が共同生活の物的基盤である共有財産を喪失に至らしめ、村落公共事業に消極性をもたらした。この消極性の具体的内容は、一部階級による指導的地位の独占、共有財産の私的専有、事業内容の階級的制約などである【清水，1939：265，301】。また、今堀も同様な見解を述べている。異姓雑居村では、「公共的施策即ち社会事業や学校教育への援助には全く誠意を欠き、道路橋梁などにも関心が薄く、渡津からは利益をあげようとした程であるから、公益団体としての看板は有名無実になっている」。にもかかわらず、一方で村落は、「表面上その階級性をかくし、村は聚落全体の統一性連帯性の象徴であると宣伝して土地所有者でない者の村落への恭順を期待した」。したがって、「村落の事業に見られる共同体的性格は、地戸の共同体を村民全体の共同体らしく印象づける為のスタンドプレー」【今堀，1953：101】だとした。

（8）国家による「村民自治」導入の背景には、次のような一般的情勢がある。第一に、改革・開放後の農村改革は、生産経営方式の変動に限られ、生産手段は集団所有のままだった。その後、工場や土地などの請負化手続きや村民への売却は、村幹部が権限を掌握するなかでおこなっている。第二に、現有する村有の生産手段は村民に帰属するが、村幹部は経営権と分配権を支配し利益を得ている。第三に、家庭生産責任制の実施後、農家の個別経営では解決できない生産経営上の問題は村内の共同で解決をはかるが、その際、村民の出資と労力は村幹部が計算、收取、分配し使用する【徐，1997：302－305】。こうした状況においては、村幹部の任務遂行における公共性の欠如、村有企業などの村財務帳面の混乱、農民負担の加重などの問題が一般的に存在する。こうした問題にたいして国家は「村民自治」を推進する。その内容を形式的に紹介すれば次のようになる【同上書：3】。1）「民主選挙」：村民自治組織の幹部は村民の直接選挙で選ぶ。2）「民主决策」：村内の重大な公共事については、村民が決定する。3）「民主管理」：村民は、村民会議、村民代表会議、村民委員会、村民小組などの組織や形式を通じて、本村の事務や管理に参加する。4）「民主監督」：村民は国家の法律精神と相一致する章程、規定、その他の制度形式のもとに、村民自治組織の幹部と村級事務管理を監督し、この過程において自己規制と自己教育を実現するよう努める。

（9）農村人口移動に関しては、【大島，1996】【南・牧野（編），1999】【原労働部農村労働力就業与流動研究課題組，1999】【黄（編），1997】など参照。また、農村住民が出稼ぎに訴え積極的に生活向上をはかる姿は【陳俊傑，1998】が参考になる。送出村と出稼ぎ先のネットワークにおいて家族、村落、行政の果たす役割については【龔，1998】を参照。

（10）定住志向の村落について。農業税および郷・鎮政府への各種上納金は、直接各農戸からの徴収で

あるが、実際には、村幹部がこの任務を遂行する【胡，1996：53－62】。村有資産の収益がなく個人企業の発展もみられない村では、現金収入機会が少なく、上納金は大きな負担である。また、財政難ゆえに、人民公社時代に造成した灌漑水利の修築など、村の共同作業は不可能で、天候に委ねた農作物栽培は貧窮化の悪循環を形成する。しかし、村幹部は、上級機関からの批判を恐れ、税の取りたてを強行せざるをえない。村運営の困難さは、村民の村幹部への就任を躊躇させる。村民の村運営への関心は低い。一方、上級の政府や党から任命された村幹部は、いわば、村民の日常的な利益から乖離した存在となる。上からの指導の下、村幹部による村有企業設立への無理な投資が負債を累積させ、村民は、その債務のつけを払わされるのではないのかと戦々恐々としている例もある【徐，前掲書：268】。経済基盤のない村は、国家権力や市場経済の影響に直に晒される。

(11) こうした私人関係のもつダイナミズムは、農村社会においてはフォーマルな枠組みである宗族の集団的構造にも反映される。宗族集団が「分化と統合」の構造特性をもつゆえんである【Friedman, 1958, 1966】。すなわち、宗族内部で政治的経済的な力を蓄えた特定集団が新しいセグメントを形成することで、全体としての宗族は地域社会のなかでさらに勢力を伸張するのだが、ある特定集団が共有地産など財産を蓄積し宗族内における地位を差別的に確立する過程とは、有力な個人的指導者がリーダーシップを発揮した具体的局面に他ならない。

第2章 顔役の概念的意味

—「仲介者」「規範適用方法の選択者」としての役割から—

第1章では現代中国村落を類型化し、「自己表出的顔役型」を通底的な村落構造とした。顔役という個性的存在を、村落の政治的経済的構造条件に規定されつつも、一方ではそれらに働きかけ構造化をおこなう行為者として位置づけた。

序章でも述べたところだが、本稿で用いる顔役という言葉は、実は分析概念であって、決して実態概念ではない。したがって中国農村の日常生活のなかでは実際に使われることのない言葉であり、中国農村を分析対象とした書物（日本人研究者による論文や訳文）のなかでのみ見かける言葉である。しかも顔役は分析概念でありながら、今までにその意味内容が方法論的に議論され洗練されてきたとは言い難い。何となく意味はわかるのだけでも…といった、曖昧模糊とした言葉である。

そこで第2章では、顔役へとアプローチすることの意義を中国農村の実証的な先行研究のなかに探り、顔役の分析概念としての意味内容を整理する。その際、顔役の役割は、具体的事象のレベルでは「仲介者」、抽象的レベルでは「規範の適用」を他者に影響力をもつなかでおこなう「規範適用方法の選択者」として方法論的に定位する。最後に、顔役の存在からアプローチすることで、中国農村のいかなる点が実証的な分析課題として明確になるのかをまとめておく。

（1）顔役の存在が浮き彫りにする農村社会の構造

1）仲介者としての顔役と農村社会の秩序に果たす役割

おそらく、中国農村の観察を通じて最も早い時期に顔役の存在に注目したひとは、アメリカ人宣教師アーサー・スミスであろう。彼は、1872年から22年間華北に滞在し、中国人の気質や村落・家族生活について報告を残している。スミスは次のようにいう。「村落における顔役（bully）の地位を多少理解することなくしては、支那人の生活を十分に理解しているとはいえない。反対に、支那の顔役の性格と機能を正當に理解することは、支那社会を理解することであるともいえる」【Smith, *Ibid*: (訳) 258】。

スミスは、中国の顔役の大きな特徴を「平和を愛好し、喧嘩をすることを好まない」性格に見出すが【*Ibid*: (訳) 258】、その内実は「多少気性がはげしく、決して損せず、如何なる事情の下においても、巧みに応酬する人間」である【*Ibid*: (訳) 260】。村落の顔役は次の3種に分類されている。第一は、自分の資力で自分の仕事を遂行する顔役、第二は、中国人固有の結合により大勢の人々の力を頼みにした顔役、第三は、何らかの商店ないしは職業をもっており、商店経営や仕事の遂行における利害関係から、彼は恐れられるべき人間であるという事実を利用する顔役、である【*Ibid*: (訳) 260】。

具体的にスミスがあげる顔役には、ふたつの類型がみられる。ひとつは、「村のならず者」である。守るべき財産をもつ裕福な村民が、用心棒として自分の見方に手なずけておきたい相手である。彼らは「光棍」と呼ばれる。光棍とは通常、財産をもたず、それゆえ結婚もできない独身男性であり、腕力が強く村のなかで作物などの盗みを働くこともあり、村落社会からはやっかい者、ならず者として敬遠されがちな者である。

二番目は、自分の利益を引き出すために他人の事件に一役買って出る「仲介者」としての顔役である。彼らの仲介の方法として、武術、放火、作物荒らし、県衙門の下役とグルになった訴訟、自ら「秀才」の学位をもち告訴の手続きに熟知すること、警察機能の代替、官吏をつとめる血縁者のネットワークの利用、などがあげられている【*Ibid*: (訳) 262－276】。

「ならず者」あるいは「仲介者」として描かれた顔役像には少々隔たりがあるが、両者ともに「恐れられるべき人間」という点では共通しており、その原因が肉体的壮健さから知的狡猾さまでと幅広い。

後者の仲介者の顔役類型で注目すべきは、人々の属性が多岐にわたっていることである。武術集団や秘密結社などの頭目は仲介の方法に武術を用いる者である。郷紳、大地主、金持ちなどは「秀才」の学位保持者や政府部門とつながりがある者に多い。顔役と呼ばれる者たちは、一般農民とは異なって幅広い交際範囲をもち、外部社会と交渉の術をもっている。力のない農民たちは、外部社会との交渉において彼らの力の保護に頼らざるをえなかったと思われる。

スミスが示唆したような人間個人を基礎に据えた中国農村研究は、けっして多いとはいえない。そのなかでも佐々木衛は、解放前華北農村の顔役的存在に着目し、秩序の成り立ちに関するユニークな知見を示している。一般農民は「頼ることができる親族をもたない」状況に置かれており、むしろ「親族関係を超えて個人的な絆で結ばれる関係こそ重要な機

能をはたした」という【佐々木，1993：155】。一方、郷紳、地主、金持ちなどの最有力者は村の官職につかず、むしろ行政統治制度外で主要な地位を占め、村が解決しなければならない問題は、彼ら自身の上級政府内に維持するネットワークを通じて解決する傾向がみられた。ここでは「公平」は、顔役的存在の「実力」によって担われる。「私的实力者によって果たされる抗争当事者間の仲裁こそ、新たに不当な侮辱を生じめたり、あるいは、不当な侮辱を晴らすための私的な復讐」を生み出す土壌となった【同上書：242】。華北農村は「民間秩序が私的实力者によって治められている、体制の規範力がルーズな社会」だったのである【同上書：241】。

旧華北農村の秩序に関する佐々木のアプローチは、現代に関しても重要な示唆を含んでいる。すなわち、確かに保護―被保護の私的な対面集団が発達する社会では、市場経済が不完全であり、また経済取引などにおいて法に基づいた個人の権利が十分に保証されていないことがいえる【Eisenstadt and Roniger, 1984】。しかし、こうした一般的認識を現代の中国農村に当てはめただけでは、農村住民の「人間臭さ」やそれが生み出す社会の躍動感が汲み出せない。市場化や法制化など普遍主義的な「分析道具」は、農村住民の生きた生活を圧殺してしまう。顔役的存在への注目、農村住民の生活における「非公式性」を正面から扱うことで、農村住民の置かれたのっぴきならぬ現状と、そうしたリアリティある生活世界と連動したなかで社会変動をとらえることができる。

2) 村落共同体論に替わる秩序メカニズムを求めて

福武直は、村落共同体論の是非を実地調査から論証した研究者のひとりである。中国村落の集団性を説明するために、日本村落の集団モデルである本末の系譜関係やオヤコの結合と比較した。そして、オヤコ関係をもたない中国村落では合理的打算性が優先し、観念的な結合が希薄なために分散的であるとした【福武，1976（初出 1946）】。

ただ旗田とは異なり、福武は「村落共同体」の存在を否定したうえで、それに代わる農村社会の結合形態についてひとつのモデルを提示した。つまり、村落より広い社会範囲で農村住民の生活がおこなわれることに着目し、この社会範囲を「町村共同体」として論じた【同上書：260】。「町村共同体」の成立背景として、王朝中国時代、すでに農村社会では商品経済が発展し、家庭が生活組織の最も重要な単位になっていたことがあげられる。そこでは本村人資格は重要な意味をもたず、利害や打算が優位する契約的結合のあり方が中心となる。生活を守るための“十全な”社会的装置は、農業生産や生活のための最小限

度の協同にとどまる「生活共同体」(村落)には存在せず【同上書：262】、むしろ村落を超えた社会範域に成立する。「町村共同体」では、政治(自治)、経済(売買、金融、小作)、文化(宗教、教育、娯楽)などの機能や意味が、中心地的機能を果たす鎮(マーケットタウン)を核とした社会圏のなかで、契約的人間関係に基づいた交換を通じて充足される。個々の農家は「生活共同体」や宗族を超えて、直接、鎮に結びついたのである(1)。

残念なのは、福武の「町村共同体」では農村生活の比較的充足的な社会範域が明らかにされたものの、それが実際にどのようなメカニズムによって運営され秩序づけられるのかが不明なままである。輩行主義や徹底した均分相続などのため、権威が構造的に定式化されることなく流動的であり、それゆえに実力主義が人間関係を支配するとした。ただし、その実力主義社会の秩序メカニズムについて、十分に論及されたとはいえない。例えば、個々の農民と鎮との関係がもつ打算的側面が強調されたことで、村外交渉は農民個人の力量だけに依存せざるをえない印象を受ける。すなわち、農民は外部社会の勢力に直にさらされ絶えず危機的な状況にあるか、あるいは功利的に立ち回るしたたかな経済人としての印象である。しかし、農民と鎮との関係が多機能にわたるのならば、むしろ農民に代わって不在地主や高利貸しと交渉する仲介者、すなわちスミスのというような顔役の出番があるように思われるのだが、福武は実力社会における農民生活に関しては分析が不十分におわった。

一方、古島和雄は顔役の存在に着目した研究者のひとりであった。福武が指摘したような農村社会圏では、土着有力者である顔役が農村住民の日常的な交換関係を支配していくことで秩序を形成するとした【古島、1982：23】。ただし、古島による顔役イメージは、当時の中国農村の状況に制約され、否定的なものに終始した。顔役は、農村住民の生活には貢献せず、脱地域的に営利を追及する存在として描かれた。具体的には、「問屋的仲買人」「高利貸し商業資本」「土豪」「劣紳」などである。

その時代背景を古島は次のように整理している。清朝末期から、閉鎖的な農村集市市場が相互に結びつき商品流通が拡大する過程で、農村の大地主層が土地経営とともに農村における「問屋的仲買商」として登場した。彼らは「高利貸商業資本」として農村金融も独占する。最終的には、外国資本の国内市場進出に協力する買弁商人と結合した。帝国主義との結合により、閉鎖的地域社会内部に商品関係が進行、農村支配の中核が農村市場の独占による経済的支配に移行し、「縉紳」「豪紳」による支配体制を解体、彼らにかわり「土豪」「劣紳」が暴力行使による農村支配をおこなった【同上書：13-31】というものであ

る。

古島が明らかにした顔役像は、城鎮に蓄積される経済力や政治権力を後ろ盾にして周辺の農村住民を支配する不在地主や高利貸しであった。確かにこうした顔役も存在した。しかしそれは、あくまでも顔役についての一面的なイメージであり、反対に、古島が描いた顔役と渡り合うような“農村住民側の顔役”も存在したはずである。

結局、福武も古島も、旗田と同様、調査当時の時代状況に強く制約され、顔役的存在の積極的側面を見出せなかった。逆説的だが、こうした先行研究が明らかにしたこともある。ひとつは、「村落共同体的規範」に替わる農村社会のあり方に注意が向けられたが、顔役的存在にたいしてネガティブな意味内容しか付与しなかったように、実力主義の貫徹する社会を無秩序な社会と同質的にとらえようとする研究者側の価値観が存在すること、第二に、反対にもし顔役的存在に積極的な意味内容が見出せるのなら、中国農村生活にかかわる動態的な秩序形成にたいして分析視角が確保できるということである。

すなわち、中国農村を村落共同体的規範の逸脱や衰退と位置づけて議論を出発するのではなく、まさしく中国農村社会に内在的な視点として顔役の意味を探る必要がある。

（２）顔役の役割 —1900 年～解放前の顔役—

P・デュアラは、満鉄の華北農村実態調査（1940-44）の資料を中心に、20 世紀前半の華北村落における農村指導者を分析している【Duara, 1988】。20 世紀初頭、財政難を抱える中央政府は、税増収を目論んで農村の基層社会にまで国家権力を拡張しようとする。彼の問題関心のひとつは、国家権力の拡張が旧来の農村指導者層に与えた影響や、彼らに代わる新しい指導者層が国家の新政策実施の手先となるなかでいかに形成されてきたかに向けられている【Ibid: 4】。

本節では顔役の概念的意味を、主にデュアラの所論に拠りながら整理する。ここから、顔役の社会的役割を「仲介者」「規範適用方法の選択者」として方法論的に定位する。

１）仲介者としての顔役

商品経済が発展した中国農村は農家と鎮（マーケットタウン）や県城が直接結びつき、打算的契約的な関係が優先するが、しかしそれは決して市場経済におけるような匿名の関係の一般化を意味しない。例えば福武は「非資本主義的な貨幣経済という一見矛盾した農

村経済構造」と表現したが【福武，前掲書：400】、デュアラは、こうした打算的な人間関係が支配する農村社会をとらえて、人々の行為は当該地域の慣習に規定され、対面集団が支配的であることを強調した。したがって商業活動においては、違約のリスクを軽減するためにも村落内外の契約者双方を見知った仲介者の存在が不可欠だという【Duara, *Ibid* : 181】。

デュアラによれば、農民と鎮在住者のあいだで交わされる契約では金銭貸借、租佃、土地売買の三つが重要である。仲介者の役割は、第一に契約者を相互に紹介すること、第二に契約の立会人となり訴訟の際は証人として証言すること、第三に農民側の連帯保証人となること、第四に契約者双方で争いが生じた場合は調停役をつとめることなどである。顔役は、確かに連帯保証人としての財力も求められたが、むしろ肝要なのは村外社会に見識があり、交際範囲が広いことだった。

鎮在住者と交渉する際、仲介者の存在は重要である。もし仲介者たる人物が、面子があり地位も高い顔役ならば、契約交渉は農民の負担が軽くなるよう進めることができる。面子のある顔役は、借金の金額、期限、利率などの設定で農民の負担が少しでも軽くなるよう働きかけたり、あるいは質に入れていた農地を地主から買い戻すとき交渉がスムーズにいくよう助力したりする。また高利貸しからの借金は、家財道具や土地を抵当に入れる方法の他に、連帯保証人を立てることで可能だった。当然、連帯保証人として面子ある顔役が身近に存在するかどうか、農民の生活の鍵をにぎった【*Ibid* : 181－184】。

2) 仲介者の役割の変容と顔役の消失

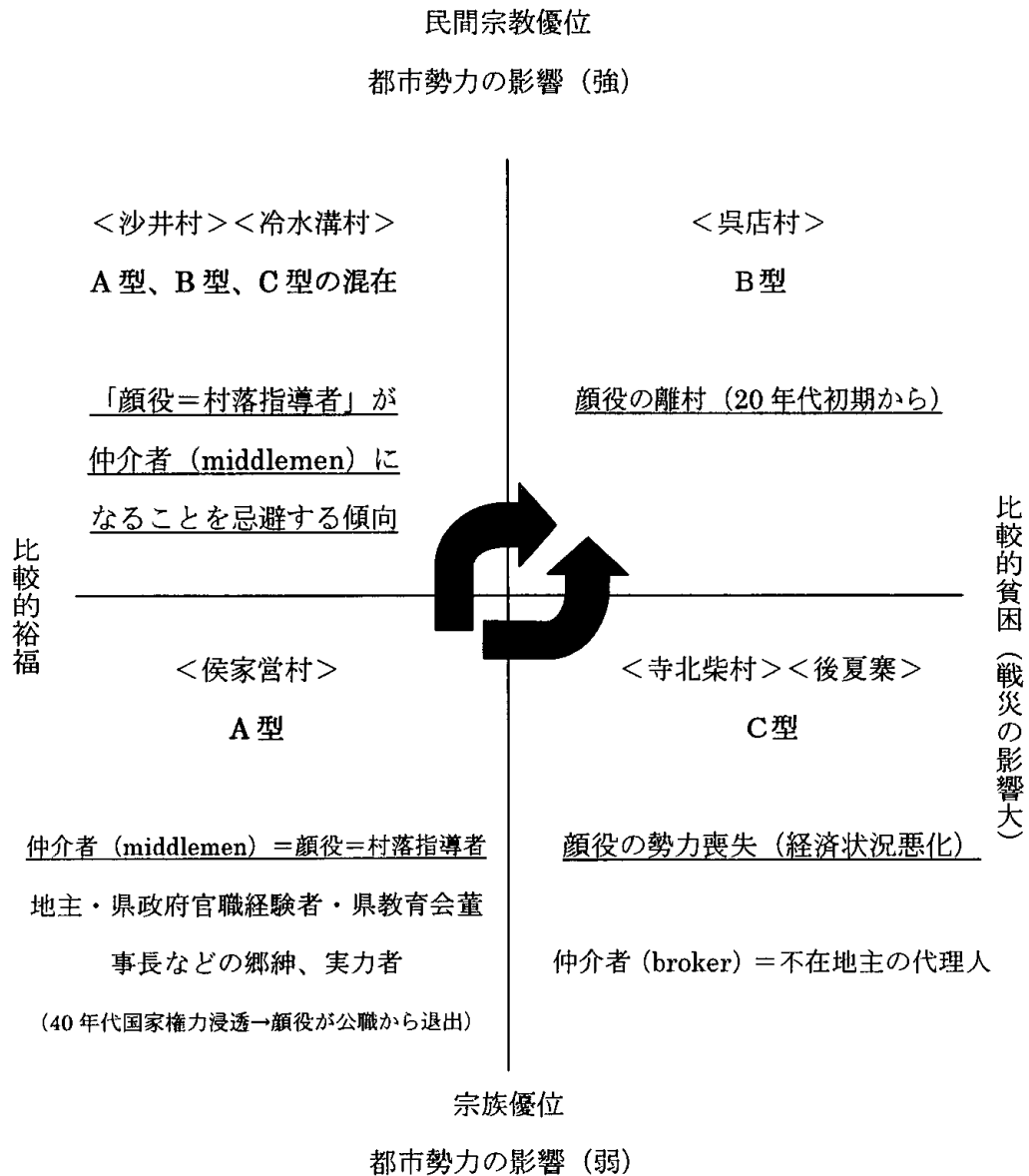
不在地主や高利貸しとの交渉が避けられない社会状況下では、仲介者の性質が農民の生活を大きく左右する。デュアラは、仲介者の担い手を次のように類型化した。

第一のタイプは、面子を有する顔役で、通常は地主で経済力があり、鎮など村外社会との交際範囲が広い者である。同時に村の指導者層の一員であり、村財政に責任をもつだけでなく村民の一般事務にも熱心である。村民が交わす契約の仲介者として村民が好条件を獲得できるよう尽力するが、その見返りを求めることはない【*Ibid* : 189】。

第二の仲介者タイプは、農民自身の親戚か友人であり、相手の地主や高利貸しも顔見知りの者である。第一の顔役と比較して、契約の成功率は低い。

第三のタイプは、鎮に住む不在地主や高利貸しの代理人であり、村のなかでもさしたる地位をもたない者である。このタイプは、ならず者か私利追求的仲介者であり、仲介料を

【図 2－1】 解放前（1930 年代頃）華北村落の顔役



出所：【Duara, 1988：14】の Fig.1.に、筆者が加筆した。

（注 1） A 型：「仲介者＝顔役＝村落指導者」、B 型：「仲介者＝親戚・友人」、C 型：「仲介者＝不在地主の代理人」。A 型と B 型の仲介者 middlemen は中国語で「中間人」、C 型 broker は「經紀人」。

（注 2） デュアラは満鉄慣行班がおこなった中国農村慣行調査（1940－44）の 6 カ村を対象に類型化した。図中の矢印は、当時、華北村落の歴史的な村落零落過程（同族解体）の方向を表したものの。

農民からとる。シンボリックに蓄積された面子もなく、地主とも特別な面識はないので、農民が得る利益は少ない【*Ibid*: 189】。

第一、第二、第三の仲介者類型を順にA型、B型、C型と表し図式化すると、【図2-1】のようになる。ここから明らかなように、仲介者の担い手は当時の村落零落過程（同族解体）と呼応し、顔役の勢力衰退や村政からの退出が顕著である。1900年から解放までの村落指導者の変容を、デュアラは以下のように概観する。

1900年代、村の指導には郷紳や地主、あるいは宗教や宗族で権威を確立した有力者が任にあたった。彼ら顔役は看青、村学校運営、保安などの公務を取りしきり、公益事業のための村財政収支は村外社会に秘密にされるのが一般的だった【*Ibid*: 160】。

そもそも顔役の条件とは経済的な富だけではなく、面子の所有が自他ともに承認されなければならない。顔役の面子は、財富と影響力が転化して個人の政治資本となるような指導者―被指導者体系のなかで維持、増進される【*Ibid*: 158】。すなわち、面子が蓄積されるのは顔役が準拠する対面集団であるが、面子の源泉自体は村外社会に広がるシンボル体系に埋め込まれている。

例えば秘密宗教は、制度化された正統的価値とは対立する超村落的な象徴体系をもつ。また、科挙試験に及第した士大夫層や官職期待者層、あるいは商人として財を成し、そのうち「官商」の伝統的志向【馬，1995】のなかで官職を買収する者などは、上層の政治やシンボル体系と関係をもつことで村外社会の正統的価値を自身の威信の源泉として差し替え、村落社会の対面集団のなかで指導者の地位を強化した。

しかし1910年代から30年代後半にかけて戦災や匪賊の横行、政府や軍閥の搾取が強まると、民間宗教組織（2）など旧来の顔役が依拠した対面集団は姿を消し、それとともに村民の公益に尽力した顔役も姿を消し始めた。政府は新政策の施行により農村に学校建設を義務づけ、各村に村の共有財産を調査し登記するよう命令した。村落は財源確保のため、廟産を没収し村公会の管理下に置くことで対応した。この際、宗教活動を通じて村の指導的地位を維持してきた会首や首事は、村公会の指導者へとスライドした【*Ibid*: 148-155】。

その後、村落指導者たちは公租公課や攤款の徴収が主要な任務となり、胥吏、収租請負人、職業的代理人と同質なものとして村民に認識されるようになる。不足の公租公課は指導者が立て替えねばならず、また佃戸に代わり連帯保証人として不在地主や高利貸しに債務を返済する事態が頻発した。財産均分相続の慣行も経済的な零落を早めた。旧来の指導者層は、村の官員からは退き、また仲介者としての顔役的役割も果たさなくなった。村の

公職が民衆の尊敬を集めたのは過去のことになり、その後は、村の利益を顧みず個人の利得を追求する不在地主の代理人が、村の官員の立場を利用した。また、私利追求に熱心な代理人さえ不在な村では、村民は村外社会の搾取に直にさらされることになり、生活が立ち行かなくなった【*Ibid*: 159－160】。

3) 顔役による規範の適用方法の選択

デュアラの論述のなかには、宗族優位に分類された村落がある。しかし仲介者の役割を担う顔役は宗族の指導者ではなく、むしろ有力宗族の支持をもたない他姓の者たちである。彼らは個人的な資質と実力により村民から信頼を獲得したのであり、その威信の代表的な源泉は県城などにつながるネットワークと、大学を卒業し訴訟の手続きなどにも精通した教養にある。

例えば、侯氏が村の全戸数の 73.7 % を占める侯家営村で【Duara, *Ibid*: 95－96】、村民の生活に尽力する顔役は蕭惠昇であった。彼が生れたのは別の村であり、父に連れられて侯家営村に移り住んだ。県城にある小学校に通い、東北地方の大学を卒業した後は県政府に勤め、34～37 年には電話局長も務めた。37 年に侯家営村に戻ってきた後は、60 畝の土地を所有し、副村長および村小学校の董事を務めた。蕭惠昇は侯家営村に帰る前から一貫して村民に尽力した。県政府とのネットワークを駆使して村民の抱えこんだ問題の解決に努め、また広い交際範囲を利用して、無担保で貸金をしてくれる者を村民に紹介し、自らは契約の保証人になったりした。一方、侯氏宗族の支持を得た侯大生は 30 年代前半に村長を務めたが、村費の私的流用がひどかったため、県政府により辞職に追い込まれた。この際、県政府に村長の不正を訴え出た中心人物のひとりには県教育会董事を務める劉子馨であり、蕭惠昇と同様、宗族の支持をもたず個人の實力で侯家営村の顔役的存在となった者である【*Ibid*: 167－169】。寺北柴村の事例も同様に、顔役的存在は個人の實力に依存しており、反対に有力宗族成員は不在地主の代理人として私腹を肥やしていた【*Ibid*: 173－177】。

ここから看取できるのは、宗族優位と分類された村落においても宗族指導者が村民（宗族成員）の生活に尽力しなかったということである。つまり宗族指導者は同族規範を「内面化」していたかもしれないが「適用」はしなかった。このように顔役がいかなる規範的価値を適用し使用するかは、顔役の個的資質に拠る問題である（3）。

この顔役による「規範の適用」は、第 1 章の村落類型にそくして説明すると次のように

なる。顔役の存在はすべての村落に通底する構造特性だった。そのなかでも「自己表出的顔役」は、他の村落類型における顔役と比べて、個的資質の表出が顕著である。なぜなら地域、同族、村民自治といった制度的、外在的、拘束的な価値規範から比較的自由だからである。「自己表出的顔役」の規範の適用とは個的資質の発露に近いものであり、恣意性、偶然性、非一貫性などが特徴となる。ここには村落の政治経済構造や村民生活のあり方に顔役の個的資質が直接反映する傾向がある。かつて仁井田陞は「村の内部規範が村の顔役の意向に依存するときは、規範の安定性も失われる」と述べた。「知ろうとするならば、内部に立ち入って聞き出してみなければ分からないことが少なくない」とも述べている【仁井田，1952：4】。ここで仁井田がいう規範の安定しない村とは「自己表出的顔役型村落」に他ならない。

顔役の個的資質に村落生活が左右される偶然性は、単一宗族集居村にも通底する。そこでの顔役の価値志向は必ずしも同族規範には同定されず、同族規範が適用されるかどうかはあくまで顔役自身の選択にかかわる。デュアラが宗族優位と分類した村落において必ずしも同族規範が社会的に機能していない事態は、恣意性や偶然性を本来的にとまなう顔役の存在を中国村落の通底的構造とする本稿の分析枠組みからすれば、十分に納得が行く現象なのである。

（３）現代中国農村における顔役の位置づけ

１）人民公社時代の顔役 ―基層幹部の装いをまとった仲介者―

解放前の顔役は、村外交渉の仲介者を務めることで村民に貢献した。しかし、顔役的地位を支える経済的支柱が減少し、また顔役の面子の維持・増殖を支える対面集団が民間宗教組織や宗族集団から村公会など政府出先機関へと変容したことで、彼ら顔役の農村生活における仲介者としての役割は消失していった。

その後、人民公社時代になると国家権力はかつてないほどの強力さで農村に浸透し、顔役の条件は基層社会における統治制度によって規定された。すなわち、農村の生活は人民公社制度に従属する以外に方法がなくなり、かつ生産大隊や生産隊といった対面集団での基層幹部との関係が生活に決定的な作用をもつようになった。この時代の顔役は人民公社の基層幹部に他ならない（４）。

人民公社から改革・開放時代にかけての基層幹部については、中村則弘が類型化をおこ

なっている【中村，1994】。基層幹部は「大衆路線」「自力更生」といった、中国史上の歴史的イベントともいえる新しい理念を体現した存在だった。つまり「民衆の意見をくみ上げ、国家権力の担い手に伝える」ことと、「地域が国家に対する自主性を持ち、主体的な組織運営」をおこなうことの実現は、基層幹部の職務遂行のあり方に依存した。そこで中村は、職務遂行のあり方とそれを支える価値観から人民公社時代の基層幹部の類型化をおこない、これを通じて、人民公社崩壊から営利階級が形成される過程、および改革・開放時代の基層幹部の姿についての分析をおこなっている【同上書：69】。

人民公社時代の基層幹部は中間層と位置づけられる【同上書 70－82】。それは、彼らの「選出方法、職務内容、職務執行上の責任関係の面」から明らかである。選出方法について、彼らは「国家幹部とは異なり、当該地域の民衆の中から選挙によって選ばれるのが一般的」であった。職務内容は、生産大隊幹部の場合、大隊の治安維持、生産計画作成、生産管理、行政命令の執行などであり、生産小隊幹部の場合では、生産管理など生産関係業務が中心であった。つまり「基層幹部の職務は、民衆の日常生活に直接に係わるもの」であった【同上書：83－84】。

基層幹部の職務遂行は、国家主義的な諸制度・諸組織と、大衆路線、自力更生、非専門化主義といった国家主義に相反する理念の生み出す矛盾が現れる場だったという。中村はジレンマの内容を次のように整理する。

第一は、職務遂行の上で生じる民衆と国家とのあいだでの板挟みである。国家からの食糧供出量増加の要求と、民衆からの食糧分配量増加の相矛盾する要求に、基層幹部は対処しなければならなかった。国家の要求に従えば幹部は出世の可能性が生じるが、一方では、民衆を苦しめることになる。また反対に、国家にたいして自主的な態度をとれば、民衆には歓迎されても国家の批判にさらされる危険性がある。

第二のジレンマは、経済面にかかわるものである。民衆にたいする威信や多忙な労働にもかかわらず、「大衆路線」の理念の下で幹部の報酬は一般民衆と同等に設定された。いわば、幹部の威信と経済的報酬とのあいだにジレンマが存在する。もし幹部が、経済的利益を顧みない生活態度を選べば、多忙で物質的にも恵まれない生活を余儀なくされるが、一方、幹部の威信を利用して役得を得ることも容易な立場であった【同上書：85－88】。

中村は、基層幹部が抱えるこれらふたつのジレンマに着目して幹部を類型化した（章末注（5）【図2－2】を参照）。分析軸のひとつは、職務執行上のジレンマをもとにして設定されたもので、「国家の側に帰属意識をもち、国家に追従的な職務遂行の態度をとる基層幹

部」と「民衆の側に帰属意識をもち、国家に対して自主的態で職務を遂行している基層幹部」である【同上書：87】。もうひとつの分析軸は、威信と報酬をめぐるジレンマをもとにして設定されたもので、「自らの物質的生活を顧みず民衆ないしは国家に対して献身するという大衆路線の理念への信念」をもつ基層幹部と「こうした信念を有さず、自らの威信を利用して私利私欲を求めている」基層幹部である【同上書：88－89】。

基層幹部は、それぞれに対応する価値意識に支えられており、その価値意識は現地民衆の連帯のあり方を反映している。中国農村では、功利的な態度は個人に基盤を置くのではなく、家族が主体になるという。したがって「利権屋型」では、家族を単位とする合理的打算的な態度が幹部の価値観と結びつき、国家を利用して家族や身内の利益を図る職務遂行がおこなわれる。「土着ボス型」の幹部が果たす役割は、族長や族董などと似通っており、土地争いや水争いなどの局面で同族の利益や価値のために任務を遂行する。ただ、同族主義的価値は、宗教的契機や経済的意味を喪失した点で、解放前からの変化が認められるという。「国家献身型」では国家への忠誠や奉公の念に支えられた職務遂行がおこなわれる。

「民衆代表型」の任務遂行は、人民公社制度が「自力更生」の理念によって形成した地域主義的価値によって支えられるとした【同上書：91－99】。

以上、中村に拠れば、人民公社時代の顔役は次のように整理できる。農村住民に貢献する顔役は、基層幹部という装いを身にまとった仲介者であった。顔役の規範の適用は、解放前と同様なところでは同族主義や家族主義がみられた。規範の内面化かつ適用の新しい動向としては、社会主義理念を体現した地域主義と国家主義がある。ちなみにこの地域主義は、改革・開放後の地域団体（村落）的規範の萌芽ととらえることができる。

2) 改革・開放時代の顔役① ―「規範適用方法の選択者」の役割への着目―

人民公社の解体後、農村社会の顔役はいかなる存在だろうか。中村の所論を批判的に参照しつつ、まずここでは「規範の適用方法の選択」という抽象レベルでの役割を整理しておく。

中村によれば、人民公社の終焉とともに「営利階級」の形成条件が整うと、農村社会には公的志向性を担う行為主体が存在しなくなったという(6)。こうした見解は、改革・開放以降の農村が、かつて国家的に体現した「一大二公」などの規範的価値を喪失する一方で、「自力更生」の下で形成してきた地域主義的価値が“地域エゴ”に変質したというイメージと重なり合う。

確かに、公的な領域を村落社会より大きい社会に設定した場合、農村社会のなかには公的志向性は見出せない。中国の“私―公”の関係は入れ子式にしか認識できないからである(7)。逆にいえば、村落社会に分析の対象を据えれば、当然、農村住民の生活に積極的にかかわるという意味で公的志向性をもった顔役的存在も見出せるにちがいない。どのレベルまでを“私的なもの”とし、どのレベルから“公的なもの”とするかという研究者の価値判断によって、農村社会の顔役的存在の有無が左右される(8)。

ただ、ここでもっとも重要だと考えるのは公私の認識にかかわる問題ではなく、むしろ私的なものが公的なものへと転換する、意味の創発にかかわる問題である。中村の議論では、郷鎮企業は農村住民の所得向上や福祉関係費、あるいは政府によって課された農民負担などを代わりに負担することで農村住民の生活に貢献することが指摘されるが【同上書：159－161】、しかし一方では、郷鎮企業の経済原理にしたがった運営や【同上書：162－167】、「国家を利用した新たな利得獲得の場」として郷鎮企業が「利権屋型」の巣窟になることが強調され【同上書：185】、結局、郷鎮企業は営利追及が自己目的化した集団として位置づけられている。

すなわち中村の議論では、基層幹部（顔役）の私的な功利追求が結果的に公的志向性の発生を促すかもしれないという可能性（意図せざる結果）が捨象され、公的なものの創発など、農村社会の意味世界にかかわる新しい動向が射程に組み込まれていない。

もちろん、改革・開放以降の経済活動を営利追求に自己目的化させず、いかにして社会のなかに埋め込むかという中村の研究テーマは、現代中国農村にアプローチする上で重要な視点を提供している。そこで、こうした問題関心を実証分析においてよりよく生かすためにも、本稿では次のような点に留意しておきたい。

すなわち、国家の体現した絶対的規範が喪失した現在では、経済活動を社会に埋め込むという意味での公的志向性は、行為者の実践のなかで具体的状況に応じて生成される過程にある。既存の規範的価値がもつ行為者への外在的拘束性が後退すると、能力ある行為者（顔役）の個的資質の発露が農村生活への意味的なインパクトをもち始める。

このような社会認識に立つ場合、ルースな規範構造を前提とした分析枠組みが必要になる。本稿では、こうした理論的要請にたいして、規範の適用の側面を重視することで応えている。例えば、宗族や村落といった制度的枠組みのもつ規範的価値に志向する場合でも、顔役の個人的な資質に基づいた選択と適用が働くことを視野に組み込んでいる。また、たとえ同族規範を内面化し適用する場合でも、宗族の結合的側面が現れるか、あるいは分裂

的側面が強調されるかは顔役の個的資質（およびそれに親和的な村民の価値志向性）に左右されると考える。

改革・開放時代は多元的、状況主義的な位相にあり、原則なき原則が多元性のなかに見出せる共通性である。このような時代状況では、農村住民の生活を成り立たせる人間の個的資質がくっきりと浮かび上がってくる。「規範適用方法の選択者」として顔役の役割に注目する理由がここにある。

3) 改革・開放時代の顔役② 一多様な「仲介者」に存在する共通性を求めて—

人民公社の崩壊は、顔役から幹部（貧農出身者）という制度的な殻を取り剥がし、顔役の条件を経済的支柱の確保と面子のシンボルの蓄積を支える対面集団の形成に求めだした。

改革・開放時代の顔役には以下の一般的な特徴が見出せる。第一に、顔役を一定の社会的属性と結びつけて論じることが難しいことである。例えば、生得的地位（階級区分や戸籍）の重要性が薄らぎつつあり、顔役の条件として獲得的地位が重要になっている。また人民公社時代の顔役との関連でいえば、新しいエリート層は旧エリート層（基層幹部）によって再生産される場合もあれば、旧エリート層と関係なく循環的に形成される場合もあり【孫, 1995: 508—547】、顔役を典型的な社会的属性からとらえることが難しくなった。第二に、農村社会の諸改革および変動により、農村住民の生活スタイルが多様化した。したがって生活に関してさまざまなニーズが生じており、仲介者としての役割にもさまざまなケースが存在する。

このように顔役の社会的布置を複雑化した社会的背景としては、改革・開放以降における個人の自由裁量の増大（[表 2－1]）と農村住民の急激な社会分業（9）が考えられる。

【表 2－1】改革・開放前後、農村社会における決定権の配置の変化

	人民公社体制		家庭生産責任制	
	集団	家庭(個人)	集団	家庭(個人)
土地所有権	○		○	
土地以外の農業生産財の所有権	○	○		○
土地使用権	○			○

土地以外の生産財の使用権	○			○
生産経営と経営決定権	○			○
分配権	○			○
職業選択権	○			○
労働時間の割り当て	○			○
社会文化生活組織	○		○	○
民事の処理およびコミュニティ管理	○		○	○
その他の行政組織などとの交渉	○		○	○
信仰の選択				○

出所：【張元紅，1996：5】参照。筆者が一部加筆した。

中国農村で現実には生起している現象に目を向けると、まず先に、個人の才覚を発揮するなかで獲得された経済的成功が【細谷（編），1997】、その他の領域への門戸を開いていることに気づかされる。

経済と文化に関していえば、人民公社時代に破壊された（あるいは潜在化した）文化体系は顕現化し、再び機能する過程にあるが、その触媒となっているのが経済資源である。例えば寺廟の再建、宗族の祠堂建設、族譜編纂などの伝統的文化事業は、経済的成功を収めた者が経済資源を率先して投入することでおこなわれ、その後、シンボリックな威信や権威が獲得される【王，1997】【羅，2000】。あるいは経済活動自体が同族規範などの伝統的価値を顕在化し、威信のシンボル体系を再興する場合もある【折，1997】⁽¹⁰⁾。経済と政治の関係でいえば、中国社会に伝統的な「官商」【馬，前掲書】の社会意識が顕在化しており【富田，2000：91－96】、経済資源の政治的威信や権威への転換が世代内、世代間でおこなわれている。

いずれにせよ、現代中国農村の顔役を把握するには、個別的事例に現れる多様性のなかに何らかの共通的性格を見出そうとする地道な実証作業が必要である。農村に生活が存在する以上、農村住民の生活に貢献する顔役について、何らかの共通した仲介者的性格が見出せるはずである。

4）調査村落の分析課題

以上、次章からの事例分析では、次のような課題を中心に論じることになる。現代中国農村において、顔役は規範の適用方法の選択を通じて、どのように人々の二者関係を方向づけるのだろうか。また、そうした二者関係を基礎とした対面集団を蓄積することで、いかなる特徴をもった生活を村落社会に立ち上げるのだろうか。さらには、そうした村落生活において、顔役は仲介者として農村住民の生活にどのような貢献をしているのだろうか。

このように、本稿の実証分析の課題は、顔役の存在から村落生活の存立構造を解明し、ひいては農村社会のダイナミズムを浮き彫りにすることである。顔役の姿がもっともよく表れるのは「自己表出的顔役型村落」であった。第3章以降では、この類型に分類される村落を事例として取り上げ、中国村落の通底的な存立条件を明らかにしていきたい。

注

(1) 後にW・スキナーは「標準市場圏」として、この社会範域を論じている【Skinner, 1964・1965】。標準市場圏は、18 前後の村落（自然村）より構成される【Skinner, 1964 : (訳) 27】。農村のマーケットタウンは経済機能として生活必需品やサービスの供給源、産物の販路、金融、信用など村落にはない機能を担う。社会組織としての標準市場圏は、農民の日常的交際、嫁選び、組織化された宗族集団、秘密結社の活動、寺廟の祭祀、娯楽、度量衡、民間伝承、方言など農村住民の諸活動にたいして一定の社会範域を提供している。そして農村社会の実力者である郷紳や地主は「社会的な統制」の舞台としてマーケットタウンに活動の拠点を据えた【Ibid : (訳) 8-61】。こうした農村社会のマーケットタウンは、産物の集荷や搬出などを通じて経済中心地の位階機構を形成し、北中国、長江上流・中流・下流、東南沿海部、西北中国、雲貴、嶺南などの大地域経済圏へ結びつくとされた。なお、柳澤和也によれば、後で触れる古島和雄【1982】の「農村集市市場」や河地重蔵【1972】の「小地方市場圏」は、スキナーの標準市場圏に影響を受けたとされる【柳澤, 2000 : 199】。また、こうしたスキナーの地域システム理論をめぐる反論については【同上書 : 217】に紹介されている。

(2) 華北農村の民間宗教については、佐々木衛が示した動態的モデルから一般的性格を知ることができる。「宗教的権威が構造化される過程」に基づいて構成されたこのモデルは、民間宗教集団の活動を三つの位相、すなわち「世襲型」「分派型」「自唱型」に分け、それぞれが「固有の個性をもちながら、民間宗教の活動としてひとつの全体を有機的に構成」するとした。「世襲型」は「教派の信仰の核となる経典・典籍の継承、劫災からの救済の予言、現世的富と権力の蓄積、宗主権の一族による独占、そして大頭目た

ちに階層的地位と特権を授与して特権集団を組織する」宗教集団である。「分派型」の宗教集団は、「卓越した宗教的カリスマをもつ男が、既存の師弟関係を組み替えて新たに宗教集団を形成する位相」に属する。

「自唱型」は「看相や八卦をみるという巫師や巫婆の活動、あるいは風水先生」など「村に住む様々な宗教家・呪術家の活動」である【佐々木，1993：158－159】。佐々木の論証に拠れば、一般農民の宗教活動は、一方で「世襲型」宗教集団を範例として「価値体系としての絶対性」を期待したが、実際には宗教活動の非組織性や非体系性が顕著であり、結局、民間宗教の構造は「極めてアンビバレントな姿」を提示したという【同上書：176】。

動態的な位相をもつ民間宗教活動が具体的に現れる社会範域については、デュアラが次のように整理している。第一に、村民の自発的参加に委ねられ、規模が小さく全村性の活動にはいたらない宗教活動、第二に、参加は村民の自発性に基づくが、組織規模は村落の範域を越えて広く、活動のあり方が村外社会の主導に従う宗教活動。それは縦横に組織化され、W・スキナーのいう市場取引機構、すなわち農村の市場圏（郷・鎮に相当）から地方都市市場圏を介在し全国9大地域経済圏に連なる重層的な市場機構と地域的、階層的に符合するものもあれば、そうでないものもある。また、指導の中心をもたず、類似した団体間にゆるやかな連帯がみられるだけのものもある。白蓮教の秘密結社などが典型例である。第三に、参加が強制され、かつ参加が本村人に限定され活動範囲が村界と一致する全村性の宗教活動。清朝末期に多くみられた村廟の祭祀であり、廟や廟田は村の共有財産とみなされる。廟の維持費や祭祀の費用は本村人負担となる。廟会の会首は廟の管理、運営以外にも、全村性の非宗教活動に責任を負う。第四に、参加が強制され、かつ組織範囲が村の境界を越えた宗教活動。村公会は、上級組織との連携をとる支部のような存在である。宗教結社の紅槍会などが典型例である【Duara, *Ibid* : 119－120】。

なお民間宗教活動の変容をデュアラの区分にしたがって表せば次のようになる。上の第一、第三のタイプが受けた影響は大きく、特に第三の全村性活動を特徴とする宗教活動は財源を消失したことで衰退し、かつての全村性活動は村公会に委ねられた。第二、第四のタイプでは、むしろ宗教活動を盛んにしていった。社会治安が悪化するなか、村落は村外社会とのつながりで得られる庇護力を通じて、自村の安全を守る必要に迫られたからである【*Ibid* : 155－156】。なお、社会秩序の混乱のなか、民間宗教の超村落的な組織が村落生活の防衛に果たした役割については、福本勝清「村を守る」を参照【福本，1998：119－139】。

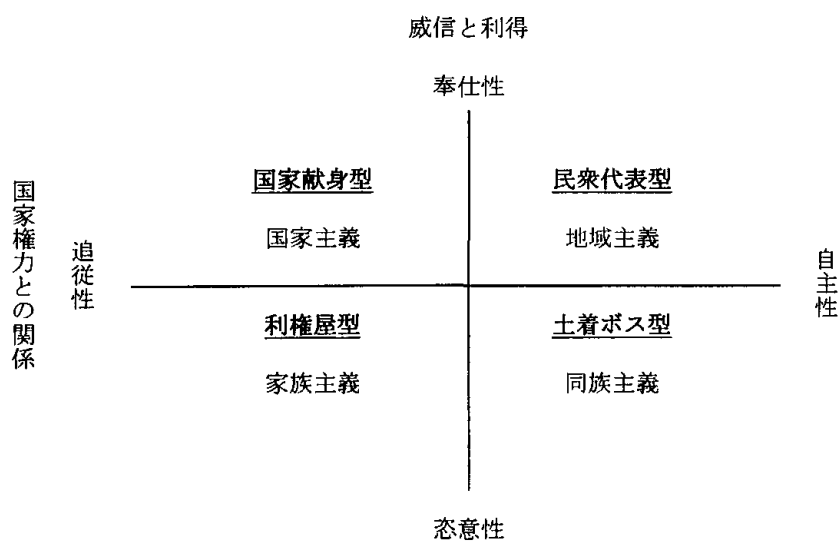
（3）「いかなる社会規範にせよ、それが実現されるためには、その適用規則を知らねばならない」。すなわち社会規範の実現には、いわゆる規範の「内面化」に加えて、規範が能力ある個人によって「適用」される必要がある【江原，1985：6】。また個人が規範を操作的に使用しないという選択もある。

（4）農村基層幹部の個的資質について、広東省のある同族村（チェン村）の解放後を香港に移住してき

た村民へのインタビューから再構成したアニタ・チャンらの研究では、次のように紹介している。チェン村には代表的な顔役がふたりいる。陳慶発と陳龍勇である。慶発は貧農のなかでも最貧層のひとりで、乞食をして飢えをしのいだこともある。チェン村の人々は、作物を刈り取る速さと天秤棒でどれだけの重さのものを運べるかを、男性の能力をはかる基準としていた。慶発の傑出した体力は、彼の権威の大部分を支えていた。また、文盲だが弁がたち決断力に富むこと、思ったことをなし遂げるために恐るべき激情（かんしゃく）をみせること、横暴ではあるが社交的な側面をもち、とくに古くからの知人や親戚にたいして忠実であることなどが、彼の個的資質である。一方、龍勇も有能な農業指導者のひとりで、おそらく村で一番の力もちだった。彼は決然とした頑固な性格の持ち主で、文盲ではあったが有能な演説家であり、鋭利な記憶力を備えていた。彼もまた激情家だったが自制心も兼ね備えていた。龍勇は慶発とちがって非社交的であり、公務に忠実で自他ともに厳しく、潔癖、がむしゃらだった。ふたりはライバル関係にあった。文革前夜、慶発は書記から失脚、かわって龍勇が最高実力者となった。毛沢東の死後、龍勇は村の企業経営で能力を発揮したが、手腕を過信して失敗、その後、慶発が再び書記の座に返り咲いた【Chan, Anita, Richard Madsen, and Jonathan Ungar, 1984 : (訳) 33-44】。

こうしたケース・スタディからは、人民公社時代の顔役（基層幹部）の個的資質が、解放前の顔役とずいぶん異なることが理解できよう。

（５） 【図 2-2】 人民公社時代の基層幹部（顔役）の四類型



出所：【中村，1994：90】の表 3-7 をもとに、職務遂行の価値【91-99】を加筆した。

(6) 改革・開放期に台頭した村の企業幹部は「利権屋型」で国家行政や民衆から遊離した存在になり、「土着ボス型」は村幹部の地位を世襲することで構造化して民衆から閉ざされた集団を形成し、「国家献身型」は国家が体现する公的価値の絶対優位性が崩壊したことで、功利と私生活に代替的な精神充足を求める「営利階級」へと転身する【中村，前掲書：217－224】。そして、頼みの綱である「民衆代表型」幹部も農村社会から姿を消し、かつて彼らが担っていた民衆連帯の核的存在や「地域主義的価値」といったものは、地方都市における特定の私的経営者にのみ見出せるという【同上書：250－251】。

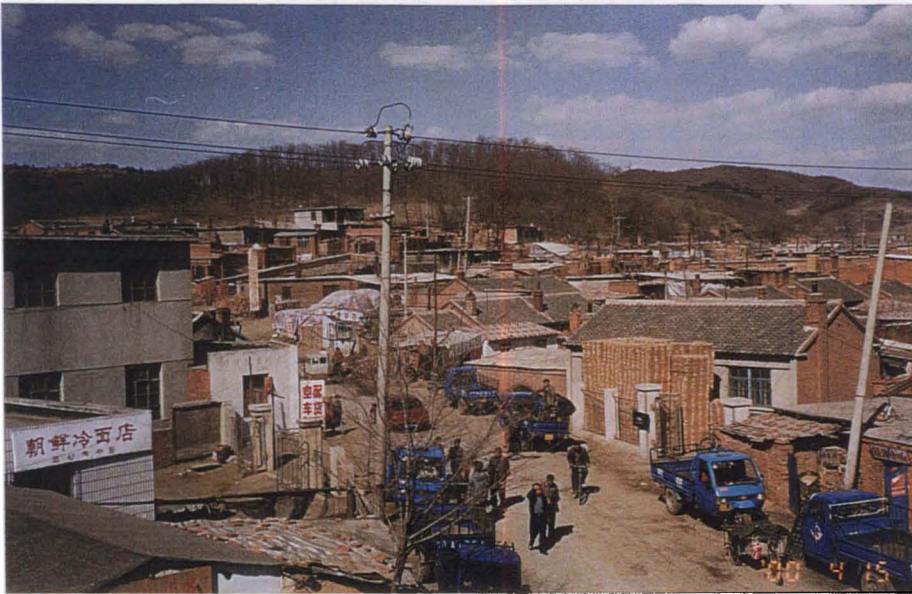
(7) 中国の「公」と「私」については【溝口，1995】【溝口，1996】を参照。

(8) 例えば「土着ボス型」について。中村は、同族主義的価値に支えられた「土着ボス型」幹部や地域連帯のあり方には公的志向性を認めていない。しかし前章で明らかにしたように、同族主義的価値は本村人関係を支える規範的価値であり、同族あるいは村落という限られた社会範域では、農村住民の生活のために機能する。「土着ボス型」の台頭は、人民公社時代から改革・開放時代を通じて蓄積されてきた村内経済基盤の成立とも関係があり、彼らの営利活動が自己目的化することなく本村人の連帯にも寄与するという意味において、公的志向性も見出せよう。

(9) 陸学芸は1990年～91年にかけて7省12県から13の村を選んで調査し、職業類型、生産手段所有形態、経営形態の3要素の組み合わせを通じて、13の村の農村住民を以下の8つの社会階層に分類した【陸学芸（主編），1992】。①「農業労働者階層」：集団所有の耕地を請負い、農業労働と農業収入を主とする農村労働者が構成する社会集団。生産手段規模は小さく平均収入はもともと低い。農村人口の主流をなす社会階層である。ちなみにこの社会階層の内訳は、一般農家、一定規模の耕種や果樹栽培、畜産・養殖などをおこなう専業戸、「離郷不離土」といわれる現象で、故郷を離れたが非農業部門の発達した農村地区でやはり農業に従事する「外来工」などである。②「農民工人階層」：郷や村の集団所有企業での非農業労働を主とする社会集団。「離土不離郷」といわれる現象である。③「雇用工人階層」：私営企業、個人経営企業や商店に雇われて労働力を提供し賃金収入を得ている社会集団。彼らは「白領」（ホワイトカラー）と「藍領」（ブルーカラー）に大別できる。前者は主に経営や技術の責任者となり、後者は肉体労働を主とするが大部分が「外村人」であり「雇用工人階層」の主流を形成している。④「知力型職業者階層」：ある一定の専門技能をもっており、教育、科学技術、文化、医療衛生、芸術などに従事する知力型労働者が構成する社会集団である。⑤「個人工商業経営者および労働者」：生産手段は労働者個人が所有する。個人労働が基礎であり、労働の成果は労働者個人が占有あるいは支配する。専門的な技術や経営能力を有しており、専門的職業についたり、自ら小規模の工業、建築業、運輸業、商業、飲食業、修理業、サービス業などを経営する社会集団である。彼らのあいだには、一定の場所で経営活動をおこない、当地の工商局に登録し営業許可証を所持している者たちもいれば、定まった経営地点や営業時間をもたず、登

記もおこなっていないため営業許可証をもたない者たちもいる。⑥「私営企業主階層」：生産手段は一定の私人が所有し、8人以上の雇用労働を基礎とした、営利性経済組織の経営者からなる社会集団。80年代初期に再生した。彼らの権力的な基礎は一定規模の生産手段の私人占有にあり、雇用労働者や財への支配権、生産経営の決定権、企業内部の分配権などをもっている。収入は比較的高いが、政治地位や社会的名声は必ずしも高くない。国家の方針や政策に敏感であり、このことが私営企業主階層にいびつな発展と短期的行為をもたらしている。⑦「集団所有企業管理者階層」：郷や村の集団企業の工場長、経理、会計、主要な課の責任者と営業員などである。企業の経営管理では、決定権、指揮権をもち、企業の労働者とは管理者と被管理者の関係にある。集団企業の損失に責任を負い、比較的大きなリスクを負っている。経済収入、政治地位、社会的名声が比較的高い。⑧「農村社会管理者階層」：村民委員会や村党支部委員会の委員、村民小組長など。彼らは集団所有財産の主要な代表者であり、党や政府の方針、政策の農村基層における具体的な執行者である。彼らの地位や収入は村落のあいだで差が大きい。

(10) 中国返還前における香港の人類学的研究（例えば【Watson, 1975】【瀬川, 1991】など）では、経済的富が宗族の組織化を促し、宗族の活動自体を活性化する様相を描出している。「伝統的」と考えられる宗族は現代の政治的・経済的状況のなかで機能集団として顕在化し、人々の生活に大きな意味合いをもつようになっている。

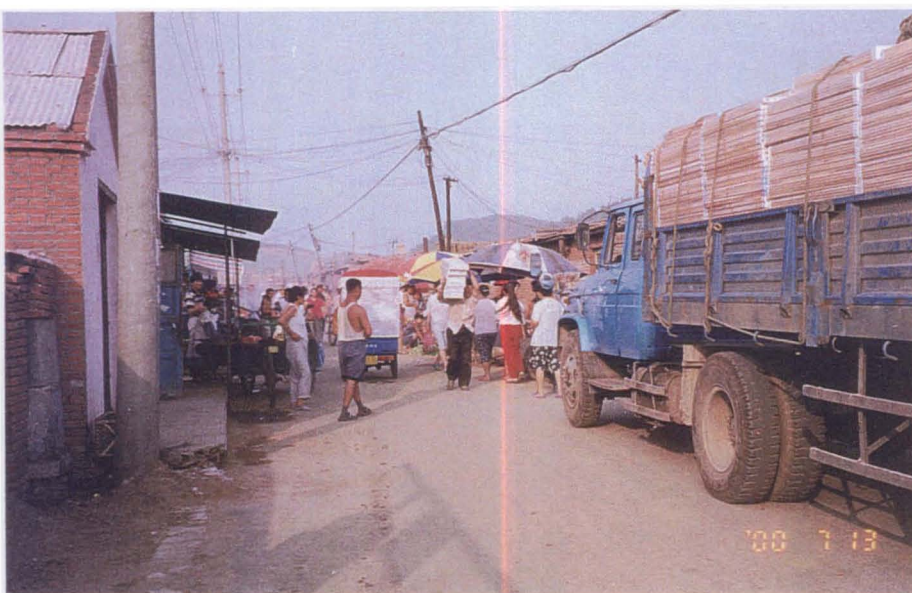


【写真1】龔家溝の風景

溝口付近の賑わい。村民のほとんどが、宅地を利用して床板を生産している。

【写真2】二哥宅付近

90年代前半、村は畜産の専門村だった。90年代後半から床板生産が流行し畜産業は衰退した。2000年、村で見かけるのはこの2頭の親子だけである。



【写真3】東街の集市

路上で商売をする者は、みな外村人である。床板は上海や武漢など、南方の大都市に運ばれるものが多い。写真の道路は、前書記の指導によって舗装されたもの。



【写真4】

床板の価格が書かれた黒板

ロシアや北朝鮮国境付近、黒龍江省や吉林省で購入された木材は1週間ほど自然乾燥される。宅地の門に掲げられた価格を参考に、全国から集まった業者は床板を購入する。村全体が床板のデパートのようなのである。

【写真5】小戸の床板

「小戸」(小規模経営者)の加工した床板。龔家溝製の床板は全国でも質が悪いことで有名になった。「大戸」(大規模経営者)は村の工場の集団化で品質管理を強化し、商標を統一して販売する計画を立てているが…。



【写真6】

小戸の作業風景

小戸の基本的な労働力は夫婦にある。資産規模は数万元ほど。月の平均収入は約1000元。



【写真7】小戸の乾燥窯

木材を乾燥させるために使用する窯。「土窯」と呼ばれるもので、建築費用は約4000元。初歩的な技術のため、数割の木材が乾燥後に湾曲して使い物にならなくなる。

【写真8】

「小鮑」のグループ

小戸は床板の加工工程に応じて、「小団夥」（工人のグループ）と請負契約を結ぶ。小団夥のリーダー「鮑主」は、加工に必要な工具や機械を所有し、臨時工を雇って小団夥を形成する。





【写真 9】

大戸の作業風景

大戸の工場では資産規模が 100 万円を超えるものもある。小戸のほとんどが龔家溝の本村人であるのにたいし、大戸の場合、96 年以降に農地使用権を購入して工場経営を始めた、都市戸籍所有の外村人が多い。

【写真 10】

大戸の乾燥窯

資金の豊富な大戸では機械窯を使用している。これら 4 つの釜には 11 万円が投資された。



【写真 11】

大戸の床板

「輝達地板廠」が生産するワックス塗装された床板。ワックスの塗装設備をもつ工場は村にふたつしかない。



【写真 12】東昇鍋炉廠

大姐夫が経営する工場。クレーンで吊り上げているのは蒸気窯。
大姐夫が三姐夫のために製造したもの。



【写真 13】龔家溝の雜貨店。

二姐夫婦が経営する雜貨店。2000 年、床板の不況と東街集市の
出現で、売上は 98 年頃に比べて半分に落ち込んだ。

第3章 調査地の概要

—遼寧省撫順市順城区河北郷龔家溝・都市近郊村の事例(1)—

(1) 遼寧省撫順市

1) 撫順の周縁性

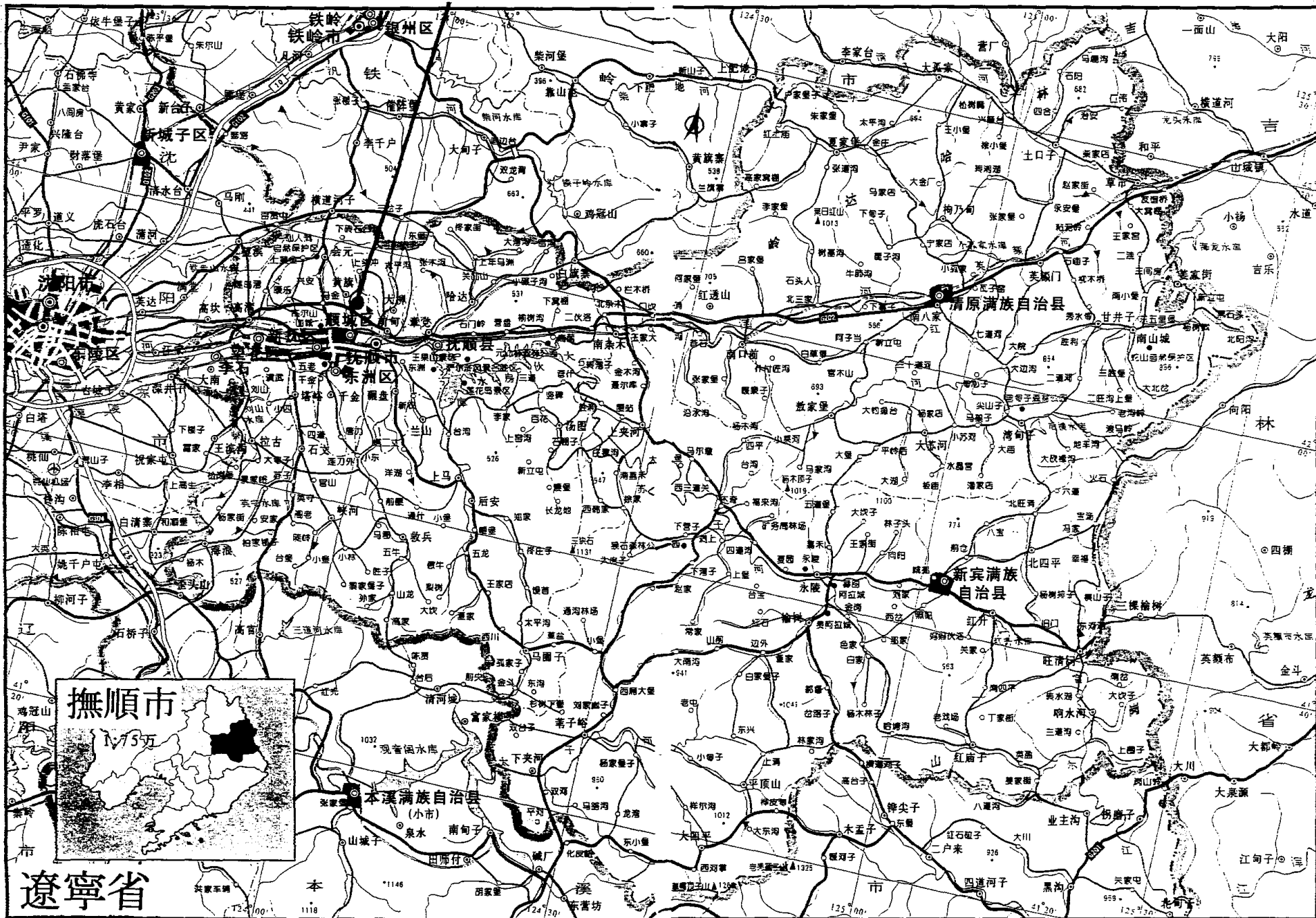
撫順市は遼寧省東部に位置し、西は省都である瀋陽市と接する。東経 123° 39′ 42″ ～ 125° 28′ 58″、北緯 41° 14′ 10″ ～ 42° 28′ 32″、東西約 151 キロ、南北約 138 キロにまたがる地域である。面積 10816 平方 km、人口 227.1 万人 (1998 年)、そのうち農業人口 (農村戸籍) 78.5 万人、非農業人口 (都市戸籍) 148.6 万人である。主な民族は漢族 163.9 万人、満族 53.6 万人、朝鮮族 4.9 万人、回族 1.5 万人などで、その他 23 の民族が居住している。市は 4 区 (新撫区、望花区、東洲区、順城区)、3 県 (撫順県、清原満族自治県、新賓満族自治県) より構成される。

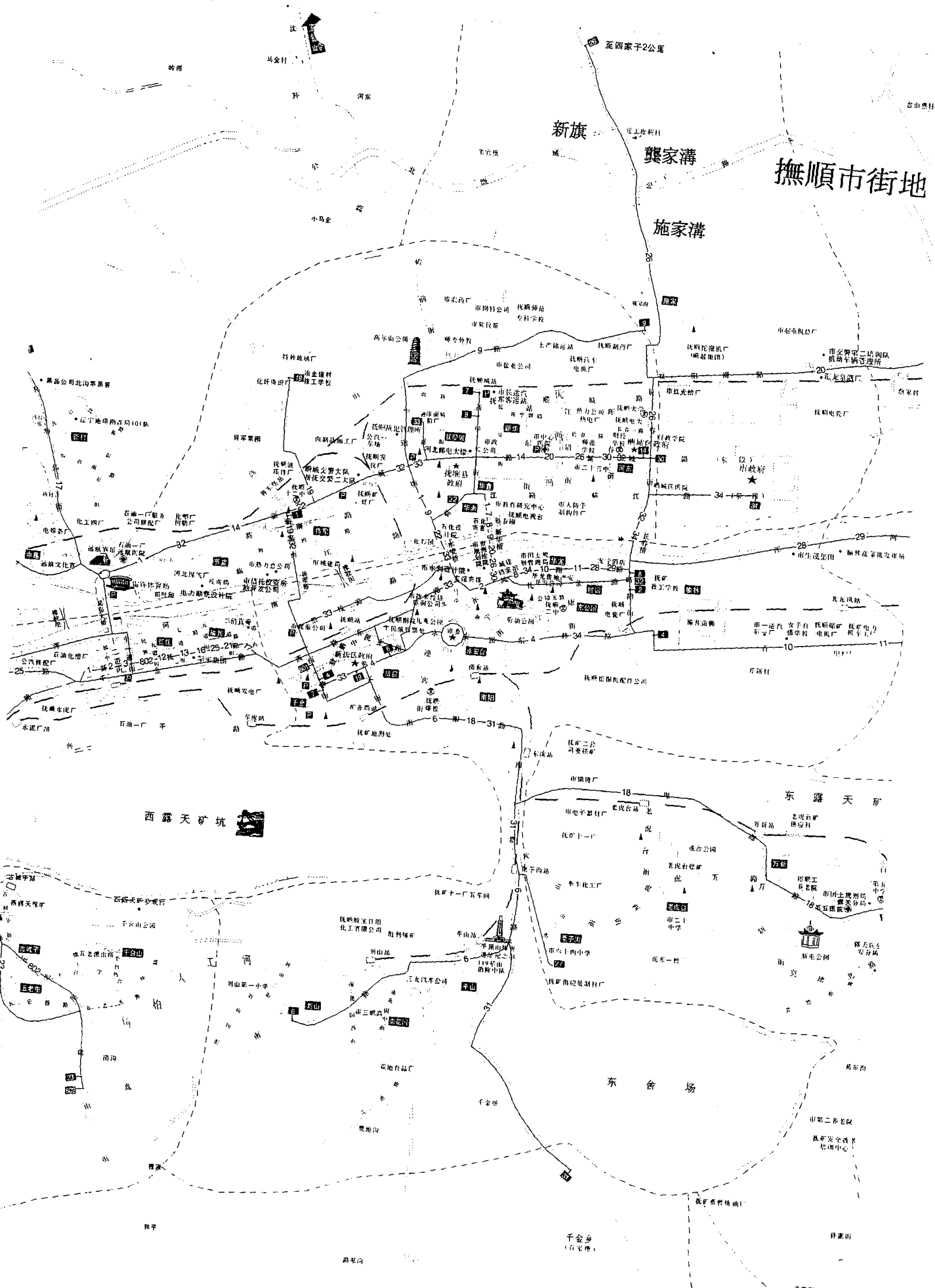
中国の東北地方は天然資源が豊富である。いまだ行政が確立していない清王朝以前の時代、新開地に流れこんだ者たちの多くは、無主の土地をあてにした食いつめた農民たちであった。彼らは法の保護なしに森林や荒地を占有し、粘り強く耕地に変えていった。また、開墾がうまくいかなかった者たちの一部は、密猟に転じたりした。この地では、古くから金鉱採掘、砂金とり、真珠、朝鮮人参、テン革といった採集がおこなわれた。清代になるとこうした天然資源は王朝独占となり、私人の採集は厳しく禁じられたが、無頼の徒による密猟は絶えなかった。農地開墾者、密猟者さらには政府から採掘、採取を請負う官商も、所有権の安定しない社会のなかで、それぞれの業種にあわせた武装集団をつくりあげていった。こうした武装集団の一部として、中国東北地方では特に馬賊が有名である。彼らは日清戦争、義和団の乱、日露戦争に続く混乱の時期に、地主や富商、あるいは地方政府の「保健隊」や「自衛団」としての役割を担ってきた【福本, 1998 : 97-102】。

福本勝清は東北地方の匪賊 (馬賊) がもつユニークさを、ただたんに各自の利益を主張して無頼集団や縄張りを形成したのではなかったことに指摘する。むしろ、積極的に公的な権力と結びつき、あるいは利用した。特に馬賊の首領であった張作霖などは、雇い主で



龔家溝





地街市

新旗

冀家沟

施家沟

西露天矿坑

东露天矿

东舍场

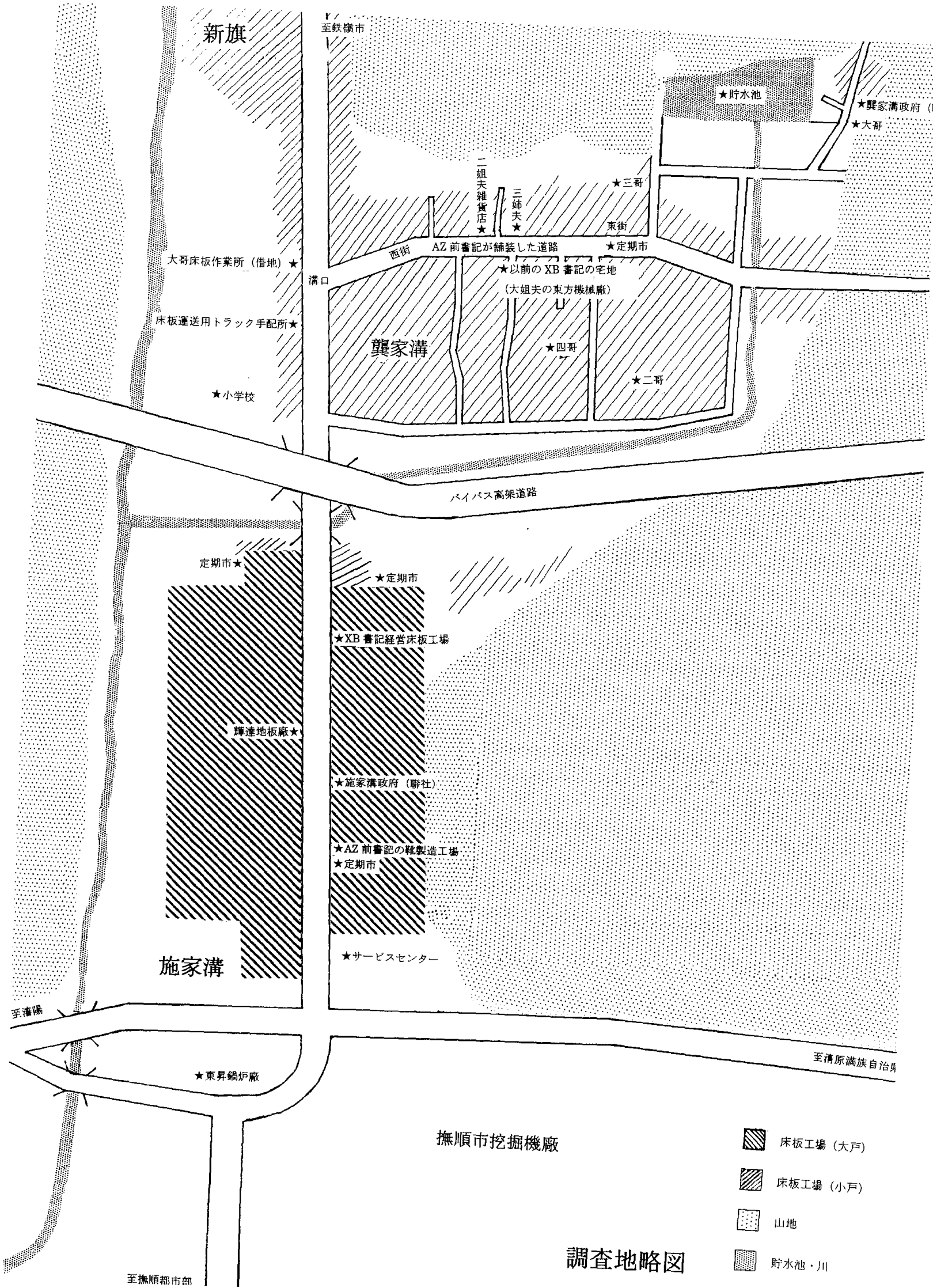
和平

高家沟

千金乡

什家街

平家街



新旗

至鐵嶺市

★貯水池

★龔家溝政府 (聯社)

★大哥

★三哥

二姐夫雜貨店★

三姉夫★

東街

★定期市

西街

AZ前書記が舗装した道路

★大哥床板作業所 (借地)★

★床板運送用トラック手配所★

溝口

★以前之XB書記の宅地

(大嫂夫の東方機械廠)

龔家溝

★四哥

★二哥

★小学校

バイパス高架道路

★定期市★

★定期市

★XB書記經營床板工場

★輝達地板廠★

★施家溝政府 (聯社)

★AZ前書記の靴製造工場

★定期市

★サービスセンター

施家溝

至瀋陽

★東昇鍋炉廠

至清原滿族自治県

撫順市挖掘機廠

床板工場 (大戸)

床板工場 (小戸)

山地

貯水池・川

調査地略図

至撫順市市部

ある公権力にたいして忠誠を尽くし、東北3省の派遣を握り、のちに北京政府の主に至るまでのぼりつめたのである【同上書：102－104】。

開拓地のもつ開放性や粗放性、匪賊集団のもつ縄張り性、張作霖に代表される公権力への寄生性、これらの要素の混合は現在の撫順の社会的特徴として見出すことができる【首藤，2000】。

2) 新中国成立から改革・開放後の撫順

撫順は、ロシアや日本の帝国主義的侵略と「偽満州国」の植民地政策下で、天然資源（とくに石炭）の搾取的開発における中心地であった。1948年10月31日、撫順は中国共産党により解放され、工場や鉱山、企業、商店、学校など旧満州国時代の資産を接収した。これら資産や物資は、全人民所有制に基づく国営経済の基礎を提供した。49年から52年までに、工業総生産額は6531万元から30167万元に増加するなど、撫順経済は順調に回復、発展した。

1953年の第一次五ヵ年計画では、撫順は国家により重点建設および重点投資地域に位置付けられた。大躍進や文革の紆余曲折はあったものの、建国以来の30年間、国有企業を中心に70億元もの国家投資を受けた【撫順市情調査組，1993：76－87】。

80年代、90年代初頭においても、国有企業の発展が地域社会を支えた。原油加工量、炭、アルミニウムの生産量は全国の10%、パワーシャベル製造は同30%、工業用変圧器は同45%を占め、1991年工業生産額は128億元、納税額18.5億元、国有固定資産額は117.1億元と、全国の都市のなかでそれぞれ22位、16位、18位を占めた【中国城市総合実力五十強叢書・撫順市編委会（編），1994：37－56】。

しかし、90年代以降、国有（全人民所有制）や公有（集団所有制）の経済部門を中心に経営不振が深刻化した。98年、撫順市の総企業のうち75%が操業停止、あるいは半操業の状態にある。また市153の国有工業企業のうち88社が赤字企業であり、赤字総額は138050万元、少なくとも97年末までに大中規模の国有企業23社が操業停止、15社が半操業の状態である【撫順市社会科学院（編），1999：23-28，152】。

現在、撫順市地方政府は国有企業部門の不振に直面し、市民の就業問題解決や市の財源獲得のために、私的経済部門の振興が課題となっている。

しかし撫順の私的企業（雇用従業員数が7人以下の「个体企業」（個人経営企業）と8人以上の「私営企業」）は未発達な状態にあるのが現状である。1992年末では、撫順市の

都市部私営企業は 766 社、従業員 8341 人、農村私営企業は 717 社、従業員 11103 人であり、個人経営企業および私営企業の工業総生産額は 17365 万元、市の工業総生産額のわずかに 1.08% を占めるにすぎなかった【中国城市総合実力五十強叢書・撫順市編委会（編）、前掲書：73-74】。5 年後の 1997 年末においても、私的企業の工業総生産額は約 57000 万元で撫順市の工業総生産額の 1.68% を占めるに過ぎない。

これら私的企業は生産規模のうえでは小さいものの、雇用の面で果たしている役割は大きく、社会不安の解消にも一役買っている。私的企業部門は撫順市の国有企業失業者の 25% を吸収しており、そのうち私営企業は失業者の 38% を雇用している。

農村の私的企業についてみると、97 年末、撫順市では 42 カ村、4200 社の個人経営企業・私営企業が存在し、従業員は 9100 人、年生産額 25000 万元に達する。注目されるのは、農村における「専門村」の発展である。撫順市には 3 ヶ所の床板専門村があり、合計の納税額は 1500 万元である。そのうち、本稿で紹介する龔家溝地区（龔家溝・施家溝・新旗）は納税額 200 万元、うち龔家溝は 120 万元である【撫順市社会科学院（編）、1999：9-10】。

（2）河北郷

撫順市は 67 の郷・鎮を擁する。河北郷は撫順市北部に位置し、総面積は約 76 平方 km である。耕地面積は 13000 畝（1 畝＝約 6.7 a）、そのうち畑地 5503 畝、水田 1430 畝、旱田 6067 畝である。他に山林面積が 41396 畝を占め、そのうち 12405 畝が果樹園として使用されている（以下、河北郷の概況は 1999 年当時の数字）。

河北郷は 25 の行政村を管轄し、総人口 19248 人、総戸数 6375 戸である。そのうち農業戸籍 6097 戸で 18435 人、都市戸籍 278 戸で 813 人である。郷政府の資料に拠れば、郷のひとりあたり平均年収入は 3927 元、調査村落の龔家溝は 4356 元、隣村の施家溝 4162 元、新旗 3912 元となっている。

25 の行政村のうち、12 の「聯社」が含まれる。聯社は村民委員会・党支部・経済組織が一体となった組織をもつ。調査地の龔家溝も連社である。都市郊外にあつて都市化、工業化が進み、農地が減少することで住民の多くが非農業に従事する地区である。こうした地区では基層民衆の自治組織を「村民委員会」（農村部）や「居民委員会」（都市部）と呼ぶには違和感があり、便宜上、聯社という名称が使われている。戸籍は「農業戸籍」（農村戸籍）のままであるが、国家への食糧供出義務が免除される場合が多い。河北郷にある 12

の聯社のうち、將軍聯社（総戸数 26 戸）はまったく農地をもたないが、その他の聯社は山地をもち、また少なくなったとはいえ農地も残っているので、景観上は農村と変わるところがない。

河北郷には 1362 企業が存在し、うち私的企業が 1271 企業で全体の 93.3%を占める。郷の総生産額は 7 億 589 万元で、産業別の比率は第一次産業 8.2%、第二次産業 60.4%、第三次産業 31.4%となっている。郷全体の納税額は 1870 万元、河北郷の財政収入は 662.3 万元であった。

（3）龔家溝

1）龔家溝

龔家溝は、清朝の順治年間に建立されたと言われている。山東省青州府褚城県の漢八旗であった龔姓一家は、戦乱による荒廃を逃れ、この地に移遷した。子の世代、龔興祖は家業を興し繁栄する。康熙帝がこの地を巡察した折、龔興祖は盛大な宴を催して皇帝に献上した。康熙帝はたいへんご満悦になり、龔興祖に次のように話したという。「おまえは、「百万富翁」と名乗るに値するほどの盛宴を催すことができるのだね」。その後、この地一帯は龔姓にちなんで龔家溝と呼び慣わされるようになったという。

①過少な耕地面積

龔家溝は、東西 2.6 キロ、南北 3.5 キロ、面積約 9.1 平方キロ、三面を山に、一面を貯水池（貯水量 32000 立方メートルの農業灌漑用貯水池が 82 年に建設された）によって囲まれている。山林面積が約 1980 畝（1 畝＝約 6.7 アール）を占める山間の村であり、大小 19 の山溝によって村の地形が形作られている。耕地面積は郷政府の資料によれば 452 畝（99 年）、ひとりあたり約 0.39 畝である。しかし実際には、90 年代中頃以降の急速な工業化による農地売却、非農業用途地への転換、あるいは村民の農地放置による荒廃にともない、耕地面積は 452 畝を下回ると考えられる。

②都市近郊村としての龔家溝

龔家溝の東は前甸郷台山堡と一脈の山によって隔たれ、西は新旗村、北は黄旗村、南は施家溝村にそれぞれ隣接している。また、村の中央には村を南北に分断するような形で、遼寧省の省都瀋陽と撫順市清原満族自治県を結ぶバイパス高架道路が 98 年に開通した。

龔家溝は山間の村とはいえ、撫順市中心部へは直線距離にして 5 キロ、公共路線バスで

は 20 分ほどで市内の繁華街に到着する。また、南接する施家溝より以南は撫順の都市地区（都市戸籍住民の居住区）であり、龔家溝は都市戸籍と農村戸籍の行政区画において境界線上に位置している。1978 年の改革・開放後、とくに 90 年代以降の龔家溝の経済発展において、都市近郊の地の利や道路交通の便が大きな作用を果たしたことは疑いない。

③人民公社時代および改革・開放期の著しい人口流入

2000 年 7 月時点、村に戸籍がある「本村人」で、かつ常住している人口は 1170 人、320 戸であった。1948 年の村の人口は約 180 人、約 25 戸であり、その後 78 年の改革・開放までに、「下郷」による都市住民の受け入れを中心に 380 人、75 戸まで増加した。改革・開放後は、人口増加のペースが加速し、この 20 年ほどで新たに増加した本村人は約 800 人、250 戸ほどにのぼる。

2000 年現在、1170 人の本村人に加えて、常時 300 人から 400 人程度の外地からの出稼ぎ者が、本村人の家屋を借りて住んでいる。村に長期滞在する彼ら「外村人」（龔家溝に戸籍をもたない者）は、中国東北三省（遼寧省、吉林省、黒龍江省）のさらにいっそう貧しい農村からやってきた者たちが多い。また、撫順市の農村地区である新賓満族自治県や清原県など、近い距離にある比較的貧困な地域や、あるいは 90 年代中頃以降の国有企業の経営悪化を反映して、一時帰休あるいは完全失業した都市戸籍住民の出稼ぎ者も少なくない。

2) 新中国成立から 78 年改革・開放までの概要

撫順の都市部では 1948 年 10 月 31 日に解放を迎え、龔家溝も含めた当地方での解放は比較的平穏におこなわれた。

①異姓雑居村としての龔家溝 ―解放前から住む「老戸」―

解放当時、龔家溝は約 25 戸、人口約 180 人であった。そのうち、今でも村民の記憶に鮮明に残っているのは 16 あった「大門」である。「門」は「院」とも呼ばれ、当地方では家屋と庭を併せた屋敷地のことをさして言う。「大門」の「大」は、この地に古くから住んでいる中心的な「老戸」にたいして、一種の敬意の念を表したものである。ひとつの大門には分家した複数の家族を含むものもあった。

大門は村の中にそれぞれ分散して建てられた。当時の龔家溝集落の位置は、現在の地理状況からみると村の北部、すなわち、98 年に開通したバイパス高架道路の北側に集中している。大門のそれぞれの姓は、当時、集落の中央を東西に横切る形に伸びた道路を南北の

境にして、道路北側では東から西へと順に崔、龔、龔、趙、李、李、劉、袁、劉、李、劉、孫、道路南側には崔、龔、劉、劉の各姓が院を構え居住した。同姓の家族は戸数にして最大でも4、5戸ほどであり、父系親族集団である宗族として何らかのまとまった活動を組織することはなかった。

龔家溝は、現在においても多数の姓が共住する異姓雑居村である。1949年の新中国成立前からこの村に住み続けている「老戸」に、龔、趙、劉、崔、王、李、袁、林、孫などの姓がみられる。現在では、龔15戸、趙10戸、劉24戸、崔14戸、王8戸、李19戸が存在し、袁や林、孫などの数戸を加えると合計100戸ほどの老戸が健在である。しかし、宗族を組織化した姓は存在せず、また、老戸ゆえに地域社会で何らかの名声や地位を得るといったようなこともない。村廟や一族の祖先を祀る祠堂などは、龔家溝の歴史を通じて存在したことがなかった。

②農業集団化と階級成分の区分け

48年12月、村の「農会」主任が隣接する前甸郷に赴いて「中国土地法大綱」を学習し、その後、龔家溝において土地改革を実施した。49年から52年にかけて互助組（偏工隊）が農民によって自発的に形成された。解放後、農民は人を雇う金銭がなかったので、友人、親戚、隣近所の者とともに農作業の無報酬での労働交換を開始した。農地は私有のまま、収穫物は全て土地所有者に帰した。村幹部は、村民の推薦を受け入れる形で上級政府が任命した。土地改革時に貧農であった村民が2、3人任命されたが、彼らの任務は上級政府の方針を村民に伝えること、村を外出する村民のために「紹介信」を作成することなどであり、農業の生産活動については全く関与しなかった。

52年から龔家溝全農家の農業合作化が進められ、56年1月には全農家が合作社に参加した。合作社の村幹部は互助組のそれに比べて2、3人増え、手当ても上級の区政府から支払われた。しかし、仕事内容や農業生産への非関与などは互助組のときと変わらない。57年9月、撫順市は農村三級（区・郷・村）の幹部会議を開き、大規模な社会主義教育運動を実行、都市部の比較的裕福な地域から龔家溝へ36戸の移住が実施された。

58年9月、人民公社が完成、龔家溝は施家溝大隊（全部で8の生産小隊からなる）の生産小隊（四隊、五隊、七隊）に編成された。他に施家溝（一隊、二隊、三隊）、新旗（六隊、八隊）である。

人民公社のもとで農家の所有財産は全て公有化された。生産大隊は、人民公社が割り当てる食糧年生産量に準じて食糧を生産、供出することが義務づけられ、人民公社は、市政

府が決定する都市戸籍住民への食糧供出量のノルマを達成することが任務であった。個人の自主性は抑えられ、人民公社－生産大隊－生産小隊の三級所有制の実施により、農村基層社会は国家の統一的な管理体制のなかに組み込まれた。人民公社化が終了した 58 年には、全村に電気が通り、照明や工業用電気の基本的な設備が敷設された。

共産党中央の指示により 63 年頃開始された「四清運動」では階級闘争がおこなわれ、土地改革時の土地所有状況に基づいて決定された階級成分が強調された。

【表 3－1】龔家溝における階級成分と所有地・耕作などの状況

分類	戸数	姓名 (戸数)	所有地	耕作などの状況
地主	1 戸	崔 (1)	300～400 畝	二頭立て、三頭立ての馬車を 4 隻所有。牛、馬などの役畜多数。在村地主。生産労働に従事せず。土地改革後に自殺。
富農	2 戸	李 (2)	10～20 畝	役畜（牛と馬）および馬車を所有。所有地を自分で耕作。10～20 畝ほどの農地があれば、所有地の耕作だけで家族は生活ができる。
中農	3 戸	王 (1) 李 (2)	4, 5 畝	牛 1 頭、馬 1 頭。所有地を自分で耕作。農繁期は共同で農作業、労働の無償交換。一部分食糧を売って塩、油などの必需品を購入。
佃中農	3 戸	趙 (1) 劉 (2)	無し	馬 1 頭。他人の所有する土地で短工。日当はトウモロコシ、コーリャン、大豆など。当初、所有地無し。その後、山腹を開墾してわずかなではあるがトウモロコシ、コーリャン、大豆を栽培。余った雑穀を売り、ほんのわずかな現金収入を得る。
貧農	16 戸	崔 (2) 王 (4) 林 (2) 李 (1) 劉 (1) 龔 (4) 袁 (1) 孫 (1)	無し	役畜無し。1 年中、地主のために労働。ある貧農の 7 人家族では、1 枚の掛け布団を家族全員が使用、オンドルはあるがその上に敷く筵がなく、土の上で寝ていた。階級成分の決定後、村のなかでは、たとえ同姓のものどうしても富農と貧農の交流はさけられた。

(出所) 2000 年 7 月、筆者による龔家溝「老戸」の村幹部や一般村民の聞き取り調査から。

③貧困で自足不可能、負債や農外収入に頼る人民公社時代

龔家溝住民の生活は、解放前から 80 年代の経済改革まで、一貫して貧しく苦しいもの

であった。龔家溝は「吃糧靠返銷、花錢靠貸款的地方」（食糧は国家から支給されたものを食べ、出費は借金でおこなう）ような貧困村である。龔家溝は山間村ゆえに耕地はほとんど存在せず、わずかにある耕地も地味が極度に痩せており、かろうじて山腹にトウモロコシや大豆などが栽培できた。当然、龔家溝住民は農業戸籍（農村戸籍）であり、制度上、国家への食糧供出が義務付けられている。しかし、米や麦を十分に栽培できない龔家溝は、野菜を撫順都市部に供給する以外は、食糧供出の義務が免除された。反対に、自家消費するための食糧もない住民にたいして、国家は食糧の配給をおこなった。これを「返銷」という。彼らが食した食糧は、都市民に配給されるそれと比較すれば、味も量も劣るものであった。

また、人民公社時代、例えば龔家溝生産小隊（五隊）では、1年の収入が4万元に満たず、農業税や上級部門への上納をすませた後、生産小隊の手元に残る金額は1万8000元足らずだった。各住民の帳簿（年生産、年生活支出）は生産小隊が管理し、年末になると小隊によって統一的に計算がなされ、労働点数に応じた報酬（実際には年生産額から年消費額が差し引かれた額）が住民に支払われた。小隊が所有するこの少額の金は住民の日常生活を満足に支えることができなかった。年末には生産小隊の金は底をつき、農村信用社から借金せざるをえなかった。人民公社が解体されるまで、龔家溝では農村信用社からの借款で牛、馬、食料を購入し農民に分配した。春と秋の二度、生産小隊は信用社から借金した。苦しい生活を強いられた人々にとって、村の山の柴を都市住民に売る副業は重要な収入源となったが、生産隊からの借金なしには満足に生活することができなかった。龔家溝では家庭と生産小隊の負債が累積した。

④「社隊企業」の不在が示す村落共有財産の貧困

工業部門での共有財産の不在も龔家溝の生活を苦しくした。このことは、改革・開放後の村の進路を大きく規定した。よく知られているように、改革・開放後の中国農村の経済発展を支えたのは郷鎮企業であった。例えば、蘇南地方などで典型的にみられた農村発展の形態は、人民公社時代に蓄積された社隊企業などの集団所有財産が改革・開放後の郷鎮企業発展の母胎を提供し、かつ、村や郷・鎮などの上級政府がそうした地域資源を管理、運営するのに有効な指導力を発揮したものである。しかし龔家溝では、こうした進路は取るべくもなく、全く正反対の道を辿らざるをえなかった。90年代以降の村の経済発展は、すべてが個人経営者の力に依存したものである。一方、村民個人の力の伸張に相反して、村政府はますます影の薄い存在になっている。

（４）改革・開放時代 ―床板生産の流行と村民の個人経営者化―

１）農外収入機会を個人で探し求める村民 ―自己資金の蓄積―

改革・開放後、家庭生産請負制の導入とともに農業生産の向上もみられた。第一に、堆肥を多く施せるようになったこと、第二に、新品種が一般農民でも手軽に栽培できるようになったこと、第三に、耕作技術の改善でジャガイモなどの芋類以外に蔬菜や瓜類が栽培できるようになったこと、第四に、害虫駆除を適宜おこなえるようになったこと、第五に、経営決定権を持つようになった農家は市場の需要に応じた作物の栽培がおこなえるようになり、また温室栽培の普及により、いっそう高い値段で作物を出荷できるようになったこと、第六に、一連の農業技術の改良は農民に余暇をもたらしたことなど、農民の生活が向上した。

しかし、90 年当時、ひとりあたりの耕地面積は 0.7 畝（1 畝＝6.7 アール）であり、農業収入だけでは生活できないという状況に変化はない。2000 年には耕地面積がさらに減少し、ひとりあたり耕地面積は約 0.39 畝となっている。改革・開放後のこの 20 年間、龔家溝には専業農家が一軒も存在せず、すべての村民が農外収入を求めて職業の移動を繰り返してきた。

ある者は村の中で豆腐屋、食料雑貨店、理髪店などを開いた。またある者は、撫順の都市部で、自転車修理、三輪自転車に取り付けた荷車での運送、豚の屠殺と精肉販売、建設現場での木工や瓦工、屑拾い、環境衛生局での臨時清掃などに従事した。彼らの収入のあいだには格差がみられたが、それでも共通していえることは人民公社時代よりもはるかに実入りが良いということであった。とくに 80 年代半ば頃からは運送業に従事する龔家溝村民が増加した。村民はそれぞれ各自の元手に応じて、人力三輪車や四輪車、ロバ車、馬車、トラクター、小型トラックなどを購入した。また工業面でも、数軒の家族経営の工場が開業した。ゴム、機械、木材などの加工工場、あるいは製粉工場である。しかしこれらは、市場経済での競争が激化するにつれて淘汰されるものが少なくなかった。

村民は、改革・開放後 10 年が経過する頃には、少しずつではあるが貯蓄をするだけの余裕も生じてきた。この自己資本の蓄積は、90 年代から本格化した畜産の資金源になる。

２）個人経営の隆盛 ―畜産から床板生産へ―

①畜産業の流行

89 年から龔家溝では畜産業が大流行する。改革・開放前はなかったが、90 年には 100 戸ほどの村民が乳牛を飼育し、村全体では 300 頭ほどが飼育された。資金に余裕のある「大戸」では 20 頭あまり、資金の小さい「小戸」では 2～5 頭ほどの牛を所有した。また、100 戸ほどが養豚を営んだ。大戸では平均 200 匹ほど、小戸では 10～20 匹ほどの豚を飼育した。当時の龔家溝は全住民約 300 戸のうち 8 割が乳牛、豚、羊乳、鶏卵、鶏肉の生産に従事する、畜産の「専業村」であった。村の道路は家畜の糞が堆積して異臭を放ち、龔家溝は内外の人々から「臭溝」と呼ばれた。多くの農家が畜産業を営んだが、経営方式はあくまでも個人経営で、住民間の組織的な協力はみられなかった。

畜産ブームは、95 年の値崩れによる不況で終息し、村人のほとんどは家畜を村外に売り渡してしまった。2000 年、村にはたった 2 頭の牛が道端の草を食んでいるにすぎない。

②書記の個人的ネットワークから始まった床板生産

現在、村の党支部書記および村長（92 年～）を務める X B は、畜産業を村で二番目に、床板生産が一番早くに開始した。彼は村民から龔家溝経済発展の創始者と呼ばれている。

畜産業が最盛期のとき、X B は羊 19 匹、乳牛 9 頭、鶏 1200 羽を飼育した。しかし、91 年には畜産業が行き詰まり、X B は新たな事業の必要性を感じていた。そんな折、91 年 8 月、撫順市内の家具センターで内装材料の販売を担当するひとりの友人が X B を訪ねてきた。この友人は、床板生産がたいへん儲かる事業であること、もし X B が床板を生産するならば、その床板はこの友人が一手に引き受けて代理販売することを告げた。

【表 3－2】龔家溝の床板工場数

	床板工場数（概数）
92 年	15 戸
93 年	30 戸
94 年	50 戸
95 年	100 戸
96 年	130 戸
97 年	200 戸
00 年	260 戸

（出所）2000 年 7 月、龔家溝会計への聞き取りから。

- （注 1） ・ 1978 年の人口（常住本村人）380 人・75 戸
・ 1990 年の人口 1100 人・300 戸

・ 2000 年 7 月の人口 1170 人・320 戸

(注 2) 2000 年現在、龔家溝には 100 戸以上の外村人経営工場が存在する。1996 年、龔家溝は村の南北を縦貫する県道沿い 200 畝以上の農地を、工業用地として販売した。約 70 戸がその土地使用権を購入し工場を建設したが、彼らのすべてが外村人（都市戸籍者）だった。

(注 3) 龔家溝の隣村である施家溝と新旗には約 70 戸の床板工場がある。

91 年 10 月、X B は正式に 8 人の労働者を雇い、床板のための木材材料を 6 t トラックで 2 台購入した。床板への加工後、トラック 1 台の原材料から 1300 元の利益を得た。このとき、運送会社の課長を務める X B の兄がトラック運送で X B を助け、また木材購入先の製材所書記が X B に品質のよい木材を紹介する幸運もあった。X B は翌 92 年 2 月には 8 人の労働者のうち 3 人（本村人 2 人、江蘇人 1 人）に 6000 元から 8000 元の資金を融資し、床板工場の設立を援助し独立させた。

彼ら 3 人の工場経営もすぐさま軌道に乗り、多くの利益を獲得した。村民は床板が成功するのを目の当たりにして、彼ら自身も次から次へと参入した。畜産業のブームが過ぎ去った後、床板生産のブームが始まった。床板工場は、92 年に 15 戸前後、93 年に 30 戸余り、94 年 50 戸余り、95 年 100 戸以上、96 年約 130 戸、97 年 200 戸以上、2000 年には約 260 戸といったように急増した（そのうち外村人が 100 戸を占める）。2000 年の龔家溝の総戸数が 320 戸ほどなので、床板生産に従事する農家は全戸数の 5 割ほどを占めることになる。また、床板生産の成長とともに商店や運送業、加工業などを経営する村民も増加した。龔家溝村民の大部分は何らかのかたちで個人経営に携わっている。

こうして龔家溝では、まず始めに X B のネットワークを通じて、その後は村民の自発的な学習によって床板生産が隆盛し、全国でも有数の床板産地を形成するまでになった。X B は 92 年から書記（兼村長）に就任した。床板の工場が増加することについて、彼は次のような考えをもっている。「車が多くても道路が破損することはない。反対に車の多い道路こそが民衆によく知られた良い道路だ。つまり、村民の多くが床板生産に従事することで、龔家溝が床板産地として全国的に有名になることができる」。

X B は、床板の加工は技術も必要なく設備も簡単でありながら、他の事業よりも多くの利益をあげることができるという。彼は、村の党員や自分が親しく付き合っている親戚友人たちに床板生産のノウハウを積極的に伝えた。また床板生産では、より良質な木材を購

入すること、すなわちその購入先がもっとも肝要だが、そうした経営の死活にかかわる情報も親しい村民に気前良く伝えている。

③床板販売の全国的市場に変貌した龔家溝

また資金のある大戸は村の農地使用権を買い取って工場の敷地を拡張し、それぞれ個人経営で床板を生産している。経営規模の小さい小戸では、庭先に作業場を建設して床板を加工している。門には、木種に応じた床板の値段が黒板に記され掲示されている（第7章[図7-2]参照）。

床板の買付け販売業者や小売業者は、主に上海、武漢、広洲など中国南部の大都市からやって来る。彼らは黒板に書かれた価格を参考にしながら床板経営者と値段の交渉をおこなう。各々の住居が床板販売店なので、村全体が床板の巨大デパートのようである。販売された床板はトラックに次々と積み込まれ中国南部に運ばれていく。華南地方のナンバープレートをつけたトラックも少なくない。

龔家溝は、木材を切削する音とトラックのエンジン音でたいへん賑やかである。宅地内には木材が積み上げられているが、それだけでは場所が足りず道路の両端にも山積みになり、その高さは3メートルにもなる。乾燥窯の蒸気は村中に木材の蒸せるにおいを充満させ、木材を切削するたびに舞い上がるおが屑は、目を開けて村のなかを歩くことができないほどひどいときもある。シーズン（6月から8月はシーズンオフ。中国南部は雨季になり、床板を貼り付けるのに適さないことから消費量が極端に減少する）にもなると、夜通し作業が続けられる。

④大戸と小戸の広まる格差

2000年、床板生産は各工場の資産規模において、たいへん大きな格差がみられるようになっている。一般的にこの村では、50万元以上の資産規模の工場経営者を大戸、5万元ほどの経営者を小戸と呼び習わしている。全村で100万元以上の規模のものは約25戸、50万元以上100万元未満は約75戸、5万元から50万元未満のものが約160戸である。

このなかには外村人が経営する床板工場が約100戸含まれる。そのうち大戸は約70戸を占める。外村人は龔家溝に戸籍をもたず、ほとんどが都市戸籍者である。彼らは96年以降、龔家溝の土地使用権を購入したり、あるいは土地や施設を請負うなどして床板生産を始めた。

【表 3－3】床板工場の資産規模別戸数

資産規模	本村人経営者の戸数（概数）	外村人経営者の戸数（概数）
100 万元以上	数戸	25 戸
50 万元～100 万元未満	30 戸	45 戸
20 万元～50 万元未満	20 戸	30 戸
5 万元～20 万元未満	80 戸	
5 万元未満	30 戸	
総戸数	160 戸	100 戸

（出所）2000 年 7 月、筆者による龔家溝会計への聞き取りから。

（注）龔家溝では、資産規模 50 万元以上の工場を「大戸」、それ以外を「小戸」と呼び習わしている。

彼ら大戸と小戸のあいだには経営規模のみならず、考え方、経営方法、個人ネットワークの広がりや質において顕著な違いがみられる。木材購入、資金、技術、販路の開拓などは基本的に個人的ネットワークのなかで処理されている。厳しい市場競争のなか、大戸と小戸のあいだの格差はますます拡大していくと思われる。

（5）床板生産後の村民生活の変化

床板生産のブームは、当然ながら龔家溝の人々の生活にたいして、多大な変化をもたらした。購買力における都市住民との格差の縮小、村民のさまざまな需要の出現とそれに応える商業やサービス業の発展、村内生業間の有機的相互連関の形成、村が当地方において相対的に裕福になったことで生じた新しい人の流れ、村の山にたいする村民の無関心化などである。

1）村民の新しい需要の出現と商業やサービス業の発展

①物質的豊かさの実現

村にとって空前の工業化は、上空の様子の変化によって象徴される。村に入って空を見上げると、工業用高圧電力線、低圧家庭用電力線、電話線などが張り巡らされているのが気がつく。工業用高圧電力線は平均して 2 戸に 1 戸が引き入れ工事を済ませており、宅地内での床板生産に使用されている。

95 年頃から床板生産する工場が急増し、村は深刻な電力不足に陥った。96 年にこの間

題を解決するため、各工場から合計 37 万元を集資し、変圧器、電柱、電線などの改修工事をおこなった。

電話は 98 年で 160 戸余り、2000 年には 270 戸、全戸数の 90%にまで普及した。テレビは 98 年、各家庭に 1 台、あるいはそれ以上の割合で普及している。冷蔵庫は 98 年に 15%、2000 年は 30%ほどである。その他、2000 年にはポケットベル 90%以上、携帯電話が 70%、高品質のオートバイ 10%、ビデオ C D 95%が村民のあいだに普及している。また、5 人が自動車を所有し、3 人がジープを所有する。

物質的な豊かさは、とくに村の青年たちに反映されている。改革・開放以前では、青年はただ 4 つの農具（鋤、鍬、鎌、つるはし）を担いで生産隊に出勤し、仕事が終われば帰宅するという毎日だった。現在は、オートバイを所有する青年も少なくない。家庭には必ず電話があり、みんながポケットベルを持ち歩いている。携帯電話を持つ者も少なくない。床板工場を経営する家庭では、夫が木材の購入のため中国最北部に赴き、あるいは床板の販売のために広東や福建に出かけ、村にいないことが頻繁にある。その際、携帯電話で連絡を取り合うのが若い夫婦のあいだで流行している。ちなみに携帯電話は、電話機本体を購入するだけでも数千元かかる（現在、北京などの大都市でも平均収入は月 2000 元程度である）。

②サービス業の出現

改革・開放以前、村には商業やサービス業を営むような店舗は存在しなかった。それが、村の経済が発展し、人の移動も活発になると、さまざまなサービス業が発展してきた。軒数とともに、経営者のおおまかな月收入を示しておく（2000 年当時）、レストラン 16 軒（3000 元）、食料雑貨店 15 軒（1500 元）、銭湯 3 軒（2000 元）、理髪店 4 軒（1000 元）、ガソリンスタンド 1 軒（800 元）、などである。

その他、ここ 1、2 年で新しく登場したものに、ゲームセンター 1 軒（3000 元）、ビリヤード場 1 軒（600 元）、レンタルビデオ C D 屋 2 軒（400 元）、などがある。また、運送用トラック手配所 4 軒、衛生所 1 軒、娯楽とサウナが一体となったホテル 1 軒が建てられた。さらには、外村人が経営する法律相談事務所が開設され、数十元で民事や商取引の揉めごとに関する訴状を作成している。

③定期市の設立

本村人を中心とした常設店舗以外に、村では東街に小市が毎日立つようになった。夕方 4 時頃になると、野菜、果物、肉（豚、鶏）、魚、卵、包子、饅頭、焼餅、煎餅、揚げパン、

揚げ菓子、漬け物、惣菜、豚の血腸、ソーセージ、豆腐など、村民の日常的な食べ物を販売する 20 余りの露店が開かれる。この小さな市はここ 1、2 年のあいだに始まったものであり、半分が龔家溝の本村人、その他半分が付近の農村からやって来た者たちである。政府税務局や工商局は管理しておらず、税金を納めずに営業をおこなっているため、村の食料雑貨店と緊張が生じている。

この小市の他にも、火曜日に村の中西部で、日曜日には ZB 書記経営の床板工場北側で、また水曜日には隣村の施家溝において規模の大きな定期市が開かれる。食料品の種類は東街の小市と比べて格段に豊富である。例えば中国の麺類には、日本でいう麺と同様の「面条」と、小麦粉や穀類の粉の総称である「面粉」の二種類がある。この定期市で売られる面条には、掛面、切面、冷面などがあり、面粉には米、とうもろこし、小麦、豆類、アワ、もち米などのものが売られている。市で見かける穀物には、米、もち米、インディカ米の香米（白と黒）、あわ、ひえ、緑豆、紅豆（大と小）、大豆、飯豆、とうもろこし（大と小）などがある。この地方では、米や麺とともに餅や饅頭も主食である。餅には、筋餅、発面餅、餡餅などが、饅頭には大包子、小包子、紅豆饅頭、トウモロコシ饅頭、黒面饅頭、糖三角、花巻などがある。果物は、りんご、なし、バナナ、ぶどう、ライチ、マンゴー、もも、すもも、桜ん坊、柑橘類、マキワウリ、スイカなどがある。魚介類は太刀魚、養殖淡水魚、イカ、貝などが中心である。肉類は、豚、牛、鶏、羊、ウサギ、犬、馬、ロバ、鳥がある。しかも頭、舌、四肢、心臓、肺、胃、肝、腸、腎臓、血など、あますところなく体の全てを食する。卵には、鶏卵、鴨卵、ウズラ、ガチョウ、ピータンなどがある。豆腐も種類が多い。もめん豆腐、水豆腐、豆腐腦（屑豆腐）、臭豆腐、腐乳、揚げ豆腐、五香豆腐、豆漿汁、干し豆腐、豆腐皮、小豆腐などである。

また食料品以外にも、日用雑貨やカセットテープ、衣類、寝具などを売る露店が出店される。歯医者や床屋の露店もある。露店は全部で 200 店ほど、露店主は 10%が龔家溝の本村人、90%が外村人で付近の農村住民や撫順都市部の失業者たちがやって来る。政府関係部門が彼らから管理費を徴収するとともに、集市の場所を提供している地主が露店主から一定の「地皮費」を受け取る。また一部の土地は、15 年ほどの長期契約（請負）や 1 年ほどの短期契約（出租）で貸し出されている。市が開かれる時間は早朝 6 時から正午過ぎまでであるが、このあいだは、付近の農村から集まった人々でごった返し、木材を運搬するトラックが道路を塞いで立ち往生してしまう。わずかに数百メートルの道路を車で通過するのに、半時間ほどを費やさなければならないほど渋滞する。

商業活動の充実ぶりは、常設店舗や集市の露店だけにとどまらない。村の中を移動して回る三輪オートバイ（1台）や手押し三輪車（5台）によって食料販売がなされている。三輪オートバイでは素麺、麦面、米、雑穀、緑豆、小豆、ピーナツオイルなどが、手押し車では、豆腐、白酒、白酢、鶏肉、鶏卵、野菜、果物などが売られている。彼らは朝昼晩の3度、村の中を巡回する。

2) 人々の移動の変化 ―龔家溝での労働市場の形成―

①職業移動にみられる村民の移動の変化

龔家溝の経済発展は、人々の移動のあり方にも大きな変化をもたらした。村には外地から多くの人々が床板を買付けにやって来るのと同時に、村民も原料購入や床板の販売、顧客の出迎えや接待、その他の所用などで頻繁に都市部や中国各地の都市、農村に出かけて行く。また村民の収入が向上したことで都市部に買い物に出かける者も多い。村民の移動は頻繁で、そうした需要に応えるため、村の入り口には常時20台ほどのタクシー、三輪オートバイが待機している。また、ちょっとした物資を運搬してくれる小型トラックが10台ほど停まっている。運送業に従事するドライバーはみな外村人であり、需要の多い龔家溝を稼ぎ所として集まってくる。

また、付近の農村や都市部から日雇いの力仕事を求めて人々が集まる。多いときには100人ほどが、村の中央に位置するバイパス高架橋の下に集まってくる。彼らは、トラックからの木材下ろし、乾燥窯への木材の積み上げや取り出しなど、単純な肉体労働に従事する。工場経営者はこの高架橋で必要な臨時工を雇う。

こうした地域間移動の変化に加えて、龔家溝で労働市場が形成されたことで、従来、村外で臨時工や建築現場での力仕事、人力車での運送業、都市部レストランのコックや給仕、溶接修理工、自転車修理などに従事していた村民が、仕事を求めて村に帰ってきた。あるいは都市部に出勤するのをやめた。その数は、臨時工や建築現場で働いていた者たちだけでも100人近くになる。彼らは、資金や技術に応じた仕事を村のなかで始めた。床板生産を始める者、惣菜をつくり食料雑貨店を始める者、レストランやホテル、銭湯を開く者、龔家溝の工場を取引先にした溶接修理、電動機械部品修理、機械加工、切削工具刃メンテナンス、加工された床板をビニール包装する際に用いる小ボイラーの製造など、いろいろである。

②外村人（臨時工・床板経営者）移入の増加と多層的な就業構造の形成

すでに述べたところだが、村の床板生産は、常時 300 人から 400 人にもものぼる外村人の長期滞在者を生み出した。彼らは都市部の失業者や、比較的貧しい農村地域からの出稼ぎ者である。本村人は外村人にたいして部屋を賃貸している。龔家溝にはこうした賃貸部屋が 200 ほどあり、家賃は 80～100 元／月である。また、外村人のなかには土地使用权を購入して床板工場を建設し龔家溝に住みつく者もいる。

外村人の就業構造は多層的である。経営者もいれば賃金労働者もいる。経営者は大戸と小戸に分けられ、また賃金労働者のあいだでも賃金の格差は大きい。床板の製造は、床板工場経営者（大老板）—作業用機械所有の賃金労働者（小老板）—単純賃金労働者という重層的な雇用関係に支えられている。「老板」は経営者を意味するが、龔家溝で呼び習わされているところの「大老板」は、作業工程に応じて「小老板」を雇用し、床板の加工 1 m²につき 1 元の賃金を支払う。小老板も自ら臨時工を雇い、0.1 元／m²の賃金を支払う。

3) 村の山にたいする無関心化

村の経済発展は、龔家溝の自然環境にも大きな変化をもたらした。村の小川は、90 年代初頭ではそのまま飲料水に使用できるほど澄んでいたが、最近は床板生産のために汚染が進んでいる。しかし、川の汚染は村政府の注意を惹きつけず、また村民もまったく関心を示していない。化学物質の排出による汚染ではないので、さしたる問題ではないというのが彼らの一般的な見解である。

一方、村の山だが、改革・開放前、貧困に苦しんでいた村民にとって山の柴は重要な収入源だった。また 80 年代末から流行した畜産業では、牛や羊が山に放牧された。しかし床板生産がブームになると、山に放牧される家畜は村から姿を消した。床板生産に明け暮れる経営者たちは、収入のあがらない山に全く興味を失ってしまった。食事の煮炊きやオンドルの暖は、床板の製造で生じる廃材や木屑を使っている。また電気炊飯器やプロパンガスの普及で、山の柴は無用となった。以前はすっかり禿げあがっていた山も、今では自然の状態に近づき、雨期の表土流出もなくなった。

現在でも、ごく少数ではあるが一部の村民が村から土地を請負って、山腹で果物やトゥモロコシを栽培している。春 4 月頃、山では果樹が実をつける。しかし、果樹園の請負主は床板生産に忙しく、収穫作業をまったくしない。また他の村民が収穫を手伝うこともない。こうした果実は、付近の村や都市部からやって来た者たちが自由に収穫してもよい。果樹園の請負主からすれば、すでに自家消費用の果実は収穫しており、残った果実につい

てはだれが採ろうとかまわない。

山菜も同様である。町で販売するために山菜を摘みにくる者もいる。500 グラムが 5 元から 10 元で売れる。龔家溝の習慣では、地上に姿をあらわしている部分、すなわち樹木の幹や枝は手をつけてはいけないが、地表に落ちている柴や木陰に生息するキノコなどはだれが採取してもよい。また、耕作主が植えたとわかる作物以外ならば、地表に生えている山菜も自由に摘んでよい。

現在の龔家溝村民にとっては、山はもはや生活と関係しない。また付近の農民や都市の失業者がやって来ても、村民から差別的にみられたり追い払われたりすることはない。村の財産が荒らされるという考えや治安悪化を心配する声は聞かれない。

（6）龔家溝の村政府幹部 —私的経営者の兼職—

現在、すべての村幹部は、非農業部門における営利的な経営活動にかかわっている。幹部手当を主な収入源とする専任の村幹部は龔家溝には存在しない。龔家溝の現書記 X B は次のようにいう。「稼ぎがろくになく、自分の家のことも管理できないような者が、村の書記になって他人を管理することなどできようか。そのようなことをしたら、村民からなめられてしまう。だれひとりとして、そんな書記の言うことなど、聞きはしないよ」。

【表 3－4】 龔家溝の村幹部

氏名	出生年	役職名	幹部手当以外での主な収入源
X B	1953 年	党支部書記・村長	床板工場経営
G Z	1940 年	会計	雑貨店経営、息子が床板工場経営
D B	1953 年	出納	部屋の賃貸、床板原材料買付け販売
F H	1955 年	婦女主任・党支部副書記	床板工場経営
J Y	1954 年	民兵連長	宅地の作業場と乾燥窯の賃貸
Y M	1956 年	農業主任	床板工場経営、宅地の作業場と乾燥窯賃貸

（出所）2000 年 7 月、筆者による龔家溝会計への聞き取りから。

ここでは、出納を務める D B を簡単に紹介しておこう。D B は 1953 年龔家溝に生れた。

8～14 歳まで施家溝大隊小学校、14～19 歳まで新撫鋼廠工農兵中学（現撫順市師範専門

学校)で学んだ。19歳から施家溝大隊第七生産隊(現龔家溝)で出納を一年間務めた。75年から80年、第四生産隊(現龔家溝)で会計を務めた。81年から86年は施家溝大隊の建築隊の出納、87年から89年は施家溝大隊の所有する化学工場に出納を務めた。90年から96年は3つの私営企業で会計の仕事を掛け持ちした。96年から2000年現在、龔家溝の出納を務めている。

龔家溝の出納は、村政府財政の現金収支と档案の管理に責任を負っている。銀行で預金や現金引出しをおこない通帳に記入し、定期的に銀行通帳と村の帳簿を照合する。档案の管理では、企業請負契約、土地請負契約、村民間で交わされる契約、村民と村政府との契約などについて、上級政府によって定められた規則にしたがって手続きをおこない、公証書の発行を申請する。

DBは1976年に2歳年上の妻と結婚、79年生れの息子がひとりいる。息子は中学1年で退学した。現在は、床板工場から出るかなな屑や木材の切片を回収して販売しており、年間で3000元から5000元の収入がある。DBの妻は専業主婦である。

DBが村政府から得る手当では、月平均にして800元から900元ぐらいである。手当で支給の形式として、300~500元の基本手当が毎月支払われている。さらに年末には、郷が統一的に定めた「責任達標」(村幹部の業務内容)にしたがい、村幹部に課せられた仕事内容がどれだけ遂行されているかを郷政府が検査する。その結果をまっけて、郷政府は相応の手当が村幹部に支払われることを各村政府に許可する。DBは年末に平均して4000~5000元の手当を受けている。ちなみに村政府は、それぞれ各自の村財政から手当を拠出しなければならない。村財政は、国家の財政体系には組み込まれていないからである。次章でみるように龔家溝は、その財源のほとんどを土地使用権の売却益でまかなっている。

郷政府と村のあいだでは、村幹部の請負責任制が実施されているが、郷政府にたいする請負のなかでもっとも重要な項目は納税の履行である。その他には、精神文明、党建工作、植樹造林、計画生育、村民間に生じた問題の調停などがある。任務の遂行が評価されると、それぞれの項目に応じた点数が加算される。100点満点で1点につき100元が支給される。すべての任務が達成されれば1万元の手当を得ることができ、さらには報奨金も支給される。反対に、任務の遂行が一定程度の水準に達しなければ手当が減額される。

DBの例を見てもわかるように、龔家溝の幹部の手当では年間で1万元を超える場合もある。実際には、納税以外の任務はほとんど遂行されていない。しかし床板生産による国への納税額が120万元(99年度)と高額であり(そのうち国へは75%、区政府12.5%、

郷政府 12.5%)、龔家溝幹部は満点以上の評価を郷政府から得ている。また、郷政府の村幹部にたいする任務評価は、実際には郷書記と村書記のあいだの話し合いでおこなわれる。2000 年当時、X B 書記と郷の工業部長を兼ねる副郷長との関係はたいへん緊密であり、何らかの非公式な影響も働いていたようである。

村幹部の手当て以外に、D B は自分が所有する建物や敷地、設備などを賃貸することで多くの収入を得ている。1997 年 5 月、1.5 畝の農地、1.5 畝の宅地について 50 年間の土地使用権を 18000 円で村政府から購入した。購入した土地には、3 つの乾燥窯（土窯）や床板を製造するための作業場を建てた。土窯とは床板を乾燥させるための設備であり、費用や手間のかからない最も単純な種類の窯である。

2000 年、3 人の者がそれぞれ年間 1 万元で D B の土地や設備を借りて床板の生産をおこなっている。そのうちのひとり、龔家溝本村人である。もうひとり、撫順市の都市部に住まいがある。もともと国有企業の労働者であったが、レイオフされた後は龔家溝で妻とともに床板を製造している。彼らは撫順の都市部から龔家溝へ毎日出勤する。もうひとり、やはり撫順市都市部に住む元国有企業の労働者である。彼らも夫婦そろって毎日龔家溝に出勤し床板を作っている。

このほか、D B は 5 つの家族にたいして部屋の賃貸をおこない、一部屋につき 80 元／月の家賃を得ている。黒龍江省からやってきたのが 2 家族、遼寧省本溪市から 1 家族、遼寧省鉄嶺市昌圖県から 2 家族である。黒龍江省からやってきた者たちは、D B の部屋を借りて住んでいるが、作業場や設備は D B 以外の村民から借りて床板を製造している。その他の者たちは、龔家溝で臨時工として働いている。

D B と賃貸関係にある者たちは、親戚友人といった特別な関係ではない。彼ら外村人は龔家溝のうわさを聞きつけ、自ら龔家溝を見て回り、各自の条件に合った部屋や生産設備などを借りていく。華南の村では宅地や家屋内に外村人が入ることを嫌い、さらには本村人と外村人の居住区を分けている例もある【折、1997：26】。龔家溝の開放性とは対照的である。

以上、D B 一家の収入は 1 年間で 4 万 5000 元ほどになる。支出についての詳細は、当地方では家計簿をつける習慣がないので不明であるが、概略次のようなものであった。食費 2500 元／年、夫婦の服装費 1000 元／年、こどもの服装費 3000 元／年、交際費 2000 元／年、煙草 200 元／月、酒 100 元／月で、その他を含めると年間 1 万 5000 元ほどの支出である。

DBという。「村の仕事に参加して以来、困難に遭遇したことはない。もちろん以前、批判闘争の槍玉にあがったこともなかった。今、信仰しているものがあるとすれば、それは宗教なんかではなく、やっぱりお金だね。もう 50 歳だし、いまさら共産党に入党する必要もないし、本当に気楽な毎日だよ」。

注

(1) 筆者は 1998 年 8 月から 2000 年 8 月まで、中国社会科学院社会学研究所の客員研究員として中国に滞在した。滞在期間中の 2000 年 2 月から 8 月にかけて、中国社会科学院による調査手続きを経て遼寧省撫順市順城区河北郷に滞在し、都市近郊農村のフィールド調査をおこなった。調査方法は、龔家溝村民を対象とした聞き取り調査が中心である。また必要に応じて、撫順市社会科学院の研究員、あるいは河北郷政府、龔家溝政府の幹部に聞き取り調査をおこない、可能な場合には政府資料を提供していただいた。しかし、さまざまな制約があったことは事実であり、世帯調査などの量的調査は実施できなかった。また、筆者の調査村落は中国農村の先行研究で多く見られるようなモデル村を対象としたものではなく、また政府による「上からの」紹介によって選定した調査地でもない。筆者の調査村落は、村としての体をなしているとは言い難いものだった（むしろ、こういう姿の方が中国農村に一般的なものと考えるが…）。

第4章 顔役の性格が反映する村の政治構造 —村政府と村民のルースな関係—

(1) 村の「緩やかなまとまり」—顔役の個的資質の反映—

龔家溝は、本稿の村落類型からいうと「自己表出的顔役型」村落に分類される。

前章で紹介したように、80年代後半以降、龔家溝は個人の力量に基礎をおいた経済発展を進めてきた。90年代前半は畜産業、90年代後半は床板生産が発展し、ほとんどすべての村民が市場活動に参加するようになった。木材購入や床板販売市場は全国規模で展開され、外村人の豊富な労働力が利用される。異姓雑居村で都市近郊村である龔家溝は、もともと流動性、異質性、開放性などが特徴だったが、村の経済が個人経営を基盤に確立されたことで、その性格がますます強調されることになった。

龔家溝では、本村人／外村人という区別で排他的に利益を専有する傾向はみられない。つまり、同族的規範や地域団体的規範に基づいた本村人関係は形成されていない。龔家溝の本村人は、「村に戸籍がある者」といった程度の意味しかない（戸籍取得には手続きの費用（2000年当時で約1万元）以外に特別な条件は課されていない）。また、村財政の管理運営をめぐって村民の関心が糾合することもない。後にみるように、村財政は土地使用権の売却益に依存するが、土地の管理に関してはすべて村幹部の手中にあり、村民の参加する余地がない。すなわち、「村民自治」を通じて村民の利害関心が制度的に合意形成されるような状況はみられない。

龔家溝は、経済活動も村民結合形態も村外社会にたいして開放的だといえる。また、分散性を村の通底的な性格とし、龔家溝で生じる多様な社会現象を規定している。とくに村政府と村民の関係はルースさが顕著である。

ルースさを龔家溝の政治構造の特徴としたうえで、あえて村のまとまりを見出せば、以下のようなものがあげられる。第一に、91年、施家溝大隊からの分離独立を求めて上級政府におこなった上訴の運動、第二に、外村人の書記AZ（91～92年）と本村人のあいだの軋轢が転じて生じたAZ書記主導の村落公共事業、第三に、大戸による床板工場集団化の計画立案と実施に向けた動き、第四に、龔家溝からの増税を目論む郷政府にたいする村民

の反発、などである。

これら村の緩やかなまとまりには、それぞれ順に次のような人物の存在と動機が影響している。それは、1)「老戸」の自主決定権請求、2)「前書記 AZ」の書記就任の正当性を示そうとする自己表出的動機、3)「大戸」の生き残り戦略、4)「現 XB 書記」の郷政府にたいする面子である。これら契機の異なる龔家溝の緩やかなまとまりについてまとめると、以下のようになる。

〔表 4－1〕 龔家溝の「緩やかなまとまり」

できごと 分析項目	上級政府への 上訴	自己表出的な 公共事業運動	「大戸」の 経営戦略	地方政府の動向 にたいする反発
時期	91 年 7 月以前	1991 年末	計画中	2000 年以降
影響をもつ人物（顔役）	老戸	外村人の前書記 AZ	外村人の大戸 K T	現書記 XB
影響をもつ人物の目的	施家溝大隊から分立し、独立した行政村となって自主決定権を獲得する。	前書記自身が書記就任の正当性を村民に明示する。	不況や市場競争の激化を企業集団化で克服し生き残る。	郷政府への面子の維持・増大。
村民の態度	施家溝大隊への反発意識から積極的な支持へ。	一部本村人が前書記 AZ に猛反発。その後、舗装道路が自己の利益にもなることから徐々に協力的になる。	「商会」参加者である外村人の大戸が中心。小戸（龔家溝本村人）は蚊帳の外にある。	郷・村政府への不満。政府からの見返りは期待できず、新たな負担要求は正当な理由がないものとして反発。
村外社会からの影響	市、区政府の行政区画整理縮小政策による後押し。	前書記 AZ の村外社会に広がる個人的ネットワークが後押し。	郷政府が商会を通じて集団化を援助している。	現書記 XB と副郷長の個人的友誼関係による増税の目論み。
まとまりの持続性	龔家溝独立とともに消失。	事業の終了と前書記 AZ の辞職により消失。	郷政府の指導が実現すれば持続可能性あり。	村民の対抗手段は個人の消極的な負担拒否の態度にすぎない。

こうした村の緩やかなまとまりには、ある特定の人物（顔役）の志向性が影響している。

換言すれば、龔家溝の通時的な差異とは、彼ら顔役のあいだにみられる個的資質の相違を反映したものである。例えば前書記 AZ と現書記 XB は党支部書記という役割を担ったことでは共通するが、彼らが実際に龔家溝に与えた影響はまったく異なった内容をもつ。制度的な役割としての書記を強調してしまうと、龔家溝で生じたできごとの意味は適切に理解することができない。むしろ顔役の個的資質を明らかにすることで龔家溝のまとまりにみられる質的な相違が理解できる。

（２）外村人の前書記がおこなった村落公共事業

外村人である AZ は書記（村長兼任）に就くやいなや、龔家溝本村人の猛反発を喰らってしまう。そこで AZ は、書記に就任することについて自分自身の正当性や個人的な資質を村民に示す必要が生じた。この表出的活動の手段として採用したのが道路の舗装という公共事業だった。したがって、そもそも書記の志向性は、龔家溝村民の公益や福祉といったものには向けられていなかった。

この公共事業実施には資金、機械、労働力などの調達において AZ の村外社会でのネットワークが機能した。工事が進展するにつれて、当初は非協力的であった村民のあいだにも舗装道路は自分たちのために造られるのだという意識が共有され、それなりに村のまともが見出せるようになった。しかし、工事終了後に AZ は龔家溝を去り、こうした村のまとももただ一過性のものとなった。後任の XB 書記は、村の公共事業には関心が無い。公共的なものに志向する指導者がいないと、瞬く間に分散的な姿に戻るのが龔家溝の特徴である。龔家溝の公共事業は個人の資質に過度に依存するため、一過性、非連続性、偶然性、目的の恣意性などを特徴とする。

１）前書記 AZ の家族

まず前書記 AZ の個人経歴を紹介しておきたい。前書記の個的資質および自己表出的動機を理解する手掛かりになるからである。

前書記 AZ は 1952 年生まれ、父親は中国人、母親は日本人である。母親の初婚の相手は日本人男性であり、AZ の実父である中国人男性とは再婚であった。母親は、日本が中国大陸を侵略し、中国東北地方が満州国の統治下にあったとき、初婚の日本人配偶者とともに撫順にやって来た。撫順では磁務局の会計を務めるエリートだった。彼女と日本人配

偶者とのあいだには4人のこどもがいた。敗戦後、この日本人男性はソ連軍の捕虜となってシベリアに抑留され、10年ほど後に日本へ帰還した(1)。

母親は終戦後、撫順の炭鉱宿舍にひとり残されてしまった。彼女の4人のこどもは、餓死する者は餓死し、まだ生きている者は見ず知らずの中国人にあずけられた。彼女は4人のこどものうち、ひとりの娘については預けた人物と場所を記憶していた。

終戦後、炭坑で働いていたひとりの中国人労働者がAZの母親の再婚相手となった。炭坑の幹部がこの炭坑夫に彼女を紹介した。「おまえはもう30過ぎなのに、まだ結婚していない。私はひとりの日本人女性を知っているが、身寄りもなく困っているようだ。この女性もすでに若くはない。どうだろう、この女性と一緒にしてみては。そうすればおまえも一家の主として家庭をもつことができるぞ」。この炭坑夫が初めてAZの母親を見たとき、強い憐憫の情を禁じえなかった。彼女は一着の衣服も纏っていなかった。敗戦の混乱のなかですべての所持品は略奪されていた。彼女は身動きひとつせず、ただ一枚残った薄汚い絨毯にくるまりオンドルの上にうずくまっていた。炭坑夫はすぐさま彼女を連れて帰ることを決心した。AZの母親は、日本人の夫はすでに亡くなっていると思っていたので、この中国人炭坑夫の申し出に従った。

彼女は炭坑夫と再婚後、4人のこどもを出産した。娘1人と3人の息子で、AZは第二子長男である。母親は再婚後すぐに、人にあずけていた先夫の娘(長姉)を捜し出し、連れて帰った。当時、炭坑夫の収入は少なく生活は苦しかったが、長姉を引き取ることにすぐさま同意した。さらにAZの父親は長姉に勉強する機会を与え、苦勞して学費を捻出した。

文化大革命の頃、AZの両親はこの長姉を除く4人のこどもを連れて夫の実家のある撫順市新賓県の農村に引っ越した。AZの母親は中国の農村生活に馴染めず、たびたび夫と喧嘩をした。喧嘩のたびに母親は外に出て門に寄りかかり、日本の歌を歌った。

一方、長姉は撫順の都市部に残り中国人男性と結婚、6人のこどもを出産した。しかし長姉の夫は心臓が悪く、30代半ばにして亡くなった。1972年に日本と中国の国交が回復し友好関係が結ばれると、撫順政府と公安局は撫順在住の日本人集会を組織し、肉親探しのための情報交換の場を提供した。長姉はこの機会を通じて当時の日本および国内の肉親探しに関する情報を収集した。撫順在住の日本人のなかには、離散した肉親の消息をつかむことにすでに成功した者がいるという話を聞き及び、長姉は新賓県にいる母親に手紙を送って日本での住所および日本人先夫の親戚の名前などを問い合わせた。母親の返事を得

ると、それを日中交流友好協会に知らせた。当協会は長姉の手紙に記された情報を日本の新聞紙上に掲載した。この記事を AZ の母親の姉の夫が目にした。彼は AZ の母親と生き別れになっていた日本人の先夫を捜し出し、新聞記事の内容を告げた。AZ の母親と日本人の先夫は、20 年余りの歳月を経て、お互いの生存を初めて確認した。先夫は、妻の生存を信じ、再婚せずに彼女の帰国を待ち続けていたこともわかった。

AZ の母親は、すぐさま日本へ帰ることを決心した。彼女は帰国する日を待ちわび、門に寄りかかり遠くを眺めながら日本の歌を歌いつづけた。こどもたちはそんな母親の姿を見るにつけ、あまりにも薄情な母親にたいする怒りの気持ちを抑えきれなかった。その一方、強い望郷の念にかられ我を忘れた母親の姿に、胸のつぶれる思いをした。最終的に遼寧省の最高人民法院は、母親と中国人男性の夫にたいして離婚の判決を下した。判決後 3 ヶ月して、AZ の実父は失意のうちにこの世を去った。

母親と長姉、長姉の 6 人のこどもたちは、先夫が住む九州の H 市に帰ることになった。しばらくして AZ の一番下の弟も日本に渡った。日本での生活は、思い描いていたものとは違っていった。30 年の過ぎ去った年月は、日本人の先夫と AZ の母親とのあいだに到底埋めることのできない深い溝を刻み込んでいた。再会の喜びに高揚した感情も徐々に消え失せ、日常に戻ると双方の生活習慣の相違が目につくようになり、感情的な軋轢が日増しに増大した。当初は妻や長姉にたいして寛大であった夫の態度にも変化が生じ、挙げ句の果てには妻にたいして毎日のように暴力を振るうようになった。

先夫が死去する前、AZ の母親や長姉らは、先夫の暴力や親戚の冷淡な態度に耐えきれなくなり、長姉と 6 人のこどもたちは九州の K 市に、母親と三男は同じく T 市に引っ越した。先夫は山地や鉱山を所有する地主であった。夫は、妻と長姉にそうした資産の一部を分与することを考えていたが、夫の親戚たちがこれに反対した。夫が死去するとこれらの財産はすべて親戚のものとなった。AZ の母親や長姉、三男は、日本で一から生活を立て直す必要に迫られた。

2) 前書記 AZ の個人経歴

AZ は 91 年暮れから龔家溝の書記を務めた。また、龔家溝の隣の施家溝村では靴製造工場も経営していた。この頃、九州の T 市に母親とともに引っ越した三男は、AZ も日本に来るよう再三要請した。92 年、AZ は弟の招きに応じて 3 ヶ月間日本に滞在した。弟は滞在期間中の仕事を AZ のために手配した。収入は 3 ヶ月で 50~60 万円ほど、人民元にし

て3, 4 万元ほどになった。

日本でも生活していくことに自信をもった AZ は、中国に帰国後、経営の悪化していた靴製造工場に見切りをつけた。それから郷政府に書記辞職の手続きをおこない、一家全員で日本に行く決心をした。92 年のことである。

九州の T 市では、AZ の弟の紹介により、AZ と妻、それに長男は棺を製造する木工工場で働くことになった。AZ は、棺に彫刻を施す木工細工の仕事を担った。2000 年 6 月当時、AZ は木工細工の責任者として日本人労働者を指導する立場にあった。彫刻には特殊な技術を要する。一般労働者が彫刻した棺は数十万円ほどの値段だが、AZ が彫刻した棺は 200 万円ほどで売れる。工場の経営者や日本人の同僚との関係も円満だという。また、99 年に長男は遼寧省遼陽市出身の女性と結婚し、今では長男夫婦もこの工場で働いている。次男は九州の私立大学に通う大学生である。日本に来て、一家みんなが同じ職場で働けるとは夢にも思わなかったと AZ は話す。2 年ほど前には、3000 万円あまりで 4 LDK の一戸建ても購入した。自家用車も 2 台所有している。家族の年総収入は 1 千万円を超える。

すべてが順調に見える AZ の生活であるが、実際には多くの苦難が続いた。AZ が日本に来てまだ間もない頃、作業中、はめていた手袋が機械に巻き込まれてしまう事故に見舞われた。AZ の左手は動力部のローラーに引きずり込まれ、すりつぶされるようにして複雑骨折し、一ヶ月ほどの入院生活を余儀なくされた。悲しみと不安のあまり、人知れず涙を流す毎日だったと、AZ は当時を振り返っている。

政府によって認められた労災は AZ 一家の窮地を救った。数ヶ月のあいだ、生活費の支給を受けることができた。AZ の左手は変形してしまったが、それでも独自に工夫を重ね、高度な彫刻技術を習得した。その後、再度の不運が彼を襲う。仕事中、木材の破片が彼の左眼を直撃し、失明してしまった。眼球の摘出手術の後、彼の左眼には義眼がはめ込まれた。ガラスレンズのため、日中の日差しが強いときには痛みがひどく耐えがたい。

大きなけがにたて続けに見舞われたとき、母親がこの世を去った。歴史に翻弄された波瀾万丈の一生といえるだろう。かつて中国農村で暮らしていた頃、AZ の母親がこどもたちに要求したことは教養と気品を身につけることであつたという。日本人である母親が、文革などの厳しい時代を耐え抜いてきたのは、彼女自身、他人から尊重されるだけの教養と気品を身につけていたからだ AZ は考える。また AZ の父親は、そうした日本人の母親を、あらゆる困難から救う防波堤になった。父親の村民にたいする実直で献身的な態度が、文革の荒波の中、AZ 一家の安全を守り続けた。AZ は教養の修得とともに人間関係を

円滑におこなうことの重要性を両親から学んだという。母親が日本人という不利な状況にもかかわらず、文革の最終年には共産党への入党を果たし、基層幹部として実力を発揮した。

AZ は 20 歳で高等学校を卒業後、1 年間農作業に従事した。76 年、24 歳で中国共産党に入党、以来 7 年間、撫順市新賓県農村の生産大隊書記を務めた。施家溝へやって来たのは 83 年である。

81 年に新賓県の農村では家庭生産請負制が実施され、村の土地が各家庭に請負いに出された。その後、農民は等しく豊かになったが、AZ の場合は彼らの誰よりも早く経済的に成功した。AZ は請負制の開始とともに、さっそく機械加工の工場経営を始めた。また当時、停電が頻繁におこったことに目をつけ、ろうそく生産も始めた。さらには鉄筋コンクリート製建築資材の供給不足に着眼し、建築資材を撫順都市部から新賓県に輸送し販売した。

83 年、AZ は妻の兄弟を頼りに、妻とふたりのこどもを連れて龔家溝の隣、施家溝にやって来た。都市近郊に位置する施家溝は、新賓県農村に比べて、より大きなビジネスチャンスに恵まれていた。AZ には、当時すでに 5 万元ほどの貯蓄があった。引っ越しの際、撫順 81356 部隊の軍用トラック 3 台を借りて新賓県から床板を運送し、後に売却した。その後、友人の紹介で靴製造工場の経営を始める。施家溝大隊の土地と建物を請負い、機械、工業用電気、地下配水管の敷設など基本的な生産設備へ 3 万元以上を投資した（2）。

AZ の工場は、就業チャンスの提供という面で村民に貢献した。靴製造工場の最盛期には、施家溝や龔家溝の村民も含めて 300 人以上を雇用した。経済的成功は郷など上級政府とのネットワークを築くきっかけともなった。その後 AZ は、工場のある施家溝ではなく、隣の龔家溝の書記に就任するよう郷政府から要請される。彼は、龔家溝村民、とくに 1949 年の解放前から住む「老戸」を中心に大きな反発を食らうことになった。

3) 外村人の書記就任にたいする反発の背景

AZ が龔家溝書記（村長兼任）に就任した経緯を紹介しておこう。

91 年当時、撫順市では行政区画のスリム化が推進されていた。改革・開放後、国家によって進められた「放権譲利」政策は基層政権である村政府を国家の財政体系から除外し、村財政の自立を強く促した。各村落に財政支出の自主決定権を与え、かつ財政源の自己開拓を促すことで農村の経済発展を導き出し、同時に郷など上級政府の財政負担の軽減と税

の増収を図った。しかし、財政基盤の脆弱な村では村政府の管理が非効率にならざるをえない。そこで郷・鎮などの上級政府は、既存の村落を再分割することで人口規模を縮小して管理の効率向上をはかり、村落運営にあずかる権力のパイを増やすことで農村住民の権力への欲求を刺激し、ひいては経済活動への活力を導き出そうとした。

龔家溝村民の施家溝大隊からの分離要求では、村を代表した数名の村民が郷政府、区政府、撫順市政府まで直接出向き上訴した。彼らの不満は、人民公社時代から一貫して抱かれてきたものである。施家溝大隊は龔家溝の道路の建設や修理に一切助力せず、村民の訴えも聞かず問わずの態度であった。撫順都市部からの幹線道路に面する施家溝大隊の中心部（現在の施家溝村）は、いわば農村から都市部へと通じる玄関口に位置する。龔家溝や新旗へは、ここから山地に向かってさらに数キロ行かねばならず、大隊の中心部住民からすれば物理的な距離以上に心情的な遠さを感じさせた。また、相対的に開けていない龔家溝や新旗にたいして差別的な感情も少なからず持っていた。

人民公社時代に編成された施家溝大隊は、91年の分割以降、生産小隊の一、二、三隊が施家溝に、四、五、七隊が龔家溝、六、八隊が新旗に再編された。施家溝の一、二隊は79年に国家によって収用され、パワーシャベルを製造する国有企業（撫順市挖掘機廠）が建設された。これにともない施家溝一、二隊の住民は農村戸籍から都市戸籍（非農業戸籍）に編入された。彼らは国有企業が経営する「集体企業」（建築業）で働く資格を得た。「大集体工人」（国有企業が経営する下請企業で働く労働者）である彼らは、国有企業で働く「全民工人」に比べれば、賃金や年末の報奨金などで低く抑えられていた。それゆえ彼らは、農民にたいする国家の差別的な政策を完全に払拭した存在ではなかったが、それでも改革・開放が始まったばかりの時期、食うや食わずの生活を送っていた龔家溝村民などとは雲泥の差をもつ生活を送れた。国家の投資を享受する幸運に恵まれた施家溝大隊の中心部住民が、山の奥の龔家溝や新旗に関心を払わなかったのは想像に難くない。

龔家溝村民の熱心な嘆願のかいあって、河北郷政府は施家溝大隊からの分離独立に同意した。彼らの独立への意気込みは、郷政府の同意が得られる以前に、すでに新しい村政府の幹部リストを作成し、来るべき時に備えていたことからもうかがえた。しかし、龔家溝分立直後、村運営の難しさに直面した村幹部たちは指導者の地位を自主的に退かざるをえなかった。龔家溝内部では、新しい指導者を擁立することができず、結局、郷政府が彼らにかわって村幹部を探すことになった。郷政府が目をつけたのがAZである。AZは施家溝に来る前、新賓県の生産大隊で書記を務めた経験もある。郷政府は再三にわたってAZに

龔家溝書記の就任を要請した。

AZ は龔家溝を管理することに魅力をまったく感じず、また工場経営も忙しかったので郷政府の要請を固辞しつつけた。しかし郷政府の説得は執拗に続けられた。「工場の景気はどんどん悪くなっている。ここはいったん郷政府の要請を受けて書記に就任しよう。龔家溝の緊張状態を解決するあいだに、工場経営について何か良い方法が見つかるかもしれない。そうすれば郷政府幹部の面子も立つし、自分も今後の進路について考える時間ができる」。

AZ は書記就任を承諾した。郷政府は AZ 自身に村幹部の選出を任せた。彼は会計として、人民公社時代に一貫して龔家溝の会計を務めた G Z を採用した。G Z の妻は、64 年から 81 年まで施家溝大隊の書記を務めた W C の妹である。その他の幹部は、龔家溝村民の立候補により、彼らが欲する役どころにしたがって役職を与えた。

郷政府が AZ の書記兼村長の就任を公布した翌日、龔家溝の宅地の壁という壁に、「AZ 滾出去！」（AZ は出て行け！）という「大字報」が貼られた。私腹を肥やすのが目的で AZ は書記に就任したのだと非難された。AZ 自身、自分が施家溝の人間であることから、書記就任が本村人の強い反発を招いていることは十分承知していた。AZ はいう。「龔家溝村民は、床板生産を始める以前から、複雑な性格で有名だった。彼らは『挺嘎』（柔和とは正反対の性格で、事あるごとに不満を表明し、みんなが一致協力することを好んで妨げる性格）なんだ」。

AZ や彼の反対者たちは、当時の状況を説明するのに本村人と外村人の対立という図式を好んで用いた。本村人と外村人が機能していることは間違いないが、それは決して利益専有に基づいて形成された排他的関係でないところに龔家溝の特徴がある。当時の本村人／外村人の対立は、以下のことを背景としている。

第一に、反対派の中心人物、ZM（1930 年生まれ）は、中国東北地方に伝わる民間舞踊「秧歌」の同好会を組織し、その「会首」を務めている。秧歌では、きらびやかな衣装を着た老若男女が隊列を組み、銅鑼、唢呐（ラッパ）、太鼓などを吹き鳴らしつつ、踊りながら整然と練り歩く（3）。ZM は、「打頭指揮」を務め、ひとり隊列の前に出てみんなを先導し、踊りの種類やテンポを次々に指示していく。2000 年では総勢 30 名ほどのメンバーを抱え、うち龔家溝村民が 80%ほどである。床板生産が盛んなここ 2、3 年はメンバーも仕事に忙しく、以前のように頻繁に集まって練習をすることはなくなったが、ひと月に数日は村の小学校のグラウンドに集まって踊りや音楽の練習をする。農曆正月（初三、四、五）

が秧歌隊の一番の見せ所であり、稼ぎ所でもある。村、河北郷、順城区の各政府や龔家溝の床板工場に「拜年」に訪れ、踊りを披露する。政府幹部や工場経営者は彼らに 50 元から 200 元のお年玉をプレゼントする。このお金は秧歌隊の衣装や楽器の購入にあてられる。

ZM が会首を務める秧歌隊は、龔家溝「東街」の秧歌隊と呼ばれ、92 年に発足した。実は、この東街秧歌隊発足のいきさつのなかに、AZ との対立の契機が潜んでいる。これは 91 年の龔家溝分立以前の話である。ZM が秧歌隊を設立しようとしていた頃、龔家溝の隣村に住む石場経営者の妻の妹の夫が、同じく龔家溝「西街」の秧歌隊を発足させた。この石場経営者は AZ の親友であり、石場経営者とともに AZ や AZ の妻も西街秧歌隊の中心メンバーであった。秧歌隊を設立し施家溝大隊の批准を得ると、秧歌に必要な楽器購入の費用が支給される。したがって、西街秧歌隊の会首と東街の会首である ZM は、大隊の正式な批准をめぐる相争った。西街の会首には、石場経営者が財政的な援助をおこなった。この石場経営者は、当時の施家溝大隊長と親密な関係にあり、最終的にこの人間関係が決め手となって西街の秧歌隊が東街よりも一足先に批准された。

西街秧歌隊は、大隊と石場経営者の財政的援助により、東街秧歌隊よりもはるかに裕福な活動資金をもった。大隊から楽器の購入費用が支給され、衣装代は石場経営者が援助した。こうなると、もともと ZM の東街秧歌隊のメンバーだった者が、ぞくぞくと西街秧歌隊に参加するようになり、ZM の東街秧歌隊は、まるで「日干し」にあったように活力を失った。西街秧歌隊のメンバーは 100 名を超えたのにたいして、東街秧歌隊は 20 名にも満たなくなった。西街秧歌隊は、農曆正月の拜年に貸切バスに乗って郷、区、市の政府官庁に出向いて秧歌を披露し、政府幹部からお年玉を受け取った。農曆の初五から初十五の 10 日間あまりの拜年で、秧歌隊の一年間の活動に必要な経費がまかなえた。余った分はメンバーで均等に分配し、一日ひとりあたり 10 元から 15 元ほどの小遣いになった。旧正月の初八には、順城区政府で郷対抗の秧歌隊大会が開かれた。西街秧歌隊は河北郷の代表として出場し、90 年と 91 年には AZ と彼の妻が「打頭指揮」し、見事優勝に導いた。

東街秧歌隊の ZM は、西街秧歌隊の大活躍によって完全に面子を潰された。そんな折、AZ は河北郷の任命により龔家溝の書記に就任したのである。ZM の怒りは爆発した。

龔家溝の本村人／外村人関係の背景として、第二点は、老戸としての ZM の存在が考えられる。AZ の書記就任に絶対反対の立場を貫いたのは、ZM の姻戚たちだった。

確かに ZM は経済的に裕福ではない。床板生産などはおこなっておらず、また以前も市の食品工場に務めた（62 年に退職）以外は農業を中心に生活の糧を得ていただけである。

しかし、例えば村民が死亡した場合、その遺族の多くは ZM に頼んで、葬儀や宴会など必要な儀式を執りおこなってもらう。墓の位置なども相談に応じることがある。冠婚葬祭は村民にとってたいへん大切な儀式であるが、ZM はそうした儀式に通曉している。ZM は村民の世話役として人望を集めており、村落生活におけるよき相談者であった。政治や経済領域以外のところで村民との対面関係を築いており、この意味で ZM は民間社会の顔役的存在ともいえる。龔家溝に蓄積された老戸 ZM の姻戚ネットワークが秧歌隊をめぐる対立で排他的に顕在化し、AZ の書記就任に反対する勢力を一気に形成したのだった。

4) 前書記の自己表出的な公共事業運動と外村人ネットワークの利用

AZ は、ZM ら反対派が貼りつけた「大字報」を見て次のように考えた。「私はまだ何も仕事を始めていないし、何もまちがったことをしていない。だから、出て行く理由は何もない。このような大字報は、もっとひどい内容のものを文化大革命のとき経験してきた。龔家溝のは、それらに比べれば何ということもない。私に村から出て行くよう要求するのなら、私は何か事を成し遂げて村民を必ず見返してやろう」。

AZ は村幹部を呼び集め、どのような事業が村民の共同の利益になるのか話し合った。彼らの結論は「要想富先修路」（道路を拡幅、舗装することで経済発展の足掛かりにする）だった。当時、撫順都市部から施家溝を經由して鉄嶺市へと至る県道が開通していたが、龔家溝にとっては集落の横を素通りしていくだけのようなものだった。そこで、集落の入り口でこの県道と直角に交わる全長 1460 メートル、幅 7 メートルの舗装道路を、集落の中心を東西に横断する形で建設することに決めた。

ただし、分離後の龔家溝にはたった 2000 元の予算しかなく、机、いす、紙、筆、墨汁、書類棚を購入した後には、わずか 200 元が手元に残っただけだった。AZ は予算の不足を補うために、新賓県の書記時代や施家溝の工場経営で培ったネットワーク、文化大革命時代に知り合った友人（「下放」によって農村にやって来た「知識青年」たち）などを利用することにした。

まず、撫順市の集団所有企業で幹部を務めていた友人に資金の提供を求めた。当時、国家の農業政策は「以工建農」や「以工哺農」をスローガンに掲げ、郷鎮企業を中心とした非農業部門の利益が同地域の農業部門に投資されることを奨励し、地域内での自足的な投資循環を通じて農業の機械化や経営規模の拡大化をはかっていた【宇野、1994：22】。AZ は国家の農業政策の利用を思いついた。彼は友人に頼んで集団所有工場の予算に「農業支

援金」を計上してもらい、龔家溝の農業振興という名目で1万円（そのうち一割はリベートとして友人に渡す）の資金を獲得した。

撫順市所有の機械工場では、知り合いの幹部に頼んでブルドーザーを安い値段で借り受け、道路をブルドーザーで平らにならす作業に着手した。しかし工事を開始してまもなく、東北地方は記録的な長雨に見舞われた。このとき、道路中央部分の土はブルドーザーによって平らにならし終えていたが、道路の両脇に押しやられた残土はまだ未処理な状態だった。そのまま放置された土が小高く盛り土状態になっていたので、工事前に比べると、道路はかえって凸凹の激しい状態にあった。ひと月にわたる長雨に見舞われると、道路はひどくぬかるみ、村民は家から外に出ることも、外から家に入ることもままならなくなった。

大部分の村民は、道路工事はAZの一存で決定したものと考えていたので、書記にたいする反発は否応なくエスカレートした。村民から浴びせ掛けられた罵詈雑言は辛らつを極めたが、AZの信念に変化はなかった。「言いたいことは今のうちに言っておけばよい。しかし、彼らは将来、きっと私に感謝するはずだ」。

長雨がやむのをまって、AZはすぐさま工事を再開した。市有工場の友人は、AZの置かれた状況に同情し、期限が過ぎた後も引き続きブルドーザーを使用できるようはからった。

舗装工事の困難のひとつに、道路拡幅の問題があった。道路には宅地の塀がばらばらに反り出していたので、広狭が定まらずジグザグに曲がりくねっていた。道路を舗装するには、少なくとも7メートル幅に拡幅しなければ意味がない。しかし、AZへの協力を拒む村民が、宅地の減歩に応じるわけがない。

AZは、ある日の晩、村で一番見栄えのする塀をもつ村民の家をこっそり訪ね、次のように話をもちかけた。「あなたの家の塀は、村のなかで一番立派なものだ。もし、あなたが率先して家の塀を取り壊せば、ほかの村民もあなたに続いて塀を壊さざるをえないだろう。そこで相談だが、明日の朝、みんなの前で自ら塀を取り壊してくれないだろうか。もちろん、私はただでこのお願いをしているわけではない。あなたに、いくばくかの謝礼を差し上げるつもりだ。けれども他の村民たちは、ただで自分の塀を取り壊すことになるだろう」。

翌朝、この村民がみんなの前で塀を取り壊し始めると、他の村民も自主的に自分の塀を取り壊し始めた。薄汚れた自宅の塀に固執すれば、他人の嘲笑を浴び、面子を損なうからである。

拡幅工事が終わると、砂利を敷き詰める作業に着手した。AZには、龔家溝の北隣の黄旗村で石場を経営する友人がいた。秧歌隊と一緒に活動していたあの友人である。彼のと

ころに出向き次のように話した。「きみのところの砂利を、私に供給してくれないだろうか。道路の舗装工事が終われば、見返りとしてきみに宅地を差し上げようと思う。場所は村のなかから自由に選んでくれたらいい」。当時、国家の規定では、こうした土地の使用権を個人に譲渡することは困難だった。しかし一方で、村レベルの基層社会では状況に応じた対応がなされていたのも、珍しいことではなかった。AZ は石場経営者の友人に龔家溝の土地 1 畝（6.7 a）を譲渡することで、1 万元相当の砂利 2000 立方メートルを得た。不足の分 1000 立方メートルは撫順市交通局から数千元で購入した。

AZ は、この友人に頼んで砂利製造場から 2、3 台のダンプカーを借り、龔家溝への砂利運搬を始めた。作業を迅速に進めるため、龔家溝の入り口に村の出納係を立てておき、黄旗からやってきたダンプカーが村の道路に砂利を下ろし、黄旗へと帰っていくたびに、5 元を運転手に手渡させた。運転手は、この 5 元を多く得るために、競い合うようにして龔家溝と黄旗を往復した。たちまち道路のあちこちに砂利の山ができあがった。ダンプカーが激しく往来し砂埃がもうもうと立ち込めるなか、龔家溝村民は目を丸くして砂利の山を見つめた。「AZ はいったいどこからこのように多くの砂利を集めてきたのだろう」。AZ が隣の村から、ほとんどただ同然で砂利を運んできたことなど、村民は知る由もなかったのである。

AZ は砂利運搬の作業に見通しがついたところから、「為我修路」（自分のために道路を修理しよう）と名づけた寄付金募集のキャンペーンを開始した。村は寄付金募集の事務所を設立し、キャンペーンを村民に浸透させるため、村の小学生たちに歌や劇をやらせて宣伝した。また一日に数度、決まった時刻に村の数箇所に取り付けた拡声器を通じて村民の寄付状況を発表した。A さん寄付金 100 元、B さん寄付金 80 元、C さん寄付金 5 元、……。もちろん、わずかな寄付しかしていない村民は、あわてて自分の子どもにお金を持たせ、再び寄付に行かせることになる。キャンペーン当初、ほとんどの村民は 5 元ほどの寄付でも渋っていたのだが、最終的には、どの村民も 4、5 回の寄付を繰り返し、一戸あたりの平均寄付額は 100 元あまりになった。

5) 前書記辞任後の公共事業の低調

以上のような経過をたどって、道路の舗装工事は完成した。外村人である書記が自らの正当性の証をたてるために始めた道路修理だが、そのきっかけがどうであれ、村の舗装道路は後の床板生産発展の重要な礎となった。木材や床板商品を積んだ 6 t トラックが、毎

日 30 台近くも村を出入りできるのは、この舗装道路のおかげである。外地から床板の買い付けにやってきた商人は、各工場の入り口に表示された床板の値段をみて購入するかどうかを決める。したがって、村の舗装道路に面した工場は、舗装道路からはずれた位置にあるその他の工場に比べれば、当然、商談をまとめる機会が多くなる。実際、舗装道路から離れたところに住む村民のなかには、よりよい立地条件を求めて舗装道路に面した土地を借り、床板生産を始める者もいる。借地料は年間で 5000 元から 1 万元と幅があり、路線価格のメカニズムによって借地料が決定されている。また、土地の投機的売買も盛んである。「禁止炒土地！」（土地転がし禁止！）という紙が貼られた電信柱を村のいたるところで見かける。土地の高騰は一部の村民にとって頭の痛い話となっている。

村民生活の浮沈を握る舗装道路であるから、村民は他の土の道路も舗装されるのを切に希望している。しかし、AZ が日本に去ってしまった後、92 年から 2000 年にかけて、彼のようにリーダーシップを発揮して公共事業を起こそうとする者はいない。

AZ にたいする村民の評価は複雑である。一貫して AZ に反対してきた村民は、現在、AZ のおかげで裕福な暮らしができるようになったことを間接的に認めている。また、AZ の後任として村幹部に就任した者は、筆者による聞き取りの際、道路の修理は自分たちの手でおこなったと主張し、AZ の名前を出したがない。例えば、XB 書記は、舗装道路の経費負担について次のように説明した。「豊かになるためには先に道路を修理しなければならない。村政府は募金箱を設置して寄付金を収集した。村幹部は 100 元、党员 50 元、村民は任意であった。総額で 2, 3 万元集まった。舗装工事は郷政府の援助の下、アスファルト、トラック、ブルドーザー、砂利の提供を受けて完成された」。

舗装工事終了の翌年 92 年、AZ は、すでに日本で暮らしていた弟の再三にわたる申し出を受け、家族とともに日本へ移住した。その後 99 年、長男の結婚式をおこなうため、AZ は龔家溝を再訪した。そのとき、彼が龔家溝に抱いた印象は次のようなものであった。「舗装工事が終わった当時、村の入り口に 2 階建ての建物を建てた。2 階は村幹部の事務所、1 階は村民の会議室と交流の場所、また一階のトイレの横には風呂場をつくって老人に無料開放する予定だった。ところがこの建物は、今では売却されてしまって個人の所有だ。また、村の貯水池と周囲の山を利用して、大きなレジャーランドをつくる計画もあった。村には舗装道路ができた。撫順の都市部まで直通になり交通の便もよくなった。多くの都市住民がこの恵まれた自然環境を目当てにやって来る可能性があると考えた。レジャーランドの経営で得た収入は、すべて村幹部の手当てにまわすつもりだった。そうすれば、村

幹部は確かな収入と保険を得ることで、専業の村幹部として村務に専念できるようになると思った。専任幹部がいれば、村民生活も向上するはずだ。しかし、今の龔家溝幹部は、何もやらなかったのだね」。

（３）現書記の個人的資質と村政府

92 年から書記（村長兼任）を務めているのは XB である。XB 書記は、前任の AZ とは異なり、龔家溝の公共事業に関心を示さない。彼の日々の関心は床板工場経営や郷政府との関係に向けられている。

XB 現書記と AZ 前書記の個人的性格が反映された龔家溝の姿は、互いに異なった趣を見せている。2000 年、XB 書記は副郷長との個人的なネットワークを背景に、従来、龔家溝では実施されなかった土地請負費や工場管理費の厳格な徴収に乗り出そうとしている。

2000 年の村の状況を理解するには、XB が書記に就任した 92 年以降の村と村民の関係をみる必要がある。村は村民の生活にほとんど関与せず、村民は畜産や床板生産によって自立的に生活を営んできた。龔家溝では食糧供出や土地請負費が免除され、床板生産が発展した後には特別な課税方式が導入されるなど、村政府が村民生活に関与する機会はほとんどない。村と村民の関係は一貫して希薄であったゆえに、郷政府の勢力を背景にした村政府の新たな負担要求は唐突の感が否めず、村民には納得がいかない。

一方、XB 書記は龔家溝に床板生産を持ち込むことで、村民の生活向上に多大な貢献をしたことも事実である。村民は XB のことを経済発展の創始者と呼んでいる。XB は、龔家溝が経済的に裕福になるにつれて上級政府との関係を築き上げ、現在では撫順市順城区の人民代表にもなった。一般村民からすると、XB は村外社会に顔の利く特別な存在である。

以下では、龔家溝の村財政、納税方法、工業用電気の管理方法、上級政府の龔家溝にたいする優遇策などを紹介し、村政府と村民のルースな関係を明らかにする。そして上級政府の税増収計画（龔家溝の管理強化計画）と XB 書記の個人的資質の関連について述べ、「自己表出的顔役型」村落は、顔役の個人的資質によって方向づけられることを浮き彫りにする。

1) 村財政

【表 4－2】村の主な収入（1992 年～2000 年）

収入項目	内容
元生産大隊所有資産の売却益（94～95 年）	・ 靴生産工場（55 万元）（4）。
AZ が建てた建物	・ 45 万元
招商引資 （土地使用権の売却）	・ 95 年 8 月に国家の土地政策が変更され土地使用権（50 年）の売却が可能になった。96 年に県道沿いの土地約 200 畝の使用権を外村人（都市戸籍者）に売却し、約 200 万元の利益を得た。 ・ 販売価格は 2.5 万元/1 畝（約 6.7a）。そのうち、9000 元は土地使用者であった農民にわたる。残り 14000 元のうち、郷への管理費、区の土地管理局土地証明書手数料負担を差し引いた約 1 万元/畝が村の収入になる。
国道建設（98 年開通）の土地収用にたいする補償金	・ 約 100 万元の収入（約 100 畝の農地、宅地、荒地、山地の収用にたいする補償）。
土地請負費	・ 1 畝年間 5～200 元（畑地：年 25～150 元/畝、荒地：年 5～80 元/畝、水田：年 10 元/畝、山地の果樹園：年 7～10 元/畝）。 ・ 92 年より免除（すなわち実際に徴収が行われたことはない）。 ・ 郷政府の決定により、2001 年から請負費支払いの義務化。
床板工場管理費	・ 1 年間 1000～3000 元。 ・ 92 年より免除（すなわち実際に徴収が行われたことはない）。郷政府の決定により、2001 年から管理費支払いを義務化し、郷政府が村に再分配するシステムへと移行する計画。
工業用電気管理費	・ 管理費徴収は名目だけ。村政府は徴収をおこなわない。 ・ 村が電気を管理していた頃、村民による電気代の滞納や盗電が頻繁に発生した。後に、村の顔役的存在で「土匪性」のある龔家溝村民が電気の管理を引き継ぎ、村は関与しなくなった。
農民負担金 （村保留金）（注）	・ 92 年より「村保留金」は免除（すなわち実際に徴収が行われたことはない）。

（出所）2000 年 7 月、筆者による村会計および村民への聞き取りから。

（注）「村保留金」の内訳は、公共積立金（農業基盤整備費などに充当）、公益金（貧困家庭援助などの費用）、管理費（幹部報酬、一般管理費など）である。

ちなみに農民負担には、大きくわけて次の 4 つのものがある。①公民としての納税：農業税、農業特産税、放牧税、屠殺税、耕地使用税（耕地の転用に課税）、②農業生産者としての売渡し義務（農民は穀物などの主要農産物を、国家の定めた価格、数量にしたがって売渡す義務が課されている）、③集団経済組織の一員としての義務：村保留金（上述）、郷統一企画費（学校運営、計画出産、軍人遺族手当て、民兵訓練、道路の建設修理などの事業費）、農業義務労働（年間 5～10 日程度）、農村義務労働（農業水利基本建設や植林など、年間 10～20 日）、④その他：国家の関係法律に基づく一定の負担（農村教育資金、特定の行政目的のための基金への拠出など）【河原，1999：102－103】。

【表 4－3】村の主な支出（1992 年～2000 年）

支出項目	内容
養老金支給 (1992 年から 2 年間)	・ 合計約 48000 元。 ・ 男性 60 歳以上、女性 55 歳以上の老人に毎月 20 元の養老金を支給。支給対象者は 100 人前後。
村中西部の橋梁修理 (1993 年)	・ 4 万元。
工業用電気敷設 (1996 年)	・ 村負担が約 40 万元、工業用電気を使用する床板工場が 37 万元の負担。 ・ 200 k W から 1000 k W に増量。変圧器の購入、電柱の増加、電線の修理など。
電話線敷設 (1996 年頃)	・ 3 万元。
村幹部の手当て (2000 年)	・ 約 72000 元（年間）。 ・ 村幹部の平均手当て額は 1000 元/月。村幹部は 6 名。

（出所）2000 年 8 月、筆者による村会計への聞き取りから。

龔家溝の主な収入と支出について上の表にまとめた。龔家溝では毎年の定まった収入が存在しない。土地請負費、村管理費、村保留金などは免除されており、村民の上納金が村の財政収入に占める割合は皆無に等しい。村の主な収入源は土地使用权の売却益および国道バイパス建設にともなう土地収用の補償金である。95 年に国家の土地管理が変更されると、96 年、村政府は県道沿いの 200 畝の土地使用权を外村人（都市戸籍者）に売却した。床板生産のブームに乗じて、村政府は 200 万元以上の利益を手にした。

2000 年には村の収入はほとんどなく、村幹部への手当てなどは、かつての土地売却益の蓄えなどから拠出している。村の公共事業への支出は消極的で、工業用電気の容量増設工事以外に目立ったものはない。

2) 工業用電気の管理と村の治安

①工業用電気の管理

一般に中国農村においては、電気の管理は村政府の重要な経営項目のひとつである。村内送電施設の敷設は村政府がおこない、電気管理局への支払いは村政府が村民を代表し、一括して支払う。村政府は村民から電気管理費を徴収するが、そこには村幹部への手当てや報奨金が上乗せされるのが普通である。電気管理の方法は村落ごとにさまざまであり、管理費の設定は任意におこなわれる【張静, 2000 : 70－72】。また、私的企業への警戒心

が強い村では、工業用電気の供給を通じて私的企業家をコントロールする場合が少なくない。

しかし龔家溝は例外である。1996 年、工業用電気の容量拡大のため、村が 40 万元、床板を製造する村民たちが 37 万元を出資し、変圧器や送電施設の工事をおこなったが、その後の電気管理は WX（30 歳前後）個人がおこない、村は関与しない。

工場や床板作業場への送電は村全体の変圧器を経由するが、村全体の電気メーターは WX が管理し、電気代は彼を通じて「撫順市電業局」（電気管理局）に納められる。工業用電気の使用を申請した者は作業場や工場に各自の工業用電気メーターを取り付けることができる。家庭用電気から工業用電気に切り替える場合、工事費用に 1000～2000 元ほど、手続きで 5000 元ほどが必要になる。そのため、資金の少ない小戸では近隣が共同で工業用電気を使用する場合もある。

WX は従業員を雇用しており、メーター、電線、電柱の敷設、電気代の徴収などを業務内容とする。直接、撫順電気管理局に工業用電気の管理を依頼した場合、電気代は単位あたり 0.7 元だが、WX が管理した場合、村民に請求する額は 1.0 元である。WX は電気の管理で利益を得ると同時に、村民にさまざまなサービスを提供している。例えば龔家溝全体の電力が不足する場合は、WX が電気管理局と交渉して増量してもらう。また電圧機の取り付けや電線の修理などは無料である。

以前、龔家溝では盗電や電線の盗難が横行し、停電が頻繁に生じた。その後、WX が電気の管理をおこなうようになってからはなくなった。WX は「土匪性」のある人物で、同時に情に厚い人物だといわれている。経済的に困難な状況にある村民には電気代を強要せず、お金のあるときを待って徴収する。WX は電気の管理とともに床板工場も経営している。WX の父親は、かつて龔家溝で獣医をしていた。畜産が盛んなころは、村民のほとんどが WX の父親の世話になった。現在はすでに引退したが、WX の父親も龔家溝の村民にとっては重要な存在だった。

②村の治安

村政府の消極性は、村の治安活動についてもいえる。龔家溝の経済発展は遼寧省においても有名だが、それゆえに他の地域から龔家溝にやってきて強盗や空き巣をする者が少なくない。また村内には 300～400 人ほどの外村人が部屋を借りて住んでいるが、彼らのなかには空き巣に精を出す者もいるという。1998 年頃、龔家溝の治安はもっとも悪化し、覆面を被った男が一家 4 人を殺害し金品を奪うという事件も起きた。通行する車を強襲する

路上強盗も珍しくはない。夜間、龔家溝に向かう客を乗車拒否するタクシー運転手が多い。旧暦正月（春節）を控えたころなどは、行き先に龔家溝を告げるとタクシーの運転手はまちがいなく嫌な顔をする。

村幹部によれば、民兵が夜の見回りをし、また郷警察の私服警官が村を巡回しているという。しかし村民によれば、むしろ個人で治安活動をおこなうのが実情のようである。大戸のなかには、私的に用心棒を雇うところもある。XB 書記の工場にもそうした用心棒が数人住み着いているという噂を耳にする。小戸など一般の家庭では次のような意見が大半である。「まだ、私の家族は襲われたことがない。家族の誰かが殺されたりした場合には話は別だが、今は取り立てて村に要求するつもりはない。保安は自分たちでやるべきことだと思う。龔家溝では、国も村も干渉しないので村民たちは好きなことができる。商売がこれほど自由にできるところは他にない。中国社会でもっとも幸せな場所とは、都市でも農村でもなく、龔家溝のようにその中間に位置する近郊村だ」。

治安以外では火災への対策も重要な問題である。村には宅地、道路を問わず到る所に木材が積上げられている。火災が発生し類焼することを心配する村民は多い。実際に、年に数件は火災が発生している。火災の原因は乾燥窯からの出火が一番多い。98 年からの 2、3 年、ボイラーの爆発ではすでに 3 人の外村人出稼ぎ者が死亡した。資金不足のため、乾燥窯用に国家の安全基準を満たさない廉価なボイラーを使用する小戸が多いことも、頻発する火災事故の原因である。事態を重く見た区政府は窯設備の改善を村民に勧告しているが、5 万元以上もする新型の窯にほとんどの小戸は投資しようとしない。XB 書記は 2001 年末までには旧来の窯をすべて撤去すると話したが、具体的なアクションを起こす気配はまったくない。

3) 上級政府と龔家溝 ―納税方法と優遇策―

①地方政府による徴税方法

龔家溝では、99 年春より「査驗徴収」とよばれる特別な徴税方法が導入された。99 年以前は郷の税務部門が床板生産をおこなっている各戸に赴き収税していた。この際、多くの床板経営者は実収入よりも少ない金額を申告したり、不景気を口実に納税を逃れようとした。そのため納税額は龔家溝、施家溝、新旗をあわせて 20 万元／年に満たなかった。ところが査驗徴収の導入により、当地区の税收額は 200 万元を越え、龔家溝だけでも 120 万元に達した。

査驗徴収とは、龔家溝から出荷される床板にたいして、一等、二等、三等などの床板の品質にかかわらず、床板の面積に応じて一律に税金を課す方法である。床板 1 m²につき工商管理費 0.4 元、運輸税 0.4 元、国税 0.46 元が課税され、徴収された税金は、国 75.5%、区政府 12.5%、郷政府 12.5%の割合で分配される（5）。それゆえ、高品質で価格の高い床板を製造できる大戸では 10～15%ほどの利潤率を確保できるが、資金や設備をもたない小戸では等外品とよばれる品質の悪い床板しか製造できないため、利潤率は 10%をさらに下回る。

河北郷政府は 99 年 4 月、龔家溝から施家溝を通して市内に通じる県道沿いにサービスセンターを建設した（税金をとるばかりで何もサービスを施さない「サービスセンター」として地元の床板経営者から揶揄されている）。龔家溝地区から床板を輸送するトラックは必ずサービスセンターに立ち寄り、必要な税金を納めなければならない。

②地方政府による優遇策

地方政府は龔家溝や施家溝などの床板生産にたいして優遇政策をとっている。ひとつは「無照経営」であり、工商局で営業許可証を取得しなくても床板の製造ができるように配慮されている。

龔家溝では床板工場の半数を小戸が占め、夫婦の労働力が中心である。彼らの多くは、畜産などで蓄えた自己資金をもとに必要最低限の設備だけを購入している。床板製造を始めてまだ数年だが、小戸のなかには今すぐにでも他の業種に乗り換えようとする者さえいる。乱伐による国内木材供給量の減少、大戸による木材の買占め、国家の森林保護政策強化など、小戸の経営を取巻く状況は年々厳しくなっているからである。小戸は、事業を継続することや生産規模を拡大することには大きな魅力を感じていない。

地方政府の実施する「無照経営」は、流動的な生業を特徴とする当地区の住民から、取れるときに取っておくための収税方法である。農村住民に工商局への登録を義務づけ、書類上の手続きに基づいて徴税するのでは彼らの転業スピードに追いつけない。

税率の抑制は、地方政府が龔家溝地区に施しているもうひとつの優遇政策である。国家の通常の規定では、個人経営工商戸に課せられる税率は 6 % である。例えば大戸の K T（第 5 章で詳述）の場合、年間生産額が 1400 万元であるから、通常の税率だと 84 万元／年の税金が課せられる。ところが実際には 30 万元／年の納税額であった。地方政府は床板生産の利潤率の低さに配慮し、税率を抑制している。仮に、規定どおり 6 %の税率を実施すれば、ほとんどの床板工場は経営が成り立たなくなる。

三つ目の優遇政策として、大戸などに「私営企業」（雇用従業員数が8人以上の企業）としての登録を要求しないことがある。彼らは「个体工商户」（個人企業経営者）として政府登録される。もし私営企業として登録すると、国家の規定に基づき私営企業は政府関係部門とのあいだで帳簿の照合をおこない、納税額を算出しなければならない。しかし床板業界では木材の購入や販売において投機性が強く、その場での現金決済が通常であって、帳簿をつける習慣がない。地方政府が私営企業の登録を要請しないのは、床板経営の実情に即した配慮である。

4) XB 書記の個的資質が反映する龔家溝の政治構造

XB は 1953 年、山東省済南市歷城県党家庄村に生れ、1 歳のとき母親と死別した。1960 年、大躍進の失政と天候不順から大飢饉が発生した。XB 一家は極度の貧困を打開するため、当時、施家溝大隊で書記を務めていた母親の兄を頼って龔家溝にやってきた。60 年から 66 年は施家溝小学校、66 年から 69 年は撫順市第 25 中学校に通い、70 年には施家溝大隊第四生産隊（現在の龔家溝）で農作業に従事した。71 年から 76 年には、新疆ウイグル自治区で人民解放軍 86472 部隊に所属し、気象観測の任務にあたった。74 年に共産党に入党している。

77 年 1 月に復員し撫順に戻った。支給された復員費はわずかに 200 円で生活は困窮を極め、壁の崩れた一間半の「土房」に 2 年間住まなければならなかった(6)。復員後は、撫順市が経営する運送会社で臨時工をした。賃金は日当で 1.96 元だった。3 ヶ月ほどして磁務局前の市場で小商いを始めた。共産党員の営利活動は禁止されていたので、帽子を深くかぶりマスクとサングラスをかけ、人目をはばかりながら商売した。毎朝 4 時に龔家溝の土房を出発し、磁務局の卸売市場で落花生や瓜の種をそれぞれ 25 キロ購入する。その後、野菜の自由市場に出向き販売する。仕入れ値は 2 元/kg、売値は 2.4 元/kg で、一日の利潤はだいたい 18 元ほどだった。4 ヶ月の小商いで手元には 2000 元ほどの蓄えができた。

都市部で 10 年間ほどこのような小商いに従事した後、88 年に 5 匹の羊を購入し、都市住民への羊乳配達を始めた。龔家溝のなかでは一二を争う早さで畜産業を開始した。89 年には乳牛を 1 頭、翌 90 年には 19 匹の羊、9 頭の乳牛を飼育するまでになった。牛乳配達と羊肉販売で得た資金を使って養鶏も始め、最盛期には 1200 羽の鶏を飼育した。91 年以降は過当競争のため、利益がほとんどあがらなくなった。

91 年 10 月から XB が床板の製造を始めたことはすでに第 3 章で述べた。当時、畜産に行き詰まっていた XB は、撫順市内で住宅内装を手がける友人のすすめで床板生産を始めた。設備投資への負担が小さく、熟練技術も必要ないことから、龔家溝村民のあいだに床板生産は瞬く間に広まった。

その後、XB の名声は龔家溝の経済発展とともに撫順市内でも高まった。撫順には、龔家溝地区を含めて 3 ヶ所の床板生産基地がある。開始時期の早い順から龔家溝、新賓県外辺村、撫順県救兵郷となるが、そのうちもっとも規模の大きい救兵郷の床板生産は、XB の助力によるところが大きい。95 年、撫順は記録的な大雨に見舞われて大洪水が発生し、救兵郷の農地は表土が流出して耕作ができなくなった。撫順県政府と救兵郷政府は床板生産基地の建設を決め、XB 書記にアドバイザーになることを求めた。XB は生産設備、木材購入、床板販売などのノウハウを救兵郷住民に伝えた。

92 年に XB は AZ の後を継いで書記に就任した。XB を知る多くの村民によれば、80 年代後半から 90 年代半ばまでの XB は、一般村民の生活にも心を寄せていた。床板産業の発展では、龔家溝住民に気前良く経営ノウハウを伝えた XB の存在が大きい。また、工場経営に失敗して行き場を失った家族にたいして、XB は自分が所有する宅地や工業用電気は無償で貸出している（第 7 章）。龔家溝に移民してきた外村人のなかに生活に困っている者がいれば、農地を特別に分配してやる配慮もあった。また、龔家溝村民は畜産や床板で上級政府に直接納税することに配慮して、国家の規定上、村民にたいして課される負担金や農業税などをすべて免除してきた。

90 年代において、XB の龔家溝の管理方法は村民への積極的非関与であった。村民が各自で生活に責任をもち、村財政の確保については村が独自にやる。土地所有権の売却益は村幹部の懐を潤したに違いない。村民の負担金免除と村財政管理への村民不参加は、一種、暗黙の取引のようなものである。そしてお互いの領域には干渉しない。XB はこのようなルールを村の政治構造として作り上げた。

XB は、経済的な成功を足掛かりにして上級政府とのあいだにネットワークを形成し、撫順市順城区の人民代表にもなった。河北郷の工業部長（兼副郷長）とは親密な関係を築いている。ルーズな村と村民の関係であったが、2000 年、XB は村外社会のネットワークを利用して村民への管理強化を目論み始めた。村書記として上級政府への面子を保つためにも、龔家溝の村政を掌握する必要性を感じているようである。あるいは、土地所有権をほとんど売却しその蓄えも尽きたので、XB は新たな村財源を確保する必要に迫られ、積

極的非関与を特徴とした以前の政治構造を自ら変更しようと試みているとも解釈できる。

村民のなかには、XB が以前と変わってしまったという者もいる。XB は龔家溝の「当家人」から「代理人」になってしまったというのである。あるいはより辛辣に「政府の狗」になったという者もいる。政府幹部や金持ちの電話は取り次ぐが、一般の村民からの電話には居留守を使うようになった。以前はよく村民と麻雀を囲んだのに、最近は政府幹部としか遊ばないなどと、彼の交際の変化を指摘する者もいる。

しかし一方の XB 自身は、AZ 前書記がかつてそうであったように、龔家溝村民の一筋縄では行かない抜け目のなさに辟易している。XB は龔家溝について「貧山惡水出刁民」（土地の貧しいところでは性悪な人間を輩出する）の土地柄だと評している。恐らくは、村民は村民でしたたかに XB 書記や郷政府の出方をさぐりながら、表面的には穏やかに、しかし内実は彼らにたいする新たな負担要求を頑固に拒否しつづけるだろう。

注

（１）「満州移民体験者」の個々によって「生きられた世界」についての質的かつ量的な理解では、【蘭，1994】を参照。

（２）靴製造工場の事業拡大は、結果的に銀行からの借款の増大を招いた。「今、あなたの銀行が追加融資をしてくれなければ、私の工場は必ず倒産し借金の返済はできなくなる。続けて融資が得られるならば、将来、必ず借金を返済することができる」。こう口説き落として重ねた借金は、最高で 80 万元にも達したという。92 年、AZ は経営不振の工場に見切りをつけ、日本にやって来たのだが、2 年後には、当時の借金をすべて返済し終えた。一部分の借金は、工場の機械設備や生産商品、顧客リスト、また、債務、債権、銀行からの借款など、すべてまとめて妻の兄弟に引き渡すことで相殺した。それでも足りない分は、日本の工場で得た賃金でまかなった。

（３）「秧歌」については次の説明を参照。「中国南方の秧歌は、田植えの時に太鼓を鳴らしながら歌をうたう一種の労働歌であるが、北方の秧歌は、こうした稲作文化にかかわる芸能とはまったく起源が異なる。北方の秧歌は、春節（旧正月）から元宵節（小正月）にかけて、通りを練り歩きながら、歌よりも踊ることに重点を置いた芸能である。練り歩いた（過街）あと、広場での集団の踊り（大場）と数人による物語性の強い歌舞（小場）がある。一般に言われる秧歌劇は、この歌劇（小劇）が独立したものである。サーカスのスティルトのように、足に一尺三寸から三尺くらいの木の足をつけて踊る高跷秧歌と木の足をつけ

ない地秧歌に分かれる。その起源は、門付けの厄払いにあるとする説が有力であり、村の廟に礼拝することが芸能の一部に組み込まれている秧歌も報告されている」【牧・松浦・川田，2000：159】。

（4）91年、施家溝大隊は施家溝と龔家溝に分割され、その後、新旗も施家溝から独立し、もともとの施家溝大隊は3つの行政村に分割された。93年から翌年にかけて施家溝、新旗、龔家溝の代表者たちが一同に集まり、元施家溝大隊が所有した3つの工場の土地、建物の分割方法を話し合った。3つの工場の位置は分割後の施家溝に集中していたので、不動産を「属地主義」に基づいて分配した場合、新旗や龔家溝は分け前が得られない。そこで、土地、建物の資産価値を話し合いで評価し、その売却益を3つの行政村が均等に分け合う形で分割した。周知のように、伝統中国の財産相続は、有資格者の男子成員のあいだで徹底的な均分原理に基づいておこなわれる。この均分相続の原理が、施家溝大隊の資産分割においても作用した。ちなみに龔家溝では、施家溝大隊からの分立を「分家」と表現する。

（5）一般的に、1立方メートルの木材から40 m²の床板を加工することができる。黒龍江省、吉林省、ロシア、北朝鮮などで購入された木材は、トラック1台で10立方メートルが運ばれてくる。99年1年間に龔家溝が購入した木材は25万立方メートル、製造された床板は約100万m²、日産で80立方メートルの原材料から4200 m²の床板が生産された。

（6）中国東北地方農村の住居については【聶，1992：21-29】に詳しい。農村住民の住居を観察することで、彼らの生活に関する多くの情報が得られることは言うまでもない。

第5章 経済領域の顔役 —大規模床板工場の経営者—

龔家溝の床板工場は、資産規模が5万元以下の小戸から50万元以上の大戸まで幅広い。経営者は本村人（農村戸籍）と外村人（大部分が都市戸籍）に大別することができるが、大户の約100戸のうち、約70戸が外村人経営者である。そのなかでももっとも規模の大きい床板工場が、本章で紹介する「輝達地板廠」である。

現在、龔家溝地区（施家溝、新旗を含む）の床板生産は不況にさしかかりつつあり、資金、技術、原材料調達の面でさまざまな困難を抱えている。輝達地板廠の大户経営者はこうした状況に危機感を募らせており、窮地打開策として分業に基づいた企業の集団化を考えている。

輝達地板廠は、資産規模、生産設備、企業管理、労働者雇用形態、材料購入、販路、床板商品の種類などで、小戸の床板工場とはかなり異なる。さらに、大户経営者の思考方法は、小戸の農民経営者のあいだに見出すことのできないものがある。

以下では、輝達地板廠経営者へのインタビュー資料をまとめるなかで、外村人であり経済的リーダーであるこの大户経営者が、経済活動を中心にして、いかなる顔役的な役割を龔家溝で果たしているのか分析する。

（1）大户が経営する床板工場

1）経営者の経歴と床板工場への投資

輝達地板廠の経営者KTは1972年に生れた。彼はもともと撫順市新撫区建築会社の運転手だった。車を運転しているとき、かなり深刻な交通事故に巻き込まれ、これをきっかけに運転手の仕事をやめた。

その後、この建築会社が所有する小さな木器廠の請負経営を会社の経理に申し込んだ。この木器廠は、建築会社に提供するための木製ドアと窓枠を生産していたが、利益が上がらずだれも請負経営をしようとしなかった部門である。請負の許可を得ると、KTは建築会社から友人など12人を引き連れ、木器廠を一年ほど経営した。結果は、やはり低収益

なまま芳しくなかった。

KT が龔家溝の情報を耳にしたのはこのときである。彼は、木器廠の請負契約を打ち切ると、すぐに龔家溝で床板製造を始めた。94 年 7 月、22 歳の頃である。まず、龔家溝村民が個人経営していた食品飲料工場の敷地と建物を借りし、床板をつくるための作業場をつくった。また、レンガを組み立てて木材を乾燥させるための窯（土窯）をつくった。土窯では、窯の温度を上げるのに柴や木片を燃料として使うので、温度を適度に保つのが難しい。40%ほどの木材が乾燥後に湾曲して使い物にならなくなる。KT は、現在では機械製蒸気窯を 7 つ所有するが、床板生産を始めた頃は、龔家溝の農民経営者と同様、初歩的な生産設備から出発した。

床板生産を始めて 1 年半、経営は良好だった。95 年 8 月以降、国家の土地政策が変更になり、龔家溝は農地の使用权（50 年間）を村内外に販売し始めた。価格は 2.5 万元／畝（1 畝＝6.7a）である。96 年、KT は蓄えた資金を元手にして、県道沿いの農地を 5 畝購入し、新しい床板工場の建設を終えた。98 年、工場敷地裏側のトゥモロコシ畑 6 畝を購入、さらに 2000 年は同じくトゥモロコシ畑 17 畝を購入した。

KT は積極的に設備投資をおこなっている。93 年の生産開始以来、2000 年にいたるまで、すでに 4 度生産設備の入れ替えをおこなった。初期の生産設備では、「横材機」（あるいは「双端銑機」と呼ぶ。床板の両端に凸凹の突起と溝を加工する機械）がなかった。横材機は国産のものでも 9 万元と高く、当時の龔家溝床板経営者の平均年収に相当する額だった。95 年、撫順市新賓県の機械工場が国産の横材機を改良し、2.5 万元で売り出した。KT は一台を購入したが、当時の龔家溝では彼以外に所有する者はいなかった。

「四面鉋」（あるいは「大鉋」と呼ぶ。床板の裏表を鉋がけし、裏面に溝を掘る機械）は、ドイツ製で 25 万元するものを大連で購入した。これは、1 分間に 180 メートルの木材を処理することができ、「集成材」（船、家具、机などの大張の木板）を高速で加工する。さらに台湾製「砂光機」（四面鉋で加工した後、床板に磨きをかける機械）は 2.7 万元した。またワックス塗装機が 17 台で 67 万元、それぞれ 1998 年末に大連で購入している。乾燥窯は 7 つ所有している。そのうち 4 つは 18 立方メートルの床板を乾燥することができ全部で 11 万元、他の 3 つは 30 立方メートルで 18.5 万元、ともに遼寧省産である。2000 年 4 月に北京で開かれた国際博覧会では、台湾製の横材機（17 万元）を購入した。

KT は次のようにいう。「私の工場は、蓄積と投資の自己決断を通じて、段階的に徐々に発展してきた。もし何らかの方面から経営に関するサポートやアドバイスがあれば、ひと

っ飛びに目標を達成できたと思う。100 万元以上もの不必要な重複投資は免れたはずだ」。

積極的な設備投資の結果、輝達地板廠の規模は龔家溝において群を抜いている。年間生産額は 1300 万～1400 万元に達する。利潤率は 10～15%ほど、納税額は年間 30 万元あまりである。ちなみに龔家溝全体では床板工場数約 260 戸、納税総額は約 120 万元だった（2000 年）。そのなかには、資産規模が 50 万元を超え、大戸と呼ばれる工場が 100 戸ほど存在する。しかし、輝達地板廠ひとつで村全体の納税額の 25%を占めている。

2) 大戸の業務内容と龔家溝の床板生産への貢献

大戸と小戸の相違点は業務内容においても歴然としている。KT は 3 人の木材買付け担当者を雇用している。彼らは専属的に契約している三ヶ所の製材所（吉林省 1、黒龍江省 2）で、木材の品質検査と買付けをおこなう。工場の注文した型に製材されているかをチェックした後、製材所の者が龔家溝の工場まで木材を運送してくる。

床板の販路でも、取次販売する業者は固定されている。主な所在地は、遼寧省瀋陽、江蘇省南京市、安徽省淮北市、山東省東營、山東省済南、浙江省寧波などである。

ワックス塗装は、輝達地板廠のもっとも大きなセールスポイントである。龔家溝では輝達地板廠以外にワックス塗装の専門設備を備えた工場はひとつしかない。当地区でワックス塗装を希望する床板工場にたいして、「滾漆」13.5 元/m²、「淋漆」18 元/m²でサービスを提供している。KT は、床板の塗装を申し込んできた床板工場にたいしては取次販売業者を紹介し、できるだけ良い値段で販売できるよう助力する。換言すれば、龔家溝の他の床板工場で加工された床板は、いったん輝達地板廠でワックス塗装されると、その床板は輝達地板廠の商標で固定の取次販売業者に売却されることになる。

輝達地板廠では床板の品質管理が厳格になされている。ワックス塗装前に床板の材質や加工の精度がチェックされ、水準に満たないものはもとの床板工場に返却される。KT は、もし品質管理をしなければ、輝達地板廠、取次販売業者、床板工場の三者に損失を与えると考えている。

輝達地板廠とその他の龔家溝地区の床板工場とは、相互に利益をもたらす関係である。ワックス塗装された床板は高価な値段で取引され、龔家溝製床板の全体的なイメージアップにつながる。輝達地板廠からいえば、工場の 4 つの生産ライン（ひとつは 1500 m²/12 時間）すべてを使って生産する床板は、5 つあるワックス塗装生産ラインのうち、ひとつを稼働させる生産量にすぎない。ワックス塗装の生産効率は、龔家溝地区のワックス塗装

にたいする需要に依存している。

市場でのワックス塗装床板の販売競争は激しい。江蘇省、安徽省、上海などではすでに10年ほど前から生産を開始している。しかしKTによると、他地域での床板は輝達地板廠ほどには利益があがっていないという。その理由は、これらワックス塗装工場が龔家溝のような大きな床板生産基地を背景にもっていないからである。

3) 大戸と政府の関係

KTは政府との関係について多くを語らないが、例えば龔家溝村政府が招商による土地販売を決定した際、最初にこの情報に接するのはKTなどの大戸である。その他、郷政府による地域産業育成のための補助金や融資斡旋などは大戸が優先的な恩恵を享受しており、小戸には情報が伝わらない。経済的な力をつけると政治的なネットワークもおのずと開けてくる。

KTはいう。「私はまだ若い。政府や友人のところに行くと、みんないろいろと面倒をみってくれる。人間関係は企業の発展にとってたいへん重要な役割を果たす。自らの宣伝だけでは不十分だ。ここ数年、民営企業の発展が著しく、それにともない、民営企業家の政治的地位も徐々に上昇している。撫順市政府は私を政治協商委員に選出した。また、市は工商連に働きかけて企業協会を設立し、私は木製品加工企業協会（木業商会）の副会長に就任した。会員は1000人、会長1人、副会長7人で、会長および副会長は各郷を代表して選ばれる。私は施家溝、龔家溝、新旗など河北郷地区を代表し、会員は200人あまりいる。私は頻繁に区や郷の政府を訪れ、区長や郷長に意見を述べている。政治協商委員であることは、私にとって助けになる。以前、国有企業の一介の運転手に過ぎなかったのに、今では政府幹部によって尊重され、榮譽あることだと思う。手痛い失敗をしたときなど、自分は周囲によって能力ある人間だと評価されていることを思い出し、元気を奮いだす。政府もたいへん心得ており、私が困難な状況にあるとき、いろいろなかたちで援助してくれる」。

「木業商会では、経営上の困難や発展の方向などについて議論する。実際には、宴会をひらいて酒を飲むことが多いが。それでも、こうやってみんなが集まることで会員相互の交流がおこなわれ、ばらばらの個人経営者たちに集団の一体感を提供することができる。とくに、もともと公有企業で働いていた床板経営者にとっては、集団によって労わられていると感じることができるので有意義だと思う。確かに国有企業の給料は安い、旅行や晩餐会などが頻繁に催されて、とても楽しい。私もそうだったが、国有企業で仕事がなく

なり外でいろいろやるようになると、自分は社会でたったひとりだという孤独感に苛まれることがよくある。商会在できた後、個人経営者は帰属感を得ることができたと思う」。

河北郷で新たな政策が実施される前には、政府幹部が必ず木業商会在やってきて会員たちに説明をおこない了承を求めるという。例えば、第4章で紹介したように、99年より「査驗徴収」とよばれる徴税方法が当地区に導入された。そのときも郷政府幹部は入れ替わり立ち代りやって来て、会員への事情説明をおこなった。

当時の村の様子について、KTは次のように話している。「査驗徴収が導入されると、床板購入者は、トラックで村を立ち去る前に、必ず施家溝の入り口にあるサービスセンターに立ち寄り納税することが義務づけられた。床板購入業者は床板を購入するとき、あらかじめ課税分を差し引いた金額を床板工場に支払う。その後、床板購入者は床板生産者にかわってサービスセンターに立ち寄り、国税や工商管理費を納める。また、床板の購入者は運輸税を自己負担しなければならない。この納税方式が始まったばかりのとき、当地区の工場経営者は喧しく不満を述べた。『自分たちの工場にやって来て徴収したらすむことだ。サービスセンターなんて必要ない！』。しかし政府の考えはちがっていた。『新税法の導入とともに、政府は床板に課す税率を1.26元/m²と低く抑えることで、当地区への優遇政策をすでに実施している。新税法を理解してくれなくては困る！』。それでも床板生産者は政府のいうことにうなずこうとしない。そこで郷政府幹部はこういった。『我々が徴収する税金は、あなたたちの金ではないだろう。床板購入者がサービスセンターに立ち寄って払うのだから。あなたたちは床板を販売するとき、彼らとうまく相談すればそれですむ話だ！』。

「査驗徴収方式が導入されると、以前、当地区での税収は20万元足らずだったが、99年以降は200万元以上になった。政府の意図は、もちろん、以前のこの地区にたいする経済的な軽視を改めることにある」。

「こうした税法の導入は典型的な地方政策だ。当地区の経営者たちは、地方政府の採用した新しい徴税方法にたいして懐疑の念を抱いていた。政府は、査驗徴収方式が国家の法律に違反しないことを木業商会在説明した。残念ながら私たちは、地方政府に反対する理由をなくしてしまった。「査驗徴収法」では、それが適用される範囲として、集市など経営時期や経営者の定まらない分野をあげており、当地区での課税にも適用しうるといなのだ」。

ここ数年、地方政府は龔家溝地区の床板産業を重要な財源と見なし始めた。とくに大戸にたいする寄付金や手数料などの要求は増加しつつある。各地方政府レベルや各部門間の関係が制度化されておらず、郷政府、区政府の工商局、税務局などによる乱脈徴収がたえ

ない。例えば 2000 年からは、個体工商戸登録の際、消防部門での審査が必要になった。しかし審査とはいっても、彼らは実際に床板工場を検査することはなく、ただ、消火器 10 個と火災警報機 1 セット（1000 元）の購入を義務づけるだけである。

また、龔家溝地区の財源を排他的に専有しようとする政府の動きも見える。例えば、区や郷の政府は、市の技術管理局が当地区で床板工場から上納金を得ることを阻止している。

（2）大戸が雇用する従業員

1）専門職能者と単純労働者

2000 年、KT は労働者 67 名を専属従業員として雇用している。そのなかには会計、保管、生産、木材買付け担当者など 12 名の管理職を含んでいる。

専門職能をもった管理職者の調達先はふたつある。第一に、家族からの調達である。KT の兄は、加工工程でもっとも重要なワックス塗装を管理している。彼は大学で企業管理を専攻し、卒業後は撫順市磁務局に配属された国有部門のエリートであったが、99 年に退職して弟の工場にやってきた。今では KT の経営を支える右腕的存在である。

KT の両親は、以前、国有の建築企業に勤めていたが今は退職して KT の経営を助けている。父親は、かつての職場の関係を生かし、工場施設建設などで便宜を提供した。母親は会計部門で働いた経験を生かし、年末の利潤を計上した後、従業員の給料額を決定する。

（特筆すべきは、92 年、KT が自動車の運転手をやめて木器廠の請負経営を始めたとき、母親が彼に 7 万元を融資したことである。これが初期資本となって、KT のその後の事業展開に弾みをつけた）。

第二の専門職能者の調達先は、撫順市の公有企業不振によって形成された地域労働市場である。公有企業の倒産、操業停止、営業不振による給与大幅カットや不払いなどが原因で労働力の流動が生じ、地域労働市場の形成を支えている。KT の兄も、このケースに該当する。ここ 4 年間、KT はこの地域労働市場から労働力を調達することが多い。例えば撫順市撫順県木材加工工場（郷鎮企業）の会計や木材買付け担当者たちは、企業が倒産した後に輝達地板廠に移り、引き続きその職能を生かした業務を担っている。経理や保管を担当している者も、もともとはパワーシャベル製造国有企業（撫順市挖掘機廠）、あるいは撫順県李家郷経営の木材加工工場などで会計を務めていた。

専門管理職の 12 名を除く残り 55 名の単純労働者は、その 80% が工場の門に貼り出し

た求人広告をみてやってきた。龔家溝一帯はそれ自身が巨大な労働市場を形成している。特に、79年、施家溝大隊に建設された撫順市挖掘機廠の経営不振が労働力の移動を活発にした。この国有企業は、92年時で従業員数約6500人、うち500名ほどの技術者を抱える大所帯であった。しかし現在では、借款取り立てへの対応以外に仕事がない。従業員は、公有企業独特の制度である「停薪留職」の状態にある。すなわち、給料の支払いはストップされているが職籍は留保したままの休職状態である。撫順では彼らのことを「放暇人員」と呼ぶ。操業が開始されれば、職籍のある国有企業にもどることができる。しかし現在は不景気なので、せいぜい月300～400元ほどの賃金しか得られない。それゆえ彼らのほとんどが復職を望んでいない。むしろ、将来、国有企業が本格的に景気回復するのを待ち、職籍を保持したまま、景気のいい民营企业で働くことを望んでいる。KTの工場で働く単純労働者は、このような国有企業の放暇人員が全体の40%を占めている。

放暇人員は輝達地板廠では平均1000元／月の賃金を得ている（KTの月給は5000元だが実際には数万元だろう。ちなみに龔家溝の小戸経営者は500元～2000元ほどである）。国有企業の職籍を持つ彼らは、当然に都市戸籍である。

KTは放暇人員に限らず一般の単純労働者を採用するにあたっては、次のような方法をとっている。現場での試用期間を一週間設け、その後、求職者との話し合いをおこない、双方条件の合意に達すれば半年間の労働契約を結ぶ。その際、被雇用者は、「押金」（保証金）として300元をKTに預けなければならない。一般的に当地方では1000～2000元が保証金の相場なので、KTが預かるものは比較的小額である。押金は、被雇用者の「跳巢」（被雇用者が他の工場の好条件をみて雇用者には告げずに密かに転職を決め、しかも仕事の上で蓄積してきた技術や情報を新しい職場に持ち逃げしてしまうこと）を防ぐためにおこなわれる。

輝達地板廠で働く単純労働者のうち、放暇人員以外では農民が多く、全体の60%を占める。彼らのうち3分の2は、河北郷の隣にある黄旗郷や大柳郷などに住む農民である。施家溝、龔家溝、新旗など当地区の村では、ほとんどの農民が既に自ら床板工場を営んでいるので、被雇用者となって安い賃金で働こうとする者は少ない。

地元以外では、四川省からやってきた農民たちがいる。彼らは、かつてKTが建築会社の木器廠を請負経営したときに、建築会社から引き抜いた12人のうちの6人である。彼らは、KTが床板製造を始めた94年7月から2000年現在まで、一貫してKTの下で働いてきた。

管理職を含めた従業員全体の平均賃金は 1150 元／月である。会計など専門的な職能が必要とされる管理職には 3000～4000 元の固定給が支払われている。単純労働者の賃金は出来高払いだが、仕事内容によって単価に差がある。横材、大砲、ワックス塗装機などを操作する労働者は、月平均収入が 1000 元を超える。トラックあるいは乾燥窯への床板の積み下ろしなどでも 1000 元近くの賃金を得られる。乾燥窯の火力調整の作業にたいする賃金をもっとも低く、月平均で 450 元ほどである。労働は一日三交代制でおこなわれている。

2) 大戸の単純労働者にたいするイメージ

輝達地板廠では、単純労働者は 3 種類に大別できる。国有企業に職籍をもつ放暇人員、龔家溝近隣の農民、四川省の農民であった。このなかでも KT の放暇人員にたいする見方は、少々厳しいものであった。KT は次のように言う。「基本的に仕事は肉体労働で頭を使う必要のない単純な反復作業だ。しかし放暇人員は怠惰な性格が強い。例えば 5 人でグループワークをしているとき、彼らのうちのひとりが休息をとれば、他の 4 人もすぐさま休憩に入る。たとえ出来高払いの賃金であっても、あるいはひとつの工程を請負させたとしても、彼らにとっては重要なことではない。彼らをもっとも注意を払うのは、いかにして仕事で疲れないようにするかということだ。ところが、工場でなにか催しものをおこなうと、彼らの活発なことといったら表現のしようがない」。

一方、「民工」（農民労働者）について、KT は高い評価を与えている。「民工はそうした催しものがあっても参加しようとはしない。民工の毎日は、飯を食って仕事をするというものだ。消費について、例えば放暇人員はうまいものを食べ、着替えの服を買い求める。一方、民工は、体を露にせず身にまとうものがあればそれでよいと考える。現在、私のもとには 6 人の四川人が働いている。山峽北辺の山峽新村という村から出稼ぎにきている。彼らはみな 10 万元ほどの蓄えがあるが、外見だけをみればそのような金をもっているとは思えない。99 年、彼らは資金を集め、故郷に帰ってホテルの経営を始める計画をもっていた。私のところにもやってきて出資を募ってきた。私は彼らのために市場を分析し、まだ条件は熟していないと言った。彼らも私の言葉に納得し、現在でもまだこの工場で働いている。しかしきっと来年にはみな四川に帰るだろう。他人のために一生働くことなど、だれも望まないことだからね。彼らは自分で着る服や食べ物には頓着しないが、みな故郷に二階建てのマイホームを建てている。四川人というのは克己心が強く独立心も旺盛で、

そのため共同経営などにはあまり向いていないと思われる」。

農民労働者の高評価にひきかえ、放浪人員へのイメージは悪い。こうしたイメージはKTだけのものではない。他の民営企業経営者は撫順の状況について、次のように表現している。「国有企業は「大鍋飯」に依存する労働者によって喰い物にされ倒れてしまった。それにともない「大鍋飯」も消失した。この国有企業の労働者たちは今、私の経営する民営工場で働き始めた。すると、なくなったはずの「大鍋飯」がいつのまにかここで姿を現し、今まさに私の工場を喰い物にしようとしている！」。

(3) 大戸の危機感

1) 小戸にたいする印象

KTは龔家溝の床板生産の実情について、次のように話した。「龔家溝の床板生産はすでに9年の歳月を経ているが、未だに生産規模の拡大ができず、小戸の生産に留まっている。撫順では総勢2000戸あまりの床板工場が存在する。龔家溝、施家溝、新旗だけでも400戸ほどになるが、どれも総じて規模が小さく家族経営だ。すでに9年間も床板を生産しているのだから、当然、当地区の床板は全国的なブランドとして名を馳せていてもよさそうなものだ。実際、この床板は有名なことは有名だが、たいへん残念なことに、それは品質が悪いということで全国的に有名になってしまった。現在は、市場は大きいですが床板の価格は低い。市場が大きいという意味は、床板を生産する家庭がとても多いということだ。しかし、生産者の数が無数に増えていくことは発展の方向とはいえない。国家は毎年新しい法律を公布して森林の乱伐採を禁止し、木材資源の保護に乗り出している。しかし、ほとんどの経営者は、木材を購入してもっとも簡単な加工だけを施すと、それをたいへん安い値段で売ってしまう。貴重な自然資源を安い金に替えてしまうのは貧しい国のすることだ。現在、私の工場では中級の木材を使用している。本当に高級な木材は何の加工も施されず、そのまま日本やアメリカなどに輸出される。先進国で製造された高級床板はその一部が中国にも輸出され、上海や広州などに住む金持ちが購入する」。

KTは、当地区のほとんどすべての床板工場が設備投資をおこなわず、自然資源浪費で低利潤型のままだという。結果的に、生産性や技術水準悪化の悪循環に陥っている。そうした袋小路に入りつつある床板生産について、彼自身は次のことを原因として考えている。

「龔家溝、施家溝、新旗の400人にもものぼる経営者は、企業家として市場の分析を十分

におこなうことなど、一切ない。彼らのなかで一番多いのは当地の農民だ。あるいは国有企業を休職している者も多い。この地の農民は以前、豚や牛の畜産をしていた。今は工場の経営者になったので、もうそれだけで満足している。彼らが床板生産を始めた理由は自分や家族を養うためであり、市場や資源などには関心がない。床板は金儲けの手段に過ぎず、床板工場をひとつの企業に育て上げることなど念頭にはない。木材を探し回って購入し、トラック一台分でどれだけの金が稼げるかということだけ四六時中考えている。その場に現金収入があれば、それで満足だ。この地区の床板がますます評判が悪くなり、全く売れなくなってしまうても、彼らにとっては先のことなど関心がないし、もちろん地区全体の利益なんてどうでもよい。床板が売れなくなれば、また別の金儲けの手段を考えるだけなのだ」。

KT は、200 万元以上の設備投資をおこなってきた。したがって、今こそ多くのリターンを期待している。しかし小戸が製造した粗放な床板が龔家溝の評判を貶め、KT の願いを踏みにじろうとしている。

2) 企業集団化への期待

KT は龔家溝の床板生産についてかなりの危機感を抱いている。彼はいう。「現在、自分の工場では先進的な外国製設備を使用しており、撫順市全体でもっとも高いレベルにある。しかし、全国市場と比較すると、先進的な家具製造工場などでは同様の設備をすでに 10 年前から使用していた。10 年前といえば、この地方ではレンガで組み立てた窯など、まだ土着の設備を使っていたときだ。私たちがつくる床板が 50 元/㎡ほどの利益であったころ、他の先進的な地域では 100~150 元/㎡もの利益をあげていた。現在、私たちがやっと輸入設備を使うようになった時、床板市場の景気はすでに後退しつつある」。

現在、龔家溝の床板生産が芳しくないのは、例えば初期段階での資本蓄積と設備投資において、特に華南地方の企業に水をあけられてしまったことが原因だという。「現在、私の工場で輸入設備を使って生産する床板の価格は国産品価格だ。つまり、国内消費者向けに設定した価格であり、また不景気も手伝って値段が安い。反対に生産設備は競争力をつけるために輸入品を購入したのでコストが高くついた。福建省や広東省など華南地方にも床板工場が多くある。国有企業など集団経済の恩恵にほとんどあずからなかった彼らは、改革・開放後、いち早く民営の事業を開始した。床板生産を始めた 90 年代初頭、彼らはすでに一定程度の資本や技術をもっていた。撫順のほとんどの工場がそうであったような、

家族の労働力に依存し、宅地に作業場をこしらえただけの個人経営工場とは、ずいぶんレベルが違った」。

撫順の床板生産は、開始早々、厳しい条件下に置かれてきた。しかし、それでも龔家溝の零細な経営者たちは、ここ最近まで大きな利益を得ることができた。「華南の床板工場は木材供給地である東北地方からたいへん遠く、管理上の困難を抱えていた。木材の購入で契約を交わした東北地方の購買員は、華南の工場にたいして常に水増し請求をした。二割増、三割増などは普通である。地理的な点からいうと、木材供給地に近い撫順は有利な条件にあった。経営者は自ら山地に出かけて直接木材を買い付けるので、床板の価格を安く抑えることができる。撫順の廉価な床板は、徐々に全国の市場に浸透していった。床板販売業者の多くが撫順の安価な床板に切り替えたことで、それまで好調だった華南の床板工場は 96 年から 98 年にかけて倒産が相次いだ」。

「ここ 2、3 年、撫順など東北地方の質の悪い床板が全国市場を席卷したが、安いものが必ずしも良いわけではないことを消費者はだんだんとわかってきた。現在ではむしろ、木目の美しい高級床板が消費者に好まれている。嗜好の変化にともなって、最近、華南の床板産業が息を吹き返してきた。さらには、四川省や雲南省で大規模な床板工場が操業を開始した。彼らが生産する床板は合成処理を施して品質を高めた木材を使用しており、高級床板と並んで、市場の主流を形成しつつある。彼らはもともと木材の一大供給地だったのだが、木材価格の下落に直面し、一方、床板生産の好況を目の当たりにして、彼ら自身も床板を加工製造するようになった。市場の新しい動向によって、99 年 2000 年の両年、龔家溝や施家溝など当地区の床板生産は存続の危機に立たされている」。

KT は、床板生産の不景気を打開するため、ひとつは、経験と資金の豊富な人材が龔家溝にやって来て事業をはじめることには期待をかけている。「当地区では、本当に企業を起こしたいという人が少ない。農民経営者は発展への意欲がないから現状にすぐ満足してしまう。他の地域で事業を起こした経験があり、その後、龔家溝にやって来た人は数えるほどしかない。例えば、「広龍地板廠」や「広義地板廠」の経営者は以前、他の地域で企業を経営しており、龔家溝に来るまでにすでに数百万元の資金を蓄積していた。彼らが龔家溝に来たのは床板でさらなる発展を目論んでのことだ。こういう人材が龔家溝に多く集まれば、相乗効果が生じて当地区の床板産業も好転するはずだ」。

もうひとつ彼が考えている打開策は、分業に基づく床板工場の集団化であった。「撫順は床板の産地として有名だが、個々の企業で有名なものはひとつもない。木材購入、製造、

販売までを一つの家庭ですべてやってしまう「小而全」の方式が中心であり、豊富な資金力をバックに大規模化したような工場がほとんどない。けれども、もし、当地区の経営者が連合してひとつの集団を形成できるならば、外部との市場競争にも耐えることができるだろう。例えば、すでに先進の生産設備を備えたもっとも規模の大きい二、三の大戸が、木材の加工に責任をもつ。家族経営の小戸には、黒龍江省や吉林省、あるいはロシア、北朝鮮に行って木材の買付けをしてもらう。木材の乾燥も小戸が受け持つ。床板の販売は比較的規模の大きい大口にってもらう。すなわち分業に基づいた合作であり、それぞれの得意分野に応じて作業を専門化すれば資金面での融通も利くようになり生産性も改善される。もちろん集団化した後、床板を統一ブランド名で販売することがたいへん肝要である」。

「ここは郷政府に指導力を発揮してもらいたい。郷長も副郷長も集団化することに同意している。98年から集団化に向けた作業が開始されているが、計画の実行は遅々として進まない。いずれにしても、経営者たちの力だけでは先が見えてこない。現状は、各自それぞれが経営者となって自己管理、自己経営をおこなうだけで満足している。このような意識では、この先10年後、1元の金を10元に増やすことさえ難しいだろう。しかし集団化すれば1000万元の金を1億元にすることは簡単なのだ。広東省順徳市で冷蔵庫やクーラーを製造する民営企業は集団化に成功し、1年の生産額が数百億元にもなっている。集団化に果たした政府の指導的役割は大きい」。

KTはこの先2年を床板生産のくぎりの年として考えている。「仮にこの2年間で集団化が実行されず、また高級床板の生産が発展しなければ、私は迅速に資本蓄積を完成させた後、他の業種に鞍替えしようと考えている。集団化が実現されない、すなわち当地区で統一されたブランド名が確立されないならば、必ずこの2年で、厳しい市場競争によって淘汰されてしまうだろう。たとえ高級床板の生産が好調でも、東北地方の木材資源はまもなく消滅する。華南との競争でかろうじて有利に立てた時期があったのは、すべて木材供給地に近いという地理的条件があったからだ。木材は海外から輸入することもできる。しかしインドネシア、マレーシア、オーストラリアなど木材輸出国でも政府の管理が年々厳しくなっている。現在、木材供給の潜在能力を秘めているのは唯一ロシアだろう。私たちが中国北辺のロシア国境沿いまで行くと、中国と対照的な山の風景に驚いてしまう。中国側の山には森林がほとんど残っていないが、ロシアの森林は繁茂している。しかし現段階では、ロシアの森林を伐採するには多大なコストが必要だ。林道の整備、伐採所の施設建設、国家間の通商手続きなど、解決すべき問題が多い。もちろん私たち民営企業の経営者がロ

シアと交渉したところで、大きな進展にはならない。中国東北地方の林業局や林管局などがロシア産木材の輸入合作で話を進めてもらいたい。いずれにせよ、木材がなくなれば、私の床板工場は撫順の地の利を生かして化学工場に鞍替えするしかない」。

現在、河北郷政府は KT など大戸の意見を参考に、木業商会を媒介にして龔家溝地区の企業集団化に取り組んでいる。2000 年では外村人の大戸ばかり 30 戸が参加の意思を持っているが、具体的な組織化に到っていないのが現状である。

新政策導入の際、郷政府は商会の会員に事前に相談し了解を求める。郷政府は経済的な力をもつ商会の会員には一定の配慮を見せている。企業集団化では資産規模が 50 万元以上の大戸を中心に話を進めようとしており、小戸はこうした動向に取り残されている。企業集団化の行方によっては、龔家溝のほとんどの小戸が淘汰される可能性もある。

第6章 経済的顔役の周縁にいる者たち

—小規模床板工場の経営者—

龔家溝の床板工場は260戸ほどあるが、そのうち約150戸が資産規模5万～20万元の小戸である。そして小戸経営者のほとんどが龔家溝に戸籍をもつ本村人である。前章では大戸の床板工場を紹介したが、資金、生産設備、労働者雇用形態、材料購入、販路などにおいて大戸と小戸は異なる点が多い。本章では、小戸が経営する床板工場の状況を整理し、大戸と小戸の基本的な相違点を明らかにしておく。

(1) 小戸の生産設備と製造工程

1) 生産設備

床板の製造を始める際、生産設備を整え、第一回目の木材買付けから床板が作られるまでに要する費用は、一般的に次のようなものである。1) 宅地のなかに床板加工をおこなうための屋根つき作業場を建てる。建築費は数千元。2) 乾燥窯(土窯)の建築に約4000元。内訳はレンガなどの材料費3000元、人件費1000元。3) 工業用電気への増設工事に約3000元。内訳は電柱2本で400元、電気メーター525元、電線1100元。近所で工業用電気を共同使用し、設備投資を節約する小戸も少なくない。4) 木材(板材)は、近いところで吉林省と遼寧省の省境一帯、遠方では黒龍江省のロシア国境付近まで買付けに行く。旅費は前者で300元、後方で1000元ほど。遼寧省や吉林省の木材は品質が悪く値段が安いので、小戸が多く購入する。黒龍江省は大戸が多い。5) 製材所に支払う木材の手付金500元。6) 約20立方メートルの中等木材の代金20000元。7) 木材購入先で手配した輸送用トラック(6t)2台。吉林省から龔家溝までの輸送費1200元。8) 床板加工費3000元、などである。

このように、基本的な生産設備、木材の買付け、床板加工などには3万元ほどの資金が必要になる。3万元は、撫順市内の国有企業や地方政府で働いた場合、2年分の賃金に相当する(2000年当時)。一般的に龔家溝の小戸はこうした資金について、一部は自己資金、その他は親戚友人から年利2分(場合によっては3分)の借金で調達している。床板生産

は 95 年以降に本格化した。それに先立つ十数年間、小戸たちは少しずつ資金を蓄積してきた。80 年代は撫順の都市部で小商い、機械修理、輸送業、肉体労働など、90 年代前半は畜産業などに従事した。

大戸と小戸の事業展開には大きな差異がみられる。床板生産の開始時期、資金規模、個人的ネットワークの質的相異などが顕著である。前章の輝達地板廠の場合、積極的な設備投資を続けることができた。工作機械、蒸気窯、工場敷地拡張などにつぎ込まれた資金は 100 万元以上になる。その結果、2000 年の年間純利益は約 140 万元に達した。輝達地板廠が拡大再生産に成功した要因は複数存在する。

第一に、家族の援助があげられる。KT の母親は無利子で 7 万元の融資をおこない、工場の初期資本形成に大きな役割を果たした。また KT の両親は建築部門の元国有企業幹部であり、工場施設の建設に際してさまざまな便宜をはかった。さらには、大学で経営学を専攻し、国有企業に勤めた経験のある KT の兄が工場経営をサポートしている。家族を通じた国有セクターとの関係が成功要因として働いている。

第二に、94 年 7 月に床板製造を始めたとき、すでに 6 人の固定した従業員（四川省出身の農民工）が存在した。小戸の場合、ほとんどが家族労働に依存するが、輝達地板廠の場合、安定した労働力が存在した。

第三に、比較的早く床板生産を始めたことが功を奏した。2000 年、龔家溝の大戸約 100 戸のうち 9 割以上が 95 年前後に製造を開始した床板工場である。輝達地板廠は 94 年に創業したが、この 2、3 年は国家による木材伐採の規制や床板の品質管理の基準が緩やかで、もっとも景気のよい時期だった。また、国家の土地管理制度の変更にともない、96 年以降、村政府は県道沿いの農地 200 畝ほどの土地使用権を売却した。輝達地板廠はすでに十分な資金をもっていたので、工場の敷地拡張に成功した。大きな舗装道路に面した工場の立地条件が床板の製造・販売に好影響をもたらすのはいうまでもない。

第四に、ひとたび規模が大きくなれば、地方政府からはさまざまな便宜の提供がある。例えば村政府が農地使用権を売り出すとき、情報はいち早く大戸に伝えられる。2000 年、村には売却できる農地がほとんど残っていないが、輝達地板廠はさらに敷地を拡大し続けていた。一方の小戸は、村政府による土地売却の情報を耳にする機会すらない。

こうした大戸の機に乗じた発展とは対照的に、小戸の多くは 96 年以降に生産を開始した。2000 年、小戸の平均純利益は 500～2000 元／月である。小戸は新たな設備投資にたいしても消極的にならざるをえない。ある小戸は、新型の蒸気窯について次のように話し

ている。「聞くところによると、国家の林業局は東北地方の山を封山して森林伐採を禁止するかもしれないという。そうなれば床板は作れなくなる。新しい設備への投資は危険が多い。むしろいつでもやめられるように投資は最小限に抑えるべきだ」。

2) 生産工程

小戸は大戸とは異なって専属の従業員を雇用せず、労働力は基本的に家族および臨時工に依存する。臨時工は床板の加工工程に応じて雇用されるが、臨時工のなかでも「零工」と「鉋主」の区別が存在する。零工とは工具などを所有せず、単純肉体労働に従事する労働者をいう。鉋主とは、工具や機械などの生産手段を所有し、加工工程の一部を専門的に請負うなかで、自らも零工を雇う労働者である。以下、床板の生産工程を具体的にみてみよう。

①「零工」と「小団夥」

小戸の木材購入先は遼寧省と吉林省の省境に多い。製材所で購入された木材(板材)は、現地で調達されたトラックで龔家溝に運ばれる。到着後、まずトラックから木材を下ろすために零工を雇わなければならない。20 元／1 台の費用がかかる。トラックから下ろされた木材は自然乾燥させるため、宅地内や通りの脇に 3 m ほどの高さに規則正しく積上げる。この作業にたいして 5 元／1 立方メートル、トラック 1 台には平均して 10 立方メートルの木材が積まれているので 50 元／1 台の賃金が零工に支払われる。こうした自然乾燥の方法では、木材に含まれる水分を十分に乾燥させることができず、湾曲の原因になることが多い。大戸では湾曲を防ぐ「水池」といわれる設備を使用しているが小戸にはない。自然乾燥の終わった木材は、乾燥窯で乾燥させる。小戸の場合は土窯(8～10 立方メートル)だが、大戸では蒸気窯(20 立方メートル)を使っている。「装窯」(窯のなかに木材を積上げる作業)は 5 元／1 立方メートル、5～7 日間乾燥させた後、「出窯」(窯から木材を取り出す作業)には 4 元／立方メートルかかる。以上のような零工(力仕事)は、3、4 人でひとつのグループを形成する。

零工は、そのほとんどが外村人の出稼ぎ者であり、龔家溝に有力なネットワークを持たない者が多い。零工たちが抱える一番の問題は、仕事の確保が安定しないことである。そこで彼らは、小戸に顔が利く者を中心に「小団夥」(小グループ)を結成することが多い。この小グループは通常 7、8 人で結成される。グループのリーダーを村の人々は「大打工」と呼ぶ。大打工は小戸から仕事を受注し、零工を派遣する。零工は仕事を探し出す手間が

省ける。賃金の分配は次のようになる。零工の日当を 15 元とする。大打工を含めた 5 人の賃金 75 元は小戸から一括して大打工に渡される。大打工は自分の賃金 15 元の他に、各零工から 2 元の幹旋料を取る。したがって大打工の日当は 23 元、零工の賃金は 13 元となる。

②「鉋主」と「小団夥」

次に工具を用いた床板の加工がおこなわれる。現地の農民は工程順に「小鉋」「大鉋」「横材」と呼んでおり、臨時工たちはひとつの工程を専門に請負う小団夥を結成している。小戸は加工工程に合わせて必要な小団夥を雇用する。一方、小団夥のリーダー「鉋主」は加工作業に必要な平削り盤を自己所有し、自ら 2、3 人の零工を雇う。龔家溝の人々は床板工場を経営する小戸を「大老板」、鉋主を「小老板」と呼ぶ。

小鉋、大鉋、横材への報酬は、すべて 1 元/㎡の出来高払いである。例えば大鉋（鉋主 1 人・臨時工 2 人）では、1 日平均で 200 元ほどの収入になる。小戸（大老板）は 1 日の賃金を鉋主（小老板）に支払う。さらに鉋主は自分が雇った臨時工に 0.1 元/㎡の出来高で賃金を支払い、残りを鉋主のものとする。したがって、大鉋における 1 日の収入は、鉋主 160 元、零工 20 元となる。

小鉋は木材の長さと幅をそろえる作業であり、3 人ほどでひとつのグループを形成する。1 人が板材の幅をそろえ、もう 1 人が長さをそろえる。残りの 1 人は小鉋の終わった板材を拾い上げ、整理する。大鉋は機械を使って床板の表と裏を鉋がけし、裏面には当地の言葉で「風道」「風溝」などと呼ばれる溝を掘って床板の強度を高める。また、側面に床板を張合わせるための凸凹の突起や溝をつける。作業は、大鉋をする者、板材を手渡す者、大鉋の終わった板材を拾い整理する者と手分けしておこなう。横材では床板の両端に凸凹の突起と溝を加工する。作業の分担は大鉋や小鉋と同様である。

加工が終わると、できあがった床板はビニールシートで包装される。これを「打包」というが、賃金は包装の種類によって異なり、ビニール袋 0.7 元/㎡、大包 0.5 元/㎡、片包 0.7 元/㎡となる。大包では床板を 15 枚か 18 枚、片包では 6 枚か 8 枚を包装する。大包では、中に挟まれた床板の品質を外から見て判断することができない。したがって品質の悪い床板を包装するときに使われる。作業グループは 5 人ほどで構成され、包装 2 人、床板を手渡す者 1 人、整理整頓 1 人、雑用 1 人である。

装窯、出窯、小鉋、大鉋、横材、打装をおこなう小団夥は、彼らを必要とする床板工場があればどこにでも出向いて仕事を請負う。小戸と小団夥の関係は「承包関係」（請負関係）

である。臨時工のあいだには、何も工具をもたない零工から、生産手段を所有し自らも零工を雇う鉋主まで存在する。

臨時工のあいだに鉋主が生れたことで、次のような特徴がみられるようになった。1) 小戸は生産手段に投資する必要が少なくなり負担が軽減した。2) 臨時工たちのあいだに活気が生じた。外村人の出稼ぎ者でも小老板になれる。鉋主には都市戸籍の失業者、外村人、本村人などさまざまである。本村人の鉋主には、床板生産に適した土地（宅地）をもたず、手持ち資金の少ない者たちに多い。3) 鉋主の賃金は工具を所有しない臨時工に比べて高い。しかも請負条件に工作機械の所有を要求する小戸が多いため、鉋主には仕事の依頼が頻繁にくる。

（２）木材購入と床板販売

１）木材の購入

小戸は、宅地に作られた作業場で床板製造をおこなうと同時に、木材の購入も自らおこなう。一方、大戸の木材購入の方法は、小戸とは異なる。第一に、大戸は製材所に手付金を支払うなどして継続的な契約を結び、林区の木材購入権を独占する。高品質で高く売れる樹種は、安定的に大戸に供給される。第二に、前章でみたように、大戸のなかには木材購入の専任スタッフを木材供給地で雇用している。経営者が自ら買付けに出かけることはない。第三に、急速な森林伐採のため、遼寧省や吉林省では品質のよい木材を調達することが困難になっている。大戸は黒龍江省やロシア国境沿い、北朝鮮など遠方の地方から木材を購入する。

小戸が品質のよい木材を購入する機会は少ないが、彼らは次のような手段を用いて高品質の木材を確保することもある。大戸が買い占めた木材を製材する過程では、形や大きさの不揃いな木材が生じる。このような「破木」は数量が限られているが、品質は決して悪くない。製材所は現金を常に必要としているので、初回の交渉の際、手付金として約 500 元を払えば製材所は小戸のために破木を確保してくれる。二回目の購入からは、小戸は龔家溝にいて電話で製材所と連絡をとり、必要な木材（破木）が確保されると、汽車と長距離バスを乗り継いで製材所まで買付けに行く。品質の確認と値段の交渉が終わると、現地で輸送トラックを手配して龔家溝まで運ぶ。

木材の価格は樹種に応じて設定されている。幅 80 c m、厚さ 2 c m、長さ 90 c m の「長

板」と呼ばれる床板 10 立方メートルを例にとると、水曲柳 19000 元、柞（ははそ）や樺（かば） 24000 元、楸（ひさぎ） 11000 元、榆（にれ） 17000 元などである。2000 年では樺の床板が売れ筋であった。小戸は破木によって売れ筋の木材を獲得するチャンスはあるものの、やはり通常購入できるのは楸（ひさぎ）など床板に加工しても低価格にしか販売できない木材である。

床板生産では売れ筋の木材を買付けることが何よりも肝要である。次に紹介するいくつかの事例は、木材の買付けに関して小戸の置かれた状況を表している。

①黒龍江省やロシア産の木材が欲しい小戸

2000 年 6 月、EY は龔家溝に住む友人の紹介で、ロシアに頻繁に行き来するという人物と知り合った。酒の席上、この人物はロシアに行くビザはあるが十分な旅行資金がないことを打ち明けた。小戸にとって黒龍江省やロシア産の良質な木材を購入する機会はほとんどない。EY は 1 万元の現金をこの人物に手渡し、「いい木材があるかどうか、ついでに見てきてほしい」と依頼した。数ヵ月後、EY は再びこの人物と出会った。木材のことを尋ねるとこの人物は「見てきてほしいとは頼まれたが、購入しろとは言われていない」と答えた。もちろん 1 万元が EY に返されることはなかった。

②麻雀友だちから得る木材の情報

龔家溝では麻雀をやる者が多い。小戸のなかには、月に 1、2 度木材の購入に出かけ、仕入れた木材を他の工場に売却して収入（500～2000 元）を得ると、その他はまったく仕事をしない者もいる。もちろん彼らは農作業をする必要もない。こうした生活を送る人々は、毎日のように一同集まって麻雀を打つ。麻雀仲間の溜まり場のひとつが XP 宅である。

XP と懇意にしており、XP 宅に頻繁に出入りする人物に Z がいる。Z は撫順市撫順県から出稼ぎにやって来た外村人であり、龔家溝で部屋を借りて住んでいる。Z は 2000 年初頭に黒龍江省の人物 HL と合作の契約をし、黒龍江省の工場が生産したワックス塗装設備のレンタル契約を済ませた。2000 年 7 月、HL は 40 万元をもって広東省深圳に行き輸入ワックスを購入した後、ワックス原料を持ち帰るために大連行きの大型客船に乗船した。しかし運悪くこの客船は山東海峽で海難事故にあって沈没し、200 人あまりの死傷者を出す惨事となってしまった。HL もこの事故で亡くなった。

高価なワックス塗装設備（70 万元）を安くレンタルできたのは、黒龍江省の工場とネットワークのある HL が保証人になっていたからだった。Z の計画では HL が龔家溝に帰ってきた後、黒龍江省の製材所に行き、すでに契約している木材を購入する予定だった。し

かし HL が亡くなり塗装設備がレンタルできなくなると、製材所と契約した木材の大部分は無用となった。また Z は、HL の遺族へのお見舞いや葬儀などで手持ちの金を使い果たしてしまった。

Z は麻雀仲間として普段から懇意にしている XP に黒龍江省の木材の話を伝えた。ここ数年、良質な木材の確保は難しい状況にあり、木材のありかはもっとも貴重な情報である。XP は Z から話をきくと、その日の晩にさっそく Z と一緒に黒龍江省へ行くことを決めた。しかし XP にも十分な現金がない。そこで XP は龔家溝に住む三番目の姉の夫 GL に購入資金の融資を頼んだ。彼らの取り決めはこうである。購入資金は GL が出資する。実際に黒龍江に行き木材を購入するのは Z と XP である。Z は GL に木材のありかを教えたくないの、GL の同伴を断わった。購入した木材は GL に売る。Z と XP が手にする利益はあわせて 1000 元ほどである。その後、GL は木材を床板に加工し、約 3000 元の利益を手にすることができる。

③親戚による製材所の紹介

LJ は妻の五番目の姉の夫 GI（吉林省遼原市）に手紙を送り、床板の合作を打診した。GI は快諾しすぐさま龔家溝にやって来た。98 年の合作でふたりは 10 万元の利益を手にした。LJ と GI は皮ジャケット、テレビ、携帯電話などで 13000 元を使った。LJ は親戚友人からの借金を全額返済した。それでも、まだ、5 万元が手元に残った。

その後 GI は、黒龍江省で製材所を経営する自分の親戚 FP を LJ に紹介し、この製材所との合作を勧めた。LJ は GI に紹介された製材所を訪ね、木材購入の契約を交わした。LJ は、親戚の紹介で FP と知り合ったこと、また LJ 自身が FP と同郷の関係にあることなどから FP を信頼し、木材の代金 4 万元を全額前払いした。しかしその後、FP は姿をくらましてしまい、LJ は契約した木材を手にするができなかった。FP を探すために LJ は三度黒龍江省を訪れたが、さらに 1 万元の出費を重ねるだけの無駄骨に終わった。LJ と GI の関係は陰悪になり、ふたりの合作は消滅した。

2) 床板の販売

龔家溝で製造された床板の多くは、そのほとんどが華中、華南の大都市に販売される。なかでも上海、武漢、広州などが多い。大戸の多くは、固定の取次販売業者を通じて販売する。取次販売業者への信用を維持するため、品質管理を厳しくおこなっている。一方、小戸の顧客は流動的で小口である。小戸は資金が少なく木材の仕入れが安定しない。床板

の品質は劣り、売れ筋の樹種が少ない。取引する業者も小戸に相応し、手持ち資金の少ない小規模な小売店、取次販売業者が中心である。

小戸の床板販売には、いくつかのパターンがみられる。第一に、前章でみたように、ワックス塗装の設備がある大戸に床板を販売する方法である。大戸のほうでは、龔家溝の床板をすべてワックス塗装し同一のブランドで販売したいと考えている。しかし集団化の進展は芳しくない。集団化に参加している工場は大戸を中心に 30 程度である。しかも床板工場の半数を占める小戸は、ほとんど参加しようとしなない。

理由はいくつかある。小戸の乾燥窯（土窯）だと木材は乾燥後に変形してしまうことが多く、大戸が要求する品質水準を満たすことが難しい。ほとんどの小戸は蒸気窯に設備投資する資金も意欲もない。また小戸は運転資金が少ないので、床板を大戸に供給する際、現金決済がその場ですぐさまおこなわれることを期待する。そうでなければ、当面の生活費さえ捻出するのに苦勞する。前章でみた大戸の場合、100 立方メートルの木材を保管する倉庫があり、市場の状況をみながら床板に加工し販売することができる。しかし小戸の場合、親戚友人から借り集めた 2、3 万元でトラック一台分の木材を買々と、資金回収のため即座に床板へと加工し、安値で業者に売ってしまう。利益は 1000 元ほどである。小戸にとっては、売れるときにすぐ売ってしまうのが第一であり、質の悪い床板であってもそれを買取る業者がいる限りは新たな設備投資は避け、古い設備のまま現状を維持しようとする。小戸のこうした志向性のため、大戸に床板を販売するパターンは少数にとどまっている。

第二の販売方法は、すでに触れたように、龔家溝に仕入れに来る業者や小売店に直接販売するやり方である。小戸のほとんどすべてがそうしている。数は少ないが、龔家溝に来る業者のなかには特定の小戸と継続的に取引をおこなう者もあり、毎月二回ほど床板を購入する。一回の購入量は 6 t トラック 1 台分（約 10 立方メートル）である。

第三に、製造した床板を自ら華南地方などの床板消費地に運んで販売するパターンがある。具体的なケースからみてみよう。2000 年、JM の床板は材質が悪く、村にいてもほとんど売れなかった。時間が経過すると床板の傷みがひどくなるので、ますます売れなくなる。たとえ売れたとしても、数年前は 70 元/㎡の値段で売れたものが 2000 年には 20 元/㎡にしかない（ちなみに雲南省で作られる高品質の床板は 150 元/㎡でもよく売れている。決定的な違いは乾燥窯の施設にある）。

2000 年 6 月、窮地を打開するため JM は ZP とともに床板 900 ㎡を福建省まで運送し、

現地で販売することに決めた。福建省漳州市には、ZP と取引している小売業者 SS がいる。JM と ZP は SS を頼って彼のもとに身を寄せた。SS は彼らが運んできた床板を自分の店頭で販売することに同意した。JM と ZP は SS の店に泊り込んで宿泊代を節約し、食事も自炊した。

彼らは7月中旬まで滞在したが、床板はひとつも売ることができなかった。華南では木質の固い床板が好まれるが、JM と ZP の床板は軟質の樺だったので消費者に不評だった。またこの時期、福建は梅雨でフローリングには適さず、もともと床板の消費はにぶい。さらに消費者の嗜好の変化もあった。華南では、木製の床板よりも人口大理石（200 元／㎡）や「金剛木」（合成床板）でフローリングすることを好む人が多い。こうした傾向がここ数年、生活水準の向上とともにいっそう顕著になってきている。

第7章 周縁にいる者たちの顔役 —ある兄弟姉妹の歴史から—

本章では、ある兄弟姉妹の歴史を紹介する。文革期に「上山下郷」運動の対象となり農村へ下郷された兄弟姉妹は(1)、改革・開放後に龔家溝で工場の経営を始めた義理の兄を頼って「回城」(都市部に戻る)し、その後、親族関係のあいだの協同と離反を並存させながら(2)、それぞれが床板経営者として経済的に独立していった。こうした具体的事例を取り上げる目的は、小戸の経済活動を彼らの生活世界のなかに位置づけ直し、小戸であることの社会的意味を浮き彫りにすることである。

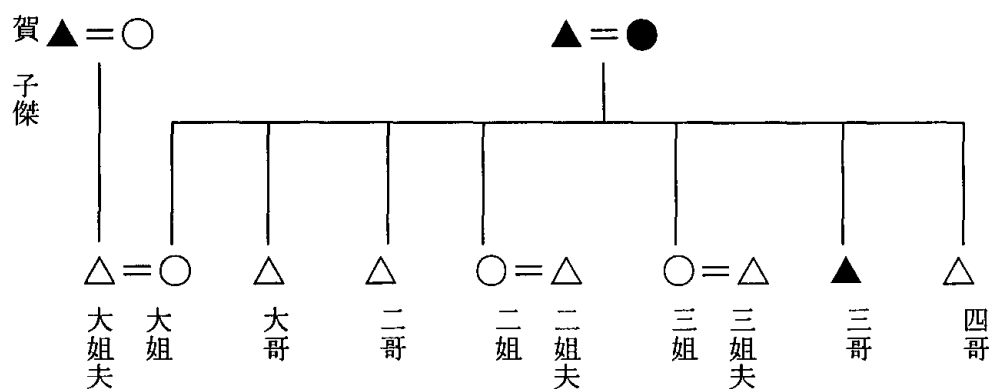
ある兄弟姉妹の事例は、次の二点に関して小戸の一般的状況を代表している。

第一に、彼らの生活の営みに大きな役割を果たしたのは、兄弟姉妹をめぐって結ばれた親族集団における顔役であった。顔役的存在が親族におこなう「關懷」(物心両面にわたる配慮)は、親族関係が無条件にそうさせるのではなく、やはり顔役の個的資質に基づいた規範適用の結果である。たとえ血縁関係にあっても、ある者が血縁者の生活の面倒をみるかどうか、あるいはできるかどうかは、個的資質にかかわる問題である。

第二に、第4章や第5章で取り上げたのは、龔家溝における政治的経済的な顔役であった。いわば彼らは農村社会の中心にいる者たちであり、数百戸、一千人近くの生活にかかわる存在である。一方、ここでとりあげる兄弟姉妹のほとんどは、周縁にいるその他大部分の一般農村住民を代表している。周縁の者が親族における顔役的存在を介して、農村社会の中心的な顔役へとどのようにつながるのか、あるいはいかにして村外社会へと開かれていくのかを明らかにし、周縁者の生活のあり方を浮き彫りにする。

(1) 文革から 80 年代前半にかけて

【図 7-1】ある兄弟姉妹の親族関係



【出所】2000 年 7 月当時。すでに亡くなった方の没年は、賀子傑 (1996)、大姐らの父 (1983)、母 (2000)、三哥 (1999) である。

(注) 以下、本文中で、例えば大哥の妻は「大哥媽」、二哥の妻は「二哥媽」と表す。

【表 7-1】出生年・出生地・結婚年

	出生年	出生地	結婚年	1968 (下郷) - 86 年 (回城) の居住地
大姐	1948	吉林省遼原市東遼県建安鎮革新村	1971	撫順市露天区→順城区龔家溝付近
大哥	1950	〃 (51 年両親・大姐・大哥撫順へ)	1974	遼寧省錦県 (68) →70 年に家族と合流
二哥	1952	遼寧省撫順市露天区瀏山街	1976	遼寧省撫順市新賓満族自治県 (69)
二姐	1955	〃	1977	↓
三姐	1957	〃	1980	吉林省遼原市東遼県建安鎮革新村 (71)
三哥	1960	〃	1983	↓
四哥	1964	〃	1985	84~86 年にかけて龔家溝に「回城」

1)「上山下郷」運動

この一家は 1951 年まで父親の実家がある吉林省遼原市東遼県建安鎮革新村に住んでいた。1951 年、大哥が満 1 歳にならないうちに、父親と母親は大姐と大哥を連れて撫順市露天区（現在の東洲区）瀏山街に引っ越した。母親の実姉が撫順に住んでいたの、彼女を頼りにすることができた。父親 27 歳、母親 31 歳の頃である。当時、全国の都市は労働者を募集していた。父親は撫順勝利炭鉱の炭鉱夫となり、毎月 50～60 元の賃金を得た。母親は家で家事をした。このとき、一家四人の戸籍は農村戸籍から都市戸籍に変更された。

1966 年に文化大革命が始まった。1968 年末に「知識青年」の「下放」がおこなわれた。中学校を卒業している大哥はその対象となり、遼寧省錦県大中人民公社趙官堡大隊に下放された。1969 年 1 月 15 日には、大姐を除く家族 7 人が「群衆下郷」として遼寧省撫順市新賓満族自治県平頂山公社下青大隊に下郷された。大姐は当時すでに撫順市轻工設備廠の国有企業で学徒として働いており、下郷の対象から除外された。家族がすべて下郷され、ただひとり撫順市露天区に残された大姐は、母親の妹の夫の妹のところに身を寄せた。この「小姑子」は集団所有部門のレストランで働いて給料もよく、大姐は生活費や宿食費の心配をせずにすんだ。小姑子に居候になった 3 ヶ月間、街道委員会は大姐にも下郷を要求し続けた。下郷を拒んだ大姐は転居を余儀なくされ、母親の兄の娘方に引っ越した。しかしその後は親戚間の人間関係に悩まされ、住居地を転々とせざるをえなかった。

知識青年として下放され家族と離れていた大哥は、父や母とともに下郷された弟や妹たちが、まだ農作業も十分にできないほど幼少であることを心配した。大哥は新賓県の家族のもとに移ることを希望し、70 年、公社によって認められた。彼は知識青年から群衆下郷の処遇へと変更され、新賓県にいる家族の下に移り住んだ。

69 年、新賓県に来たばかりのとき、二哥（当時 17 歳）や二姐（14 歳）は農作業が十分にできず、また当地の言葉も理解できず苦勞した。しかし彼らに課された仕事量は成年と同じだった。他の者たちが午前の仕事を終えて昼食を食べに帰っても、彼らは休憩することができず働きつづけた。一日の仕事が終わると二哥や二姐は大哥とともに山に登って山腹に座り、疲労と悔しさから肩を寄せ合って泣くこともあった。ある日、生産大隊の幹部が彼らを批判したとき、大哥は幹部たちに向かってこう叫んだ。「この次も私たちを批判することがあるならば、私はあなたたちを殺します！」。これ以降、幹部はだれひとりとして彼らを批判しようとはしなかった。

新賓県に下郷された家族（大姐を除く）は、71 年の春節 1 ヶ月前に吉林省遼原市東遼県

建安鎮の父親の故郷に戻った。新賓県では十分な食糧が確保できなかったからである。生産隊による一家消費分の食糧割当は 180 kg／年だったが、吉林省遼原市では 260 kg／年だった。吉林省に戻ると一間半の小さい土房を買い、1 年半住んだ。その後、生産隊から宅地が与えられ、三間の土房を立てた。

大姐は家族が吉林省の故郷にもどったことを手紙で知らされたが、もし事前に知っていたなら、家族が吉林省に行くのを止めたという。吉林省の故郷は貧しく、都市にもどる機会を一生失ってしまうと考えたからである。

2) 改革・開放から龔家溝に移住するまで 一兄弟間の離反のきざし

〔表 7-1〕から明らかなように、兄弟姉妹はみな下郷の時期に結婚し、順に別居、「分爨」（竈を別にし食事を別々に作る）して各自の家計をもつようになった。結婚の相手は同じ鎮内の別の村に住む者か、あるいは隣接の鎮に住む者であり、親戚や職場の上司、友人の紹介で知り合った。一方、ひとり撫順に住んでいた大姐は、71 年 5 月に撫順市挖掘機廠（国有企業）で働いていた技術者と結婚した。末男の四哥は結婚後も母親との同居を続け（父親は 83 年に死去）、86 年の龔家溝移住の際に親の家産を処分して養老費とし、龔家溝でも母親と同居した。

兄弟姉妹すべての家族が龔家溝に移住し終えたのは 87 年である。改革・開放から龔家溝に移るまで、大哥は鎮営の鍛冶場で働いた（年収 3000 元）。二哥、四哥は農業、三哥は人民解放軍に入隊した。二姐夫や三姐夫は農業以外の仕事に従事した。

例えば二姐夫（1956 年生）であるが、彼は中学を卒業後、73 年～80 年は建安鎮の防暴電機廠（鎮営企業）で働いた。初めの 3 年間は学徒として鑄造工（18 元／月）、旋盤工（20 元／月）、機械組立工（22 元／月）をした。学徒の終了後は、一級工（32.5 元／月）、二級工（38.5 元／月）、三級工（42.5 元／月）と昇級するにつれて昇給した。しかし、鎮営企業は農業よりも収入が少なかった。

77 年 12 月に二姐と結婚した。当時、結婚の法定年齢は男 25 歳以上、女 24 歳以上であり、計画生育は厳格に執行されていた。規定に反すると集団企業で働く権利を消失する。78 年に二姐が懐妊すると、二姐夫はこどもの出産を選択し鎮営企業を退職した。80 年からの 2 年間は、口糧田を耕す一方、山の果樹園で園芸を学んだ。82 年～85 年は鎮の老人ホームで調理師をした。86 年正月、家族とともに龔家溝へ移住した。

三姐夫（1956 年生）は 73 年に建安鎮高校を卒業、73 年～74 年は農業、74 年～78 年

は建安鎮育仁村民兵長、治保主任、青年団支部書記を務めた。1979 年から 2 年間は建安鎮林場で臨時工をし、結婚後 80 年から 85 年までは建安鎮で靴下、衣服、靴底、鎌刀などの小商いをした。

二哥は農業を生業とした。81 年、二哥には山地と平地あわせて 15 畝（1 畝＝6.7a）の土地（責任田）が分配された。主要作物はトウモロコシ、大豆、コウリヤン、粟などで、トウモロコシと大豆を 2：1 あるいは 1：2 の比率で栽培した。風通しをよくし、収量を増やすためである。また二哥は、二頭の乳牛を飼育した。81 年から 83 年にかけて、1 畝あたりの収穫量は 500 kg に達した。鄧小平が実施した生産責任制以来、農民は「三大自由」を手に入れたと二哥は言う。「腹いっぱい食える」「あまったお金や作物は自分のものにしてよい」「農閑期には臨時工などで現金収入を得られる」という自由である。

三哥と四哥も 15 畝ずつ農地の分配を受けたが、三哥は人民解放軍に入隊していて不在、四哥は自分で満足に耕作することができなかった。83 年に父親が亡くなると、三哥、四哥（当時未婚）、父親の 3 人に課された責任田、あわせて 37 畝を耕す者がいなくなった。大哥と母親は二哥と相談し、二哥と四哥のふたりで合計 4 人分の責任田を耕すことに決めた。二哥と四哥は、収穫後の利益を半分に分割する約束を交わした。

83 年、二哥と二哥媽が耕地、播種、収穫、脱穀をおこない、四哥はほとんど何もしなかった。収穫後、農作物の換金は次のような過程を経ておこなわれる。まず、収穫した食糧のなかから自家消費と役畜の飼料分を確保し、残りの食糧を国家が管理する食糧庫に売りに行く。食糧庫は農民に引換券を発給し、代金を信用社に送る。農民は引換券をもって信用社に行き現金を受け取る。

83 年、二哥たちが得た現金は 3700 元だった。四哥は信用社からこの現金を受け取った後、一袋の米と 40 元相当の小麦粉を二哥の取り分として渡した。もちろん二哥は納得しなかったが、四哥は二哥の話を聞こうとしなかった。二哥媽はこのことを知り、たいへん立腹した。二哥は再び四哥のところにやって来て言った。「合作は解消だ。農地を十分に耕すことができないのなら、お前の責任田の半分はおれが耕してやる。しかし、残りの半分は自分で耕せ！」。ふたりの合作が解消された 84 年、二哥は、責任田から 1700 元、請負った山地で作った籠の材料で約 600 元、黄豆が 700 元相当で、合計 3000 元ほどの利益を手にした。一方、四哥の収入は 700 元足らずだった。これ以降、ふたりの合作はみられなくなった。

（２）龔家溝への移住 ―親族のなかの顔役が果たした役割―

80年代になると、文革期に農村へ下放された人たちは都市に帰ることができるようになった。しかし大姐の弟妹家族は下郷後に遼寧省新賓県から吉林省へと省を超えて再移住したため、地方政府への手続きが煩雑になってしまった。大姐は、政府のなかに知り合いを探して書類を作成してもらい、その後、吉林省の父母に郵送した。父親は撫順への回城を申請したが、政府は彼らの書類を紛失してしまった。

結局、彼らは自力で、すなわち親族ネットワークを利用することで撫順に帰るより他はなかった。大姐夫と彼の父親は、こうした親族ネットワークの核的存在であり、兄弟姉妹の顔役として彼らの生活に責任を負った。本節では、吉林省の兄弟姉妹が顔役的存在をテコにしつつ、いかなる経路をたどって撫順に帰ってきたのかを整理する。

１）工場経営を始めた大姐夫 ―兄弟姉妹の撫順移民のきっかけ―

①「東方機械廠」（電動ゴーカート車体製造工場）：84年末～86年

83年、大姐夫は撫順市挖掘機廠を退職し、国有企業の撫順市淀粉廠（でんぷん工場）の生産部長に就任した。春から夏にかけて3ヶ月間工場に泊り込み、設備や生産工程の改善をおこなった。生産コストの削減に成功すると、大姐夫は廠長の嫌がらせを受けて生産部長の職を追われ、一般工人の身分に処された。84年、大姐夫は淀粉廠を辞職した。

国有企業を退職後、大姐夫は工場設立の準備を始めた。大姐夫の実父賀子傑は、かつて国有製油所（撫順市石油一廠）の廠長を務めたことのある技術者である。息子のために、賀子傑は国有プラスチック工場の技師長を務める友人と相談し、多くの需要が見込めることから寝具の製造を決めた。賀子傑は施家溝大隊（既述のように91年以降、施家溝、龔家溝、新旗の3村に分立）の幹部を招いて食事をし、幹部と息子の仲介をした。その後、施家溝大隊と工場施設の請負契約を結び営業許可を取得した。さらに賀子傑は、撫順市石油一廠とのネットワークを利用して旋盤、ボール盤、平削り盤を2400円で購入した。

大姐夫は挖掘機廠の分配した住宅に住む都市戸籍者である。施家溝大隊で「東方機械廠」の経営を開始したのは次のような理由による。第一に、資金の問題がある。施家溝では、都市部に比べて土地や施設を安く請負うことができる。第二に、施家溝への土地勘がある。以前の職場の挖掘機廠は施家溝にあり、施家溝の工場は大姐夫の住宅から徒歩20分のところにあって便利がよい。

84 年末から工場の操業を開始したが、経営はたいへん厳しいものになった。当初、予想されたベットの注文がまったくない。がらんとした仕事のない工場では、急場をしのぐために豚とニワトリの飼育が大姐と三姐によって始められた。しかし、もともとこの工場を請負経営していた者が、村と大姐夫の契約後に工場を追い出されたことを恨みに思い、ある日、家畜に毒をやって殺してしまった。後日、撫順市外事弁公室と撫順市挖掘機廠から 50 のベットを受注したが、鉄板の購入がままならず、結局 28000 元の損失を抱えて操業はストップした。

85 年 7 月、大隊の会計は操業していない工場の様子をみて大姐夫との契約を解消し、施設からの即刻の退出を命じた。行き場のない大姐夫の窮地を救ったのが、後に龔家溝の書記になる XB であった。彼は大姐夫に同情し、龔家溝の自分の宅地、建物、工業用電気を無償で提供した。

85 年 10 月、大姐夫は XB の宅地に引っ越すと、今度は電動ゴーカートの車体製造を始めることにした。撫順にはたくさんの大規模国有企業があり、工場の敷地内を移動する際にはゴーカートが使用される。当時、別の工場がすでにゴーカート車体を製造していたが、技術の水準が低く十分競争できる相手だったので、賀子傑と大姐夫はこの業界への参入を決めた。

賀子傑は、3 ヶ月の時間をかけてゴーカートの車体を設計した。大姐夫は生産と営業を担当した。車体の原型や試作品を製造するとき、大姐夫の中等専門学校時代の同級生 ZY（当時、撫順市挖掘機廠の幹部）が便宜をはかってくれた。挖掘機廠の設備を使用することで試作品は安い費用で作ることができた。彼らの製造した製品はゴーカート製造工場に販売され 8 万元の利益を得た。

②「東方機械廠」経営権の移行（大姐夫→三姐夫）：87 年～95 年

86 年 10 月、撫順市外事弁公室から大姐夫に次のような話がもちかけられた。「あなたの工場もどうやら苦境を乗り越えたようだね。しかし、共産党の政策がひとたび変われば、損失を抱える可能性が高い。今、私たちは「日本中国帰還者連合会」との合作でホテルを建てる計画がある。わたしたちのところにきて設計の仕事をやらないか」。大姐夫は外事弁公室の誘いに応じ、87 年 1 月から弁公室に出勤するようになった。

「東方機械廠」の経営は三姐夫に任せ、利益は半分ずつ分配することにした。しかし三姐夫は利益の分配をおこなわず、事実上、東方機械廠の所有権と経営権を自分のものにした。三姐夫は、大姐夫の設備、技術、人間関係を利用した。ゴーカート車体の取引先はゴ

一カート製造工場、撫順市石油二廠から大連の工場にまで広がった。87年からの2、3年は高収益をあげることができた。しかし取引先から技術的な注文を受けると、三姐夫には対応する技術がなく、業種の転換を余儀なくされていった。

94年、三姐夫は友人の紹介を通じて自動車修理を始めるため、撫順市汽車修配廠の廠長と3年間の契約を結んだ。しかし1年後に廠長が転勤し、新しい廠長が就任すると契約は解消された。新しい廠長は契約の条件として、党员、大学卒業、都市戸籍の三つを要求したからである。95年、三姐夫の経営する東方機械廠は仕事を失い、倒産した。

③「通用機械廠」（機械加工工場）92～95年、「東昇鍋炉廠」（ボイラー工場）95年～

一方、大姐夫は87年1月から外事弁公室でホテル建設に従事した。ホテルは88年5月に完成した。翌89年6月には天安門事件が発生した。当時、大姐夫は次のように考えた。

「今後のことを考えると、今の給料と貯金にたよりながらの生活は続けていくことができない。息子は高校1年生、娘は中学1年生になり学費も必要だ。やはりもう一度、工場を始めなくては」。外事弁公室を退職後、90年には心臓病の悪化により1年間自宅で静養し、91年から新しい工場の準備にとりかかった。

92年春、施家溝所有の「総合廠」を請負契約し、機械加工工場「通用機械廠」の経営を開始した。93年初頭には、以前ゴーカート車体を製造したときに援助してくれた挖掘機廠のZYと山東省で中古パワーシャベル2台を買って帰り、修理した後に販売して10万円の利益を手にした。

93年、撫順市順城区環境保護局扶貧開発部はボイラー製造を大姐夫に勧めた。かつてボイラーの設計をしたこともある賀子傑は大姐夫の転機を支えた。93年後半、ボイラーの設計に着手し、翌94年、大姐夫は「外風室施転風」式ボイラーの開発に成功した。このボイラーは遼寧省科学委員会によって国家先進水準の認定を受けた。

94年からは、村資産の所有権改革が始まった。95年4月、総合廠の土地建物は20万円で大姐夫に売却されることが決まった。大姐夫は15万を自己資金から、残り5万を高校の同級生の融資（年利2分）でまかなった。8月には正式にボイラー製造の国家資格を取得した。その後、総合廠の旧い建物を建て替え、起重機（重い資材を吊り上げて運ぶ機械）の設計にとりかかった。当時、賀子傑は三男夫婦と同居していたが（大姐夫は二男）、総合廠に泊り込んで息子の仕事を助けた。賀子傑は糖尿病が悪化するなか、病床で息子のボイラー設計を手伝い、具合のよいときには工場の事務室に出て来て金庫番や電話番をした。

96年4月9日、賀子傑は亡くなった。賀子傑は、生前、工場の4つの作業場にたいしてそれぞれ名前をつけていた。そのうちのひとつが「東昇」である。大姐夫は父親の遺志を受け継ぐ意味をこめて新しいボイラー工場を「東昇鍋炉廠」と命名した。

その後、瀋陽の鋼材市場で起重機を2万円で購入した。起重機を鍋炉廠に取り付け試運転を開始すると、大姐夫は溢れる涙を止めることができなかったという。「父は最期、この工場にすべての情熱を捧げてくれた。新しくなった工場の姿と一緒に見てもらいたかった」。

2) 龔家溝への移住 一大姐夫を頼って—

東方機械廠の経営を始めた84年11月、大姐夫は吉林省にいる二姐夫に手紙を送った。機械組立工が必要だったので、経験のある二姐夫に撫順に来るよう要請したのである。大姐夫の手紙を生産大隊で受け取ったのは二哥だった。二哥は毛筆でしたためられた宛名をみて、かつて小学校の先生が毛筆の手紙は相手への尊敬の念を表すと話したことを思い出した。二姐夫に手紙を届ける道中、手紙を開封して内容を知り、二哥はさらにうらやましく思った。

二姐夫は初め、撫順に行くことをためらっていた。養老院の仕事が悪くなかったからである。「大姐夫はきっと高い技術をもっているはずだ。お父さんの賀子傑の協力があれば、大姐夫の工場は必ず成功するはずだ」。二哥は二姐夫を説得した。二姐夫が龔家溝に来ると、大姐夫の工場は期待に反して、大隊の施設（三間半の古い建物と工業用電気）を借りただけのみすぼらしいものだった。二姐夫は体調を崩し、10日後には龔家溝を後にした。

二姐夫が帰ってくると、二哥は三哥と三姐夫に言った。「大姐夫は教養も技術もあり、きっと成功する人物だ。それに撫順は私たちの故郷だ。みんなは先に撫順に行ってくれ。その後、私も行くことにする。秋の収穫が終わり、次の耕地が始まる前にはきっと行く。私たち祖先の故郷は雲南（山東省）だ。雲南人はいろいろと旅をして見聞を広める伝統がある。撫順に行って工場の具合がよければ工場で働けばよい、もし悪ければ自分で仕事を探せばよい。こんな田舎にずっといたのでは、いつまでたっても芽が出ない。都市では商売もできるが、農村では農民の負担が重過ぎて何もできない」。

三哥夫婦とこども（当時1歳）、三姐夫夫婦とこどもふたり（当時4歳と2歳）は吉林省の村を出発し、85年3月20日、龔家溝に到着した。彼らふたりが龔家溝にやって来ると、大姐夫は少々不安な表情を浮かべた。当時、仕事で必要だったのは機械組立の技術をもった二姐夫だった。大姐夫の家族自身、生活に余裕がなく食べ物も満足になかった。その上、

さしたる技能をもたない親戚家族を養わなければならない。大姐夫婦は逼迫した状況に置かれていたが、弟妹家族の世話を引き受けることに決めた。三姐夫家族は工場に寝泊りし、三哥家族は大姐夫の家で生活した。

前述したように、工場の状況は徐々に悪化し、85 年 8 月には損失 28000 元を抱え（一方、収入は 31.5 元／月に過ぎない）、施家溝との請負契約も破棄された。当時、大姐夫の苦悩は深く、自ら命を絶つことさえ考えていた。

二哥が撫順にやってきたのは、ちょうどこの頃である（85 年 10 月 15 日早朝）。大姐夫は二哥の顔を見るなり言った。「きみも来たのか！ もうここにはきみを養うだけの力が残っていない。どうしてここに来た。どうやって吉林に帰るといふのだ？！」「お義兄さん、心配しないでください。来たからにはもう吉林の田舎には帰らない。お義兄さんがここに泊めてくれないのなら、他にどこにでも行って仕事を探します」。傍にいた大姐も弟のために嘆願した。「もう来てしまったのだから、どうか面倒をみてあげて！」「わかった、わかった。ここで働きなさい！」。

XB の宅地に大姐夫の工場が移ると、二哥と三姐夫家族は農作業用の牛車などが置かれていた倉庫に板とレンガで簡単な寝床をつくり、共同生活を始めた。賀子傑も仕事が忙しいときには数キロ離れた自宅には帰らず、彼らと一緒に工場に寝泊りした。86 年の正月には大哥（大哥媽と 75 年、77 年生れのふたりのこどもが来たのは翌 87 年）、二哥家族（二哥媽と 77、78、79 年生れの 3 人のこども）、二姐夫夫婦とこどもひとり（79 年生れ）がやって来た。

また少し遅れて、四哥家族（当時、生後 8 ヶ月のこどもひとり）が母親と一緒に龔家溝へやって来た。母親の財産である吉林省の家屋は処分し、そのお金は養老費として四哥が管理した。大姐の弟妹家族が龔家溝に来ると、大姐夫は彼らのために戸籍、賃貸部屋（当時の家賃は 15～20 元／月）、衣食の面倒をみた（3）。

XB の宅地で再出発した工場は、86 年夏までに 140 台のゴーカート車体を製造した。しかし、扉の一角に突起があつてうまく開閉できない問題が生じた。このとき活躍したのが二哥である。40 日後、修理を終えたゴーカート車体は取引先に納入された。大姐夫はたいへん喜び、二哥に家を買って与える約束をした。当時、村の家屋は 8500 元した。しかし大哥やその他の弟妹が大姐夫の計画に反対し、この話は実現しなかった。

87 年 1 月、東方機械廠の経営権はうやむやのうちに三姐夫の手に渡った。88 年、東方機械廠に残ったのは三姐夫と三哥だけで、その他の兄弟は別の仕事を探した。（95 年頃か

ら兄弟たちは床板の生産を始めるが、三姐夫の床板工場はもつとも規模が大きい。大姐夫の東方機械廠を手に入れたことが他の兄弟よりも資金蓄積を容易にしたからである）。

3) 精神的・技術的な支え ―賀子傑のこと―

大姐夫にとって実父賀子傑の存在は、85年に龔家溝で工場を始めてから一貫して精神的、技術的、資金的な支えであった。初期投資に必要な数千元は、賀子傑が出資した。賀子傑の存在なくしては、現在の大姐夫の成功はなかったはずである。また大姐夫が工場経営を始めなければ、大姐の弟妹家族は龔家溝に来ることができなかった。賀子傑と息子の大姐夫が姻戚の生活の安定に果たした役割は大きい。大姐の兄弟姉妹にとっては、彼らをめぐる限られたネットワークのなかでの顔役的存在だといえる。

賀子傑は1915年、中農の家に生れた。中学在学中に両親を失った。その後は父方の伯父の援助により勉学を続けたが、貧しさのため退学せざるをえなかった。1、2年農業をした後、やはり勉学の道を捨てきれない賀子傑はIという日本人の学徒となって機械設計を学んだ。その後、賀子傑は別の設計事務所に雇われ頭角をあらわす。当時、日本人が管理していた中国で唯一の石油化学コンビナート「西製油廠」（現・撫順市石油一廠）の設計に「大工匠」（設計主任）として携わった。2000年当時でも使用されている石油タンクは、賀子傑が設図したものである。

1945年8月15日、抗日戦争が終結すると賀子傑は村に帰って農業を始めた。撫順市は八路軍の管理下に入り、砒務局局長（実質的な市長）に就任した王新蘭は、西製油廠の生産管理者を中国人から捜すことにした。当時、西製油廠はまだ日本人によって管理されていたからである。撫順出身の共産党幹部は王新蘭に適任者の推薦を求められ、中学時代の恩師に相談した。恩師は教え子の賀子傑を推薦した。王新蘭は賀子傑を砒務局に呼び出した。

賀子傑は根っからの技術者であった。王新蘭からの召集を受けると、賀子傑は再び設計の仕事ができることを喜び、定規やペンをもって砒務局に出向いた。賀子傑の様子は、まるで設計のアルバイトを喜ぶ書生のものであったという。王新蘭は賀子傑に面会するところと言った。「私はあなたに設計の臨時工を頼むわけではありません。西製油廠の管理者になっていただきたいのです」。賀子傑は大役就任を固辞したが、王新蘭の強い態度に押し切られてしまった。

46年、撫順は八路軍の撤退とともに国民党軍の支配下にはいった。48年10月下旬、国

共内戦は激しさを増し、東北地方で繰りひろげられた「遼瀋戦役」は熾烈な様相を帯びていた。撫順の政府、生産機関の幹部のなかには、共産党の入境を恐れて撫順を後にする者が少なくなかった。多くの炭鉱や工場は管理者が不在となり麻痺状態に陥った。こうした状況のなか、西製油廠や炭鉱、発電所といった国家資産の破壊、流失を防ぎ、電気や水のライフラインを維持するために「撫順磁務局愛磁委員会」が結成された【林，1983：67－74】。発起人は磁務局の呉葆明と林世権、西製油廠の賀子傑の3人だった。

遼瀋戦役中、西製油廠は国民党軍から再三、給油の要請を受けた。賀子傑は面従腹背の苦肉の策に出た。石油タンクの中身を交互に入れ替えるなどして石油の備蓄が底をついたように見せかけ、国民党軍への給油を拒否し続けた。48年10月30日、撫順は共産党によって解放された。翌日、撫順磁務局愛磁委員会の主任呉葆明は鉱区にたいして解放を宣言した。

新中国成立後も、賀子傑は撫順市石油一廠の生産管理など重責を担った。しかし、文化大革命期に無実の罪をきせられ迫害されたのは、中国革命に多大な貢献をしたその他多くの同朋の末路と同様であった。

ここでは、文化大革命の悲劇を論じることが目的ではない。社会の周縁に位置するようなある兄弟姉妹が、賀子傑といった撫順の歴史に名を残すような顔役と姻戚のネットワークを通じて「つながっている」ことこそ、ここで強調しておきたいことがらなのである。

（3）床板生産後の兄弟姉妹　—親族のしがらみによる協同と離反—

88年以降、三姐夫の東方機械廠には三哥だけが残ри、大哥、二哥、二姐夫、四哥はともに他の仕事をみつけて生活するようになる。92年、再び大姐夫が工場経営を始めると兄弟たちは大姐夫の工場に戻った。弟妹たちは大姐夫に労働力を提供し、大姐夫もできるだけ多くの給料を払おうとした。95年頃から、弟たち自身も床板工場経営者として自立していく。その際必要な資金は、自己資金や友人の融資（年利子2分）に加えて、大姐夫による1万元以上の融資（無利子）が大きな役割を果たした。床板生産が始まると木材の購入などで兄弟間の合作がおこなわれたが、同時にさまざまな矛盾も生じて兄弟間に離反がみられるようになった。さらに2000年には、母親の介護を通じて兄弟姉妹の争いが絶えなかった。

しかし苦境の際、頼りになるのは親族以外に存在しないという状況に大きな変化はない。

彼ら兄弟姉妹の生活は、親族の重みゆえに生じる協同と離反の反復的過程のなかで成り立っている。

1) 床板経営に到る過程

①都市での臨時工や雑業

88年、三姐夫の経営する東方機械廠を離れると、大哥、二哥、二姐夫、四哥はさまざまな仕事に従事した。兄弟4人は、龔家溝から10kmほど離れたところにある炭鉱で2ヶ月間働いた。100元ほどの収入になった。毎日、早朝3時に起床し、自転車に乗って炭鉱まで行く。炭鉱の坑口で石炭を積んだトロッコがやって来るのを待つ。露天掘りの炭鉱で、トロッコは谷の下から石炭などを満載して坑口まで上がってくる。トロッコが運ぶ石炭には「矸子」(不純物)が大部分を占めている。彼らの仕事は、トロッコにあがり、シャベルで石炭を選び分けた後に袋に詰め、炭鉱の職員に渡すことである。賃金は出来高払いで、トロッコが1台も上がってこない日が続くこともあった。

「捡煤」と呼ばれるこの仕事は重労働のわりに稼ぎは少なかった。そこで撫順北駅の青物市場に行き野菜を売ることにした。収入は100元/月ほどだった。また1ヶ月ほど、川底の砂から砂金を取る仕事もやった。1週間で50元の稼ぎになった。砂金がなくなると再び撫順北駅に行き、今度は人力三輪車で運送業をした。三輪車は磁務局前の市場で購入した(180元)。この仕事に4年間ほど従事し、毎月の収入は400~500元ほどになった。その他、4ヵ月半にわたって大姐夫宅の新築工事を手伝ったこともあった。

②再び大姐夫の工場へ ―賃金をめぐる兄弟間の揉め事―

92年、大姐夫が再び工場経営を始めると、大哥、二哥、四哥は大姐夫の工場へ戻った(二姐夫については後述)。最初、兄弟たちは工場に戻るのを渋った。人力車の仕事は1日3時間の仕事で30元稼げるが、工場では1日8時間働いても30元に満たないからである。大姐は、駅前で人力車の仕事をする弟たちのところにやって来ては、工場に戻って大姐夫を助けるよう説得した。

大姐夫の工場に戻ると、賃金額をめぐる兄弟間で争いが生じた。大姐夫は貢献度に応じた出来高払いを採用していた。工人は兄弟3人を含めて8人だった。「領工」(工人のリーダー、兄弟以外の者が担当していた)は工人との打ち合わせの際、技術や職位にかかわらず、仕事の貢献に応じて賃金を算出することを確約した。二哥は溶接の技術をもっていなかったが、危険な力仕事は彼以外にできる者がいなかった。彼らは領工の提案に同意し

た。

50日あまりの労働の結果、8台のボイラーが製造された。その後、各人に支払われる賃金が全体会議で発表された。領工 3170 元、大哥 3000 元（溶接、材料への設図）、四哥と王某 2800 元（溶接）、工人 3 人 2500 元（溶接とその他の仕事）、二哥 900 元（力仕事）だった。二哥はたいへん立腹し、工場をやめると言い出した。領工は会議後におこなう予定だった宴会の費用 500 元を二哥に手渡そうとしたが、彼の怒りは収まらなかった。

二哥の解釈によると、この時期、大姐夫、大哥、四哥はみんなで二哥をいじめたという。四哥が悪知恵を出し、大哥が大姐夫に吹き込み、大姐夫が鵜呑みにして実行したというのである。四哥は、巧みに横槍を入れて二哥に溶接の技術を習得する機会を与えなかった。大哥は、工場には力仕事が多く、二哥がやらないのなら、さらにふたりの工人を力仕事のために雇わなくてはならないと大姐夫に吹き込んだ。大哥や四哥は、二哥が養豚や農業で儲けていると考えて嫉妬し、いろいろと策略をめぐらしては二哥の昇給を邪魔したというのである。

後日、大姐夫は二哥の気をなだめるために宴席を設け、その席で彼に 1300 元の賃金追加を約束した。また、大姐は野菜を売って貯金した 100 元と、二哥の家族が着る衣服を送った。（大姐夫は 90 年頃から心臓を患うようになったが、妻の弟妹たちのあいだで頻繁に生じる揉め事は病状を悪化させた原因のひとつである）。

96 年、四哥は大姐夫から 1 万元を借りると、それを元手に木材の買付販売を始めた。工場には、二哥が溶接技術を学ぶのを邪魔する者がいなくなった。二哥は、帰宅すると水をいれたバケツを片手に持ちながら食事をし、3 ヶ月かけて溶接に必用な腕の感覚を養った。ある日、二哥は決心して溶接銃を手にした。すると、すぐさま大哥が止めにかかった。「大哥、おれは大哥の給料をもらっているわけではないだろう。おれが溶接をしたところで、大哥は何も損をすることはないはずだ!」。大哥に呼ばれて大姐夫がやって来ると、二哥にチャンスを与えて溶接の技術をみてみることにした。40 分後、二哥は初めて鉄板の溶接に成功し、大姐夫の信頼を獲得した。

97 年、大哥も工場をやめて床板の製造を開始した。二哥はその後も 1 年間工場で働き、98 年に工場をやめて床板を始めた。

③養豚と農業

大姐夫の工場で働き始めた頃、二哥の家庭ではこどもが大きくなり、工場の賃金だけでは生活が苦しくなっていた。二哥には 3 人のこどもがいる。当時、長男と長女の中学、高

校の学費に3万円が必要だった。

二哥はこどもの学費を稼ぐため、早朝と晩の時間を利用して養豚を始めた。早朝3時に起床して仕事を始める。豚小屋は毎日清掃して清潔に保たなければならない。豚の飼料は残飯に豆腐殻、トウモロコシの粉、添加剤を加えて作るが、この残飯の確保も骨の折れる仕事である。工場の1時間半の昼休みに、荷車を引いた自転車にのって数キロ離れた市の中心部まで出かけて行く。ホテルやレストランが捨てる残飯を集めて回るためである。こうした残飯の獲得をめぐっても激しい競争が存在した。養豚をする者が多いからである。二哥は、ホテルやレストランのためにごみ捨て場の清掃をおこない、その見返りとして残飯を安く譲ってもらった。また、大姐夫の紹介を通じて、外事弁公室の設計したホテルから残飯を譲り受けた。二哥は、春節になると外事弁公室の幹部に豚肉を届けてそのお礼とした。

養豚を始めたとき3000元が必要だった。飼育小屋1000元、10匹の子豚800元、子豚を産ませるための母親豚1匹、飼料や予防薬、その他雑費に1000元ほどを費やした。その後、平均して20匹、多いときでは40匹ほどの豚を飼育した。豚1匹につき利益は240元/年ほどだった。当時、龔家溝にやって来て子豚を販売する外村人の業者がいた。子豚は7、8ヶ月たつと大きくなって売ることができる。その頃になると、外村人が再びやって来て豚を購入していった。

工場の仕事と養豚に加えて、二哥は2畝の農地（48元/畝/年の請負費）を耕作し、自家消費用の野菜を栽培した（兄弟のなかで農業をしているのは二哥だけである。二哥の二男は3歳のとき脳炎を患い、歩くことができない。大姐夫は、生活負担の重い二哥のために農地の分配を龔家溝幹部に依頼した）。98年、この農地はバイパス道路建設のため国によって収用され、補償金として村政府から12400元が支払われた。補償金額は、村との請負契約15年のうち、まだ残っている年数と年間の作物収量の市場価格を乗して算出された。その他、二哥は、山腹にある4畝の荒地を年間14元/畝で請負い、大豆、トウモロコシ、コウリャンなどを栽培した。毎年350～400kgの収穫があり、豚の飼料に用いた。

98年末、二哥は多忙な生活に終止符を打った。第一に、脳溢血で倒れた母親を引き取り自宅で看病するため、第二に、長男が高校を卒業したことで家計に余裕ができたからである。二哥は、それまでに貯めてきた資金を元手にして宅地に簡単な作業場を作り（[図7-2]参照）、自ら床板の製造を始めることにした。

2) 床板生産における協同と離反

床板の製造を始めたのは、大哥 97 年、二哥 98 年、三姐夫 95 年、四哥 96 年であった。なお三哥は 99 年に病気で亡くなり、二姐夫婦は 97 年から雑貨店の経営を始めた。

床板生産における兄弟間の協同だが、資金融資の面でみると、大姐夫と大姐の弟妹とのあいだには密接な関係がみられる。彼らが床板の生産を始めたとき、大姐夫は 1 万元以上の融資をしている。一方、大姐夫も弟妹たちから借金することがある。弟妹のあいだでも金銭の貸借は頻繁におこなわれている。

大姐夫が姻戚の弟妹に融資する場合、基本的に利子につけない。ただし、大姐夫が実の兄弟姉妹にたいして融資をおこなうときは年 2 分の利子をつけている。大姐夫は工場の経営で妻の弟妹たちと苦楽をともにしてきた。感情的な親疎が利子の有無に表れている。

大姐夫と三姐夫の関係だが、87 年以降、東方機械廠の諸権利がうやむやのうちに三姐夫に渡ったことはすでに述べた。現在、彼らの関係はどうだろうか。例えば 2000 年 7 月に三姐夫は大姐夫に頼んで蒸気窯を作ってもらった。大姐夫は利益なしの 23000 円で蒸気窯を製造し、三姐夫に提供した。このことからわかるように、過去のことは彼らの関係に大きな影響を与えていない。とくに大姐夫の個人的な資質が、ふたりの関係を良好なものに保っている。

三姐夫と大哥とのあいだでは次のようなことがあった。大哥の宅地は、貯水池の傍の山腹にあり、村の中心部から 1 キロメートルほど離れたところにある。舗装道路は大哥の家まで通じておらず、当然、床板の販売には不向きな場所である。97 年、大哥は立地条件のよい三姐夫の作業場と乾燥窯（土窯）を 5000 元／年で借り、大哥媽と床板を作りはじめた。2000 年 3 月、三姐夫は他の者と賃貸契約を 8000 元／年で結び、大哥夫婦を追い出した。大哥はたいへん立腹し、他の場所で作業場と土窯を 8000 元／年で借りた。こうしたいざこざにもかかわらず、彼らふたりは木材購入に一緒に出かけるなどして合作関係を続けている。

大哥と四哥の合作では以下のようなことが生じた。大哥が三姐夫の作業場を借りていた頃のことである。大哥は床板の加工を担当した。四哥は木材の買付けと床板の販売を受持った。彼らの合作は 97 年 1 月から始まり、その年 12 月までに 3 万元以上の利益があった。四哥は利益を手にとると、自宅に電話を設置したり（2700 元）、飲み食いなどで使い込んだ。その後、四哥は大哥に 7000 元だけを渡し、2 万元を自分の手元に残した。

97 年に合作を始めたとき、大哥は大姐夫以外の親戚や友人から年利 3 分で 1 万元の借金

をしていた。四哥から受け取った 7000 円で借金の一部を返済すると、手元にはいくらも残らなかった。大哥は立腹し、四哥との合作を 1 年で解消した。ちなみに大哥は四哥と合作を始める前、二哥にも参加するよう誘っている。しかし二哥は、責任田の耕作で四哥にだまされた経験があるので断った。大哥は二哥を「機を見る目がない」といって罵ったが、結果は二哥の心配したとおりであった。

3) 母親の介護をめぐる協同と離反

兄弟姉妹の母親は脳溢血が原因で数ヶ月の寝たきり生活を過ごし、2000 年の秋に亡くなった。最期、母親は二哥の自宅で息をひきとった。母親の介護をめぐって、兄弟姉妹のあいだではさまざまな矛盾と葛藤が生じた。

二哥は言う。「道理からすれば、大哥や四哥が母を介護するのが当然だった。私は生れるとすぐ、母の姉のもとにあずけられた。養父は私が 1 歳のとき脳出血で亡くなったが、私のために 600 元を残してくれた。1956 年、私は実父の家にもどった。ある日、父は大哥と私をつれて百貨店にでかけた。父は大哥に木綿の靴と帽子を買ったが、私には布の靴を買おうとした。私がいないというと父は突然私を平手打ちにし、足を何度も蹴った。その後、私は父母のものには手をつけないようにした。市場に落ちている野菜を拾い集めた。それを売れば 0.1～0.2 元になり、1 週間の生活費として十分だった。24 歳で結婚したが、そのとき使ったお金は 600 元だった。つまり養父が私に残してくれたお金だけである。確かに母には命を授けてくれたことに感謝している。けれども、もし養母が生きているなら、きっと養母を優先してこの家に引き取っただろう」。

「母が脳溢血の治療を終えて退院する前、兄弟姉妹は四哥の家で一日、会議を開いた。大姐夫、二姐夫、三姐夫もやって来た。実の息子たちは誰も母を引き取ろうとしなかった。私の意見はこうだった。四哥が母の面倒をみるべきだ。四哥は生れてからこのかた、ずっと母と一緒に暮らしてきた。結婚の費用は母に出してもらい、母の土地家屋を売却したあとの金も四哥がすべてもっている。四哥のこどもの面倒は母がみてきた。私の下の子が生まれたとき、誰も面倒をみるができなかったので、紐にくくりつけてオンドルの下に落ちないようにした。その後、病気になって歩けなくなった。もし母がそばにいてくれたなら、こんなことにはならなかったはずだ」。

「大哥にも母親を介護する責任がある。長男だからだ。結婚のとき 2700 元のお金を使ったが、そのうちの 600 元は養母が父に預けた私の金だった。私が結婚するときは、家にお

金がなかった。仕方なく、清原（撫順市東部の満族自治県）の養母を訪ねていった。そのとき養母は涙を流しながら、初めてこの 600 元のことを私に教えてくれた」。

「この会議の日、大哥は私に言った。『妻は母を介護することはできない。下々の世話をすると吐き気がして飯も喉を通らない。母がうちにくれば数日のうちに妻が死んでしまう。四哥もだめだ。四哥媽も母の介護ができない。もし二哥が母を引き取らないというのなら、今後おまえは赤の他人だ！』。それを聞いて大姐夫が初めて口を開いた。『お義母さんは私の家に来たらいい！ 私が面倒をみるよ！』。そのとき私は思った。実の息子がいるのに、息子が母親を引き取らず、娘の家に引き取らせるとはたいへん面子のない話だ」。

「結局、母親は私が引き取ることにした。98 年末、私の月收入は大姐夫の工場から 700 ～800 元、養豚 400～500 元、部屋の賃貸 100 元で合計 1300 元だった。みんなは母の介護に必要な費用を 1700 元と計算したが、私は 1000 元で大丈夫だといった。そこでみんなは、毎月 200 元を私に渡すことに決めた」。

2000 年 7 月、母親が二哥の家に来てからすでに 1 年半以上が経過した。このあいだ四哥は 14 ヶ月分、大哥は最近 4 ヶ月分の介護費を二哥に渡していない。また、四哥は 2000 年の春節から、大哥はここ 5 ヶ月、母親の顔を見に来ることもない。二姐や三姐も最近 3 ヶ月姿をみせない。大姐が月に 3、4 度、見舞いに来るだけである。

二哥は次のように話した。「兄弟や妹たちは毎日肉や肴を食らって酒を飲んでいるというのに、母親にはビター文出そうとしない。この前、頭にきて四哥のところに行くと、反対に四哥媽は私にこういった。『あんたがやりたいから老人の世話をしているんでしょ！ だれもあんたに頼んだ覚えはないわよ。最近はずかしく金の使いっぷりもいいんだろうね！ 老人はね、私たちのところで病気になったわけじゃないんだ。こことは関係のない話だよ！』。四哥もいった。『やるよ、やるよ、金が欲しいんだろ！』。私は悔しさのあまり涙がとまらなかった」。

「思い起こせばこんなこともあった。四哥が結婚するとき、母親や大姐は大反対して認めなかった。途方にくれた四哥は、ある晩私のところにやって来て、私の前に躓き結婚の許しを嘆願した。私は親に成り代わって彼らの婚約を取りおこない、結婚の面倒をみてあげた。今では、だれが彼らにとって大切な人間だったのかを忘れてしまったのだろう。私は四哥にお金を請求しているのではない。ただ、母親の姿を見に来るだけでいいと言っているのだが……」（4）。

（４）床板生産以外の選択

大哥、二哥、三姐夫、四哥は床板の生産を始めたが、二姐夫婦だけは 97 年から雑貨店の経営を始めた。本節で明らかにしたいことは次の二点である。第一に、二姐夫は料理の才能と大姐夫のネットワークおよび資金援助によって雑貨店の開店にまでこぎつけた。雑貨店の開店に至る過程について、親族ネットワークの利用を焦点に整理する。第二に、二姐夫は農村社会の顔役でもなく、また村の主流を占める床板生産者でもない。二姐夫から見た場合、龔家溝の床板生産はどのように位置づけられるのか述べておきたい。

１）雑貨店の開店に至る過程 ―顔役が後押しした料理の才能を生かす道―

16 歳、まだ吉林省の実家にいたとき、二姐夫は村の結婚式で料理をつくり、「歳が若いのに料理がうまい」と多くの人から称賛された。二姐夫の料理の腕前は龔家溝でも有名である。結婚式、「上梁」（家の新築で梁を掛け終えたときにするお祝い）、「満月」（赤ん坊の満 1 ヶ月を祝う行事）などのお祝いがあるとき、村の人は二姐夫か HW のどちらかに頼んで農村の宴会料理を作ってもらふ。村には調理師免許を持っている者が十数人いるが、農村の宴会料理ができるのは彼らふたりだけである。2000 年 6 月には 38 卓もの宴会料理をひとりで作り、1200 元の謝礼を受けている。二姐夫は、雑貨店がなくても料理人として働けば、月に 1000 元は稼げるという。

二姐夫の料理の才覚は、床板の小戸経営者となった他の兄弟とは異なる道を選ばせた。既述のように、87 年に大姐夫の工場が三姐夫の手に渡り、88 年には大哥、二哥、二姐夫、四哥はともに工場を去り、炭鉱や野菜市場などで働いた。二姐夫は他の兄弟と一緒に同様の仕事にも従事したが、一方で料理の勉強にも励んだ。87 年 12 月から 3 ヶ月間、撫順市飲食服務会社が主催した調理講習に 300 元の学費（大姐夫が融資）を払って参加し、レストランでの実地教習の後、撫順市と遼寧省の調理師資格を得た。その後は 89 年の春まで撫順北駅付近のレストランで働き、月に 300～600 元の賃金を得た。

89 年春天のある日、大姐夫が二姐夫の働いているレストランにやって来た。「今晚、うちに来客がある。仕事が終わったらうちによって料理を作ってくれないか」。仕事を終え大姐夫の家に寄ると、大姐夫は最上の食材を買い揃えて二姐夫が来るのを待っていた。「こちらは施家溝大隊の H 大隊長、こちらは FH 婦女主任」。二姐夫は大姐夫から来客を紹介された。二姐夫は彼らと初対面だった。当時、大姐夫と大隊長の関係は、さほどよいもので

はなかった。以前、大姐夫は施家溝大隊と工場施設の請負契約を結んだが、業績不振のために追い出された経緯があるからである。

二姐夫が料理を作り終わると、大姐夫は二姐夫も食事に同席させた。食事が終わりに近づいた頃、大隊長は大姐夫にこう話した。「大隊には溝外に総合廠（現在の東昇鍋炉廠）があるが、私はそこにレストランがあれば便利なものだ」と長年思っていた。今までは大隊に來客があっても、よそのレストランで接待するしか方法がなかった。もし本人にやる気があるなら、総合廠にレストランを開いてみてはどうか」。

大隊長の示した条件は、請負費 5000 元／年の支払いは、大隊がレストランで飲食した料金によって代えるというものだった。二姐夫はレストランの請負経営に同意した。それから 20 日後の 1989 年 5 月、レストラン「施家酒店」が開店した。開店に必要な資金 2800 元は大姐夫から借りた。毎年、大隊の食費は 7、8 千元になったので、請負費との差額数千元を大隊から受け取ることができた。93 年、周辺の工場も食堂を作り始めると、施家酒店の客が減り始めた。同年 12 月には店を閉め、その後 97 年の春まで二姐夫夫婦は大姐夫の工場で働いた。

二姐夫がレストランを経営したことは、大姐夫にも利益をもたらした。92 年、大姐夫は施家溝大隊と再び請負契約を結び、総合廠の西半分の施設を使って機械加工を始めた。93 年に施家溝の財政が悪化すると、施家溝書記はレストラン売却（4 万元）の話をもちかけた。二姐夫はこの話を断わったが、総合廠が売りに出されることをいち早く知ることができた。その後、大姐夫と二姐夫は、総合廠の所有権を争っていた施家溝と新旗の村政府のために、何度となく無償で機械の加工や修理をおこなった。入札の競争相手は大姐夫よりも大きい価格を提示したが、大姐夫は激しい競争をしのぎ、95 年 4 月に 20 万元で総合廠を買取ることができた。

2) 雑貨店の経営からみた龔家溝

二姐夫夫婦は 97 年 3 月 15 日から食料雑貨店の経営を始めた。必要な資金 2 万元のうち半分は自己資金から、残り半分は大姐夫の融資に拠った。当初は道路沿いの一部屋（2000 元／年）だけを借りたが、2000 年にはさらに一間半を借りて合計二間半となった（1 万元／3 年）。倉庫や休憩場所が確保されて店舗が広くなり、貯蓄も 7 万元に増えた。2003 年頃には都市部に店舗を借りて雑貨店を経営することも計画している。

二姐夫夫婦と長男が生活する部屋は別に三間あり、また別の一間半は鉄嶺市から来て「大

[表 7 - 2] 雑貨店の主な品物 (2000 年 7 月)

単位：元

野菜類：1 斤 (500g) あたり		食品・卵類	
夏季 (冬季)		包子 (自家製)	0.5/斤
たまねぎ	0.8 (1.2)	饅頭 (自家製)	0.5/斤
キャベツ	0.4 (1.0)	インスタントラーメン	0.5~3.0
セロリ	0.5 (1.6)	落花生 (しょうゆ味)	4.0/斤
なす	0.4 (2.0)	鶏卵	1.9/斤
ジャガイモ	0.5 (0.8)	ハム	1.0/200 g
ねぎ	0.5 (1.0)	コーラ	5.0/500ml
白菜	0.6 (0.3)	調味料	
きゅうり	0.3 (1.5)	砂糖	2.5/斤
トマト	0.4 (2.0)	塩	0.8/斤
にんにく	2.0 (4.0)	酢・醤油	1.0/斤
しょうが	3.0 (3.0)	肉・魚類	
煙草		豚肉	5.5/斤
黄山	13.0	鶏肉	3.8/斤
5 5 5	11.0	太刀魚	6.5/斤
紅河	5.0	日用雑貨品	
石林	4.0	石鹼	4.0
力士	1.0	歯みがき粉	1.8~3.0
酒類		台所洗剤	3.0
撫順白酒	28.0	洗剤	2.5
榆樹王 (白酒)	15.0	炊事手袋	2.5
徳恵大曲 (白酒)	6.0	トイレットペーパー	6.0
小焼王 (白酒)	1.0	殺虫剤 (スプレー缶)	8.0
ビール (大瓶)	1.3	ノート	0.5
		鉛筆	0.3

(出所) 2000 年 7 月、筆者による二姐夫婦への聞き取りから。(注 1) 中国は 1 斤=500 グラム。この雑貨店では斤ごとの利潤が野菜 0.1~0.2 元 (最低)、惣菜・ハム 1.0 元 (最高) で価格を設定している。

(注 2) 大戸のタバコは「5 5 5」など、一方小戸は普段「力士」など、接客時は「石林」「紅河」など。

鮑」の小老板をしている夫婦に 100 元／月で貸している。長男は 2001 年 5 月頃に結婚する。その後は、三間の部屋を長男夫婦に与え、二姐夫婦は雑貨店の家屋に移り住む計画である。長男の結婚後、雑貨店の経営は長男夫婦と共同でおこなう。長男が品物を仕入れ、娘が店番するなど役割分担を決める仕事もあるが、基本的に店の経営は二姐夫が指揮する。利益の分配は二姐夫婦と長男夫婦が均等だが、新しい惣菜の研究に必要な費用は二姐夫が負担し、その利益は長男が手にする。

雑貨店経営の生活は毎日、朝が早い。二姐は 3 時に起床して饅頭の生地作りにとりかかる。二姐夫は 4 時頃起床してコンロに火をつけ、一鍋（200 個）の饅頭を蒸す。その後、荷車をつけた自転車に乗って都市部へ商品を仕入れに行く。多いときには 7 ヲ所ほどの専門市場に寄り、ソーセージ、惣菜、肉、魚介類、日用雑貨品、煙草などを仕入れる。店は毎晩 9 時まで営業し、10 時頃には就寝する。

2000 年は店を始めて以来、もっとも景気が悪い年である。床板生産は、とくに小戸などでかつての勢いを失い、雑貨店の経営に直接影響している。二姐夫はこうした状況を次のようにみている。「現在、常連客は多くないが 30 人ぐらいいはいる。うちのような小さな店では 1 日に 50 人ぐらいの客があればやっていけるので、今でも店の経営に大きな問題はない。月に 1000 元の利益はあるのでそれで十分だ。それにひきかえ、床板はたいへんだ。リスクが大きい割に利益が小さい。一回の売買で 1000 元の利益があればいい方だ。売買は多くて月に 2、3 回。売れない時期が数ヶ月間続くこともある。木材の品質が悪ければまったく売れない。それにひきかえ雑貨店では 100 種類ほどの商品を扱うので、まったく物が売れないということはない」。

「以前、床板の景気がいいときは月に 2000～3000 元の利益になった。2、3 万元を手にする者も少なくなかったから、買い物で 50 元使おうと彼らにとっては何ともなかった。今ではトラック 1 台さえ目にしない日がある。こんなに安い野菜でさえ売れ行きが悪い。ほとんどの客は付け払いで、年末に一括して集金する。最近困っているのは、代金を支払わずに故郷へ帰る外村人が増えたことだ。以前では、年中、床板の臨時工の仕事があったので、正月を迎える前に帰ってしまうことはなかった。今では仕事がないので、外村人は長く村に滞在しようとしなない。なかには 1000 元あまりの付けを残して消えてしまう者もいる」。

床板の不景気による影響以外に、二姐夫の雑貨店が抱える問題はふたつある。ひとつは重い税負担、もうひとつは 99 年頃から始まった小集市（東街）の存在である。

税負担や手数料には次のようなものがある。工商管理費（河北郷工商所）240 元／季節、所得税（河北郷税務署）40 元／月、衛生費（順城区防疫ステーション）5 元／月などで、あわせて 1500 元／年。また、工商執照、税務執照、衛生執照の検査費が各 200～300 元／年である。以前は品物の仕入れの際にオートバイを使って荷車を引いていたが、管理費に年間数千元かかるので使うのをやめた。（二姐家族の生活費の主な出費項目は、部屋代 3300 元／年、二哥に渡す母親の介護費 2400 元／年、保険（医療・養老・傷害・長男の終身保険）3000 元／年／3 人、電話代 600 元／年、携帯電話 200 元／年、新築・出産・冠婚葬祭などの祝儀・香典 5000 元／年である）。

小集市について二姐夫は次のように考えている。「東街に立つ小集市の脅威は大きい。小集市で商売している者は管理費も税金も納めていない。毎日午後 4 時頃に村外からやって来て 7 時半までいる。買い物時に市を出すので私の店の客はほとんど取られてしまった。今、常設店の経営者と協同して工商管理局と交渉することを考えている。もし管理部門が彼らから税金を取るならば、彼らはここで市を出すことができなくなる。もし私たちの協同が失敗すれば、自分で対処法を考える。工商部門が管理費を取りにければ、『客は東街の市に取られたから金がない。東街に行って管理費を取ってきなさい。そうすれば私も管理費が納められる』と言うつもりだ。それもだめな場合は、私も東街の市に参加する。彼らと同じだからね。税金も管理費も納める必要がない！」。

実際、二姐夫は 99 年末から 2000 年の 7 月まで、わずか 2 か月分の管理費しか納めていない。工商部門の者がくると、「金があればいつでも管理費を払うよ。そばで立って見ていなさい」と言う。しばらくすると役人は痺れを切らして帰っていくという。

（5）受け継がれる親族のしがらみ・期待される顔役の存在

ある兄弟姉妹の歴史から明らかなのは、生活の安定への努力は親族のしがらみのなかでおこなわれ、顔役とはそうしたしがらみを支えることのできる存在だということである。親族関係を媒介にしてしがらみは継承され、継承された先で新たな顔役の存在が期待される。本節では、第一に、息子の結婚を通じて継承されるしがらみ、第二に、親族を頼った移住の連鎖で継承されるしがらみについて、具体的な事例から考察する。

1）長男の結婚と二男の将来

二哥媽と長男（1977 年生）は 2000 年 4 月 6 日、吉林省東遼県金洲郷大肚村を訪れた。長男のガールフレンド HG の実家を訪れ「訂婚」について相談するためである。彼らは HG と同郷の YQ の紹介を通じて 99 年 11 月に知り合った。YQ は龔家溝で臨時工をしている。

本来、訂婚は息子の父親が女方に出向くものだが、二哥は母親の看病に忙しかったので二哥媽が代わりに行った。訂婚では、以下のようなことを相談する。1）女方の父母と相談し、結納金と「彩礼錢」（女方の母親に渡されるお金で、娘の出産と養育の苦労を労い感謝の意を表すもの。農村の貧しい家庭にたいしては 1000 元程度の彩礼錢だという）の金額を決める。2）家具、電化製品、金銀装飾品など、どのような要求があるかガールフレンド本人に尋ねる。3）結婚式の日取りを相談する。

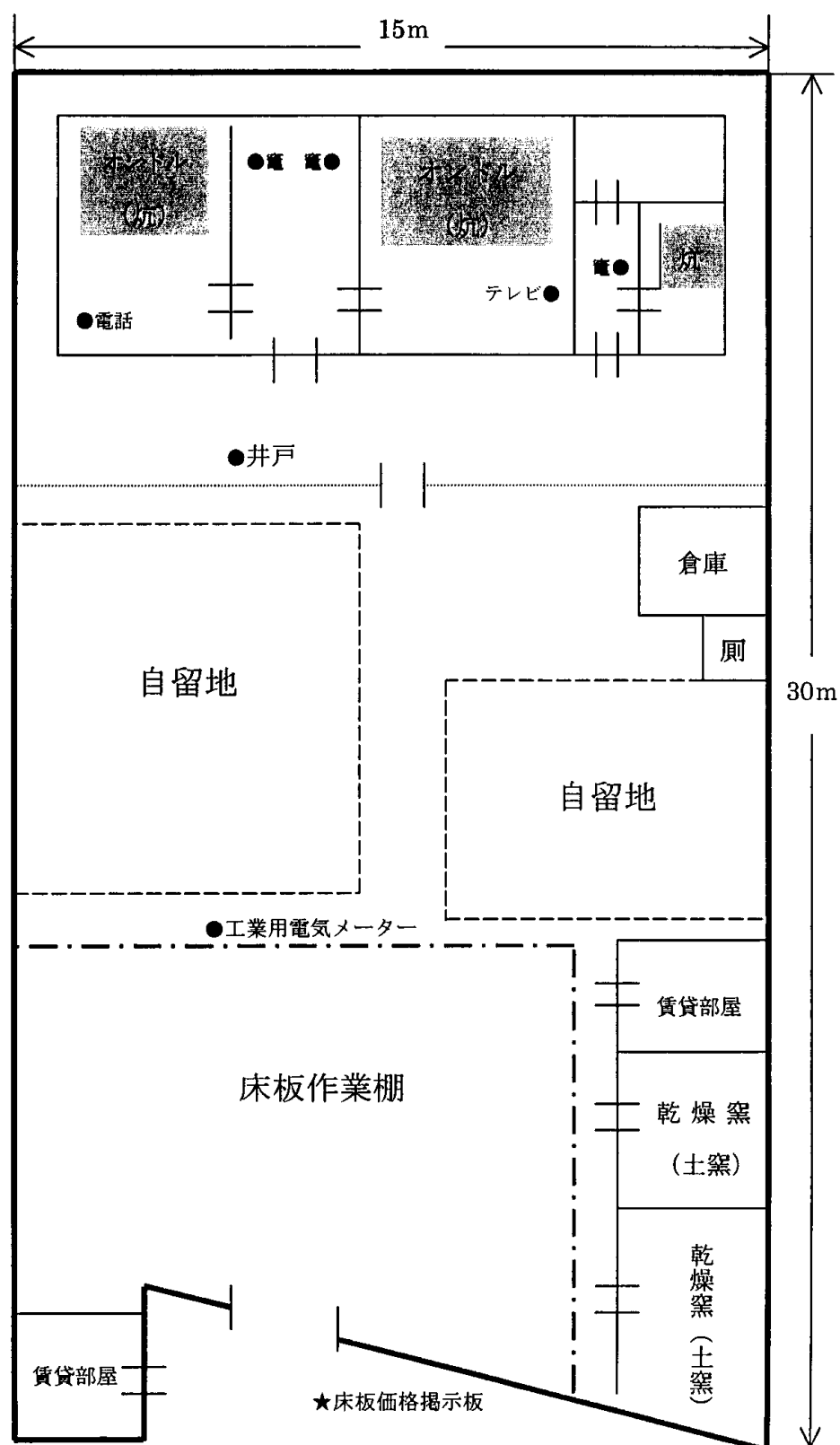
二哥媽は龔家溝に帰ると HG 家の要求を二哥に伝えた。二哥は十分負担できる範囲だと考え、長男の結婚に同意した。息子の結婚に同意する理由はさまざまである。第一に、農民の娘であるほうが龔家溝の生活に適応しやすい。第二に、3 人のこどもがいて経済的な負担が大きい。とくに末っ子は今年 21 歳になるが歩行が困難で学校に通う機会もなかった。将来の負担を考えると長男の結婚で多くの金を使うことができない。第三に、ふたりのあいだの感情がたいへん良い。第四に、家庭のことは二姐媽が決める。二姐媽は嫁の条件として、背が高く健康なことをあげる。中国では「高個子門前站、不穿衣服也好看」（背の高い者が門前に立てば、衣服を着ていなくとも見栄えがする）という。

二哥は財産の相続について次のような計画を立てている。長男が結婚した後、三部屋のうち西房を長男夫婦に分与する。台所は共用だが、竈と食卓を分けて家計を別にする。訂婚や結婚の費用とは別に、1 万元を長男に渡す。これを元手にトラック 1 台分の木材を購入し、床板を作らせる。設備、工具、工業用電気は二哥のものを使い、床板販売後の利益はすべて長男夫婦のものとする。もし赤字になれば、損失分は二哥が補填する。

二哥は言う。「息子が独立するとき、父親はそれを支える必要がある。10 数年にわたって苦勞しながら蓄えてきた貯金も、長男が独立するにあたって、すべて使い果たす。しかし、親戚や友人から借金する必要がなく、長男の自立を援助できるので満足している」。

二哥が長男の自立を最大限に援助する背景には、二男の将来への備えもある。二男は学校に通えず、読み書きが十分にできない。歩行も不自由なので、今後修得できる技術も限られている。二哥の考えはふたつある。ひとつは、二男のためにできるだけ多くの貯金を残し、もし長男夫婦が同意すれば、二男に生活費を持参させて彼らと同居させることであ

【図 7 - 2】 二番の宅地・住居



(注) 賃貸部屋、自留地、部屋の使用状況については章末の注 (5) 参照のこと。

る。もうひとつは、三輪オートバイの免許を取らせて運送業に従事させ、経済的に自立させることである。しかし、後者の実現可能性は小さい。

おそらく二男の将来は、二哥の兄弟姉妹家族がそうであったように、ごく近い関係にある親族の援助の有無に左右されるだろう。親族ネットワークで顔役的存在につながることができるかどうか。二男の将来は顔役的存在（個的資質）に依存するという意味で、きわめて偶然的なものに左右されている。

2) 第二次移民 ―親族を頼って繰り返される移住―

大姐の弟妹家族は、大姐夫を頼って吉林省から龔家溝に移ってきた。彼らを「第一次移民」と呼ぶとすれば、その後、大姐の弟妹を頼って龔家溝にやってきた親族たちは「第二次移民」と呼べる。大哥夫婦は例外だが、その他の兄弟姉妹には彼らを頼って龔家溝にやってきた親戚家族がいる。例えば、三姐夫の場合、88年から89年にかけて吉林省遼原市の故郷から両親、一番目の弟夫婦と子ども1人、二番目の弟夫婦と子どもふたり、それに二番目の妹（すでに離婚）が龔家溝にやってきた。2000年、彼らはみな床板の仕事に従事し、両親は二番目の弟（末男）と同居している。四哥の場合も四哥媽の親戚が龔家溝にきて床板の臨時工をしている。

第一次移民の際に大姐夫婦が味わった苦労を、第二次移民の際には大姐の弟妹たちが経験している。彼らは第二次移民から面倒をみてもらうことを期待されるが、その結果、親族のあいだに矛盾が生じ、決定的な離反に至ったところもある。もちろん、第二次移民とのあいだに良好な関係を維持している場合もある。

以下では、離反のケースを二姐夫婦に、良好なケースを二哥夫婦にみてみよう。

①二姐夫婦の場合

二姐夫婦を頼ってやってきたのはM（1968年生）とMの妻（1968年生）それに子ども（1994年生）の3人である。95年、二姐夫の故郷である吉林省遼原市東遼県建安鎮革新村からやってきた。

Mは二姐夫の甥で、彼の二番目の兄の息子である。Mが7歳のとき両親は離婚し、父親は別の女性と再婚した。継母はMに冷淡だった。93年にMが結婚すると父親は住んでいた家屋を売却し、後妻とともに吉林省の永吉に引っ越した。M夫婦は崩れかかった一間半の土房に住み、農業をしながら何とか飢えをしのいだ。94年、二姐夫の母親が龔家溝にやって来てMのことを相談した。二姐夫はMの家族の面倒を引き受けることになった。

M が龔家溝にやってきたとき、大姐夫はちょうど総合廠の改築工事をしていた。建築隊の責任者 ZG とは関係がよかったので、二姐夫は ZG に頼んで M を建築隊で働かせてもらうようにした。M は毎月 600～700 元の賃金を得た。

M 家族が来る前、二姐夫婦は二間の部屋を別の外村人家族に毎月 100 円で貸していた。M が来ると、二姐夫婦は以前の住人に部屋を空けてもらい、M 家族に住ませた。二姐夫は M に言った。「部屋代は経済的に余裕ができた頃に払ってくればいい」。

M の生活は日増しによくなった。95 年頃は床板の景気が最もよいときで、M は建築隊の仕事を数ヶ月で見切りをつけると、二姐夫から 3000 元を借りて小鉋を購入し小老板となった。朝早くから晩遅くまで、M と妻は仕事のある工場にはどこにでも行き、大老板の発注する小鉋の工程を請負った。98 年頃からは C の経営する床板工場で小鉋を始めた。C は床板生産の他に、上海などの大都市で床板の取次販売もしている。仕事熱心な姿が C の目に留まり、M に「配貨」の仕事を請負わせるようになった。配貨とは、C が必要とする樹種、品質の床板を他の床板工場を回って確保する仕事である。必要な床板が揃うと、C は運送会社のトラックを手配して販売先に輸送する。M は配貨を請負うことで 1000 元／月の報酬を C から得た。M はこうした小鉋や配貨の他に、98 年後半からは機をみて自らも木材の購入に出かけ、作業場を借りて床板の製造をした。

M は年収が 3～5 万元となって経済的に余裕ができたが、二姐夫婦に一度も家賃を払おうとしなかった。99 年の春、業を煮やした二姐夫は M 家族を立ち退かせた。「甥や愚鈍な彼の妻は、だれが彼らを世話しているのかまったく理解していない。もし理解できるなら、私たちは彼らを追い出しはしなかった」。二姐夫婦が M 家族のために費やした金は、部屋代、飲食代、電話代など 4 年間で 6000 元になった。

M 家族が龔家溝に来たばかりの頃、二姐夫は彼らのために龔家溝の戸籍の取得を世話しようと考えたが、結局実行しなかった。二姐夫は言う。「甥は龔家溝に来て 5、6 年経つが、今でも出稼ぎの臨時工のような生活を続けている。しかし、私の知ったことではない。最近、甥は路上で私たちと出会っても、赤の他人のような素振りで一言も口をきこうとしない。四哥のところにきた親戚もそうだったように、恩は仇で返されるだけだ。吉林省の私の故郷には龔家溝に来るのを望んでいる親戚が多い。しかし今後一切、私は親戚の世話をみることはないだろう！」。

②二姐夫婦の場合

二姐夫婦を頼って龔家溝にやって来たのは YQ (1974 生) である。YQ は 92 年、妻とと

もに吉林省遼原市東遼県建安鎮からやって来た。YQ は二哥媽の二番目の姉の息子である。ある日、定期市で野菜を売っていた娘と知り合い、その日のうちに結ばれた。その娘が YQ の妻である。その翌日、彼らは YQ の父親が二哥宛に書いた手紙をもって龔家溝に駆け落ちしてきた。手紙の内容は、二哥に彼らの面倒を依頼するものだった。

彼らが駆け落ちした理由は三つある。ひとつは、彼らは法定の結婚年齢に達しておらず、正式な手続きができないこと。第二に、YQ の実家はたいへん貧しく、結婚に必要な資金がないこと。第三に、妻方の実家はすでに娘の結婚相手を決めていたが、相手の男性に知的障害があり、娘は結婚に反対していたことである。

彼らの戸籍は現在でも吉林省のままである。96 年にはこどもができたが、この女の子には戸籍がない。また YQ の妻の母親は言語障害があるが、この女の子も同様に言葉がうまく話せない。97 年、妻の両親はふたりの結婚に同意した（こうしたなし崩し的な結婚をある人は「生米煮成熟飯」という）。妻の両親が結婚に同意した後も、彼らは正式に手続きをしようとしな。い。手続きの費用を節約するためだという。こどもは戸籍がないまま、これから先も過ごさなければならない。

92 年、YQ 夫婦が龔家溝に来たばかりのとき、二哥夫婦は現在の住居（[図 7-2]）ではなく、村の東部に一間半の部屋を借りて住んでいた。二哥の家族 5 人と YQ 夫婦は布団を分け合ってひとつのオンドルの上で寝た。1 年後、YQ 夫婦は自分たちで一間半の部屋を借りた。二哥は 96 年に今の住居を購入したが、依然として YQ たちの生活は困難な状況にあった。YQ の妻とこどもは病気がちで、数年間に医療費で 1 万元以上を費やしていた。二哥は、YQ 家族が吉林省の貧しい故郷に帰るのを不憫に思った。そこで、新しい住居の東房をふたつの部屋に分けて南側の部屋にオンドルを作り、YQ たちに住ませることにした（その後、二哥の母親が寝たきりの生活を送った部屋である）。

YQ 夫婦は 3 年間、二哥夫婦の部屋で過ごした。そのあいだ二哥は、部屋代、電気代、電話代、薪代など、一切 YQ 夫婦に要求することはなかった。二哥は仕事の面でも YQ の面倒をみてきた。YQ が龔家溝に来ると、二哥は大姐夫に頼んで YQ を工場で働かせてもらった。YQ の仕事はめまぐるしく変化する。大姐夫の工場 1 ヶ月、建築隊 3 ヶ月、家具製造工場 1 年 3 ヶ月（その後に倒産）、別の家具製造工場 1 年（その後に倒産）、二哥の東房に来た後は床板の臨時工を始めた。YQ は工具を持たなかったのも、トラックの荷下ろしや乾燥窯に床板を積上げる零工をした。二哥は知り合いの床板工場に YQ を紹介し、仕事の機会が多く得られるよう助力した。99 年、YQ は二哥から 1200 元を借りて小鉋を購入し小老板となっ

た。

二哥が病気の母親を引き取る時分には、YQ の生活も安定しつつあり、夫婦合わせて 1500 元／月の収入があった。YQ は 2000 年に両親が亡くなるまで、毎年 600 元を実家に仕送りしていた。また実家の負債 5000 元を肩代わりして返済した。その後、YQ の親戚で龔家溝に來た者は、二番目の姉夫婦、この夫の母親、さらにこの母親の娘夫婦などがおり、親族関係を媒介にした移住の連鎖が続いている。先にみた二姐夫婦のケースとは対照的である。

注

(1) 「上山下郷」の概略は次のようなものである。1968 年以降になると、「文化大革命」の発展は全国的な武闘と混戦、労働者階級の造反と奪権を経て、各省レベルで軍・党政幹部・大衆代表の結合による革命委員会方式の権力機構が樹立され、社会の混乱が收拾する段階に入った。66 年から 68 年に卒業予定の中学生、高校生は紅衛兵運動に参加したので、予定卒業年を 4 ヶ月から 2 年あまり過ぎていた。彼らは依然として学校に留まっていたので、学校の授業再開の障害となり、また彼らの進路が社会問題となった。当時、大学入試制度は廃止され、多くの工場や企業は生産活動が衰退していたので、通常の進学や就職の道は閉ざされていた。68 年 12 月、毛沢東は「知識成年が農村へ行き、貧農、下層中農の再教育を受けることはとても必要である」という指示を出し、中学・高校の卒業生を対象とした「上山下郷」運動が巻き起こった【葛，1999：65】。

(2) 中国社会の親族について、井上徹は滋賀秀三【滋賀，1958：19－22】を参照しつつ、次のように簡潔に説明している。本稿でも参照した基本的な枠組みである。「現在私たちが用いている親族という用語は、血縁関係および婚姻関係によって結ばれている人々の総称である。中国では、「親屬」という言葉がこれに相当し、「本宗」と「外姻」の両者が親族のなかに含みこまれている。「本宗」とは、自己と男系の血縁によって結ばれている人々（男系血縁親族）とその配偶者のことを指し、「外姻」は、婚姻関係をはさんだ関係であり、女系血族、妻の実家、娘の嫁ぎ先など、要するに本宗ではなくして、親類関係にある者をいう」【井上，2000：46】。

(3) 80 年代後半、龔家溝（施家溝大隊）の戸籍は、16 歳以上 60 歳未満であれば 800 元、その他は無料で取得できた。当時、手続きは比較的厳格だったが、大姐夫は村政府と関係をもっていたので、大姐の弟妹家族はみな龔家溝の戸籍を取得することができた。戸籍の価格はその後上昇し、96、97 年頃は 6000 元だった。2000 年は 1 万元である。戸籍取得の条件は、現金のほかにとくにない。最近数年間は床板が不景

気なので、外村人の多くは戸籍を買おうとしない。2000年の状況をいえば、施家溝にある派出所で「臨時戸口」（臨時居住証）を取得すれば、外村人も龔家溝に住み続けることができる。外村人は自ら手続きするよう義務づけられているが、実際には、派出所の者が村にやって来て手続きを催促することが多い。臨時居住費はひとり30元／月であるが、ほとんどの外村人はこうした費用の支出を避けたいと考えている。外村人に部屋を貸している大家が派出所の役人と面識がある場合、臨時居住費が免除されることもある。

（4）筆者は2001年4月末から5月上旬にかけて龔家溝を再訪し、彼ら兄弟姉妹にその後の状況についてたずねてみた。母親の死後、四哥は自分の非を認めて他の兄姉に謝罪し、兄弟姉妹は仲直りしたという。母親の死は、彼らにたいして大きな衝撃をもたらした。二哥の話によると、母親が死んだ後も、彼女が部屋のオンドルの上に座って外を眺めている姿を多くの親戚が目撃したという。また、二哥の息子の肩には、人が力強くつかんだ後にできるような真っ赤な手形が、母親の死後、数日間にわたって消えることがなかったという。こうしたできごとは、四哥にたいしてかつての親不孝を心から悔い改める機会を与えた。四哥は、数万元にもものぼる借金を返済するため、村の床板工場で零工（肉体労働）のアルバイトに毎日精を出すようになった。大哥や二哥は、四哥を知り合いに紹介し、彼が零工にありつけるよう協力している。兄弟間の仲直りは、次のできごとにも象徴的に表れている。4月末、大姐は全ての弟妹たちに、革靴をプレゼントした。5月7日の大姐の誕生日には、大哥、二哥、二哥の息子夫婦、二姐夫婦と息子、三姐、四哥夫婦と息子がお祝いにやって来た。二姐夫が料理をつくって振る舞い、宴会は翌日の未明まで続いた。

（5）二哥は、ふたつの「住房」（一間半）を外村人に貸出している。ひとつの住房には、父と息子LYおよび息子の婚約者JYの3人が住んでいる。父子は吉林省遼原市の出身で、父親は98年、息子は父親より半年遅く98年中頃に龔家溝にやって来た。父親は1953年生れ、息子は1979年生れである。彼らは二哥から一間半の住房（100元／月）、乾燥窯ひとつと床板製造の作業所（5000元／年）で借りている。息子は中学校を卒業の後、ビリヤードとビデオ上映室を経営していた。婚約者のJYは、1979年生れ、99年10月1日に龔家溝にやって来た。黒龍江省大慶の出身で、父母ともに農民である。JYの老姨（母親の一番年下の妹）が97年、夫とともに龔家溝に出稼ぎにやって来ており、今は自分たちで材木を買い付けて床板を作っている。この老姨が、99年11月JYにLYを紹介し、12月には双方の父親が面会して「訂婚」をおこなった。床板の景気が悪いので2000年末には吉林省の夫の故郷に戻り、雑貨店のような小さな商売をする予定だという。

もうひとつの住房には、出稼ぎ夫婦が住んでいる。朝、村のなかで臨時工をするために出かけ、晩になると戻ってくる。夫婦ともに黒龍江省出身で、もともと夫は小学校教師、妻は幼稚園の先生をしていた。夫婦ともに32歳前後の年齢である。黒龍江省の農村にいたとき、1ヶ月の収入は夫婦あわせて400元ほどだった。龔家溝では1ヶ月に1600元ほどの収入がある。

二番の自留地では、自家消費用の野菜として、きゅうり、セロリ、唐辛子、なす、トマト、レタス、えんどう豆などを栽培している。部屋の使用状況だが、西房のオンドルには二番の母親が 2000 年の秋に亡くなるまで寝たきりの生活を過ごした。2001 年以降、東房には長男夫婦が住み、西房の奥の部屋は未婚の長女、正房には二番夫婦と二男が寝起きする予定である。床板の作業場は 98 年に作られた。作業棚 1 万元、乾燥窯 4000 元、工業用電気 4000 元ほどの資金を要した。

終章 顔役の個的資質が立ち上げる村落生活

本稿では、現代中国村落の存立条件を、顔役という個性的人間のもつエネルギーに焦点をあててアプローチした。中国農村に関する社会学的な先行実証研究をまとめるなかで、「自己表出的顔役型村落」を中国村落の通底的構造として方法論的に定位した。龔家溝はこうしたタイプに分類される村落であり、その事例分析を通じて中国村落の存立構造を実証的に探ってきた。いかなる知見が得られたのだろうか。以下に整理しておきたい。

1) 理論的射程

本稿では、まず現代中国村落の類型化を試みた。そのねらいは、村落のもつ多様性の内容と偏差の幅を総体的に把握する枠組みを設け、調査村落の全体的な位置を明瞭にすることであった。仮に農村住民の生活組織として村落が成立するならば、中国村落のもつ多様性と偏差のなかで、いかなる要因によってそうした生活組織が構成されるのかを問う視点が必要だった。

村落の類型化では、まず村落の人的結合を支える要素として政治的経済的な構造条件に着目した。その上で顔役という個性的人間の存在を、政治的経済的構造を構造化するエージェントとしてとらえ、あらゆる村落に通底する構造特性とした。

本稿での顔役という言葉は分析概念として用いたものである。しかし、従来の研究において顔役の存在に言及したものはあるが、分析概念としてその意味内容が洗練されてきたとは言い難い。そこで顔役を、具体的事象のレベルでは「仲介者」（村落社会内外に顔が広い）、抽象的レベルでは「規範適用方法の選択者」（「規範の適用」を二者関係に影響を与えるなかでおこない、対面集団の蓄積を方向づける）として方法論的に定位した。顔役は、村幹部や企業経営者といった社会的属性に同定させて論じるのではなく、意味世界に積極的に関与する行為者としてゆるやかにとらえる必要があることを述べた。

以上のような分析枠組みにより、次のような理論的射程を確保することができた。

第一に、顔役を媒介にして村外社会の資源やシンボルが獲得されるという、村落社会の開放的側面をみることができるようになった。たとえ、「同族的規範優位型」や「地域団体型」など、本村人関係に基づいて利益の排他的専有がおこなわれ、村外社会にたいして閉

鎖的な傾向を示す村落においても、村落生活の閉鎖性（顔役が適用した規範的価値と、それに親和的な村民の価値志向）と開放性（顔役を媒介とした村外社会からの資源、象徴の獲得）の重層的プロセスのうちに、村民の生活を位置づけることが可能になった。

第二に、顔役的存在に焦点を置くことで、個人を社会変動の担い手としてとらえることができた。村民結合形態（本村人関係や村民自治）や経済基盤の性質（公有／私有といった所有形態、市場／国家資産寄生といった経済活動の志向性）は、顔役の指導力や威信がいかなる社会関係や物質的基盤に基づくのかを表すと同時に、顔役がいかなる社会関係や物質的基盤を築くことで顔役としての地位を確保してきたのかも示している。村民の結合形態と村内経済基盤を、顔役の個的資質およびそれと親和的な村民の価値志向によって媒介させることで、村落社会経済構造の動態／静態の両側面を分析射程に組み込むことができた。

2) 村落生活を立ち上げる中心的顔役／生活の細部の面倒をみる身辺的顔役

村落の事例分析では、農村住民の社会生活に強い影響をもたらす顔役に着目しながら、顔役の個的資質が生み出すさまざまな社会現象を通じて、現代化に生きる農村住民の姿を浮き彫りにした。

龔家溝は、都市近郊村、異姓雑居村で解放後から人口流入が激しい反面、山間村で人民公社時代から食糧供出の義務が免除されるほどの貧困な地域だった。村民は山の柴を都市住民に売る副業によって、かろうじて生活の糧を得ることができた。改革・開放後は農業の未発達、村有工場の不在にたいして、個人経営の畜産業や床板生産が発達した。木材購入や床板販売は全国規模の市場で展開されている。国家が農村戸籍者に課するような税金や負担金は村の特殊な産業形態のために免除され、村政府は村民を管理する契機をもたない。

龔家溝では、本村人／外村人という区別で利益を排他的に専有する傾向はない。つまり、同族的規範や地域団体的規範に基づいた本村人関係が形成されていない。本村人は村に戸籍がある者といった程度の意味しかない。村財政は 96 年からの土地使用権売却益に依存するが、土地の管理はすべて村幹部の手中にあり、「村民自治」を通じて村民の利害調整が制度的におこなわれることもない。

村政府は村民の生活にたいして、積極的な役割を担っていない。保安や工業用電気の管理は実力者が個人的におこなっており、村民間の積極的な協同関係は見出せない。むしろ生活の安定化は、個々の村民がそれぞれに取り結ぶ人間関係のなかでおこなわれ、生活の

うえでの「しがらみ」は村落に付着するのではなく、人々の人間関係自体にまわりついている。

それではなぜ、龔家溝という村の空間的構造を基礎にして（もともと同一の生産大隊だった施家溝と新旗の一部を含むが）、個人床板経営という生活パターンが、近隣の村落とは異なる形で確立されるのだろうか。人間関係をベースとするならば、床板生産は村落という空間的構造にとらわれることなく分布してもよさそうなものである。このように、村落生活が近隣とは差別的な形で成り立つメカニズムの解明こそが、中国村落の存立条件を明らかにするひとつの鍵をにぎる。

そこで注目したのが龔家溝における「緩やかなまとまり」であった。村のまとまりの契機や性質は顔役の個的資質（規範の適用方法やネットワークなど）によって方向づけられていた。確かに龔家溝では、顔役が選択した規範のあり方が構造的にタイトな形で村落生活に根づくことはない。村の基本的な性格は、政治構造や規範構造のルースさにある。しかし偶発的でルースだとはいえ、他の空間領域とは異なる生活の内容が顔役の個的資質を媒介にして立ち上がっていたわけである。

例えば、前書記 AZ は自らの書記就任の正当性を示すために公共事業をおこなった。AZ の村外ネットワークを通じて資源を動員し、舗装道路を完成させた。村落生活の公益に志向する価値規範は、AZ の自己表出のもとに二義的に適用されただけかもしれない。もともと AZ には龔家溝村民の公益や福祉に関心があったわけではない。公共事業そのものが一過性、非連続性、偶然性、目的の恣意性などの性格を帯び、公への志向性がタイトな規範構造として村に根づくことはなかった。しかし、「村のために何かしよう」という「緩やかなまとまり」が村民のあいだに生じたのは事実であり、結果的に、道路の舗装が後の床板産業発展の礎となり、近隣村落とは異なった生活パターンを龔家溝にもたらしたことは疑いない。

AZ が書記を辞任すると、村落の公共事業に二義的にでも関心を払うようなリーダーは存在しなくなった。しかし後任の XB 書記は、AZ とは違った形で村の規範構造に影響を及ぼしている。90 年代後半、XB の村外社会のネットワークを通じて床板生産が村に導入された。XB の援助を通じていくつかの床板工場が設立され成功を収めると、その後は雨後の竹の子のように床板工場が作られた。

生活の安定化は完全に各村民に委ねられた。村政府の財政源は土地使用権の売却益に依存し、土地管理は幹部たちが完全に掌握した。村政府は村民に経済的負担を求めないかわ

りに、村民は村財政の管理・監督への参加に固執しなかった。経済的基盤を棲み分けるなかで、村政府と村民は積極的非干渉のルースな政治構造を作り上げた。村落生活にそうした規範を適用したのはXBである。

しかし最近、XBの村民にたいする態度が変わりつつある。XBのネットワークを経由して村外社会（上級政府）の要求（増税）が村民に向けられ始めたのである。従来の村落生活のあり方が存続するかどうかは、XBの個人的判断に委ねられている。XBが従来の規範を稀釈し、新たな規範を適用する可能性もある。2000年における村の「緩やかなまとまり」とは、皮肉にも、こうしたXBと上級政府にたいする、各村民の消極的反発の態度に見出せるほどである。

AZやXBのような顔役は、農村社会でも中心的な位置を占める。龔家溝には政治、経済、文化（民間社会）の各領域に、固有の対面集団に依拠した顔役が存在した。顔役は領域内で競合的な関係にあり、こうした状況が他の領域の構造に反映することもあった。例えば秧歌隊の主導権をめぐるAZと老戸ZMのケースは、文化領域における競合関係が村の政治構造に反映されたものである。また、経済領域で競合する顔役が政治領域の威信と権威の獲得を目指すことは、龔家溝のふたりの書記、あるいは床板工場の大戸KTの例から明らかである。大户は村の工場の集団化を目指しているが、計画の実行には政治的威信の獲得と利用が不可欠である。

村落生活の中心に位置する人物にたいして、一方では、政治的、経済的に周縁に置かれた者たち（大部分の農村住民）が存在する。第7章で取り上げた兄弟姉妹などは、その典型である。彼ら兄弟姉妹の歴史からは、周縁者が頼りにする身辺の顔役が浮き彫りになり、周縁者が農村社会の中心的顔役へとどのようにつながるのが明らかにされた。

自己表出的である龔家溝の顔役は、その個的資質が同族的規範、地域団体的規範、村民自治的規範といった制度化された規範的価値と同一化できないところに特徴がある。個的資質を通じて獲得、蓄積、増殖される資源やシンボルは、一面、生活の基盤を村落のなかに立ち上げることに貢献するが、反面、政治構造や経済活動は恣意性が特徴となった。

こうした状況に対応するため、一般農村住民は「中心的顔役」と「身辺的顔役」のふたつのタイプの顔役が必要になる。中心的顔役は村落生活の大局を方向づけ、数百人から数千人の生活に影響を与える勢力をもつ。中心的顔役の条件としては、政治領域での制度化された役職や威信（XBやAZ）、経済資本の蓄積および地方政府のコーポラティズム的政策への意図的接近（XBやKT）、あるいは文化的な素養（AZやZM）などが考えられる。

【表8-1】龔家溝の主なインフォーマントの位置づけ

XB	自己表出的顔役	中心的顔役 (村の政治・経済・文化の中心的位置にある)	・ 「带头人」(床板生産を村に紹介し経済発展のきっかけをもたらした) ・ 「講義気」(教養はないが、義侠心、責任感に溢れている。地位のないものにも眼をかけ、困っているものには金銭、設備、技術などを無償で提供する優しさをもっている) ・ 「匪性」(暴力的な威圧感をもっている) ・ 「勢利眼」(権力・財力におもねり、上級政府幹部と個人的に親密な関係にある)
AZ			・ 「張羅人」「主持人」(秧歌隊の中心人物、文化的素養をもつ。書記として公共事業を主導)
ZM			・ 「張羅人」「主持人」(秧歌隊の中心人物、文化的素養。村の冠婚葬祭を取り仕切る世話人)
KT			・ 「大戸」(大規模な床板工場経営者)
賀子傑	自己表出的顔役	撫順市史上の中心的顔役(親族にとっては身辺的顔役)	・ 「和藹」「合人」(かつて、国有石油化学コンビナートの廠長を務めた。社会的地位や名声のない者にたいしても親切。だれにたいしても分け隔てなく愛想がよい)
大姐夫		身辺的顔役(親族における世話人)	・ 「熱心腸」(面倒なことを厭わず引き受ける骨太な性格)
大姐の弟妹	農村社会の周縁者	一般農村住民	・ 「直腸子」(まっすぐで裏表がなく、直情的な性格)
龔家溝村民			・ 「挺嘎」(いくら言い聞かせても、まったく聞く耳をもたず、表面上は表情を変えないが、実際には絶えずがたがたと文句を言って、ひとつにまとまることのないような性格)

(注1)「带头人」「講義気」「勢利眼」「張羅人」「主持人」「大戸」「和藹」「熱心腸」「直腸子」などという言葉は、当地方の農村住民が使用する日常的な表現である。XB や AZ などのイメージについて龔家溝

村民や外村人に質問し、本稿におけるインフォーマントの位置づけの基礎とした。

（注2）龔家溝村民にたいする「挺嘎」という評価は、おもに村幹部や外村人、あるいは村民自身によるもの。例えば、「直腸子」な性格といわれる大姐の弟妹も、みる人や所が変われば「挺嘎」である。

（注3）各インフォーマントに共通しているのは、みな「姦」（自分や家族の利益を確保するために知恵をめぐらす）の性格をもっており、「したたか」な側面は他者に警戒心を呼覚ます側面があることである（注意したいのは、龔家溝においては、「姦」的に宗族や村落の利益に志向する人々が皆無に近いことである）。こうした「姦」的側面は、もちろん、筆者とインフォーマントの双方にみられる性質であり、聞き取り調査とは、お互いに腹の探り合いであった（章末の注1を参照のこと）。

XB、AZ、KTなどは農村社会外部の人々と日常的な交流があり、一般農村住民からすれば、彼らの思考方法や行動様式は「姦」的なもの（何かしら異質なもの）として認識される（〔表8-1〕参照のこと）。彼らの資源動員力は、村に舗装道路を完成させたり、床板生産の基礎を築いたりすることができた。

しかし村落生活は中心的顔役の「気まぐれ」に依存するだけでは安定しない。そこで農村住民は、きめ細やかな配慮を提供してくれる身辺的顔役を必要とする。身辺的顔役は、中心的顔役の気まぐれにたいする防波堤であり、また、農村住民が中心的顔役につながる媒介役でもある。

3）身辺的顔役の条件 — 「能耐」であること —

周縁者（一般農村住民）の顔役は、農村社会の中心的位置を占める顔役とは限らず、その多くが身辺的な顔役である。周縁者のネットワークは範囲が限られており、血縁関係および姻戚関係がもっとも高い頻度で利用される。切迫した生活状況では、頼ることのできる個的資質につながることだけに周縁者たちの関心を傾注させるので、顔役が父系出自集団か姻戚関係かということは重要ではない。

周縁者が限られた親族ネットワークのなかで顔役につながろうとすることは、言い換えれば、身辺的顔役の対面集団は親族集団が多いということである。親族から身辺的顔役に期待される項目は機能が未分化でしがらみに満ちたものとなる。

周縁者や身辺的顔役たちからは、親族関係のしがらみを軽減しようとする志向性も見出せる。しかし、経済的自立には親族の援助に頼らざるをえない状況があるなかで、経済的

に自立してこそはじめて親族のしがらみから解放されるという事態は、親族のしがらみをテコにしつつ親族のしがらみを軽減しようとする矛盾が存在することを示している。周縁者と身辺的顔役をめぐるしがらみは、こうした矛盾に起因する。協同ゆえに離反が生じ、それゆえにまた協同が結ばれる。彼らの悲喜劇は、このトートロジーのうちに存在する。

現地の農村住民が顔役の条件についてしばしば指摘するのは「能耐」（辛抱強い）という資質である。能耐とは人間の獲得的な「能力」にかかわるものとして認識されている。身辺的顔役は親族関係のしがらみが生み出す「協同と離反の振幅」に能耐であることが期待される。言い換えれば、人間関係のしがらみに耐えることができれば、威信と権威の供給源となる対面集団を各方面に拡充することができる。

服部民夫は経営的な観点からみた同姓結合の重要性について、ポジティブには「信用できる」こと、ネガティブには「騙されても諦められる」ことをあげている【服部，2000：273】。同姓結合に限らず、とくに「騙されても諦められる」という感情は、協同と離反を繰り返す兄弟姉妹の気持ちをよく表している。しかし「諦められる」という感情は、血縁関係が内包する生得的な感情なのではなく、むしろ経験的に形づくられる個的資質の一部分であることに注意したい。ここに、身辺的顔役と一般農村住民を区別する質的な相異が存在する。

4) 顔役の重層的存在が生み出すダイナミズム

ある一般農村住民にとっては、身辺的顔役が中心的顔役の場合もある。実は、こうしたケースについて本稿では十分に論じることができなかった。例えば、XB や AZ は中心的顔役だが、親族からすれば彼らの役割は身辺的顔役である。実際に、XB や AZ は、彼ら自身の親族を頼って龔家溝に移住してきたわけであり、また彼らを頼ってやって来る第二次移民の親族が数多くいる。

こうした場合、次のような事態が生じることになる。すなわち、主観的關係（親疎の感情）が、中心的顔役の社会的布置に占める中心性（機能領域の代表性）より勝ることになる。中心的顔役は身辺的顔役と同様、人間関係のしがらみのなかに取り込まれ、機能的に未分化で多岐にわたる期待に応えなければならない。

こうした事態は、中国の農村社会では、領域ごとに制度化された規範構造の成立が困難なことを物語っている。一般の農村住民は、資源とシンボルを擁する顔役につながることで生活の安定を得ようとする。農村住民が中心的顔役につながる場合、その対面集団にお

いては制度化された規範が成立しうる。しかし中心的顔役－農村住民の二者関係が、当事者によって親疎の主観的判断に基づいて定義されなおされるならば、領域ごとに制度化された規範構造は相対化され、状況主義的な規範の適用に取って代わられる。

こうした、行為者の状況に応じた規範の適用は、一方で顔役が個的資質の発露によって農村基層社会のダイナミズムを生み出す日常的場面を表しており、また一方で、そのような顔役の存在を戦略的に利用する一般農村住民の日常的な姿を表している。

中国農村の現代化では、産業化、都市化、民主化など、いわゆる近代化論の既存のタームでは汲み取ることのできない社会のリアリティが多く存在する。本稿の事例では、次のようなケースを数多く見出すことができた。社会的地位や職位に付随する（はずの）規範が人間関係の親疎によって相対化され、通常では獲得困難な資源が比較的容易に入手できるようになるケースである。AZ の指導した公共事業や大舅の工場設立などは、個人的な親疎の感情がテコとなって顔役の社会的地位に付着する資源が流動化し（AZ の場合、友人の地位や資源、また彼自身の書記という地位・権限を利用した。大舅の場合、実父のネットワークを生かして多くの便宜を得た）、もともと実現困難であった事業が実現可能になったものである。こうしたインフォーマルな局面を腐敗の構造化や社会の無規範化として解釈するのは短絡的で一面的である。この中国社会に独特な資源・情報の流れこそが、結局のところ、農村社会の周縁に位置する人々の生活に寄与している。このことは、ある兄弟姉妹の歴史が雄弁に物語っているとおりである。

5) 今後の課題

最後に、今後の研究課題について二点ほど触れておきたい。

KT は経済的富を政治的威信に転換することができた人物であった。木業商会などを通じて築いた上級政府との個人的ネットワークは、市場原理に基づく経営戦略の実現を後押しする可能性がある。もし政府の指導が本格化し、床板工場の集団化が実行されるならば、多くの小戸が廃業に追い込まれる可能性さえある（実際、筆者が 2001 年 5 月に村を再訪した際、多くの小戸は操業停止の状態にあり、活気を失っていた。対照的に KT の工場は敷地を拡大し、3 階建てオフィスビルを建設していた。小戸の家を訪ねて知ったことだが、KT の工場で生産されたワックス塗装床板をサンプルとして持ち帰り、それまでは考えもしなかった KT との合作を検討している小戸も少なくなかった）。

龔家溝の社会関係の変容から中国農村の社会変動をとらえようとする場合、KT の事例

は次のことを示唆している。

龔家溝の村落生活は、中心的顔役を通じて獲得される資源によって立ち上がった。生活の細部は身辺的顔役が面倒をみる。顔役－周縁者のあいだでは、状況に応じて関係性の再定義がおこなわれ、顔役役割が中心－周縁と転移することで資源が流動化し、農村住民は生活に必要な便宜を獲得する。すなわち村落生活は、顔役－周縁者の二者関係が堆積した対面集団から成り立っており、顔役が重層的に存在する。

しかし、KT の資本力や政治資源の増加が、顔役の重層的な存在を前提とした農村住民の生活に決定的な影響を及ぼす可能性も見えてきた。もし龔家溝に市場原理の荒波が持ち込まれ、また、農村実力者と地方政府とのコーポラティズム的接近が進行するならば、生活に不可欠な資源・情報の流れや農村住民の社会関係が一変することも予想される。

もちろん、逆に、ここには次のような可能性も見出せる。すなわち、生活に果たす顔役の重要性は稀釈されることなく存続し、領域ごとの規範構造が未成立のまま推移する。経済や政治領域が自律的に追い求める「近代的な」効率性は、結局、親疎の感情を埋め込んだ二者関係を基礎にしなければ立ち枯れてしまう。大戸による工場集団化によって小戸が淘汰されたとしても、村民が依拠する対面集団自体に構造的な変化は生じないという推測である。いずれにしても、村落社会から中国の現代化をみるうえで、興味深い研究課題を示しているのではないだろうか。

今後の課題の二点目として、次のような問題がある。本稿では「自己表出的顔役」の存在を、中国村落の通底的な構造特性とした。それでは個的資質の表出が、いかなるメカニズムの下で制度的な価値規範である「同族的規範」「地域団体的規範」「村民自治」などへ転化するのだろうか。すなわち、個人的でインフォーマルな価値志向がフォーマルなものへとどのように制度化されるのか、という問題である。

従来の研究では、同族村や「村落共同体」、あるいは村民自治を推進する「先進村」を、中国村落の実体的な姿としてとらえることが少なくなかった。本稿では、こうした村落における社会現象も、構造化をおこなう個人的存在を起点にして論じる必要があると主張してきた。しかし、本稿を通じて実証分析をおこなったのは、あくまでも中国村落の通底的構造と仮定した「自己表出的顔役型」の村落であり、それが「同族的規範優位型」「地域団体型」「手続き的合意形成重視型」などの村落へどのように転化するのかが分析されなかった。今後の実証的課題としたい。

注

(1) 筆者が調査をおこなった 2000 年とは、民間宗教「法輪功」が「邪教」とされ、国家による管理が厳しくなっていた時期である。またこの年から、外国人（とくに研究者）の農村地域への出入りが以前にもまして厳しく管理されるようになった。こうした社会情勢から、筆者の聞き取り調査のスタイルは、雑談風、あるいは「村史」編纂を趣味とする学生風というスタイルを貫いた。お世話になった農村住民の方々に迷惑がかからないようにしたかったからである。もちろん政治的な質問はご法度であった。統計的な調査も不可能である。彼らインフォーマントが気持ちよく話したいことを話してもらい、筆者はそれを記録した。そのなかには、明らかに「吹牛」（ほら話）もあった。筆者はそれを、すぐに「ほら話」だとわかったわけではない。同じ内容の雑談を、できるだけ多くの人々と交わすことで事実を確認していった結果である（本文中には、AZ のレジャーランド建設計画のように、明らかにほら話だとわかるエピソードも紹介している。筆者は決して彼らの話を鵜呑みにしているわけではない。ほら話も、彼らの生活世界を知る手掛かりになると判断したので紹介した）。AZ が主導した道路の舗装工事にしても、AZ が中心人物だとわかったのは村に入ってから数ヶ月後のことであり、その公共事業の詳細を知ったのは、九州にある現在の彼の家を訪ねたときである。それまでは、XB が道路を作ったことになっていた！ XB にしても、彼にたいする他人の評価はさまざまであり、また彼自身、会うごとに話の内容が変わるので、苦勞の絶えることがなかった。ついには、「村史編纂」などにまったく興味のない XB は、筆者が訪ねても居留守を使うようになった。実際、XB は非凡な才能の持ち主であって、村のなかでは秀でた人物である。また、裏の世界の影がちらちらと垣間見えることもあり、「その手の」威圧感を備えた人物でもあった。本稿では、こうした個々の人物がもつリアリティを、できるだけ読者に伝えようと努力した。資料的な欠陥が、中国農村生活に関するリアリティの描出によって相殺されることを期待している。なお、方法論的な資料批判については、今後の課題としたい。

参考文献

日本語文献

- 蘭信三, 1994, 『「満州移民」の歴史社会学』, 行路社.
- 石川准, 1997, 「感情表現と誤解の構造」, (岡原正幸・山田昌弘・安川一・石川准 (著)), 175-209.
- 石田浩・中田睦子, 1988, 「中国の郷村財政と農村建設」, 『中国研究月報』42-5, (石田浩, 1991, 『中国農村の歴史と経済』, 関西大学出版部収録).
- 井上徹, 2000, 「中国における宗族の伝統」, (吉原和男・鈴木正崇・末成道男 (編)), 45-71.
- 今田高俊, 1994, 『混沌の力』, 講談社.
- 今田高俊, 1986, 『自己組織性』, 創文社.
- 今堀誠二, 1953, 『中国の社会構造』, 有斐閣.
- 宇野重昭・鶴見和子 (編), 1994, 『内発的発展と外向型発展』, 東京大学出版会.
- 宇野重昭, 1994, 「農村の工業化と外向型発展への新展開」, (宇野重昭・鶴見和子 (編)), 15-39.
- 江原由美子, 1985, 『生活世界の社会学』, 勁草書房.
- 大島一二, 1996, 『中国の出稼ぎ労働者』, 芦書房.
- 岡原正幸・山田昌弘・安川一・石川准, 1997, 『感情の社会学』, 世界思想社.
- 葛慧芬, 1999, 『文化大革命を生きた紅衛兵世代』, 明石書店.
- 加藤弘之, 1997, 『中国の経済発展と市場化』, 名古屋大学出版会.
- 河地重蔵, 1972, 『毛沢東と現代中国』, ミネルヴァ書房.
- 河原昌一郎, 1999, 『詳解 中国の農業と農村』, 農文協.
- 北原淳, 1996, 『共同体の思想』, 世界思想社.
- 巖善平, 1997, 『中国農村・農業経済の転換』, 勁草書房.
- 厚東洋輔, 1998, 「ポストモダンとハイブリッドモダン」, 日本社会学会編, 『社会学評論』第48巻4号, 3-18.
- 小林弘二, 1997, 『二〇世紀の農民革命と共産主義運動』, 勁草書房.

- 佐々木衛, 1993, 『中国民衆の社会と秩序』, 東方書店.
- 佐々木衛・松戸武彦 (編著), 1999, 『地域研究入門 (1)』, 文化書房博文社.
- 佐々木衛, 1999, 「中国社会研究と日本社会学」, (佐々木衛・松戸武彦 (編著)), 17-43.
- 佐々木衛, 2000, 「中国村落社会の構造変容」, 神戸大学文学部『五十周年記念論集』49-95.
- 滋賀秀三, 1958, 「『訳注 唐律疏議』<付録 親族呼称および服制について>」『国家学会雑誌』第72巻第10号.
- 滋賀秀三, 1967, 『中国家族法の原理』, 創文社.
- 清水盛光, 1939, 『支那社会の研究』, 岩波書店.
- 清水盛光, 1951, 『中国郷村社会論』, 岩波書店.
- 首藤明和, 1999, 「経済利潤追求を焦点に糾合する地域組織としての村」, 日中社会学会編『日中社会学研究』7, 8-21.
- 首藤明和, 2000, 「グローバリズムとローカリズムー私的経営者をめぐる両者の相克」, (第14回「大学と科学」公開シンポジウム組織委員会 (編)), 128-143.
- 瀬川昌久, 1991, 『中国人の村落と宗族』, 弘文堂.
- 園田茂人, 2001, 『中国人の心理と行動』, 日本放送出版協会.
- 第14回「大学と科学」公開シンポジウム組織委員会 (編), 2000, 『変動する中国社会』, クバプロ.
- 高田誠, 1999, 「出稼ぎによる農村経済への波及効果」, (南亮進・牧野文夫 (編)), 105-127.
- 田原史起, 2000, 「村落統治と村民自治」, 天児慧・菱田雅晴 (編)『深層の中国社会』, 勁草書房, 85-117.
- 富田和広, 2000, 「血縁グループとして生き残るための教育戦略」, (第14回「大学と科学」公開シンポジウム組織委員会 (編)), 91-96.
- 豊泉周治, 2000, 『ハーバーマスの社会理論』, 世界思想社.
- 中村哲夫, 1979, 「解説」, (今井清一・中村哲夫・原田良雄 (訳), G・W・スキナー『中国農村の市場・社会構造』, 法律文化社), 207-219.
- 中村則弘, 1994, 『中国社会主义解体の人間の基礎』, 国際書院.
- 仁井田陞, 1952, 『中国の農村家族』, 東京大学出版会.
- 聶莉莉, 1992, 『劉堡』, 東京大学出版会.

- 橋本満・深尾葉子（編），1990，『現代中国の底流』，行路社。
- 橋本満，1990，「中国社会を見る目」，（橋本満・深尾葉子（編）），453-486。
- 旗田巍，1973，『中国村落と共同体理論』，岩波書店。
- 服部民夫，2000，「経済発展と同姓結合」，（吉原和男・鈴木正崇・末成道男（編）），271-276。
- 濱嶋朗・竹内郁郎・石川晃弘（編），1977，『社会学小辞典』，有斐閣。
- 菱田雅晴（編），2000，『現代中国の構造変動 社会』，東京大学出版社。
- 福武直，1976，『中国農村社会の構造』，東京大学出版会。
- 福本勝清，1998，『中国革命を駆け抜けたアウトローたち』，中公新書。
- 古島和雄，1982，『中国近代社会史研究』，研文出版。
- 細谷昂・菅野正・中島信博・小林一穂・藤山嘉夫・不破和彦・牛鳳端，1997，『沸騰する中国農村』，御茶の水書房。
- 牧陽一・松浦恆雄・川田進，2000，『中国のプロパガンダ芸術』，岩波書店。
- 溝口雄三，1995，『中国の公と私』，研文出版。
- 溝口雄三，1996，『一語の辞典 公私』，三省堂。
- 南亮進・牧野文夫（編），1999，『流れゆく大河』，日本評論社。
- 村松祐次，1975，『中国経済の社会態制』（復刊），東洋経済新報社。
- 柳澤和也，2000，『近代中国における農家経営と土地所有』，御茶の水書房。
- 山田信行，1998，『階級・国家・世界システム』，ミネルヴァ書房。
- 吉原和男・鈴木正崇・末成道男（編），2000，『＜血縁＞の再構築』，風響社。
- 羅紅光，2000，『黒龍潭—ある中国農村の財と富』，行路社。
- 陸麗君・南裕子，2000，「農村における基層組織の再編成と村民自治」，（菱田雅晴（編）），163-188。
- 李明伍，2001，『現代中国の支配と官僚制』，有信堂。

中国語文献（ピンイン表記によるアルファベット順）

- 陳宝榮，1998，『投資環境—中国私有経済生存与発展』，学林出版社。
- 陳光金，1998，「成就、困境与出路」（劉應傑・張其仔（編）），340-377。

- 陳俊傑，1998，『關係資源与農民的非農化』，中国社会科学出版社。
- 陳吉元·胡必亮（主編），1996，『当代中国的村庄經濟与村落文化』，山西經濟出版社。
- 戴柏華·史耀斌·許永化·周成躍，1999，『從放權讓利到制度創新』，廣西師範大學出版社。
- 費孝通，1998（初出1947），『鄉土中国 生育制度』，北京大學出版社。
- 冯芷艳·姚梅·王晓毅 1997，『中国村庄的文化傳統与企業管理』，山西經濟出版社。
- 撫順市情調查組，1993，『中国国情叢書—百县市經濟社会調查 撫順卷』，中国第百科全書出版社。
- 撫順市社会科学院（編），1999，『撫順年鑑』，遼寧人民出版社。
- 龔維斌，1998，『勞働力外出就業与農村社会變遷』，文物出版社。
- 胡必亮，1996，『中国村落的制度變遷与權力分配』，山西經濟出版社。
- 黃平（編），1997，『尋求生存』，雲南人民出版社。
- 李培林（主編），1995，『中国新時期階級階層報告』，遼寧人民出版社。
- 李振傑，1999，『私營企業透視』，經濟管理出版社。
- 林世權，1983，「撫順磁務局“愛磁委員會”」，（政協撫順市委員会文史委員會（編）），67—74。
- 劉應傑·張其仔（編），1998a，『社会学家的視野—中国社会与現代化』，中国社会出版社。
- 陸学芸（主編），1992，『改革中的農村与農民』，中共中央党校出版社。
- 馬敏，1995，『官商之間』，天津人民出版社。
- 孫立平，1995，「国外社会学界關於市場化轉型和收入分配研究的新進展」（李培林（主編）），508—547。
- 王銘銘，1997，『社区的歷程』，天津人民出版社。
- 徐勇，1997，『中国農村村民自治』，華中師範大學出版社。
- 原勞働部農村勞働力就業与流動研究課題組，1999，『中国農村勞働力就業与流動研究報告』，中国勞働出版社。
- 張厚義·明立志，1999，『中国私營企業發展報告（1978～1998）』，社会科学文献出版社。
- 張厚義·明立志，2000，『中国私營企業發展報告（1999）』，社会科学文献出版社。
- 張静，2000，『基層政權』，浙江人民出版社。
- 張元紅，1996，「当代中国鄉村變遷中的農業」，（陳吉元，胡必亮（主編）），1—32。
- 張宗和，2000，『中国現階段非公有制經濟研究』，經濟管理出版社。
- 折曉葉，1997，『村庄的再造』，中国社会科学出版社。

政協撫順市委員会文史委員会（編），1983，『撫順文史資料選輯 第二輯』，（内部資料）。
中国城市総合実力五十強叢書・撫順市編委会（編），1994，『撫順市』，中国城市出版社。
朱方明・姚樹榮・鄒曦・胡世發，1998，『私有經濟在中国』，中国城市出版社。

英語文献

- Chan, Anita, Richard Madsen, and Jonathan Ungar, 1984, *Chen Village : The Recent History of a Peasant Community in Mao's China*, University of California Press.
（小林弘二（監訳），1989，『チェン村』，筑摩書房）。
- Cohen, Paul, 1984, *Discovering History in China, American Historial Writing on the Recent Chinese Past*, Columbia Univ. Press, New York. （佐藤慎一（訳），1988『知の帝国主義』，平凡社）。
- Duara, Prasenjit, 1988, *Culture, Power, and the State Rural North China, 1900-1942*, Standford University Press, California.
- Eisenstadt, S. N. and Roniger L., 1984, *Patrons, Clients and Friends, Interpersonal Relations and the Structure of Trust in Society*, Cambridge Univ. Press.
- Freedman, Maurice, 1958, *Lineage Organization in Southeastern China*, Athlone Press, London. （末成道夫・西沢治彦・小熊誠（訳），1991，『東南中国の宗族組織』，弘文堂）。
- Freedman, Maurice, 1966, *Chinese Lineage and Society : Fukien and Kwangtung*, Athlone Press, London. （田村克己・瀬川昌久（訳），1995，『中国の宗族と社会』弘文堂）。
- Hinton, William, 1966, *FANSHEN : A Documentary of Revolution in a Chinese Village*, Monthly Review Press. （加藤祐三・春名徹・加藤幹雄・古川勇一（訳），1972，『翻身』，平凡社）。
- Rosaldo, Renato, 1989, *Culture and Truth : The Remaking of Social Analysis*, Beacon Press, Boston. （椎名美智（訳），『文化と真実』，日本エディタースクール出版部）。
- Skinner, G. William, 1964, "Marketing and Social Structure in Rural China : Part 1", *Journal of Asian Studies* 24(1) : 3-43.
- Skinner, G. William, 1965a, "Marketing and Social Structure in Rural China : Part 2", *Journal of Asian Studies* 24(2) : 195-228.

- Skinner, G. William, 1965b, "Marketing and Social Structure in Rural China : Part 3" ,
Journal of Asian Studies 24(3) : 363-399. (今井清一・中村哲夫・原田良雄 (訳),
1979, 『中国農村の市場・社会構造』, 法律文化社).
- Smith, Arthur H, 1899, *Village Life in China: A Study in Sociology*, Fleming Revelle,
New York. (塩谷安夫・仙波泰雄 (訳), 1941, 『支那の村落生活』, 生活社).
- Watson, James L., 1975, *Emigration and the Chinese Lineage : The Man in Hong Kong
and London*, University of California Press, Berkeley. (瀬川昌久 (訳), 1995 『移
民と宗族』, 阿吽社).